

特別史跡

一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告 16

第127・130・136次調査

2018

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

口絵1 発掘調査遺構



発掘調査区遠景(北より)



第136次調査区全景(北西より)

口絵2 発掘調査遺構



第130次調査区全景(北西より)



SF6352・6353(南より)

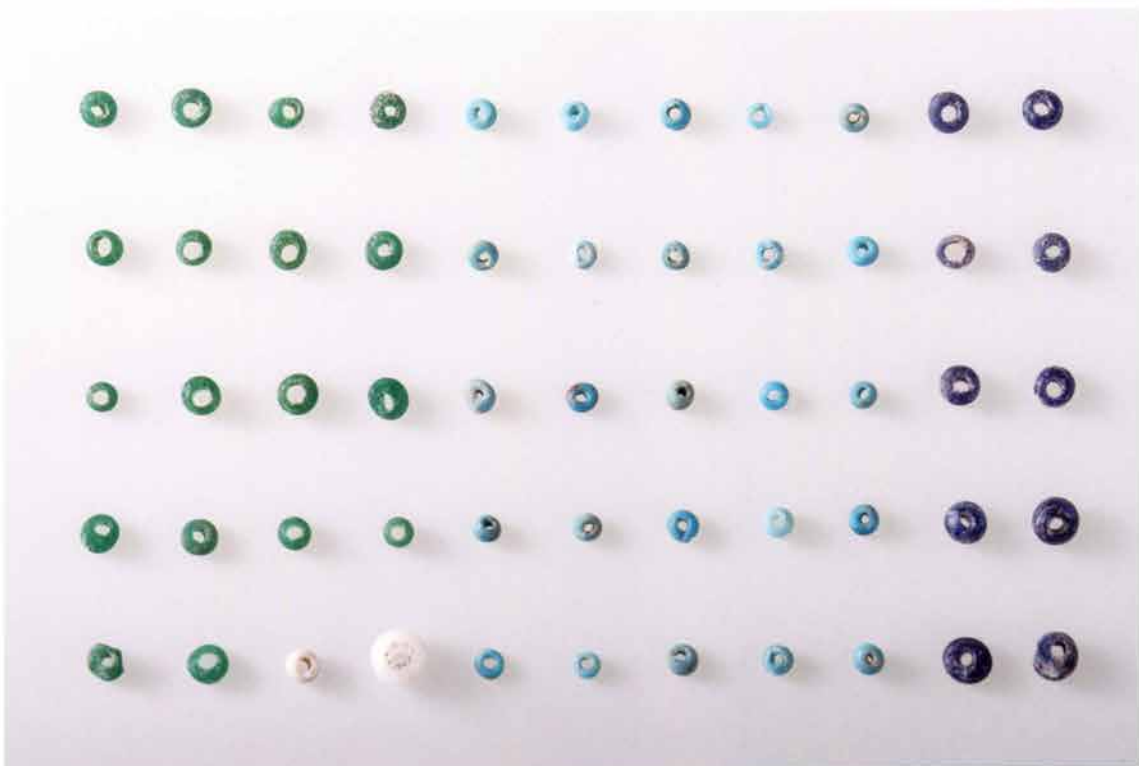
口絵3 出土遺物



【上】 元様式染付皿

【右上】 青磁不遊環付瓶

【右】 青磁酒会壺



ガラス玉

序 文

特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡の発掘調査事業は、昭和43年に朝倉館跡の調査に着手して以来、約50年間にわたり行われてきました。現在に至るまで、戦国期の城下町の構造や当時の生活・文化の様相が徐々に明らかになってきております。

本報告書は、谷を貫く一乗谷川の右岸、城下町の南を防御する上城戸跡より100mほど北に位置する字門ノ内の発掘成果をまとめたものであります。

発掘調査は、朝倉館跡から一乗谷川上流に位置する上城戸跡にかけての町割や様相を解明する目的で実施しました。調査の結果、土塁を伴う大規模な屋敷の一角から、全国的にも希少なガラス玉や、これを製作していたことを裏付ける遺物が多数出土し、日本のガラス工芸史を解明するうえで重要な発見となりました。これ以前の調査で、義景の妻小少将が住まいした諏訪館跡の麓、字米津では、大規模な屋敷において刀装具の土製文様型がまとまって出土し金工師の屋敷跡と推定されており、一般には流通しない特殊品をこの辺りで製作させていたことが窺え、朝倉氏の実像にまた一步迫ることができたと言えるでしょう。

最後になりますが、事業実施から報告書刊行に至るまで、文化庁および関係各位、地元の皆様に多大なご支援とご協力をいただきました。深く感謝申し上げます。

平成30年3月

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

館長 向出 宏二

例 言

- 1 本書は福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館が、特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡における計画的な発掘調査の結果を報告したものであり、第16冊目にあたる。発掘調査事業概要は第I章で報告する。
- 2 本書で報告する調査は、国庫補助事業として、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館が福井県福井市城戸ノ内町字門ノ内で実施したものである。各調査次数の期間・担当者は下記のとおりである。
- 3 発掘調査は第127次・第130次・第136次と3か年に分けて実施した。発掘調査の組織体制は第I章で述べる。
第127次 平成20年4月15日～同年12月5日 佐藤 圭 水村伸行 川越光洋 千木良礼子 藤田若菜
第130次 平成21年4月22日～同年12月16日 櫛部正典 川越光洋 千木良礼子 藤田若菜
第136次 平成23年10月4日～同年12月22日 畠中清隆 川越光洋
- 4 出土遺物の整理作業は、各年度の事業概要報告書を刊行するため、平成20・21・23年度に行った。本報告書作成に係る作業と事業主体者は以下のとおりである。平成24・29年度の福井県機構改革に伴う事業主体の変更がある。
平成27・28年度 出土遺物の接合・復元・実測・トレース 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
平成29年度 特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告16刊行 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
- 5 本書の編集は木村孝一郎が行い、熊谷透・木村が分担して執筆した。また、第七章第2節に田村朋子氏(奈良文化財研究所)から原稿を頂き、第V章は各分析を委託した株式会社パレオ・ラボとパリノ・サーヴェイ株式会社が提出した成果報告に木村が加筆・編集して掲載した。執筆分担は以下のとおりである。
木村 I・II・III・IV・V・VI 熊谷 IV(建築部材) VII 1
田村朋美 VII 2 ((株)パレオ・ラボ) V 1 (パリノ・サーヴェイ(株)) V 2
- 6 遺構写真撮影は各次数の発掘調査者、遺物写真撮影は月輪泰が行った。挿図・表および図版の作成は担当者が行った。
- 7 本書の調査区全体図・遺構図・石垣立面図は、以下の測量会社の測量により作成したものを一部改変して用いた。
第127次：株式会社パスコ 第130次：アジア航測株式会社 第136次：株式会社日本海コンサルタント
なお、写真図版に使用した上空写真は、航空測量時に撮影したものである。
- 8 写真図版・挿図・表の遺物番号は符合する。写真は縮尺不同である。
- 9 本書における水平レベルの表示は海拔高(m)を示し、方位は座標北を用いた。X・Y座標値は国土方眼座標系第VI系(世界測地系)に基づく。
- 10 本書で用いた遺構の略記号は次のとおりである。
SA：土塁・塀・柵、SB：建物、SD：溝・濠、SE：井戸、SF：石積施設、SG：庭園(池)
SI：門、SK：土坑、SP：小穴、SS：道路・通路、SV：石垣、SZ：暗渠、SX：その他
- 11 遺物の色調は、小山正忠・竹原秀雄編 『新版 標準土色帖』2005年農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修による。
- 12 本書に掲載した遺物と調査の際に作成した図面・写真は、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館に保管してある。
- 13 本書の作成にあたり、次の方々からご助言・ご指導を頂いた。(敬称略・五十音順)
植村昌子 渡邊 晶
- 14 発掘調査には地元の方々の参加・協力を得た。また、遺物整理作業は福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館および福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの整理作業員があたった。

目 次

I	事業概要	頁
1	調査の目的	1
2	調査の経過	1
3	調査の方法および組織	5
II	調査の概要と経過	
1	調査の概要	7
2	調査の経過	8
III	遺 構	11
IV	遺 物	33
V	自然科学分析	
<分析 1>		59
<分析 2>		63
VI	まとめ	75
VII	論 考	
<論考 1>		77
<論考 2>		87

図 版 目 次

口絵(カラー)

口絵 1	発掘調査遺構	口絵 3	出土遺物
【上】	発掘調査区遠景(北より)	【上】	元様式染付皿
【下】	第136次調査区全景(北西より)	【右上】	青磁不遊環付瓶
口絵 2	発掘調査遺構	【右】	青磁酒会壺
【上】	第130次調査区全景(北西より)	【下】	ガラス玉
【下】	SF6352・SF6353(南より)		

挿図図面目次

挿図 1	特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡調査地略図… 4	挿図31	SB6357・SD6373遺構平面図・断面図…30
挿図 2	第127・130・136次調査区周辺地形図… 7	挿図32	SD6388・SV6387遺構平面図・断面図…31
挿図 3	グリッド割設定図・区画割図……………10	挿図33	SF6363・SD6364遺構平面図・断面図…32
挿図 4	SA6365土層断面図 ……………12	挿図34	表土及びSD6279出土遺物 ……………36
挿図 5	SV6274・SV6277・SD6276・SS6275・SZ6278 遺構平面図・立面図・断面図……………13	挿図35	SD6252・SD6253出土遺物 ……………38
挿図 8	SB6704・SB6709・SF6702・SF6703・SK6701 遺構平面図・断面図……………15	挿図36	SD6373出土遺物 ……………43
挿図 9	SE6285出土遺物 ……………16	挿図37	土師質皿の法量分布図……………45
挿図10	SB6790遺構平面図・断面図 ……………17	挿図39	主要珪藻化石群集……………66
挿図13	SD6341・SD6342・SD6350・SD6351・SK6345 遺構平面図・断面図……………19	挿図40	植物珪酸体含量……………69
挿図14	SB6359・SB6791遺構平面図・断面図…20	挿図45	SB6258模式図 ……………78
挿図15	SB6359・SB6791遺構断面図 ……………21	挿図46	出土角材の釘位置にもとづく軒の出 (推定)と雨落溝の位置関係……………80
挿図16	SB6251遺構平面図・断面図 ……………22	挿図50	礎石建物SB6258復元外観 アイソメトリック図……………85
挿図17	SB6792遺構平面図・断面図 ……………23	挿図51	基礎ガラスの主成分(PbO-K ₂ O含有量)…90
挿図18	SB6331遺構平面図 ……………24	挿図52	着色成分の特性(CuO-ZnO含有量)…90
挿図23	SF6352・SF6353遺構平面図・断面図…26	挿図53	着色成分の特性(CuO-MnO含有量)…90
挿図26	SB6257・SB6258・SD6255・SD6256・SD6272 遺構平面図・断面図……………28	挿図54	各色調のガラス中に含まれる K ₂ O-CaO含有量……………90
		挿図55	淡青色不透明ガラスのX線回析スペクトル…90

挿図写真目次

挿図 6	SV6715検出状況 ……………14	挿図30	SX6385検出状況 ……………29
挿図 7	SD6279漆器皿出土状況 ……………14	挿図38	第130次調査出土柱痕の光学顕微鏡写真…62
挿図11	SD6341土師質皿出土状況 ……………18	挿図41	花粉分析プレパラート内の状況・珪藻化石…73
挿図12	SX6344土師質皿出土状況 ……………18	挿図42	植物珪酸体・種実遺体……………74
挿図19	SB6331柱根検出状況 ……………24	挿図43	礎石建物SB6258全景(南より) ……………77
挿図20	SB6331柱根検出状況 ……………24	挿図44	SB6258雨落溝の遺物出土状況(一部)…77
挿図21	SF6352土師質皿出土状況 ……………25	挿図47	越前の近世民家の壁木舞組の例(池田町)…82
挿図22	SX6343土師質皿出土状況 ……………25	挿図48	17世紀の永平寺塔頭の石置板葺屋根建物…82
挿図24	SB6257筵出土状況 ……………27	挿図49	瓜生家住宅の軒先(鯖江市)……………84
挿図25	SD6356格子状竹製品出土状況 ……………27	挿図56	第130次発掘調査出土ガラス製遺物(1)…91
挿図27	SD6272木製角材出土状況 ……………28	挿図57	第130次発掘調査出土ガラス製遺物(2)…92
挿図28	SD6373元染付皿出土状況 ……………29	挿図58	第130次発掘調査出土ガラス製遺物(3)…93
挿図29	SX6376検出状況 ……………29	挿図59	第130次発掘調査出土ガラス製遺物(4)…94

遺構・遺物図版目次

第1図 発掘調査区全体図	第18図 遺構詳細図(17)	第35図 出土遺物(10)
第2図 遺構詳細図(1)	第19図 遺構詳細図(18)	第36図 出土遺物(11)
第3図 遺構詳細図(2)	第20図 遺構詳細図(19)	第37図 出土遺物(12)
第4図 遺構詳細図(3)	第21図 土層断面図(1)	第38図 出土遺物(13)
第5図 遺構詳細図(4)	第22図 土層断面図(2)	第39図 出土遺物(14)
第6図 遺構詳細図(5)	第23図 土層断面図(3)	第40図 出土遺物(15)
第7図 遺構詳細図(6)	第24図 石垣断面図(1)	第41図 出土遺物(16)
第8図 遺構詳細図(7)	第25図 石垣断面図(2)	第42図 出土遺物(17)
第9図 遺構詳細図(8)	第26図 出土遺物(1)	第43図 出土遺物(18)
第10図 遺構詳細図(9)	第27図 出土遺物(2)	第44図 出土遺物(19)
第11図 遺構詳細図(10)	第28図 出土遺物(3)	第45図 出土遺物(20)
第12図 遺構詳細図(11)	第29図 出土遺物(4)	第46図 出土遺物(21)
第13図 遺構詳細図(12)	第30図 出土遺物(5)	第47図 出土遺物(22)
第14図 遺構詳細図(13)	第31図 出土遺物(6)	第48図 出土遺物(23)
第15図 遺構詳細図(14)	第32図 出土遺物(7)	第49図 出土遺物(24)
第16図 遺構詳細図(15)	第33図 出土遺物(8)	
第17図 遺構詳細図(16)	第34図 出土遺物(9)	

写真図版目次

PL. 1	PL. 4	PL. 7
第127次発掘調査垂直写真	SV6274・SZ6278(西より)	B区全景(南より)
第130次発掘調査垂直写真	SV6277・SZ6278(東より)	B1・2区全景(南より)
第136次発掘調査垂直写真	SV6274・6277・SD6276・SZ6278(北より)	B区全景(東より)
PL. 2	PL. 5	PL. 8
SA6712・6713・SD6279(南より)	A区下段全景(西より)	B区全景(北東より)
SD6279(北東より)	B1区南西部全景(南西より)	B2区南部全景(東より)
SD6279(西より)	SE6285(西より)	B2区北部全景(東より)
PL. 3	PL. 6	PL. 9
SD6279(東より)	SF6703(北より)	SB6359(南より)
SZ6278(南より)	SF6703・SS6710(東より)	SB6359(西より)
SV6284(北より)	SF6702(東より)	SB6359内柱根(南より)
SV6714・6715(西より)		PL. 10
		SB6251(東より)

SB6331(東より)	SB6258(南より)	PL.21 出土遺物(4)
SB6331(北西より)	SK6359~6271(南より)	PL.22 出土遺物(5)
		PL.23 出土遺物(6)
PL.11	PL.15	PL.24 出土遺物(7)
SD6250西半部(北より)	B 5 区全景(南より)	PL.25 出土遺物(8)
SD6250・SZ6278近景(北より)	B 5 区全景(北より)	PL.26 出土遺物(9)
SD6252(東より)	SB6375(南より)	PL.27 出土遺物(10)
SD6250東半部(北より)		PL.28 出土遺物(11)
SD6250・6252・6253(東より)	PL.16	PL.29 出土遺物(12)
	SB6375(西より)	PL.30 出土遺物(13)
PL.12	SS6370・SX6376・SD6369	PL.31 出土遺物(14)
SF6352・6353(南より)	SD6371・SD6372(南より)	PL.32 出土遺物(15)
SF6352内部(北より)	SA6365(南西より)	PL.33 出土遺物(16)
SX6354(南西より)		PL.34 出土遺物(17)
	PL.17	PL.35 出土遺物(18)
PL.13	B 5 区南端部全景(西より)	PL.36 出土遺物(19)
SG6333(東より)	SV6387・SD6388(南より)	PL.37 出土遺物(20)
SG6333(南より)	B 6 区全景(東より)	PL.38 出土遺物(21)
SX6332(北より)		PL.39 出土遺物(22)
	PL.18 出土遺物(1)	PL.40 出土遺物(23)
PL.14	PL.19 出土遺物(2)	PL.41 出土遺物(24)
B 4 区全景(南西より)	PL.20 出土遺物(3)	PL.42 出土遺物(25)

表 目 次

表 1 特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査一覧… 2	表15 ガラス玉製作関連遺物観察表……………57
表 2 出土遺物一覧……………33	表16 銅銭観察表……………58
表 3 土師質皿概要表……………34	表17 骨製品観察表……………58
表 4 鉄釘計測表……………41	表18 遺構別の樹種構成……………59
表 5 土師質皿の灯明痕の割合……………45	表19 樹種同定結果……………61
表 6 SB6258の出土建築部材 ……46	表20 珪藻分析結果……………67
表 7 ガラス玉色別数……………48	表21 花粉分析・寄生虫卵分析結果……………68
表 8 ガラス玉長軸と重量相関表……………48	表22 植物珪酸体含量……………69
表 9 土器・陶磁器観察表……………49	表23 種実遺体分析結果……………70
表10 金属製品観察表……………55	表24 一乗谷出土の遺物組成表……………76
表11 石製品観察表……………55	表25 SB6258出土そぎ板の寸法 ……84
表12 漆製品観察表……………56	表26 近世民家の屋根葺板の寸法……………84
表13 木製品観察表……………56	表27 中世の屋根葺板の寸法……………84
表14 建築部材観察表……………56	表28 蛍光X線分析結果表……………95

I 事業概要

1 調査の目的

特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡は、戦国大名朝倉氏が領国支配の拠点とした所で、当主の館を中心として山城、城戸、一族・家臣の屋敷、町屋、寺院などの遺構が一体となって残されており、我が国の歴史を知るうえで欠くことのできない国民の共有の文化遺産として、永久に保存するため特別史跡に指定され、公有化が進められている。

遺跡保護の目的は、単に遺構を保存するだけにとどまらず、遺跡を調査してその成果を広く公表し、一般の歴史認識に役立てて活用することにある。その方策として、遺跡の中に身を置いて「自ら歴史と生きた対話」のできる史跡公園の完成を目指している。こうした理念のもとに一乗谷朝倉氏遺跡の調査と整備が進められているが、発掘調査は当時の一乗谷の規模や構造、人々の暮らしぶりの実態などを直接的に明らかにする最も有力な方法と位置付けられる。計画的かつ連続的に行った発掘調査の成果に基づいて着実な環境整備が施され、適切な維持・管理のもと遺跡を公開する、その前提条件のひとつとしてこれまで調査を続けてきた。

本報告書は、一乗谷朝倉氏遺跡の計画的な発掘調査の結果を報告したものであり、その第16冊目にあたる。そのほか、道路・河川の整備事業や中山間事業などの現状変更に伴う発掘調査の報告は別途行われている。なお、各年次の発掘・環境整備事業の概要は、当該年次の概報として公刊されているが、本書で正式に調査所見を報告するものとし、内容については本報告書が優先する。

2 調査の経過

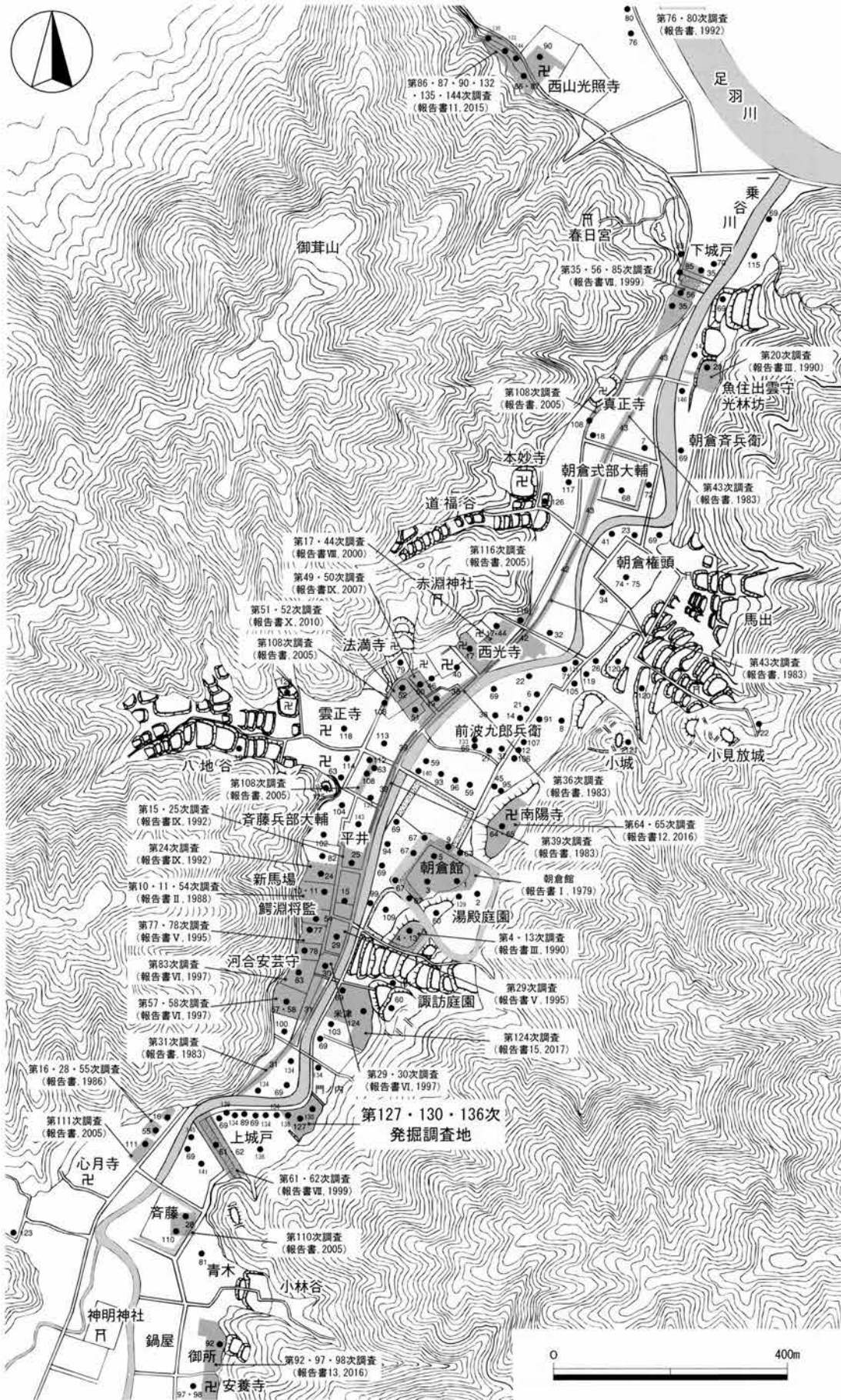
一乗谷朝倉氏遺跡の計画的な発掘調査は、昭和42年度から足羽町教育委員会を事業主体として始められた。昭和46年度から福井県教育委員会がこれを引き継いで発掘調査と環境整備事業を実施し、福井市が用地取得と遺跡の管理を担当するという機能分担で事業を進めている。同年7月に278haという広大な地域が国の特別史跡に格上げ指定され、福井県は、昭和47年3月に策定された「朝倉氏史跡公園基本構想」のもと、同年4月に福井県教育庁朝倉氏遺跡調査研究所を設置し、以後5ヵ年計画により継続して発掘調査と環境整備を実施した。これ以前の旧足羽町と福井県教育委員会による調査を第1次5ヵ年計画とし、以後昭和61年度まで4次にわたって5ヵ年計画を進めた。第1次5ヵ年計画では朝倉氏最後の当主である朝倉義景の館跡を中心として調査を行った。この間、昭和45年には土地改良事業に伴い御所・安養寺や小林谷で緊急確認調査を行い、遺構の保存状態が良好であることを確認して、特別史跡指定の機運を高めた。第2次5ヵ年計画では、それに引き続いて平井地系の武家屋敷跡や朝倉義景館跡に隣接する中の御殿跡、赤淵地係に所在するサイゴ寺跡、指定地内の北部に位置する瓢町地係や出雲谷地係など、武家屋敷、寺院、町屋などとみられるいくつかの地点を選択して一乗谷の概況の把握を試みた。第3次5ヵ年計画では、一乗谷川の西側に敷設されることになった県道鯖江・美山線の改良工事に関連して、その両側の平地部分を計画的に調査した。引き続き第4次5ヵ年計画では、その最初の4年で指定地の中央に位置する赤淵・奥間野・吉野本地係を集中的に発掘調査し、この地区の道路、武家屋敷、寺院、町屋等の極めて良好な遺構を検出し、大量の遺物が出土して大きな成果をあげた。最後の5年目は再び平井地系の武家屋敷を調査し、さらに一乗谷の内外を区切る下城戸跡本体の調査に入った。

表1 特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査一覧

年度	西暦	調査計画	主要調査成果	調査次数	調査場所・住所	概報	報告書	面積		
昭和42年	1967	第1次5ヵ年	一乗谷の発掘調査が庭園の整備に伴う事前調査から始まる。朝倉義景館での調査は日本中世考古学の確立に貴重な役割を果たす。	庭園	諏訪館跡・湯殿跡・南陽寺跡の庭園	I	I	1,800		
昭和43年	1968			朝倉館	城戸ノ内町字新御殿(朝倉義景館東南部)	I	I	2,065		
昭和44年	1969			朝倉館	城戸ノ内町字新御殿(朝倉義景館東北部)	I	I	1,953		
昭和45年	1970			御所・安養寺	東新町字御所・安如寺	II		769		
昭和46年	1971	第2次5ヵ年	朝倉義景館の調査が終了し、武家屋敷や町屋群の調査を開始する。町屋群では職人の工房跡が確認される。	第1次	城戸ノ内町字新御殿	III	I	676		
				第2次	城戸ノ内町字新御殿	III	I	34		
				第3次	城戸ノ内町字新御殿	III	I	1,992		
第4次	城戸ノ内町字水谷(中ノ御殿南半分)			IV		1,340				
昭和47年	1972	第2次5ヵ年	朝倉義景館の調査が終了し、武家屋敷や町屋群の調査を開始する。町屋群では職人の工房跡が確認される。	第5次	城戸ノ内町字新御殿(朝倉義景館西北部)	IV	I	1,305		
				第6次	城戸ノ内町字庄角14-7-1	V	14	172		
昭和48年	1973			第7次	城戸ノ内町5-32-1、33、36-1	V	14	246		
				第8次	城戸ノ内町字瓜割流13-25-26	V	14	50		
		第9次	城戸ノ内町字新御殿(朝倉義景館北辺濠)	V	I	170				
		第10次	城戸ノ内町字平井	VI	II	2,425				
		第11次	城戸ノ内町字平井	VI	II	1,240				
		第12次	福井市城戸ノ内町字瓜割流	VI	14	108				
昭和49年	1976	第13次	城戸ノ内町字水谷(中ノ御殿北半分)	VI	III	2,250				
		第14次	城戸ノ内町庄角23-1 浄覚寺		14	42				
昭和50年	1975	第15次	城戸ノ内町字平井・川合・平井・斎藤	VII	IV	2,400				
		第16次	西新町1-4(心月寺地係)	VII	一乗小学校	350				
		第17次	城戸ノ内町字赤淵	VII	VIII	2,050				
昭和51年	1976	第18次	城戸ノ内町字瓢町	VIII		2,500				
		第19次	城戸ノ内町字八地谷43-1	VIII		396				
昭和52年	1977	第3次5ヵ年	平井、川合、赤淵、奥間野地係を中心に面的に調査を実施。武家屋敷や町屋の様子が明らかとなってくる。道路の普請状況が明確になり、約30m=100尺を基準とした町割り状況が判明する。	第20次	城戸ノ内町字出雲谷2~4	VIII	III	2,200		
				第21次	城戸ノ内町字庄角	IX	14	100		
				第22次	城戸ノ内町字庄角14-8	IX	14	100		
				第23次	城戸ノ内町字権殿8-8-1	IX	14	20		
				第24次	城戸ノ内町字平井	IX	IV	2,200		
				第25次	城戸ノ内町字平井・斎藤	IX	IV	2,400		
				第26次	城戸ノ内町字兵庫9-11-1	IX	14	36		
				第27次	城戸ノ内町庄角14-56、59	X	14	33		
				第28次	東新町字斎藤 小学校プール	X	14	800		
				昭和53年	1978	第29次	城戸ノ内町字川合殿・平井	X	V・VI	3,200
						第30次	城戸ノ内町字川合殿	X	VI	1,220
				昭和54年	1979	第3次5ヵ年	平井、川合、赤淵、奥間野地係を中心に面的に調査を実施。武家屋敷や町屋の様子が明らかとなってくる。道路の普請状況が明確になり、約30m=100尺を基準とした町割り状況が判明する。	第31次	城戸ノ内町藤兵川原・川合殿	
第32次	城戸ノ内町川久保 福井市公園センター		14					114		
第33次	安波賀町15字宮下9 ほたるの里資料館	X I	14					30		
第34次	城戸ノ内町8-39	X I	14					120		
第35次	城戸ノ内町字下城戸	X I	VII					1,630		
第36次	城戸ノ内町字赤淵・奥間野		鯖江・美山線					2,800		
第37次	城戸ノ内町庄角14-57、58	X II	14					100		
第38次	城戸ノ内町庄角14-26・1	X II	14					100		
第39次	城戸ノ内町字斎藤・木蔵		鯖江・美山線					800		
第40次	城戸ノ内町字奥間野							3,000		
昭和56年	1981	第41次	城戸ノ内町字 権殿集落センター						14	18
昭和57年	1982	第4次5ヵ年	赤淵、奥間野、吉野本地係を中心に調査。市中寺院や武家屋敷、町屋群を確認した。炭化した医学書や謎が出土した区画は医師の屋敷と判明。また、下城戸の外に位置する武者野遺跡では火葬場が検出された。					第42次	城戸ノ内町字川久保・赤淵	X III
				第43次	城戸ノ内町字中惣・瓢町・下城戸		鯖江・美山線	4,750		
昭和58年	1983			第44次	城戸ノ内町字赤淵	X IV	VIII	2,600		
				第45次	城戸ノ内町瓜割流13-46 消防器具置場	X V	14	63		
昭和59年	1984			第46次	城戸ノ内町字奥間野	X V		3,000		
				第47次	安波賀町字上武者野		武者野遺跡	100		
昭和60年	1985			第48次	安波賀町字上武者野		武者野遺跡	270		
				第49次	城戸ノ内町奥間野	X VI	IX	1,300		
昭和61年	1986			第50次	城戸ノ内町奥間野	X VI	IX	1,300		
				第51次	城戸ノ内町字吉野本	X VII		1,720		
昭和62年	1987			中期 第1次10ヵ年前半	諏訪館跡、湯殿跡庭園の導水路を調査。4庭園が特別名勝に指定される。川合殿地係では上級武家屋敷、中惣地係では朝倉式部大輔景鏡の館と考えられる館を確認。権殿では武家屋敷と町屋を確認。南陽寺跡を調査し、梵鐘の鋳型出土。水辺空間事業では一乗谷川の流路移動や氾濫範囲を確認した。	第52次	城戸ノ内町字吉野本	X VII		1,930
						第53次	安波賀町字武者野		武者野遺跡	200
第54次	城戸ノ内町字平井	X VIII	II			1,800				
第55次	西新町字心月寺		一乗小学校			580				
第56次	城戸ノ内町字下城戸	X VIII	VII			1,200				
第57次	城戸ノ内町字川合殿	X IX	VI			2,560				
第58次	城戸ノ内町字川合殿	X IX				1,300				
第59次	城戸ノ内町字上川原		連絡道路			1,200				
第60次	諏訪館跡・湯殿跡庭園 導水路確認調査	X IX				70				
昭和63年	1988	第61次	東新町字上城戸・城戸ノ内町字上城戸			X X		4,000		
		第62次	東新町字上城戸・城戸ノ内町字上城戸			X X				
平成元年	1989	第63次	城戸ノ内町字木蔵			X X		200		
		第64次	城戸ノ内町21字難陽寺	1989	12	1,600				
平成2年	1990	第65次	城戸ノ内町21字難陽寺	1989	12	1,600				
		第66次	城戸ノ内町14-16		14	180				
平成3年	1991	第67次	城戸ノ内町22字新御殿	1989		330				
		第68次	城戸ノ内町6字中惣	1990		3,800				
平成2年	1990	第69次	城戸ノ内町・安波賀町・西新町(旧河川敷)		水辺空間	775				
		第70次	安波賀町14土居ノ本11-1	1990	14	100				
平成3年	1991	第71次	城戸ノ内町14字庄角2-1、2	1990	14	300				
		第72次	城戸ノ内町6字中惣	1991	14	210				
平成3年	1991	第73次	城戸ノ内町9字兵庫	1991	14	70				
		第74次	城戸ノ内町8字権殿	1991		2,600				
第75次	城戸ノ内町8字権殿	1991								
第76次	安波賀町水窪		篠尾・勝山線	500						

年度	西暦	調査計画	主要調査成果	調査回数	調査場所・住所	概報	報告書	面積		
平成4年	1992	中期 第1次10ヵ年 後半	齊藤、川合殿地係の調査では、武家屋敷や町屋群を確認。また、上城戸・下城戸の外にある寺院を中心に調査。環境整備事業では町並立体復原。	第77次	城戸ノ内町字川合殿	1992	V	2,600		
				第78次	城戸ノ内町字吉野本	1992				
				第79次	安波賀町字水窪	1992			14	120
				第80次	東新町字小林谷	1992			篠尾・勝山線	495
				第81次	城戸ノ内町字齊藤	1993				330
平成5年	1993			第82次	城戸ノ内町字川合殿	1993	VI	1,920		
				第83次	東新町字青木、御所安養寺	1993		1,300		
				第84次	城戸ノ内町字下城戸	1994	VII	500		
平成6年	1994			第85次	安波賀中島町字西山光照寺	1994	11	2,400		
				第86次	東新町	1994	11			
				第87次	城戸ノ内町字上城戸	1994		500		
平成7年	1995			第88次	安波賀中島町字西山光照寺	1994		100		
				第89次	城戸ノ内町字瓜割流	1995	11	800		
				第90次	東新町字安養寺(御所、安如寺地係)	1995	14	100		
				第91次	城戸ノ内町字上川原	1995	13	2,600		
				第92次	城戸ノ内町字新御殿	1995	14	200		
平成8年	1996			第93次	城戸ノ内町字瓜割流	1995		1,400		
				第94次	城戸ノ内町字上川原	1996	14	400		
				第95次	城戸ノ内町字上川原	1996	13	630		
				第96次	東新町字安如寺	1996	13	2,400		
				第97次	城戸ノ内町字新御殿	1996		1,000		
平成9年	1997	中期 第2次10ヵ年 前半	齊藤、川合殿地係を中心に調査を実施。上級武家屋敷を多数確認。中山間事業では城戸ノ内全域で道路遺構を検出。	第100次	城戸ノ内町字川合殿、藤兵衛川原	1997		2,600		
平成10年	1998			第101次	城戸ノ内町字蛇谷			400		
平成11年	1999			第102次	城戸ノ内町字齊藤	1998		2,300		
				第103次	城戸ノ内町字米津	1999		100		
				第104次	城戸ノ内町字齊藤	1999		2,000		
平成12年	2000			第105次	城戸ノ内町字兵庫9-18	1999	14	120		
				第106次	城戸ノ内町字瓜割流	1999		225		
				第107次	城戸ノ内町字瓜割流	32	14	98		
				第108次	城戸ノ内町字木蔵、吉野本、瓢町	32	中山間	1,400		
				第109次	城戸ノ内町字新御殿	32		2,000		
平成13年	2001			第110次	東新町字齊藤		中山間	1,000		
				第111次	西新町字心月寺		中山間	150		
				第112次	城戸ノ内町字雲正寺	33		2,000		
平成14年	2002	中期 第2次10ヵ年 後半	遊歩道周辺での調査を実施。雲正寺地係周辺を調査。南北道路の両側に大型の区画を検出。中山間事業では道路遺構を確認。	第113次	城戸ノ内町字木蔵、雲正寺	34		1,700		
平成15年	2003			第114次	城戸ノ内町字雲正寺	35		1,700		
				第115次	安波賀町字向山			540		
				第116次	城戸ノ内町字川久保		中山間	318		
平成16年	2004			第117次	城戸ノ内町中惣	35	14	26		
平成17年	2005	中期 第3次10ヵ年	遊歩道周辺での調査を実施。特に一乗谷川右岸の上城戸から米津にかけての性格不明の未調査区、および西山光照寺の未調査区を解明する。	第118次	城戸ノ内町字兵庫		14	114		
				第119次	城戸ノ内町字雲正寺	36		3,000		
				第120次	城戸ノ内町字雲正寺	36		500		
平成18年	2006			第121次	城戸ノ内町字上殿	37		100		
				第122次	城戸ノ内町(大岩谷川)			650		
				第123次	西新町字大門(西新川)			250		
平成19年	2007			第124次	城戸ノ内町字米津	38	15	2,500		
				第125次	城戸ノ内町字八地谷・雲正寺・齊藤	38		137		
				第126次	城戸ノ内町字中惣	39	14	44		
				第127次	城戸ノ内町字門ノ内	39		2,000		
				第128次	城戸ノ内町字八地	39		120		
平成20年	2008			第129次	城戸ノ内町字水谷			39		
				第130次	城戸ノ内町字門ノ内	40		2,500		
				第131次	城戸ノ内町14字庄角2	40	14	42		
平成21年	2009			第132次	安波賀中島町字赤旗	41	11	1,500		
				第133次	城戸ノ内町字庄角	41	14	40		
				第134次	城戸ノ内町字藤兵衛川原・上城戸他			222		
平成22年	2010			第135次	安波賀中島町字赤旗	42	11	800		
				第136次	城戸ノ内町字上城戸	42		1,200		
				第137次	城戸ノ内町字木蔵・齊藤	43		300		
平成24年	2012	改定基本計画 短期5ヵ年	城下町の防衛施設の要である上城戸について、城戸内外をつなぐ通路と城戸入口の構造および周辺の様相を面的に解明する。	第138次	城戸ノ内町字上城戸	43		900		
				第139次	城戸ノ内町字上城戸			660		
				第140次	城戸ノ内町字上川原	43	14	120		
				第141次	東新町字上ノ木戸	44		800		
				第142次	城戸ノ内町字下城戸・道東・出雲谷・齊兵衛			245		
平成25年	2013			第143次	城戸ノ内町字木蔵・齊藤	44		30		
				第144次	安波賀中島町字赤旗	44	11	60		
				第145次	東新町字上ノ木戸			200		
平成26年	2014	河川改修事業		第146次	城戸ノ内町字出雲谷・齊兵衛	45		1,250		
平成27年	2015			第147次	城戸ノ内町字出雲谷・齊兵衛	46		33		
平成28年	2016			改定基本計画 短期5ヵ年		第148次	東新町字上ノ木戸	47		200
		第149次	城戸ノ内町字門ノ内・上城戸、東新町字上ノ木戸			47		300		

注 報告書略称 一乗小学校→『一乗谷朝倉氏遺跡 一乗小学校校舍改築に伴う事前調査報告書1986』、鯖江・美山線→『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡 県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書1983.3』、武者野遺跡→『武者野遺跡 国道158選改良工事に伴う事前調査報告書1986.3』、連絡道路→『一乗谷朝倉氏遺跡 朝倉館前連絡道路敷設に伴う発掘調査報告書1987』、水辺空間→『一乗谷朝倉氏遺跡 一乗谷川水辺空間整備計画に伴う事前調査報告書1991.3』、篠尾・勝山線→『一乗谷朝倉氏遺跡 県道篠尾・勝山線改良工事に伴う事前調査報告書1992』、中山間→『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡 ～中山間地域総合整備事業施設間連絡道路整備事業に伴う発掘調査～ 第108次・第110次・第111次・第116次調査2005』



挿図1 特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡調査地略図(縮尺1/10,000)

昭和62年度から中期第1次10ヵ年計画として上城戸跡や南陽寺跡、西山光照寺跡、御所・安養寺跡などの大規模寺院、そして中惣・権殿・河合殿などの武家屋敷・町屋跡を計画的に調査し、遺跡内の各地に所在する大規模かつ特徴的な遺構を究明した。

平成9年度から中期第2次10ヵ年計画として、町並立体復原地区に隣接する一乗谷川より西側部分の八地谷川兩岸を連続的に発掘調査し、この地区の街路や武家屋敷の構造を明らかにした。また、遊歩道設置に伴う事前調査も実施した。途中、平成16年度は福井豪雨により遺跡や資料館が被災したため、雲正寺地係での発掘調査を中断し、災害復旧に全力を注ぐこととなった。

平成17年度から改めて中期第3次10ヵ年計画を施行し、中断した調査を再開した。平成19年度からは、朝倉館跡から上城戸跡に至る遊歩道沿いの整備を進めるために、連続的に字米津や字門ノ内を発掘調査し、刀装具製作工房跡や本書で報告するガラス玉工房跡の存在が明らかとなった。平成22年度からは、西山光照寺跡の平地部北半を調査して、大規模な石垣や建物の存在を確認した。

平成24年度からは、前年度に改定した「特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘・整備基本計画」に基づき、城下町の防御の要である上城戸跡の一带において、城戸内外をつなぐ道路跡と城戸入口の構造および城戸周辺を面的に解明する目的でトレンチ調査を行い、屋敷地や道路跡の一部を確認して現在に至る。

3 調査の方法および組織

発掘調査・環境整備は、国庫補助事業として福井県が直接実施している。その実施機関として、福井県教育庁朝倉氏遺跡調査研究所(昭和47年4月1日～同56年8月19日)、およびこれを改組した福井県立朝倉氏遺跡資料館(昭和56年8月20日～。平成4年4月1日に、名称が一乗谷朝倉氏遺跡資料館となった。)が設置され、その任にあたってきた。平成24年度からは、県の機構改革で同資料館が教育庁から知事部局に移管となったことに伴い、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが朝倉氏遺跡グループを設けて引き継いだ。平成29年度の機構改革で、朝倉氏遺跡に関する全業務を知事部局が担うこととなった。また当初から、「朝倉氏史跡公園基本構想」に基づき福井県朝倉氏遺跡調査研究協議会(平成8年度からは、名称が福井県朝倉氏遺跡研究協議会となった。)が設置され、その指導と助言を受けている。

本報告書に関係する年度における組織、および経費を以下に記す。

○平成20・21・23年度(第127・130・136次発掘調査)

朝倉氏遺跡研究協議会

委員	河原純之*(前川村学園女子大学教授・考古)	委員	池上裕子(成蹊大学教授・歴史)
委員	小野正敏(国立歴史民俗博物館副館長・考古)	委員	高橋康夫(京都大学大学院教授・建築)
委員	高瀬要一(前奈良文化財研究所部長・造園)	委員	本田光子*(九州国立博物館課長・保存科学)
委員	神吉紀世子(京都大学大学院助教授・建築)	委員	久保智康*(京都国立博物館室長・美術工芸)
委員	高妻洋成*(奈良文化財研究所室長・保存科学)	委員	岸田 清(社朝倉氏遺跡保存協会会長)
委員	青山幹男*(公募)	委員	石川 太*(公募)
委員	川口義雄*(公募)	委員	高橋百合子*(公募)
委員	松山直子*(公募)	委員	山下忠五郎*(公募)

(*青山・松山委員の任期は平成22年1月24日、河原・本田・石川・川口委員の任期は平成24年1月24日まで、久保・高妻・高橋・山本委員の任期は平成24年1月25日から)

一乗谷朝倉氏遺跡資料館

館長	水野和雄(考古)	館長	吉岡泰英*(建築)	副館長	岩田 隆(考古)
副館長	畠中清隆*(考古)	次長	藤井賢一(事務)	次長	山崎俊枝*(事務)
総括文化財調査員	佐藤 圭*(歴史)	主任	水村伸行*(考古)	主任	櫛部正典*(考古)
主任	川越光洋*(考古)	主任	宮永一美*(歴史)	文化財調査員	千木良礼子*(建築)
文化財調査員	藤田若菜(造園)	文化財調査員	今出瑞穂*(建築)	非常勤嘱託	池田千鳥*(学芸)
非常勤嘱託	奈良一信*(事務)	非常勤嘱託	伊藤正博*(事務)	非常勤嘱託	岡本妙子*(事務)
非常勤嘱託	眞保弘恵(事務)	特別顧問	青木豊昭(考古)		

(*吉岡・畠中は平成23年度、山崎・櫛部は同21年度、宮永・今出・伊藤・岡本は同22年度から。佐藤・千木良・池田・奈良・青木は同20・21年度、水村は同20年度のみ配属。川越、同20・21年度は主査。)

経費	平成20年度	発掘調査経費	32,760千円(2,000㎡発掘調査、遺物整理、概報刊行)
	平成21年度	発掘調査経費	35,551千円(2,500㎡発掘調査、遺物整理、概報刊行)
	平成23年度	発掘調査経費	18,886千円(1,200㎡発掘調査、遺物整理、概報刊行)

○平成27～29年度(本報告書作成)

朝倉氏遺跡研究協議会

委員	池上裕子(成蹊大学名誉教授・歴史)	委員	小野正敏(国立歴史民俗博物館名誉教授・考古)
委員	高瀬要一*(元奈良文化財研究所部長・造園)	委員	神吉紀世子(京都大学大学院教授・建築)
委員	久保智康(元京都国立博物館室長・美術工芸)	委員	高妻洋成(奈良文化財研究所室長・保存科学)
委員	富島義幸(京都大学大学院准教授・建築)	委員	岸田 清(社朝倉氏遺跡保存協会長)
委員	小野健吉*(奈良文化財研究所副所長・造園)	委員	小浦久子*(神戸芸術工科大学教授・都市計画)
委員	水野和雄*(元一乗谷朝倉氏遺跡資料館館長)	委員	藪本金一*(元福井県立若狭東高等学校長)
委員	網谷克彦*(福井県陶芸館長)	委員	吉田 智*(元福井市明道中学校長)

(*高瀬・水野・藪本委員の任期は平成28年1月24日まで、小野健吉・小浦・網谷・吉田委員の任期は同1月25日から。)

埋蔵文化財調査センター

所長	工藤俊樹	次長	赤澤徳明*	主査	木村孝一郎*
非常勤嘱託	蟻塚美佐子*・冨坂昌代*(事務)				

(*赤澤は平成28年度から。木村は資料館併任地勤務。蟻塚は同27・28年度、冨坂は同29年度で資料館併任地勤務。)

一乗谷朝倉氏遺跡資料館

館長	畠中清隆*(考古)	館長	向出宏二*(事務)	副館長	月輪 泰(考古)
次長	井上順子*(事務)	次長	下山淳子*(事務)	主任	川越光洋*(考古)
主任	宮永一美*(歴史)	主任	田中祐二*(考古)	主査	松本泰典*(考古)
主査	熊谷 透*(建築)	文化財調査員	藤田若菜*(造園)	学芸員	石川美咲*(歴史)
学芸員	渡辺英明*(保存科学)	学芸員	大竹桃子*(史跡整備)	嘱託文庫調査専門員	佐藤 圭*(歴史)
非常勤嘱託	眞保弘恵(事務)	非常勤嘱託	松村良行*(事務)	非常勤嘱託	花川洋介*(事務)

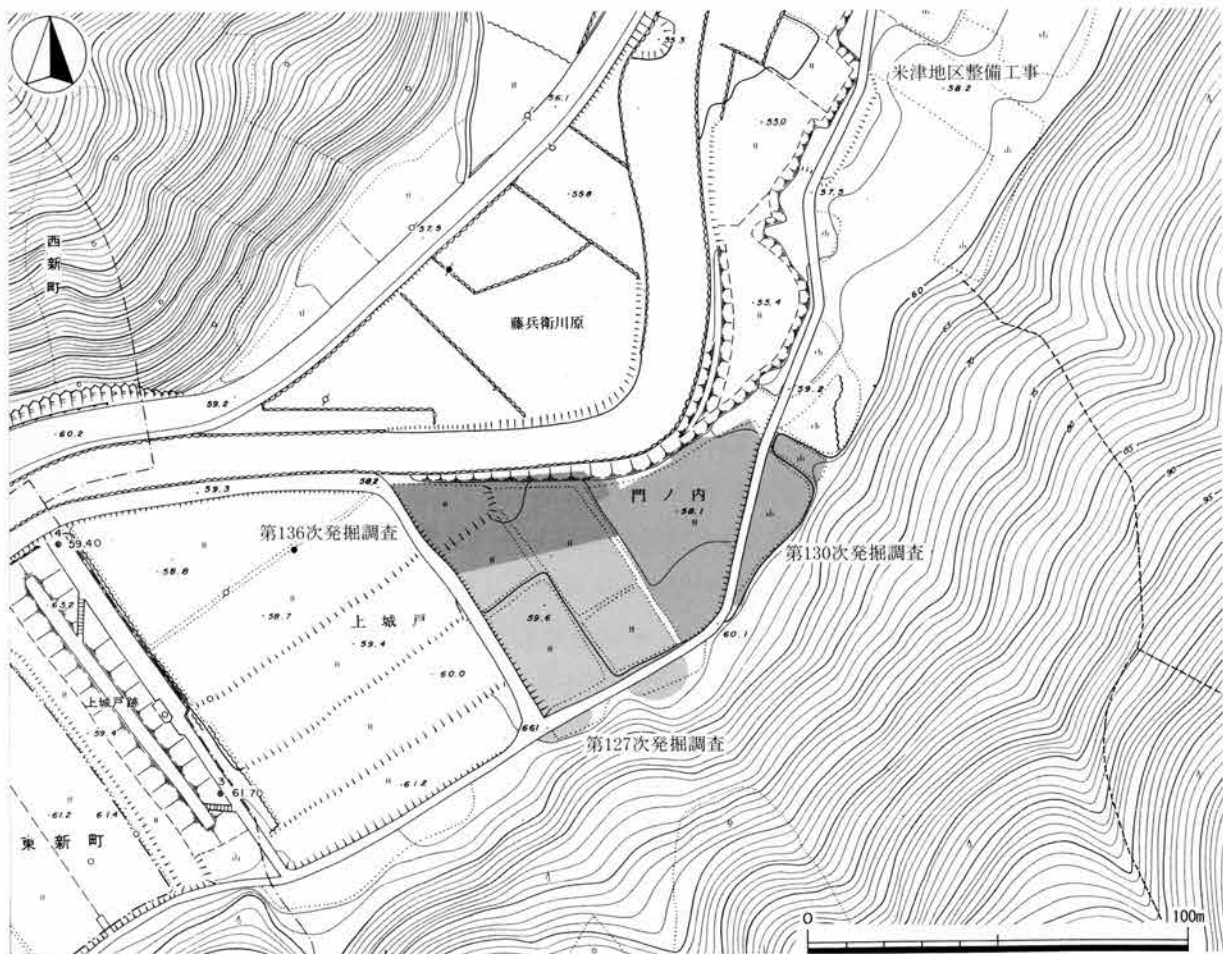
(*畠中は平成27年度。井上・松村・佐藤は同27・28年度。熊谷、同27・28年度は文化財調査員。石川は同28年度、渡辺・大竹・花川は同29年度から配属。藤田は埋蔵文化財調査センターに併任。宮永は同27年度、川越・田中・松本・藤田・熊谷・眞保は同27・28年度、埋蔵文化財調査センターに併任。)

経費	平成27年度	発掘調査費	6,083千円(報告書遺物整理)
	平成28年度	発掘調査費	3,916千円(報告書遺物整理)
	平成29年度	発掘調査費	1,557千円(報告書刊行)

Ⅱ 調査の概要と経過

1 調査の概要

調査対象地は、福井市城戸ノ内町字門ノ内・字上城戸(以下、門ノ内地区という)に所在し、一乗谷東山稜の裾部、谷内を南から北方向へ流れる一乗谷川の右岸、戦国期に越前一国を治めた朝倉氏最後の当主朝倉義景が居住した朝倉館跡の南方約400mに位置する。また、平成3年(1991)に国の特別名勝に指定された庭園跡をもつ諏訪館跡が東背台地上に位置する字米津の南に広がる。この地点では第124次発掘調査が実施され、大規模な屋敷区画と金属工房跡や金属加工職人に関わる遺物が検出されている。諏訪館跡や特殊職人の屋敷跡のほかにも、本調査区周辺には新御殿や中の御殿など朝倉氏にとって重要な施設が近距離に配置されていることも、本調査区の特徴といえる。また、本調査区から南方100mには長さ約105m、高さ約5mの上城戸土塁があり、防御施設によって城下町の内側と外側を画している。本調査区の対岸の一乗谷川左岸には約5,000㎡の字藤兵衛河原が東に張り出すように広がるが、幾度となく繰り返された同河川の氾濫で遺構は消失した。ただ、西方の字河合殿では第100次発掘調査で山裾まで広がる武家屋敷が検出され、その北側の第57・58・83次発掘調査地点では大規模武家屋敷跡が確認される。3地点と北側には、武家屋敷や町屋を復元整備した町並立体復原地区がある。なお、本調査区付近は、土地改良工事の際に削平され、削平の時には遺物が大量に認められた。



挿図2 第127・130・136次調査区周辺地形図(縮尺1/2,000)

門ノ内地区の発掘調査は、平成17年度(2005)から始まった中期第3次10ヵ年計画に当たる。米津から上城戸跡にかけての地区は、過去の調査においては昭和63年度(1988)に行われた上城戸跡の発掘調査以外なされていなかった。そのため、この区間の屋敷割など、具体的な町並みの様相を解明することが計画の目的の一つであり、門ノ内地区の調査は4年次(2008)、5年次(2009)、7年次(2011)目に行った。4年次が第127次、5年次が第130次、6年次が第136次発掘調査に該当する。調査面積は全部で約5,700㎡であった。調査区内は上城戸跡と軸を合わせた3mグリッドの区画に区切り、遺物の取上げなどを行った。なお、第130次発掘調査では東西セクションをT列、南北セクションを12列、第136次発掘調査ではD・L列と25列に設定して基本層序を確認し、第127次発掘調査では実施しなかった。

2 調査の経過

本調査区の位置する字上城戸・門ノ内を中心とする地区の地形を概観すると、東山稜の裾と一乗谷川までの間は水田化されている。上城戸地区北東の水田2枚は中ではやや大きく、標高60.2mを測るが、この水田の北側は0.8m下り、東西にやや長い小区画の水田がみられる。なお、これらの水田の西側は標高58.5mと最大1.2m下り、現状ではやや高い盛り上がりが見られた。以上から本調査区付近では、北と西へ向かうほど低くなる土地の利用が行われたことがわかる。なお、圃場整備がなされた現在は、先述した水田2面を分ける作業道が東西にのび、山際に遊歩道が南北にのびている。発掘調査は、この作業道よりも北側を三分割し、3ヵ年で行った。以下、各次毎に調査成果の概要を述べる。

第127次発掘調査は上城戸地区の北側約2,000㎡を対象とし、平成20年(2008)4月15日に開始して、12月5日に終了した。遺構の遺存状況は良好でなかったが、山から東西方向にのびる土塁と大溝を検出した。遊歩道以东は山際で水分が多いため、建物の周囲の溝から上部構造に用いられたと考えられる建築部材が多く出土した。調査区北西は、土地改良工事に伴い削平されて、遺構は全く検出していない。なお、先述した旧水田の東西の段に並行して、土塁と大溝を検出した。

第130次発掘調査は門ノ内地区の南側約2,500㎡を対象とし、平成21年(2009)4月22日に開始し、12月16日に終了した。上層遺構面に存在したと思われる建物の礎石は大半が失われていたが、柱穴や溝、石積施設など、地下を掘り込んだ遺構は比較的良好な状態で検出でき、掘立柱建物の建築部材や杭、板が水分豊富な粘質土によって保存されていた。加えて、溜枘と考えられる石積施設でも水を引き込む竹製の導水管を検出するなど、木製品が多く認められた。また、山裾が土塁と交差する調査区北東部の建物内で炉跡1基を検出し、ガラス玉や溶解ガラスを多く伴うことから、室町時代のガラス工房跡と特定することができた。本地区の北東に位置する米津地区で刀装具の金属工房跡が確認されていることから、両地区のある一乗谷川右岸は、特殊な工房が集まる区域であったことが判明した。

第136次発掘調査は第127次調査区の西側約1,200㎡を対象とし、平成23年(2011)10月4日から同24年3月23日まで実施した。遺構面は旧水田の南北の段で分かれるが、この段に並行する土塁と大溝を検出した。上段は削平されており遺構を検出していないが、下段では礎石建物や井戸、石組溝など多くの遺構を検出した。

以下、各調査次の調査過程は、日誌抄の通りである。

日 誌 抄

第127次調査(平成20年4月15日～20年12月5日)

- | | | | |
|-------|---|--------|----------------------------|
| 4月15日 | 発掘調査を開始する。耕作土除去を開始。 | 10月10日 | SD6279の一部を検出。B4区でSB6257検出。 |
| 7月1日 | 耕作土下の粘土層掘削開始。以降、継続。 | 10月11日 | SD6279の掘削を開始。 |
| 8月12日 | B3区でSD6250・SD6251・SD6252の一部分を検出。 | 10月15日 | B3区でSB6251の南半を検出。 |
| 8月27日 | B3区でSZ6278・SV6274・SV6277の一部分を検出。
既に検出済みの遺構内部の掘削開始。 | 10月16日 | B4区でSB6258の掘削を開始。 |
| 9月11日 | A2区およびB4区の調査開始。A2区は同日内で終了。
SV6274・SV6277の間でSD6276を検出し、掘削を始める。
SD6252の西端で炭化杭を検出し、同日SD6252完掘。 | 10月28日 | SD6279西側で、北側石列を検出。 |
| 9月12日 | B4区を砂利面まで掘り下げる。木製品が出土した。 | 11月5日 | SD6279西側で、南側石列を検出。 |
| 9月18日 | B4区で上層面のほかSB6258やSD6272を検出した。
後日検出したSD6256を含む溝内からは角材が多数出土し、建物内部では埋壘遺構を数多く検出した。 | 11月26日 | SD6279西側完了。 |
| | | 11月27日 | B3区、B4区の掘削作業を終了。 |
| | | 12月2日 | B3区、B4区の写真撮影を終了。 |
| | | 12月3日 | 航空測量実施。 |
| | | 12月4日 | 調査区埋め戻しは羅宇年度に実施。 |
| | | 12月5日 | 発掘調査完了。 |

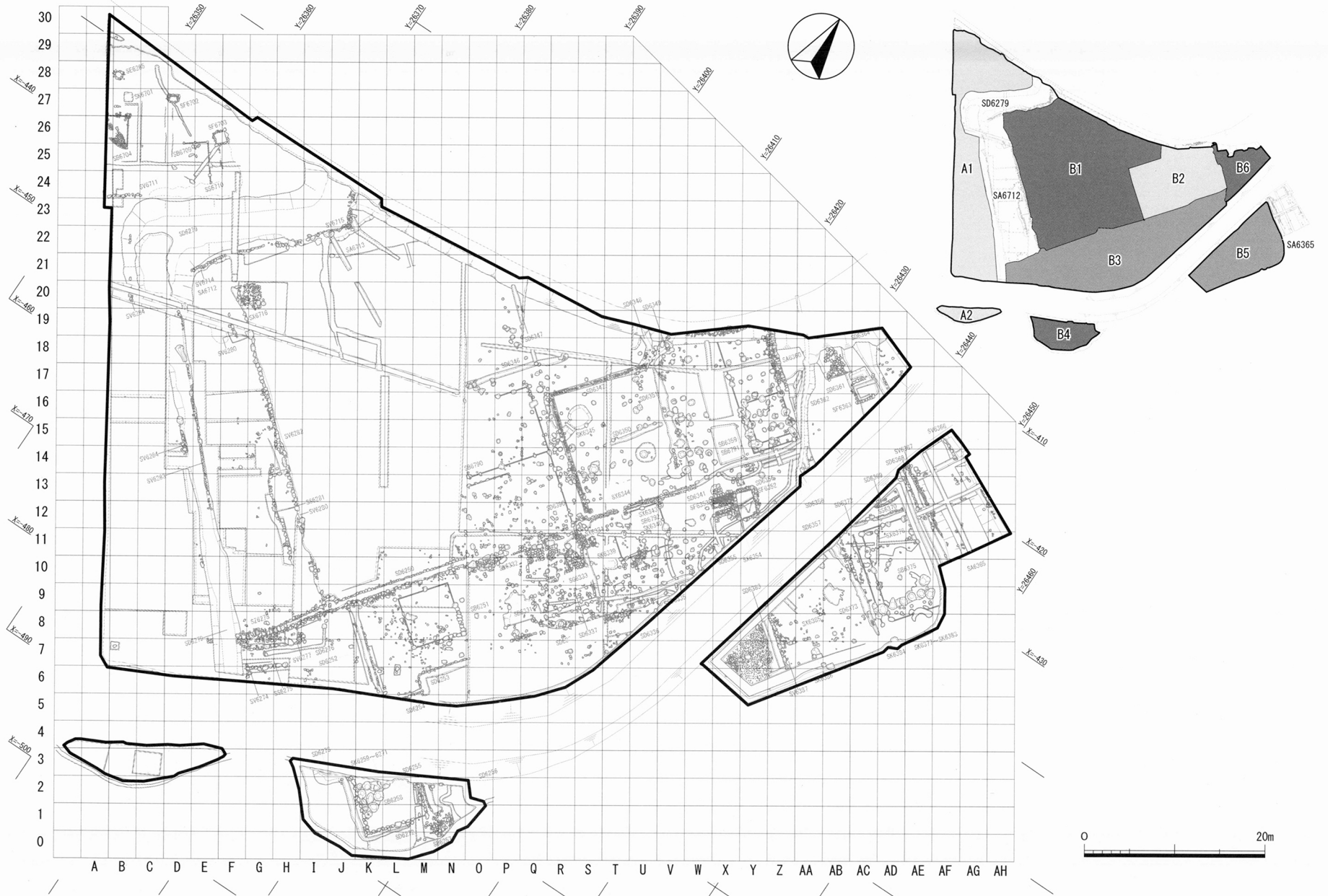
第130次調査(平成21年4月22日～21年12月16日)

- | | | | |
|-------|--|--------|---|
| 4月22日 | 発掘調査を開始する。耕作土除去を開始。 | 9月17日 | SF6352から3枚重なった板を検出。18日写真撮影。 |
| 5月11日 | B区域内は耕作土下の掘削開始。 | 9月24日 | B5区でSA6365などの遺構の掘削開始。 |
| 5月20日 | B区域内で遺構検出を開始する。 | 9月29日 | SB6339完掘写真撮影。30日も撮影実施。 |
| 5月28日 | B5区でも耕作土除去。元染付の皿が出土。 | 10月1日 | SG6333完掘写真撮影。 |
| 6月16日 | B3区で第127次調査で認めたSD6250の続きを検出。 | 10月9日 | B5区でSD6368掘削。ガラス玉が出土。SX6376検出。 |
| 7月1日 | B3区でSD6355・SF6352・SF6353などの遺構を検出。 | 10月14日 | B5区でSB6375・SD6373の掘削を開始。SD6373より元染付の皿が多数出土。後日、銅製飾金具も出土。 |
| 7月2日 | B3区でSD6335・SD6337・SD6338などの遺構を検出。 | 10月15日 | B5区でSV6387・SD6388より南を掘削。 |
| 7月3日 | B2区の北側で柱穴を検出する。 | 10月16日 | SD6388周辺からガラス玉が出土。 |
| 7月23日 | B3区でSD6335などの遺構の掘削開始。 | 10月20日 | SB6375内の埋壘遺構の掘削開始。 |
| 7月24日 | B3区でSB6331に伴う柱材の掘削開始。 | 10月22日 | SF6352内で土壌分析のサンプルを採取。 |
| 7月28日 | B1区でSB6359付近の柱穴の半掘開始。 | 10月30日 | SD6368など土壘施設に伴う遺構を完掘。 |
| 7月29日 | B3区でSG6333などの遺構を検出。 | 11月4日 | SX6376半掘。 |
| 8月5日 | B2区でSD6341に伴う土師質皿が大量に出土。 | 11月6日 | SX6385半掘。 |
| 8月18日 | SF6352・SF6353などの掘削を開始。 | 11月10日 | 遺構完掘。航空測量に伴う清掃を開始。 |
| 8月26日 | SF6352に繋がる竹製導水管を検出。 | 11月12日 | 航空測量を実施。 |
| 8月27日 | 調査区を川側に拡張し、B2区でSA6360検出。 | 11月13日 | 全景写真を撮影。 |
| 8月28日 | SF6352から土師質皿が大量に出土。写真撮影。 | 11月21日 | 現地説明会開催。 |
| 9月3日 | SF6352から竹の筒や漆器椀が出土。写真撮影。 | 11月23日 | 遺構保護の山砂の埋め戻し開始。 |
| 9月4日 | B6区でSF6363・SD6362・SD6364などの遺構を検出。 | 12月15日 | 遺構保護の山砂の埋め戻し終了。 |
| 9月8日 | SF6363を掘削。藁状の植物と、被熱した床面を確認。 | 12月16日 | 発掘調査完了。 |
| 9月16日 | B5区で耕作土下の掘削開始。10cm程掘り下げる。
B2区では、土師質皿の一括埋納遺構SX6344を検出。 | | |

第136次調査(平成23年10月4日～24年3月23日)

- | | | | |
|--------|--|--------|---|
| 10月4日 | 発掘調査を開始する。耕作土除去を開始。 | 11月20日 | SF6703掘削開始。土壌分析のサンプルを採取。 |
| 10月6日 | 東西方向に3m幅で2箇所トレンチ掘削。 | 11月29日 | SF6703出土遺物の写真撮影。SD6279掘削開始。 |
| 10月7日 | A1区でSF6703検出。第127次調査区との境界で南北トレンチ設定。掘削開始。 | 12月6日 | A1区でSF6702や近代の複数の溝を検出。 |
| 10月11日 | B1区でSV6714の一部分を検出。 | 12月7日 | SF6702掘削完了。 |
| 10月12日 | B1区でSV6715の一部分を検出。 | 12月12日 | SK6701掘削完了。 |
| 10月13日 | B1区でSX6716の一部分を検出。 | 12月13日 | 航空測量に伴う清掃を開始。 |
| 10月18日 | A1区で第127次調査で認めたSE6285を確認。 | 12月14日 | 全景写真を撮影。 |
| 10月26日 | A1区でSK6701検出。 | 12月15日 | 航空測量を実施。 |
| 11月2日 | A1区の南北トレンチでSA6712の裏込め検出。 | 12月19日 | 調査区埋め戻し開始。 |
| 11月4日 | A1区の南北トレンチでSD6279の両肩を検出。 | 12月22日 | 年内の埋め戻し完了。 |
| 11月8日 | A1区の南北トレンチでSD6279の底部を検出。 | 3月6日 | 調査区埋め戻し再開。 |
| 11月15日 | A1区でSX6708検出。 | 3月23日 | 発掘調査完了。河川改修事業に伴い、一乗谷川の川際で確認したSD6279断面観察を実施する。 |
| 11月16日 | A1区でSX6707検出。 | | |

挿図3 グリッド割設定図・区画割図(縮尺1/600)



Ⅲ 遺構

検出した主な遺構は、溝35、土塁および石垣17、建物11、井戸1、石積施設5、土坑7、埋甕遺構20である。一乗谷の滅亡時と想定される上層面は、過去の土地改良工事で削平されており一部を残すのみであり、大部分を下層面で検出した。ただ、場所により、遺構の重複や、明らかに軸の異なる遺構がみられる点から、下層面に時期の異なる複数の遺構を含むと判断できよう。調査区は大溝SD6279が沿う土塁SA6712・6713で二分され、北端に土塁SA6365がある。土塁内には土塀のような明らかな屋敷境がみられないため、山際西方の両土塁の間を1つの屋敷地B区とし、土塁より西側と南側をA区とした。また、A・B区は遊歩道で区切られるため、便宜上、この遊歩道をA・B区内を分ける区画と定義する。さらにB区は、溝SD6341・SD6250で東西に分けて、溝SD6341・SD6342を周囲に認める区画と土塀SA6330の北側の低い区画の6つに分けた。区割りについては、挿図3に示したとおりである。なお、B3区とB5区で遺構面の標高差が大きいことから、遊歩道下に段状の施設があると想定できる。各遺構のつながりの解明など、多くの問題点は今後の遊歩道下の調査で解明されるであろう。

本報告書の遺構の記述は、層序、屋敷区画の基本となる土塁と大溝、A区、B区の順番で行った。遺構の説明で用いる方位は地図上の方位とは異なり、山側を東、一乗谷川側を西とする。遺構でも主に礎石建物では一乗谷の基準寸法に従い、1間を6尺2寸=約1.879mで記述した。

区画Aの層序(第22・23図)

調査地点は、大半を大溝SD6279が占めるため、詳細は同遺構を含む土層図を参照されたい。遺構面までの堆積土は0.3mと嵩が低い。遺構面はD26で褐灰色土、D28で灰黄褐色土である。

区画Bの層序(第21図)

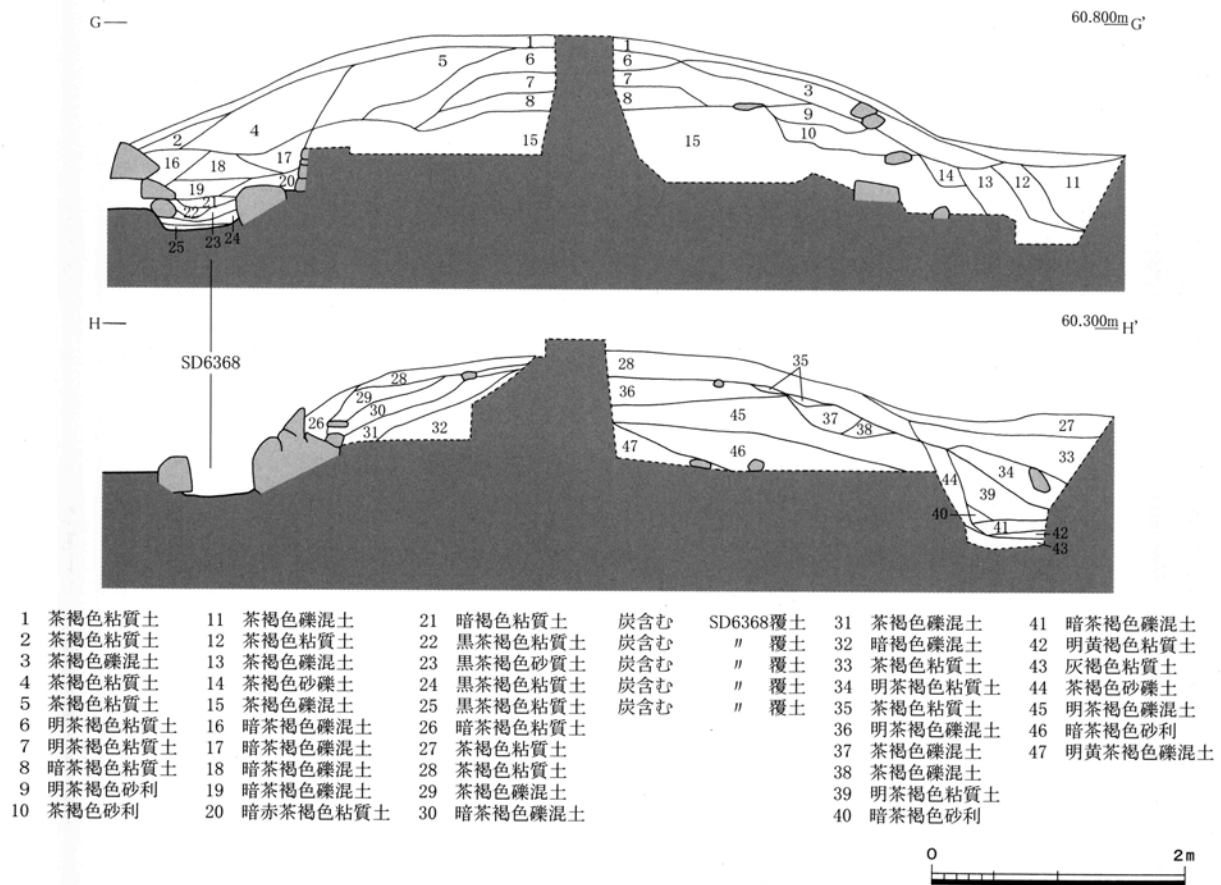
調査地点で、基本層序の不明確な地点も認められるが、調査区全域に土地改良工事に伴う暗褐色土がみられる。層序は、東西方向はT列、南北方向は12列にセクションベルトを設け、一部は深掘りも行い、観察した。B区の東西方向の基本層序は、B3区は礫を含む青灰色粘質土上に、黄灰色粘質土、炭を認める灰褐色土の順で堆積し、溝SD6335・土坑SK6339などは灰褐色土上面で検出した。T8には灰褐色土で覆われた溝状の窪みがあり、ここから遺物が出土するため溝SD6336の続きとも考えられる。B2区はT16付近で礫を含む青灰色粘質土が黄灰色粘質土に変わることから、山側の東方向から一乗谷川の西方向へと整地したことがわかる。この整地土上に淡灰色土が部分的に認められるが、この土は遺物と炭を含まない点からB3区の黄灰色粘質土に対応すると考えられる。溝SD6341・SD6342は、この上面で確認した。淡灰色土上の暗灰色土は、炭と遺物とともに現代のゴミを含むので、B3区の灰褐色土とは対応せず、土地改良工事に伴う土と判断する。B3区南西における遺構の遺存状況の悪さとも様相が一致する。B区の南北方向の基本層序は、T12～Y12間まではB3区の東西方向と同じである。基本層序は石敷遺構SX6334と溝SD6390を境に変わり、R12では青灰色粘質土上に炭化物層がみられ、砂質に富む灰褐色土、暗褐色土の順で堆積する。溝SD6390は灰褐色土上面で検出され、灰褐色土は青灰色粘質土と灰色粘質土にQ12で変わり、灰色粘質土はP12で灰黄褐色土へと変化する。Q12地点の青灰色粘質土が灰色粘質土にN12で変わるように、N12以南でも基本層序は異なるものと思われるが、詳細は不明である。ただ、N12以南は、SA6712まで削平を受けており遺構は遺存しない。

区画に関わる遺構(第1～3・5～7・9・10・20・22～25図、挿図4～7、PL.1～4・16)

屋敷地を区切る遺構である。

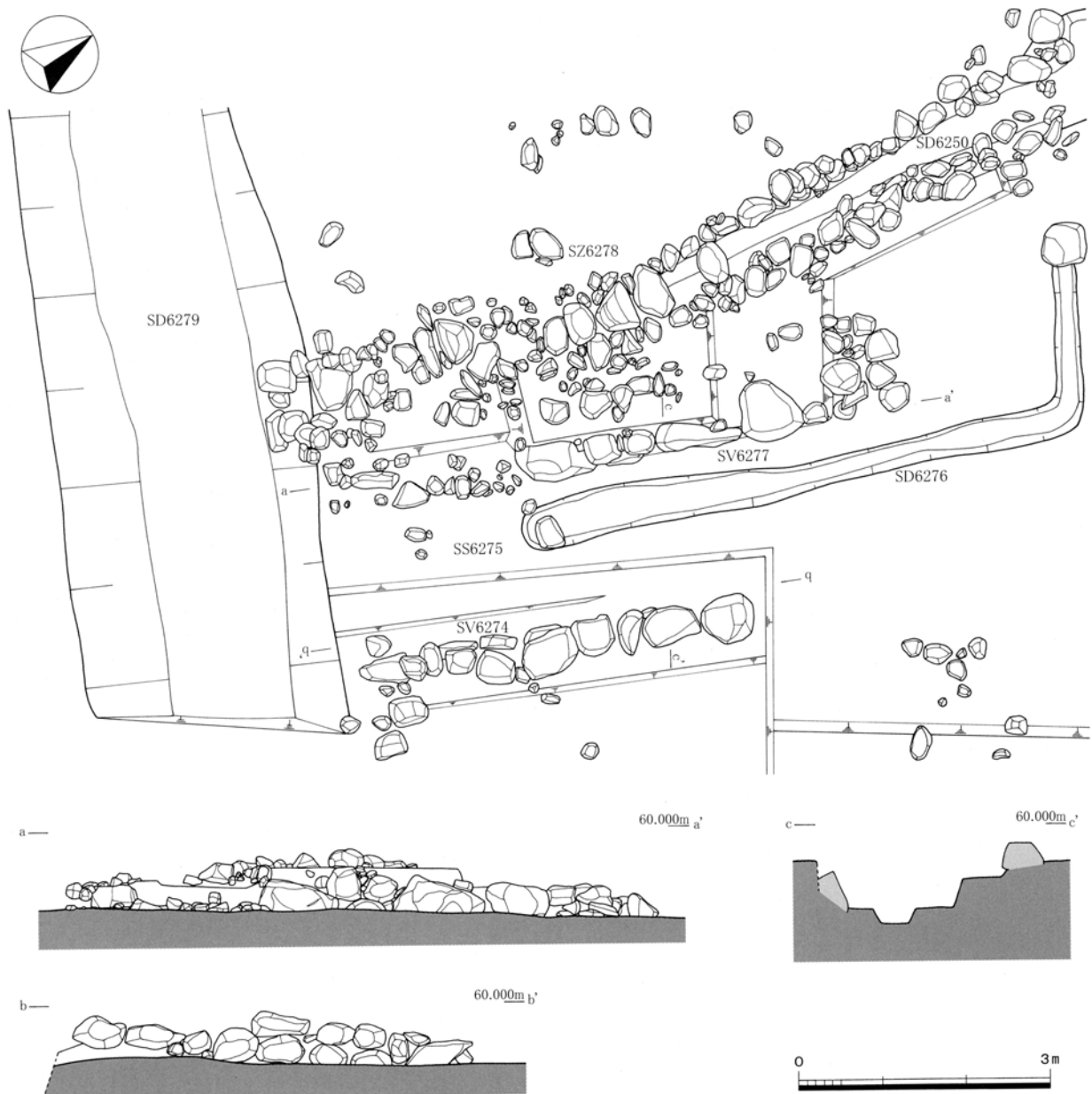
SA6712・6713 東方の山裾から続く幅約9.5mの東西方向の土塁SA6712と、その土塁が上段部の南西隅で直角に曲がり、北へ延びていたと推定される幅約3.5mの土塁SA6713で、SA6712は北面石垣SV6282と南面石垣SV6283をもつ。土塁上の北側には犬走状通路SS6281が認められる。SA6713は西面石垣SV6714をもつが、SV6714の北端から西方に石垣SV6715が折れ曲がる。両土塁の南方および西方には大溝SD6279が伴うが、SV6715の屈曲に伴って大溝SD6279も折れ曲がる。なお、SV6715は石が小振りで斜めに積むことから、SV6714よりも新しい構築物と考える。また下層遺構面においては、SA6713の石垣がない点から、大溝SD6279は北端で西方に折れ曲がらず、北方に延びていたと考えられる。土塁の構築土の下位は粘土層で、黄灰・灰黄色粘質土を上位に認める。石垣SV6280内外両脇は砂層である。砂層の上面を粘質土で埋め戻して通路SS6281を構築する。この土塁と大溝は、屋敷地の南・西面を囲み、区画するための施設である。

SA6365 検出長約8.5mを測る東西方向の土塁で、土塁の裾には石垣SV6366・6367が構築されている。石垣の南北面の幅は約5.6mで、高さは土塁南側の平坦面から約1.6mを測る。石垣は北側のSV6366と南側のSV6367とも、川側では長径0.7mまでの石を用いる一方、山側は小振りの石を多用する。土塁の構築土の下位は大きな礫を多く含む粘質土で、上に砂利や礫混じり土を盛る。遊歩道西側のB6区では、土塁延長線上で遺構を検出したため、同区で土塁は削平された可能性もある。屋敷地北東面を囲む土塁南側の礎石建物SB6375内にガラス製遺物を製作したと考える工房跡がある。



挿図4 SA6365土層断面図(縮尺1/60)

- SV6283 土塁SA6712の南側面で検出した石垣である。長径0.3~0.7m大の基底石のみ検出した。
- SV6284 大溝SD6279の南側面で検出した石垣である。長径0.3~0.7m大の石を4石積む。上端から下端まで約0.8mを測る。一部分の検出だが、対面するSV6283も同じ様相であったと考える。
- SV6714 大溝SD6279の東側面で検出した石垣である。長径0.4~0.8m大の石を数段積む。
- SV6715 大溝SD6279の北側面で検出した石垣である。直径0.2~0.6m大の石を数段積む。用いる石の規格が小さい点でSV6714と異なるが、SV6714も遺存の悪い南側では石がやや小さめである。
- SV6274 検出長約4.7m、最高部で約0.6mを測る石垣である。長径0.4~0.7m大の石を2段認める。石垣の東方は、山から続いた地形が盛り上がり、土塁と判断できるため、土塁端面の石垣と判断する。石垣SV6277と構築面が異なり時期差を想定できる。SV6274の構築時にはSV6277の間に間口約1.7mの通路SS6275があったと考えられる。南端は大溝で途切れる点から、橋などの構築物で渡ったと判断する。
- SV6277 検出長約7.3m、最高部で約0.6mを測る石垣である。長径0.4~1.1m大の石を2段認められる。



挿図5 SV6274・SV6277・SD6276・SS6275・SZ6278遺構平面図・立面図・断面図(縮尺1/80)

SS6281 土塁SA6712の北壁SV6282とSV6280の間にある犬走状の通路である。最大幅約2mを測る。

SD6279 土塁SA6712・6713と並行する大溝で、上段部東側では幅約2.5～3mを測る。西半部は両側面に石垣を伴うが、東半部は素掘りである。東半部では粘質土と砂層が互層で自然堆積するが、西半部では最下層に覆土が認められ、埋め戻して整地した痕跡を確認した。遺物は溝SD6250合流部以西のF8・9で出土量が多く、大量の土師質皿のほかに、漆皿、聞香札、折敷などがある。また、一乗谷で終末期の遺構にみられる白磁の菊皿を含むため、上段部の大溝は朝倉氏が滅亡した天正元年(1574)頃まで機能したと判断する。その一方で下段部は大溝の幅が広がり、最大幅約8mを測り、上段部との間には差異を認める。東西方向に延びる下段部の大溝の深さは約0.4mと、約0.8mを測る上段部よりも浅い。水は緩やかに一乗谷川の方へ流れる。なお、大溝と下段部遺構面周辺は厚さ約1cmの砂層で覆われていた。この砂層は、一乗谷滅亡後に起きた一乗谷川の氾濫の堆積物と考えるが、この際、多くの遺物が流出したことを出土量の少なさから推察する。なお、上段部と下段部の溝幅の齟齬については、掘り直しの可能性を想定している。つまり、当初は下段部と同程度の幅で山際まで延びていた溝が埋没した後、北肩のラインはほぼ踏襲し、幅を狭めて再度掘削した可能性がある。その場合、下段部で再掘削された溝の掘方が確認できなかったのは、前述した一乗谷川の氾濫により削平されたためと考える。一方、上段部でも本来の溝の南肩は確認できなかった。そのことについては、この一帯が一様に湿地の堆積で湧水もあり、自然埋没した場合、掘方の検出が難しいためと考える。したがって、この点については今後の調査での課題としておきたい。

SD6276 石垣SV6277の同一面で検出した素掘りの溝で、北側で西方に曲がる。

SZ6278 土塁SA6712の下部に位置する暗渠で、長さ約6mを測る。蓋部分は溝と同じ石だが、上面は面をもたない。内部の覆土は青灰色の単一粘土層で、短期間に埋没したと思われる。



挿図6 SV6715検出状況



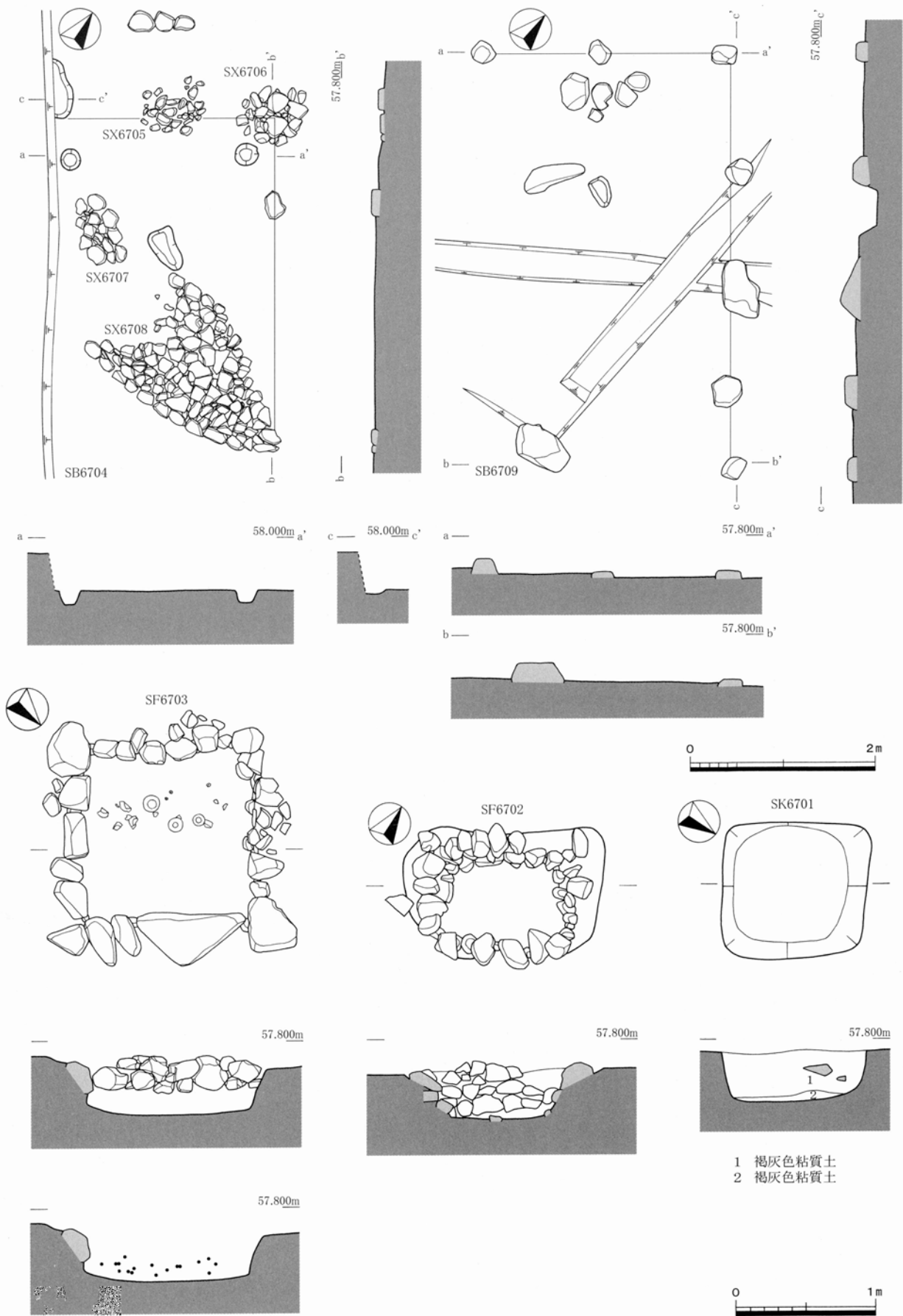
挿図7 SD6279漆器皿出土状況

A1区(第2～7・9図、挿図8・9、PL.1～3・5・6)

土塁SA6712・6713と大溝SD6279の西側に面する区画で、礎石建物など多くの遺構を認める。遺構は下段部で検出され、上段部は削平を受けて南東隅に礎石1石を残すのみである。遊歩道により、東西に分かれるA2区についても、削平を受けて遺構は遺存しない。

SV6711 検出長約3.8mを測り、やや大きめの石を用いた一段の石列である。大溝SD6279の南北方向と軸が揃い、北端は通路SS6710付近まで認める。西側に広がる平坦面を区画するためのものと判断する。

SB6704 礎石とその根石である集石遺構SX6705・6706、礎石の抜け痕の配置から礎石建物と判断する。



挿図8 SB6704・SB6709・SF6702・SF6703・SK6701遺構平面図・断面図(縮尺1/40・1/60)

建物内部では深さ0.1mを測る小穴を2基および後述する石敷遺構SX6707・6708を検出した。

SB6709 東西が約4.6mで2間半、南北1間半の礎石建物である。径約0.3mを測る礎石をもつ。

SE6285 平成2年度(1990)に実施した第69次発掘調査の第12トレンチで検出した井戸である。直径約0.6m、深さ約2.5mを測る。底に木柵はなく、埋土は人頭大の河原石と褐色粘土である。越前焼播鉢や中国製陶磁器、木製品の自在鉤、石製品は笏谷石製の平面D字型のバンドコの身のほか、茶臼の上臼が出土している(『一乗谷朝倉氏遺跡 一乗谷川水辺空間整備計画に伴う事前調査報告1991. 3』参照)。

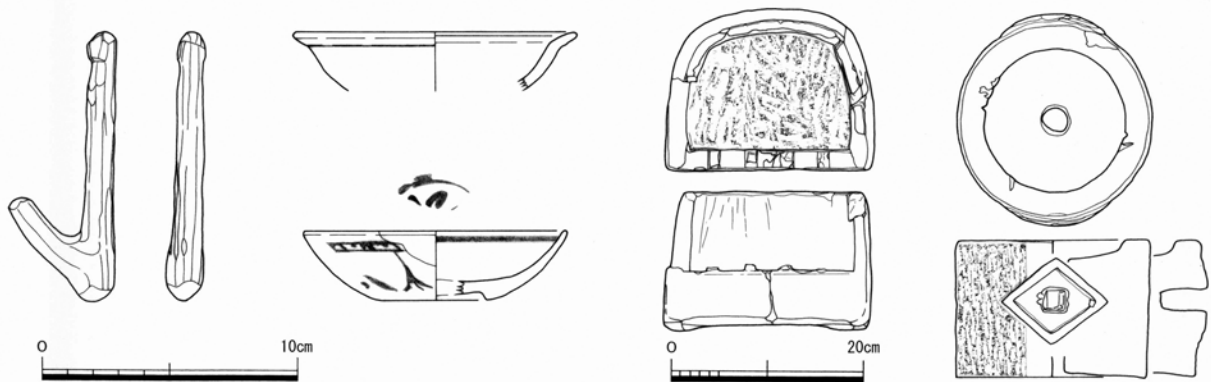
SF6702 東西約0.5m、南北約0.8m、深さ約0.4mの石積施設である。中からは多量の土壁片が出土した。

SF6703 東西約1.2m、南北約1.2m、深さ約0.4mの石積施設である。施設内北半部で土師質皿および銅銭が一括出土した。土壌分析の結果、SF6702とも便所遺構と判断できるまでには至っていない。

SK6701 東西約1.1m、南北約1.1m、深さ約0.4mの素掘りの土坑である。

SS6710 礎石建物SB6709の東面と北面に沿い、SF6703へ通じる砂利敷きの通路である。最大幅は約2.5mで、南北長は約10m、東西長は約5.5mを測る。

SX6707・6708 0.2~0.5m大の石の平坦面を上面にして配置した石敷遺構である。SX6708の南端は石を弧状に配列する。礎石建物SB6704の構造物と考える。



挿図9 SE6285出土遺物(縮尺1/3・1/8)

B1区(第6~8・10~12図、挿図10、PL.1・5・7)

土塁SA6712・6713と大溝SD6279の北東側に面し、溝SD6250西側に広がる区画で、北側に礎石建物の一部や溝を認めるが、過去の土地改良工事の削平で、遺構の大部分は消失している。ただ、礎石建物の規模は本調査区内では最も大きく池状遺構にも接する点から、主要な区画であると考えられる。

SB6790 南北5間以上、東西8間以上の礎石建物で、南半部は不明だが、北辺には1間毎に礎石が並ぶ。また、溝SD6342南肩や付近に礎石列を認めるため、建物の一部分を構成するものと判断する。本調査区では最も規模の大きな建物である点から、おそらく屋敷地の主要な建物であると考えられる。

SD6346 礎石建物SB6790の西に並行する溝で、幅約0.6m、深さ約0.15mを測る。溝を挟み西側と東側で遺構面の高さが異なる。肩の東側には横転しているものの礎石と思われる石が、溝に沿って認められる。

SD6347 溝SD6346と直交する溝で、深さ約0.4mを測る。溝の覆土が周囲の地山と変わらないことから、掘削後すぐに埋め戻したと考える。

SX6716 土塁SA6712・6713隅の内側に位置する、拳大から人頭大の石を集積した遺構である。朝倉館の隅櫓のような構築物の土台を安定させるための基礎構造を示す遺構と推定する。周辺は削平が著しい。

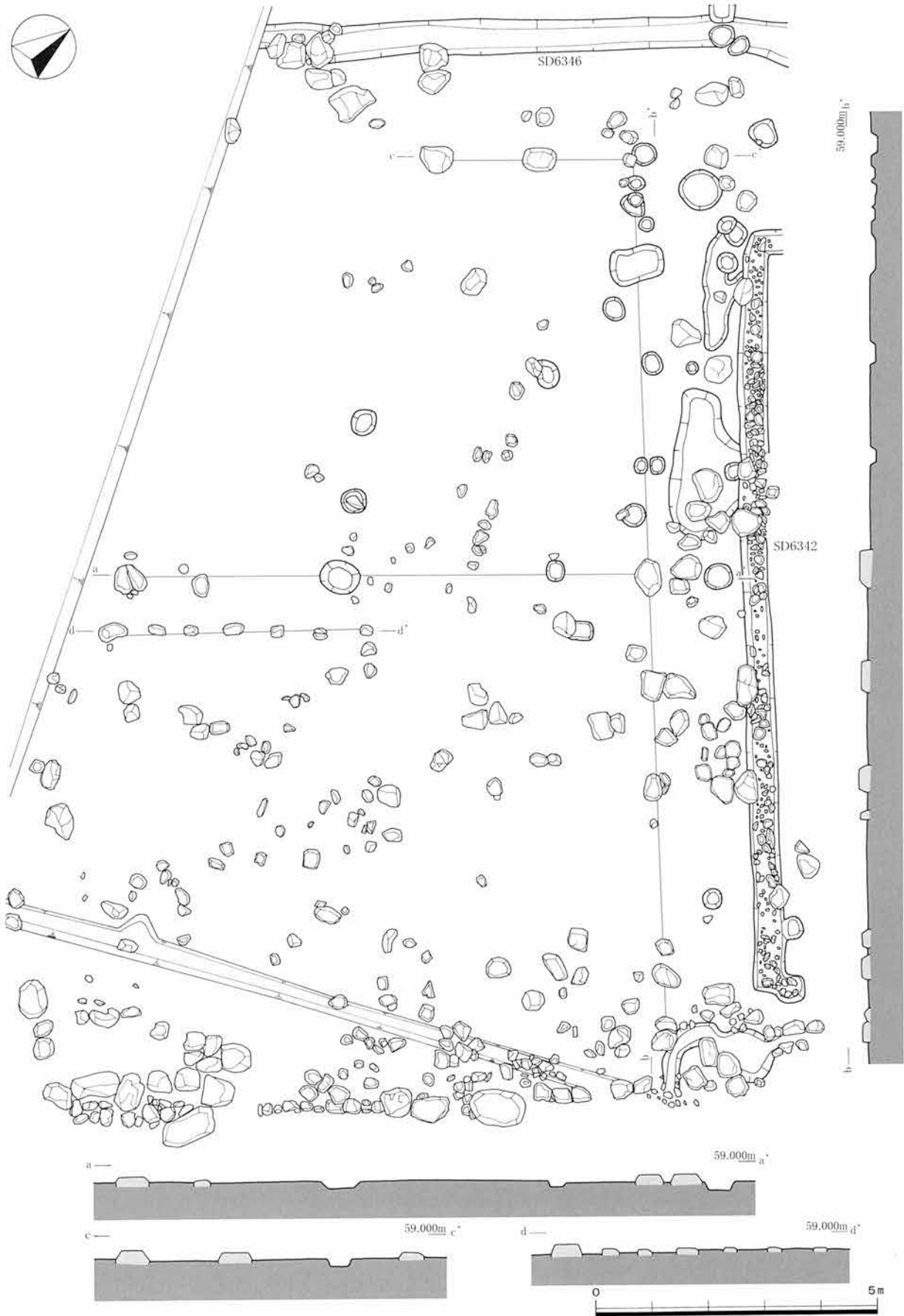


插图10 SB6790遺構平面図・断面図(縮尺1/100)

B 2 区(第12～14図、挿図11～15、PL.1・7～9)

溝SD6341・SD6342と土塀SA6360が周囲に巡る区画で、北側では掘立柱建物や礎石建物を検出した。

SA6360 北面を石垣状に積んだ土塀である。長径0.3～0.5m大の石を2～3石積み、上端から下端まで約0.4～0.7mを測る。石垣底部は西側に向け徐々に下がる。

SB6359 東西約4.8m、南北約4.1mを測る2間四方の掘立柱建物である。径0.8m～1.1mの柱穴を東西南北隅と各々を2分する位置に認める。柱穴では径約0.15mの樹皮を残した丸柱のほか、ホゾ穴が付いた再利用の角材を1点検出した。樹種同定の結果、クリなどの広葉樹が多くを占めることが判明した。

SB6791 東西約11.2m以上で6間以上、南北約4.7mで2間半を測る東西に長い礎石建物で、SB6359の上層に建て替えたものと考ええる。

SD6350 溝SD6351と直交する幅約0.6m、深さ約0.1mの溝である。肩が整わず土壤に締りがない点から礎石の抜き取り痕などと考ええる。

SD6341 全長約27m、幅約0.2mを測る溝である。南端は東側に直角に折れて溝SD6337、北端は東西方向の溝SD6362とつながる。やや西に振れる北半部は側石が全て抜き取られる。側石が残る南半部からは完形の土師質皿が廃棄された状態で多く出土した。この溝の東側で半楕円形を呈するSD6356やこの溝を南端とするSD6357・6358を検出した。また、溝南半部の西側に沿って3m毎に礎石の抜き取り痕3基を検出した。

SD6342 東西長約13.6m、南北長約11.2mを測る東西から南北に直角に曲がる溝で、幅、深さともに約0.5mを測る。溝には0.2m程の河原石や小礫を大量に含む砂質土を充填しており、排水を考慮した可能性がある。溝SD6341と東端は接さず、北端部は西に曲がり、深化しつつ溝SD6348・6349につながる。

SD6351 溝SD6350と直交する溝である。炭と焼土を含む黒色土が堆積する溝内部に、東西長2mの石列や径約0.8m、深さ約0.5mを測る柱穴がある。この北側には同一規模の柱穴が2基ある。

SK6345 東西約2.5m、南北約2.3m、深さ約0.5mを測る隅丸方形の素掘りの土坑である、レンズ状に堆積する灰色粘質土と灰色土中に白色粘土がブロック状にみられる。土師質皿が出土した。

SX6344 溝SD6342の東端とSD6341が交差する地点の北西に位置する径約0.3mの小穴である。数枚の土師質皿が口合わせで出土した。出土状況から、地鎮具として土師質皿を埋納したのと考えられる。



挿図11 SD6341土師質皿出土状況



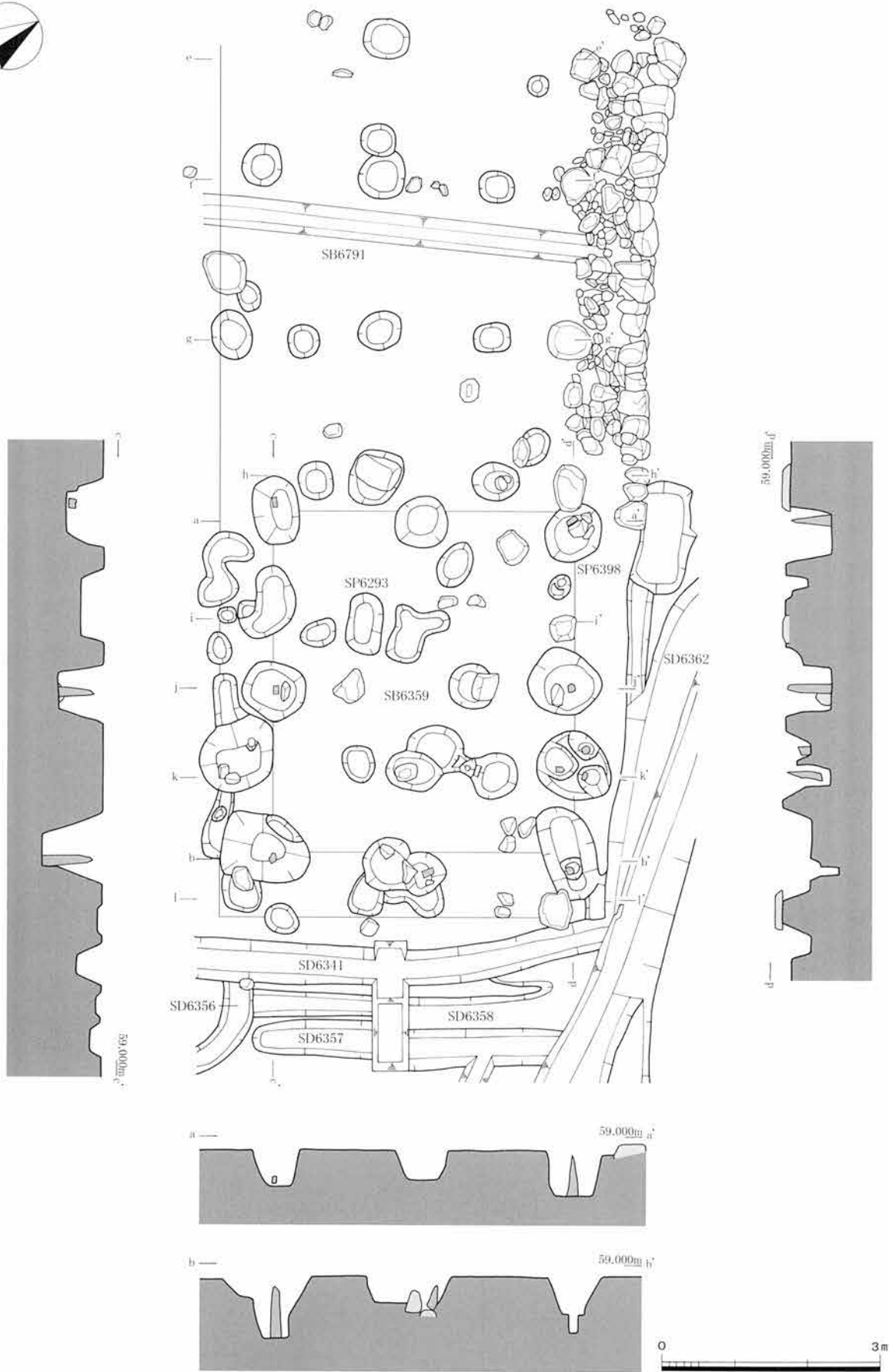
挿図12 SX6344土師質皿出土状況

B 3 区(第15・17～19図、挿図16～23、PL.1・7・8・10～13)

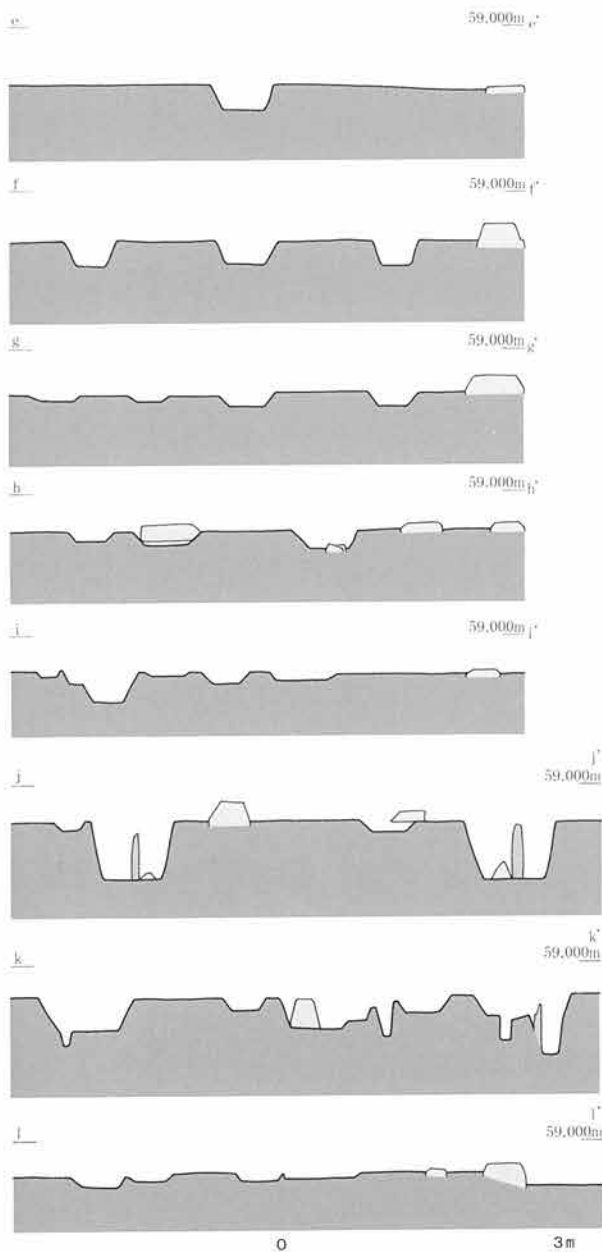
溝SD6250・6341と遊歩道の間の区画であり、礎石建物や角柱列、石積施設や池状遺構を検出した。



插图13 SD6341·SD6342·SD6350·SD6351·SK6345遗构平面图·断面图(缩尺1/40·1/80)



挿図14 SB6359・SB6791遺構平面図・断面図(縮尺1/80)



挿図15 SB6359・SB6791遺構断面図(縮尺1/80)

SB6251 東西、南北が約5.6mを測る3間四方の土台建物である。北東側の礎石の遺存は良好である。東側の溝SD6253の西に沿う3石の礎石は2m間隔で並ぶ。SB6251の礎石とも標高が揃うことから庇など建物の一部分を構成する可能性がある。周囲に巡る溝SD6250・6252・6253などと軸が揃う。

SB6792 東西約4.6mで2間半、南北約5.6mで3間を測る礎石建物である。東列北から2石目の礎石は土坑SK6340埋没後に据え置く。東辺には掘立柱が3基、北辺には2基並行する。柵列の可能性もあろう。

SB6331 角柱が列状に並ぶ掘立柱建物である。約5.6mを測る東西方向に5本、約2.8mを測る南北方向に3本の柱材が遺存し、その位置から3/4間毎に柱が立っていたと判断できる。東列の東方でも2本の柱を検出した。断面方形の柱材は、樹種同定の結果、針葉樹が多くを占めることが判明した。

SD6250 全長約27m、幅約0.4mを測る石組溝である。南端は、暗渠SZ6278を潜り大溝SD6279に通じる。石垣SV6282を延長した地点を境に北側と南側では様相が異なる。北側は西側石が1段で、上面が並び高さも揃うが、東側では削平を受け、2段程積んだ状態で天端の高さにばらつきを認める。一方、南側は両側石の高さがほぼ等しい。北側は溝を挟み西側と東側で、遺構面の高さが異なることがわかる。青磁托や青白磁水注などの奢侈品が出土している。

SD6252 溝SD6250と直交する溝で、幅約0.4m、深さ約0.2mを測る。両側石は1段分が部分的に残る。

SD6253 SB6251東側の南北方向の溝で、幅約0.7mを測る。深さは均一ではなく0.1m程と浅い。西側石のみ認める。溝とその付近から青磁不遊環瓶などの奢侈品が出土している。

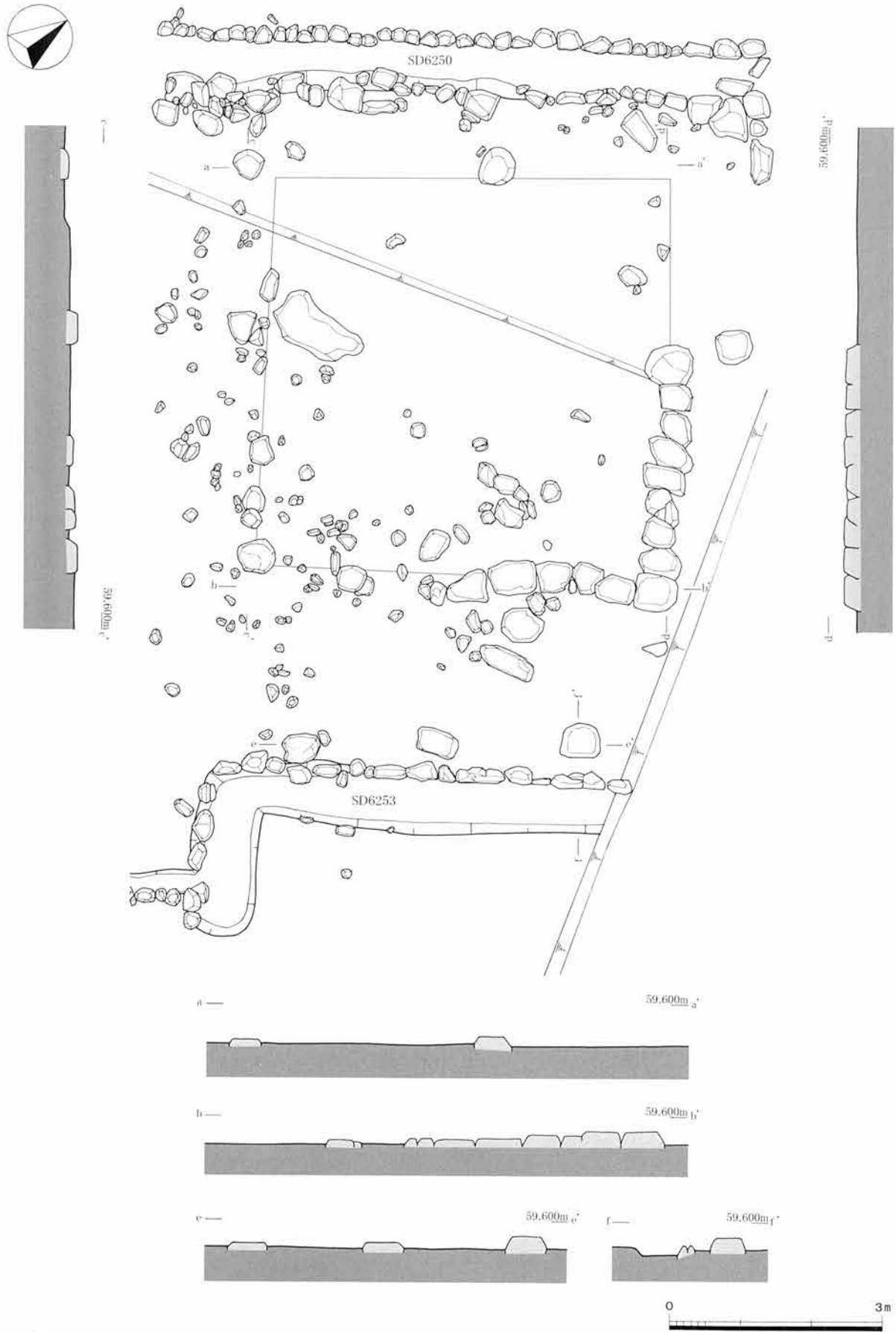
SD6254 溝SD6253とつながる溝で、幅約0.3m、深さは北端部で0.2mを測り、南端部は途切れていた。

SD6335 溝SD6336の前に構築された溝である。幅約0.5m、深さ約0.3mを測り、南半部は西側に振れる。

SD6336 溝SD6335の後に構築された溝である。北端で0.6m、南端で1.1mと徐々に幅が広がり途切れる。溝の上層は炭と焼土を含む暗灰色土と黒色土が互層で堆積しており、最終期の溝と思われる。

SD6337 溝SD6335と直交する溝で、幅約0.3m、深さ約0.3mを測る。南側は2段掘りで、上段部には石を並べる。池SG6333の接点では側石がない。

SD6338 溝SD6335・6337の分岐点より南側に直線的に延びる溝である。SB6331の北東角付近から南側に向けて浅くなり、西に広がり途切れる。



挿図16 SB6251遺構平面図・断面図(縮尺1/80)

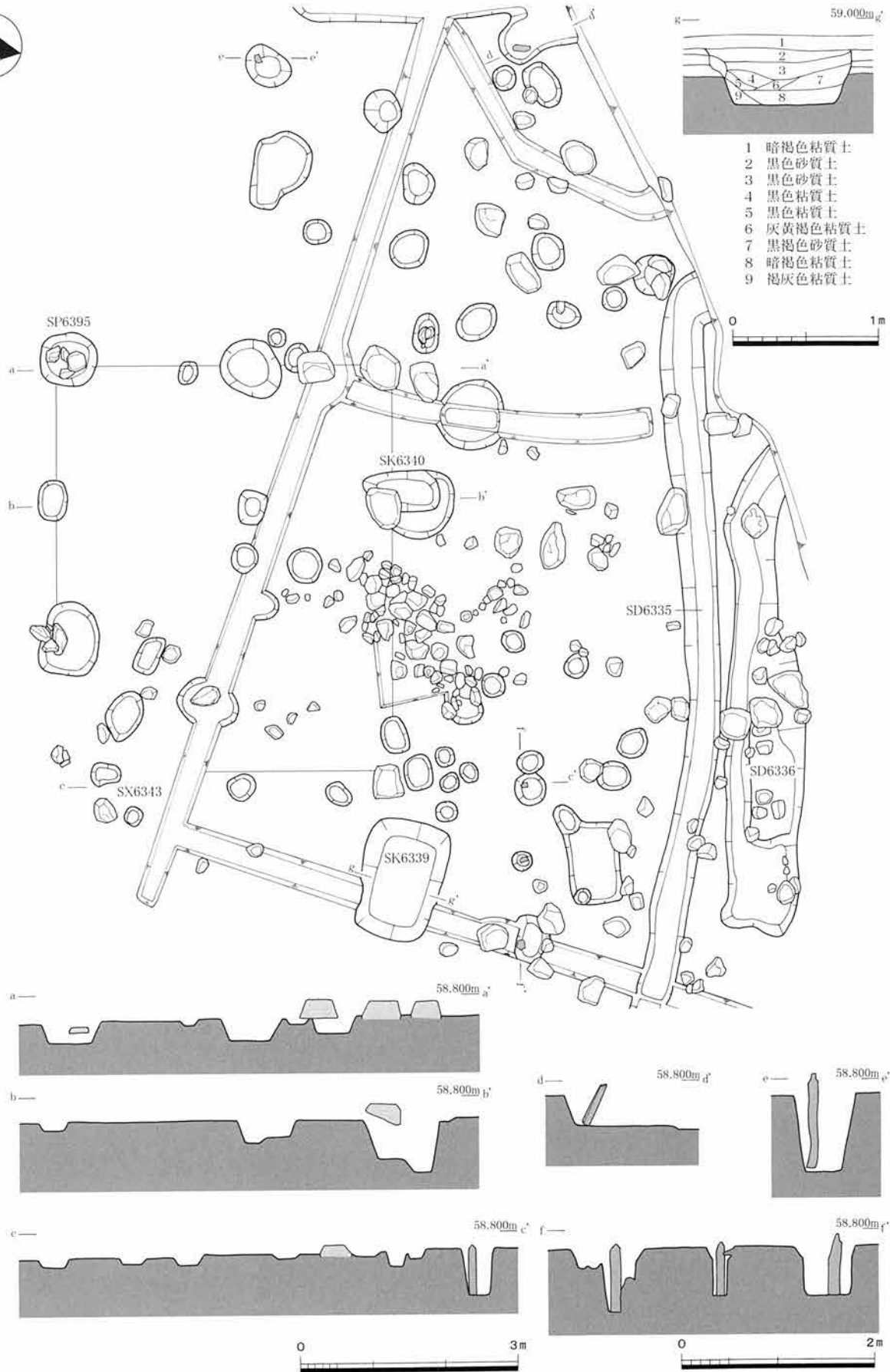
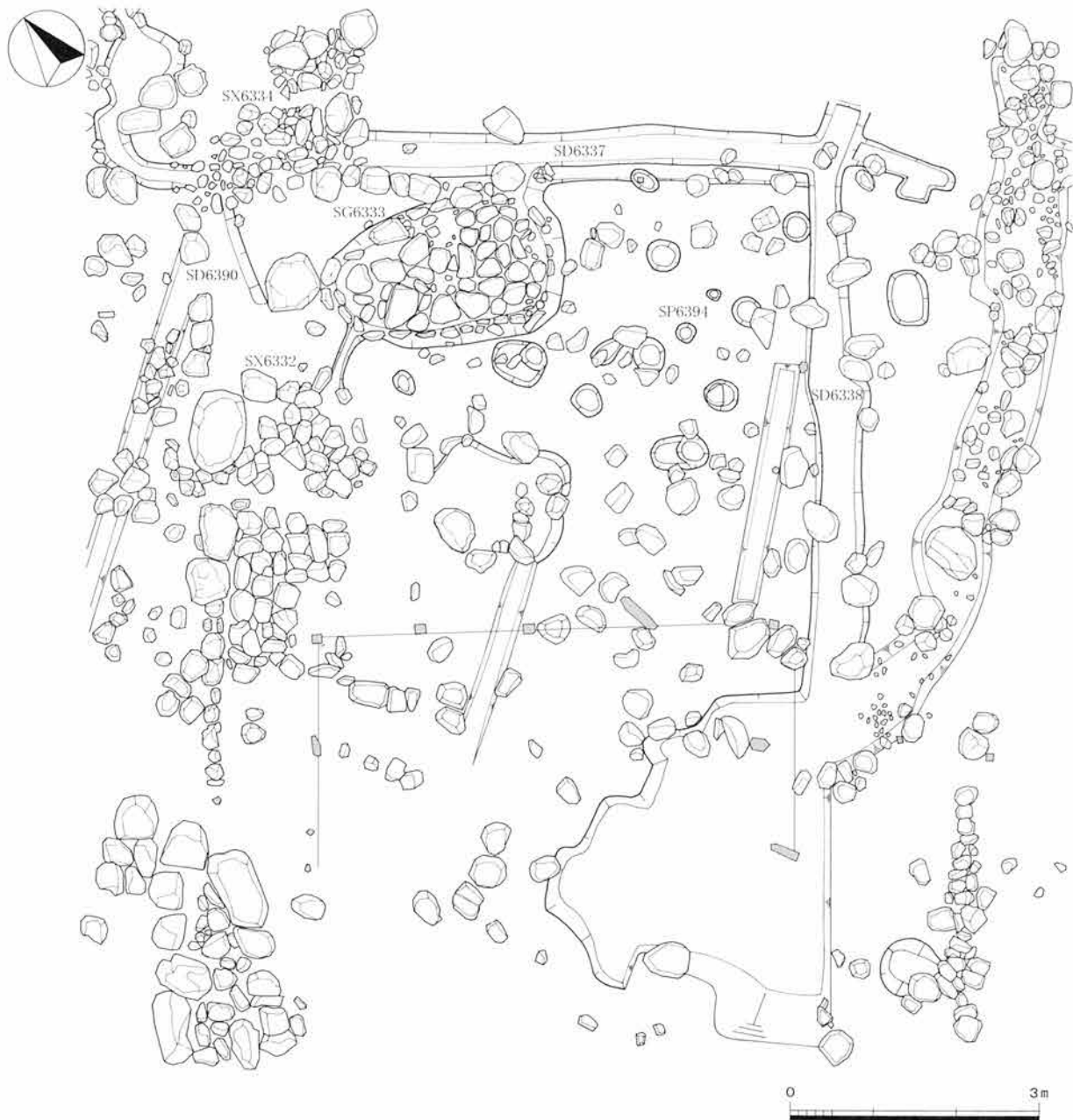


插图17 SB6792遺構平面図・断面図(縮尺1/40・1/60・1/80)



挿図18 SB6331遺構平面図(縮尺1/80)



挿図19 SB6331柱根検出状況



挿図20 SB6331柱根検出状況

SF6352 東西約2.8m、南北約1.8m、深さ約1.1mを測る石積施設で、南に石積施設SF6353が付属する。堆積土は4層に分かれ、水平堆積する。Ⅳ層の暗灰色粘質土上には南北壁面間の長さ一致する板が、3枚重なり出土した。その上位に黄色土や炭を含む黒灰色粘質土のⅢ層、上面に帯状に炭の広がる暗灰色粘質土のⅡ層が堆積する。Ⅱ層以下は土師質皿など多くの遺物を含むが、灰色粘質土のⅠ層は炭・遺物ともに少ない。板は3枚とも、長さ1.8m、幅0.3m、厚さ0.15mを測り、樹種同定の結果、3枚ともオニグルミであることが判明した。なお、南東角の上面で、遺存状況は悪いものの導水管と考えられる節を刳り貫いた竹筒を、幅約0.2m、深さ約0.1mを測る細い溝状遺構SX6354内で検出した。出土遺物は土師質皿が多いが、Ⅰ層から漆製品、Ⅲ・Ⅳ層からは漆器椀などの木製品が多く出土した。土壌分析の結果、便所遺構の可能性は低く、水溜枧と考える。なお、同分析により、この施設は屋内よりも光の多く当たる屋外に設置されていた可能性が高いという結果が示されている。

SF6353 東西約1.9m、南北約2.4m、深さ約0.5mを測る石積施設で、石積施設SF6352が付属する。最下層は1～5cm大の礫を隙間なく埋めた砂利層で、深さ0.3mを測るこの上面が床面と考えられる。砂利層の上に炭を含む暗色粘質土が堆積するが、最上層は礫を多く含む茶褐色土である。石組施設SF6352Ⅰ層と土層が異なるため、SF6352とSF6353は存続期間が異なると思われる。なお、南東角より東に向かい排水用と判断する幅0.4m～0.5m、深さ約0.2mを測る溝SD6355を検出した。

SK6339 東西約1.1m、南北約1.6m、深さ約0.5mを測る隅丸方形の素掘りの土坑である。土師質皿が少量出土したが、性格は不明である。軸が周囲の遺構と異なるため上層遺構と判断できる。

SK6340 東西約0.8m、南北約0.5m、深さ約0.6mを測る隅丸方形の素掘りの土坑である。礎石建物SB6792を構築する前の土坑で、炭層と土が互層で堆積し、土師質皿が少量出土した。

SG6333 底部に石敷をもつ小さな池状の遺構である。東西約2.5m、南北約1.4mを測り、西端に向けて徐々に狭まる。側石は高さ0.2mまでの小振りの石である。底面より0.1mまで小砂利が堆積し、SD6337付近は側石を認めないことから、溝と直接つながっていた可能性がある。

SX6332 0.3～0.4m大の石の平坦面を上面として据えた石敷遺構である。石敷の西端では南北に揃う石列を検出したが、東・南・北側の区切りは不明瞭で、規模は不明である。

SX6334 主に河原石を用いた集石遺構で、溝SD6337内からその北側約2m四方に広がる。石敷遺構SX6332と池SG6333と関連した、同一時期の遺構と考えられる。

SX6343 礎石建物SB6792の南西に位置する径0.3mの小穴で、数枚の土師質皿が口合わせで出土した。SB6792に伴う地鎮具として土師質皿を埋納した可能性がある。



挿図21 SF6352土師質皿出土状況



挿図22 SX6343土師質皿出土状況

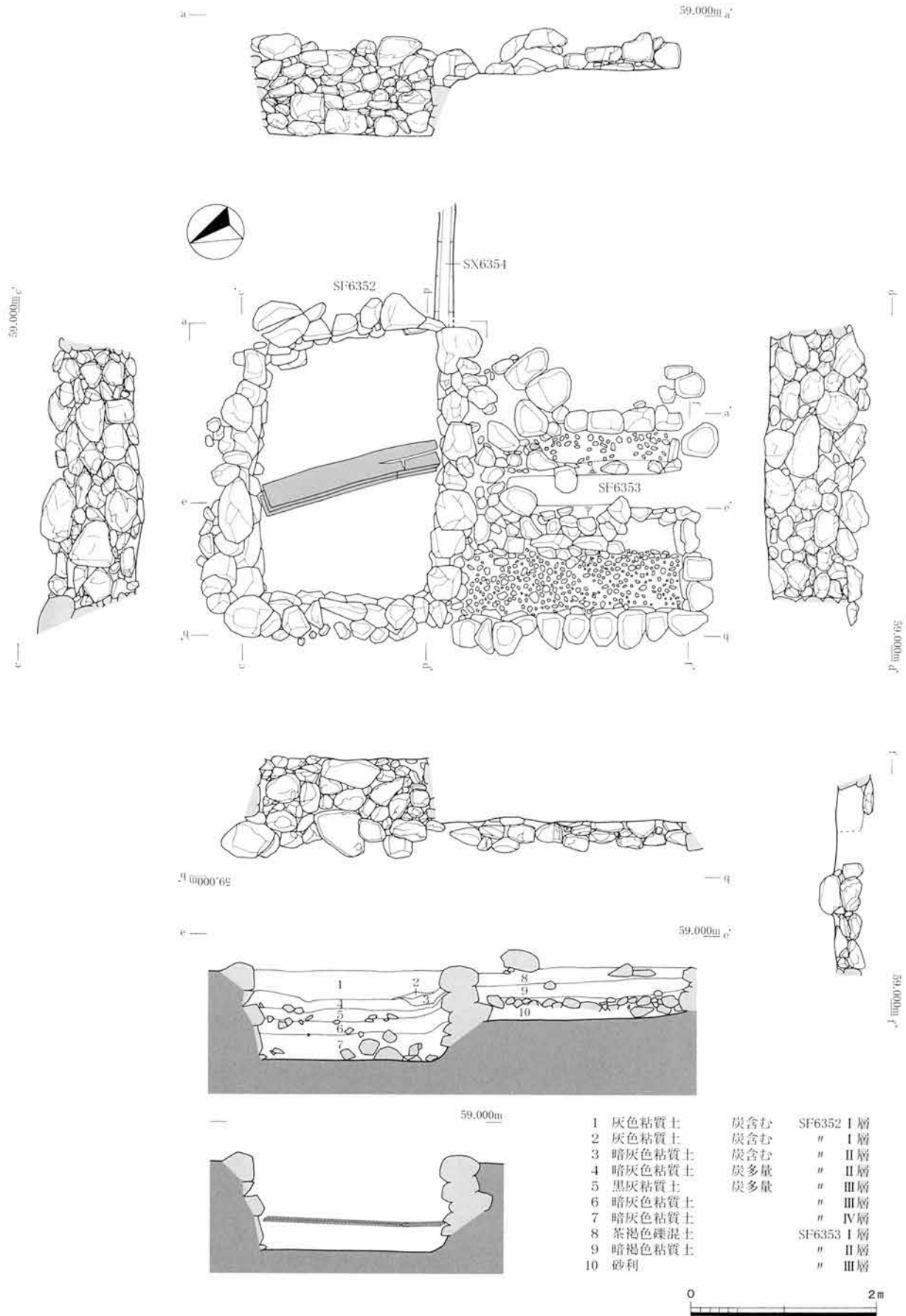


插图23 SF6352·SF6353遺構平面圖·断面圖(縮尺1/60)

B4区(第16図、挿図24～27、PL.14)

南北方向の遊歩道の東側に位置する区画で、埋甕遺構を伴う礎石建物を認める。周囲に巡る雨落ち溝からは建物の上部構造を知る手掛かりとなる建築部材が多く出土した。遺構面は上層と下層がある。

上層遺構面と下層遺構面の標高差は0.15m程で、整地層は黄褐色土で固く締まる。

上層遺構

SD6255 幅約0.1m、深さ約0.2mを測る溝で、北側には地盤の固い上層遺構面が広がる。

下層遺構

SB6257 土台建物SB6258の北東で検出した石敷の建物である。面をもつ石敷端部は検出されず、山裾と重なるため規模も確認できていない。0.4m大の石の平坦面を上面とした様相から、蔵跡と判断する。上面からは、筵が出土した。

SB6258 南北約6.6m、東西約6.4m以上を測る土台建物である。内側に礎石面をもち、建物内部からは、多量の焼土に混じり遺物が出土した。南北方向の礎石列の中心に、ほかの礎石よりも大きい礎石があり、棟持柱が載っていたものと判断する。礎石上面に柱を置いた痕跡は確認できないが、南北方向は3間半を4分割する位置に、東西方向は一間毎に柱が立っていたと想定する。建物内部には埋甕遺構が存在することから、土間をもつと判断する。

SD6256 土台建物SB6258に並行する溝で、上層遺構面を掘り下げて検出した。SD6272と異なりSB6258側では側石を認める。幅約0.6m、深さ約0.2mを測り、茅状の遺物や皮つきの雑木、角材が出土した。

SD6272 土台建物SB6258の周囲を巡るように東側から南側へ曲がる溝である。東側の溝は幅約0.4m、深さ約0.1m、南側の溝は幅約0.7m、深さ約0.2mと規模が異なる。遺物量は、東側は僅かだが、南側からはへぎ板(そぎ板)、竹、角材が多く出土した。角材の断面は長方形で、片側の端部に狭い面をもつが、一方は焼失して原形を留めない。へぎ板は屋根葺材、竹は木舞、角材は桁など上部構造に用いられたと判断する。両溝とも土台建物SB6258の雨落溝である。壁より屋外側へ突出していた部分のみが焼け残ることから、ここから出土した角材は、焼失した際雨落溝へ落ちたものと思われる。

SD6273 溝SD6256よりも新しい溝である。幅は1mと広く、深さは最深部で約0.3mを測る。

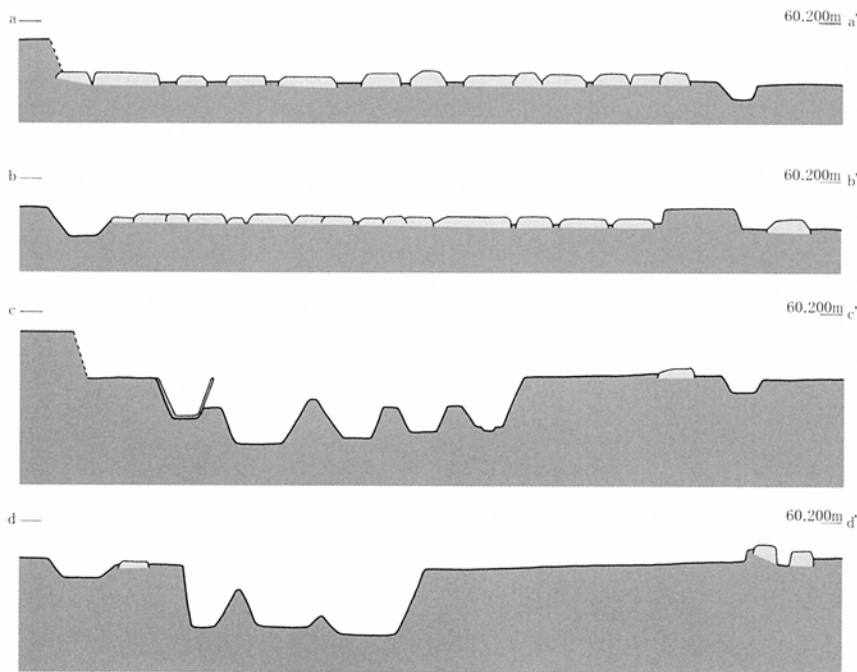
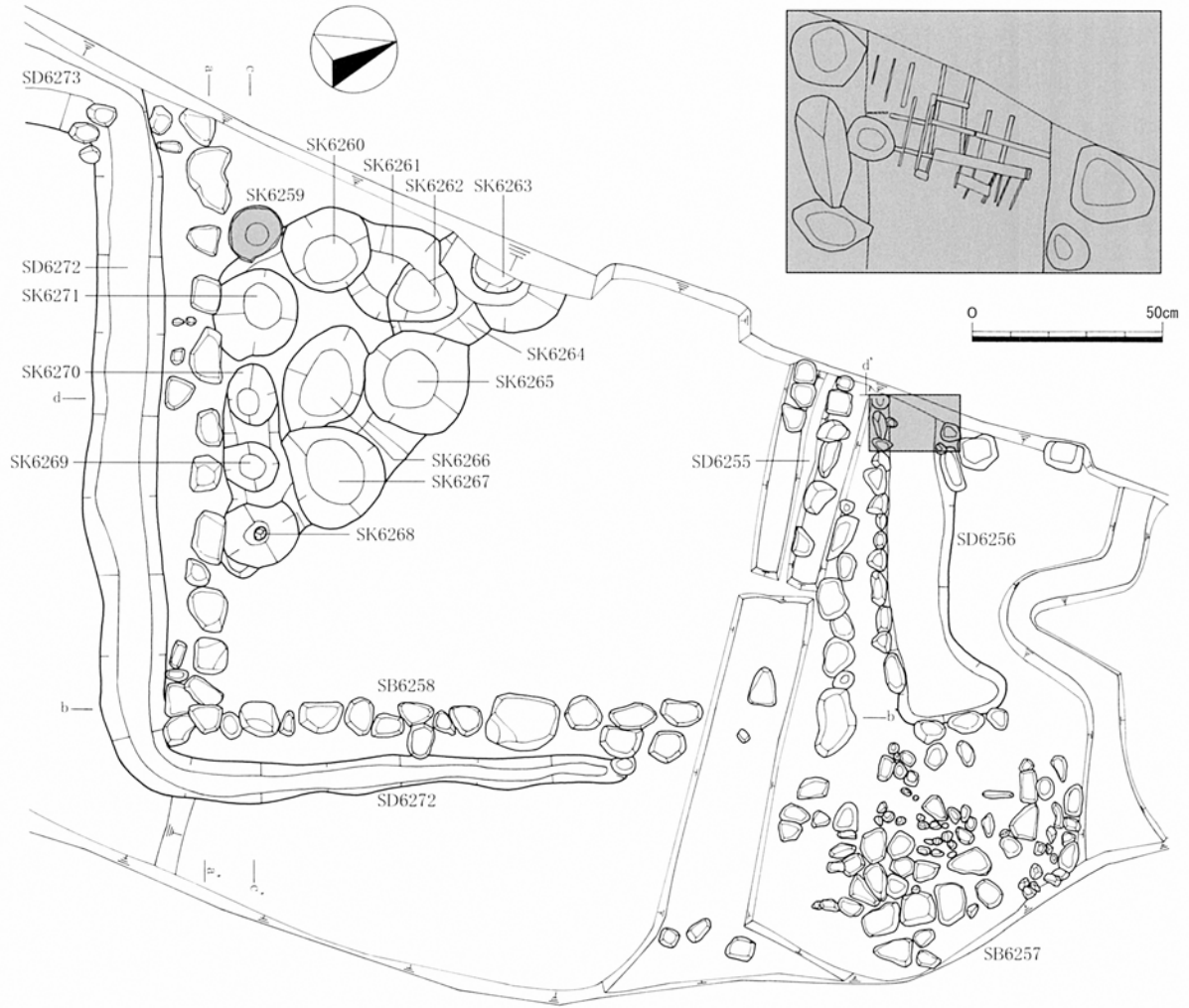
SK6259～6271 土台建物SB6258内で検出した埋甕遺構である。13基の埋甕土坑上面は大量の炭を含む土壌で覆われ、土坑からは越前焼甕の破片や環付飾金具、鉄釘、漆製品、柄杓などと多くの遺物が出土した。整理復元後の甕は10個体を数える。内訳は、大甕7個体、中甕3個体である。なお、遺構直上から、環付飾金具や鉄釘、曲物や燭台の一部が出土している。



挿図24 SB6257筵出土状況



挿図25 SD6256格子状竹製品出土状況



挿図26 SB6257・SB6258・SD6255・SD6256・SD6272遺構平面図・断面図(縮尺1/20・1/80)

挿図27 SD6272木製角材出土状況

B5区(第18~20図、挿図28~32、PL.15~17)

南北方向の遊歩道の東側に位置する区画で、北側を土塁SA6365で区切る。ガラス製遺物を製作したと判断できる礎石建物を検出した。ガラス玉は同区画内でのみ出土を認める。

SB6375 東西が約9.4mで5間、東西が約5.6mで3間を測る礎石建物で、南辺に半間の庇が巡る。建物内中央から東寄りにかけて焼土粒を多く含む赤みを帯びた土壌が広がり、西側中央部では炉跡SX6376を検出した。建物(内部)には埋甕遺構が存在するため土間をもつと判断する。

SD6368 土塁SA6365南側の裾に沿う溝で、幅約0.8m、深さ約0.3mを測る。西側に認める南側の側石は上面が並び高さも揃う。炭と焼土を含む覆土内から、染付花瓶、銅製紅皿などが出土した。

SD6373 礎石建物SB6375に並行する溝で、幅約0.2m、深さ約0.3mを測る。東から西に下る溝の東端は徐々に狭まり途切れて、1段の側石が部分的に残る。元様式の染付大皿や青磁酒会壺、環付飾金具や飾金具に、ガラス製遺物など特筆すべき遺物が数多い。これらの遺物は本調査区の東側、斜面上方にある平坦面から転落したものと思われる。諏訪館跡以南の小高い場所には、有力者の屋敷跡がある可能性が高い。

SD6388 この溝は長径0.4~0.7m大の石を3石程積んだ石垣SV6387を北側にもつ。南側は2段掘りで、高さ約0.2mを測る上段に石を1石据えていたと判断する。この溝の南側には小石を敷き詰めた面が広がる。深さはSV6387上端から約0.7mを測り、この溝を境に北側と南側では遺構面の高さが異なる。

SS6375 礎石建物SB6375の西面に沿い、土塁SA6365を北端とする幅約1.5mの通路である。東側には幅約0.2mを測る溝SD6371・6372が並行し、西側には幅0.5mを超える溝SD6369をもつ。建物に通じる通路と考える。

SK6377~6384 礎石建物SB6375東端で検出した埋甕遺構である。東側に6基、北側には2基あり、調査区東端にも埋甕遺構SK6384がある。SK6383は出土遺物が多く、越前焼甕や播鉢、瀬戸・美濃焼の四耳壺や、白磁皿、石製品と多種類の遺物がみられるが、大甕は1個体と少ない。SK6384から越前焼中甕が出土した。

SX6376 直径約0.5m、深さ約0.2mを測る炉跡で、被熱により硬化した黒褐色土のなかには砂利を含む、灰褐色粘質炭泥土が堆積する。鞆の羽口が出土した。

SX6385 越前焼播鉢を埋め据えた遺構で、播鉢内面は使用で摩滅している。



挿図28 SD6373元染付皿出土状況



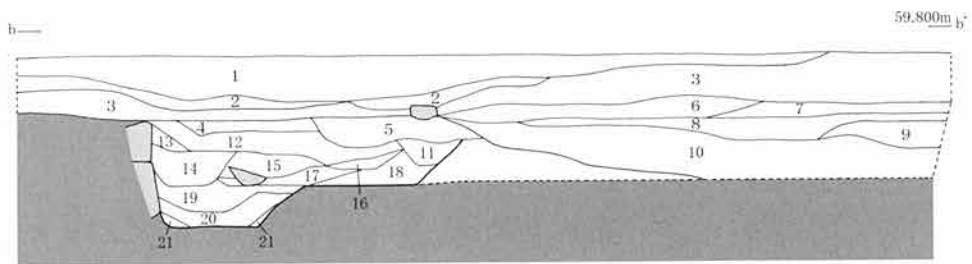
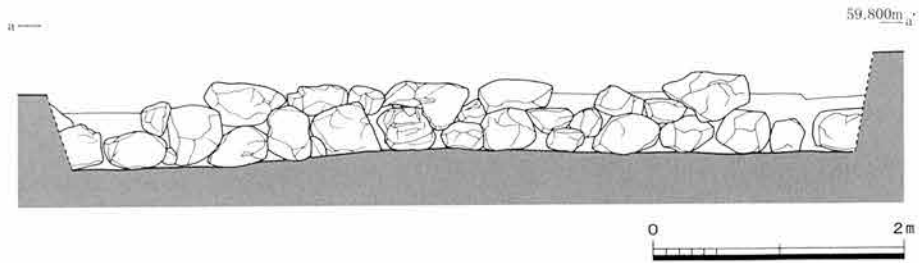
挿図29 SX6376検出状況



挿図30 SX6385検出状況



挿図31 SB6375・SD6373遺構平面図・断面図(縮尺1/20・1/80)



- | | | | |
|-----------|--------------|------------|----------|
| 1 茶褐色砂利 | 8 青灰褐色粘質土 | 15 明灰色粘質土 | SD6388覆土 |
| 2 明灰色砂利 | 9 暗灰褐色粘質土 | 16 明灰色粘質土 | " |
| 3 暗灰褐色粘質土 | 10 暗灰褐色粘質土 | 17 暗灰色粘質土 | 炭含礫 |
| 4 灰褐色砂利 | 11 暗灰色粘質土 | 18 黑褐色粘質土 | 炭含礫 |
| 5 灰褐色砂利 | 12 暗灰色粘質土 | 19 暗灰褐色砂利 | " |
| 6 明灰褐色砂質土 | 13 明灰色粘質土 | 20 暗灰褐色砂利 | " |
| 7 赤褐色砂利 | 14 灰色粘質土 | 21 暗灰褐色粘質土 | " |
| | 炭含礫 SD6388覆土 | | |
| | " " | | |
| | " " | | |

挿図32 SD6388・SV6387遺構平面図・断面図(縮尺1/40・1/60)

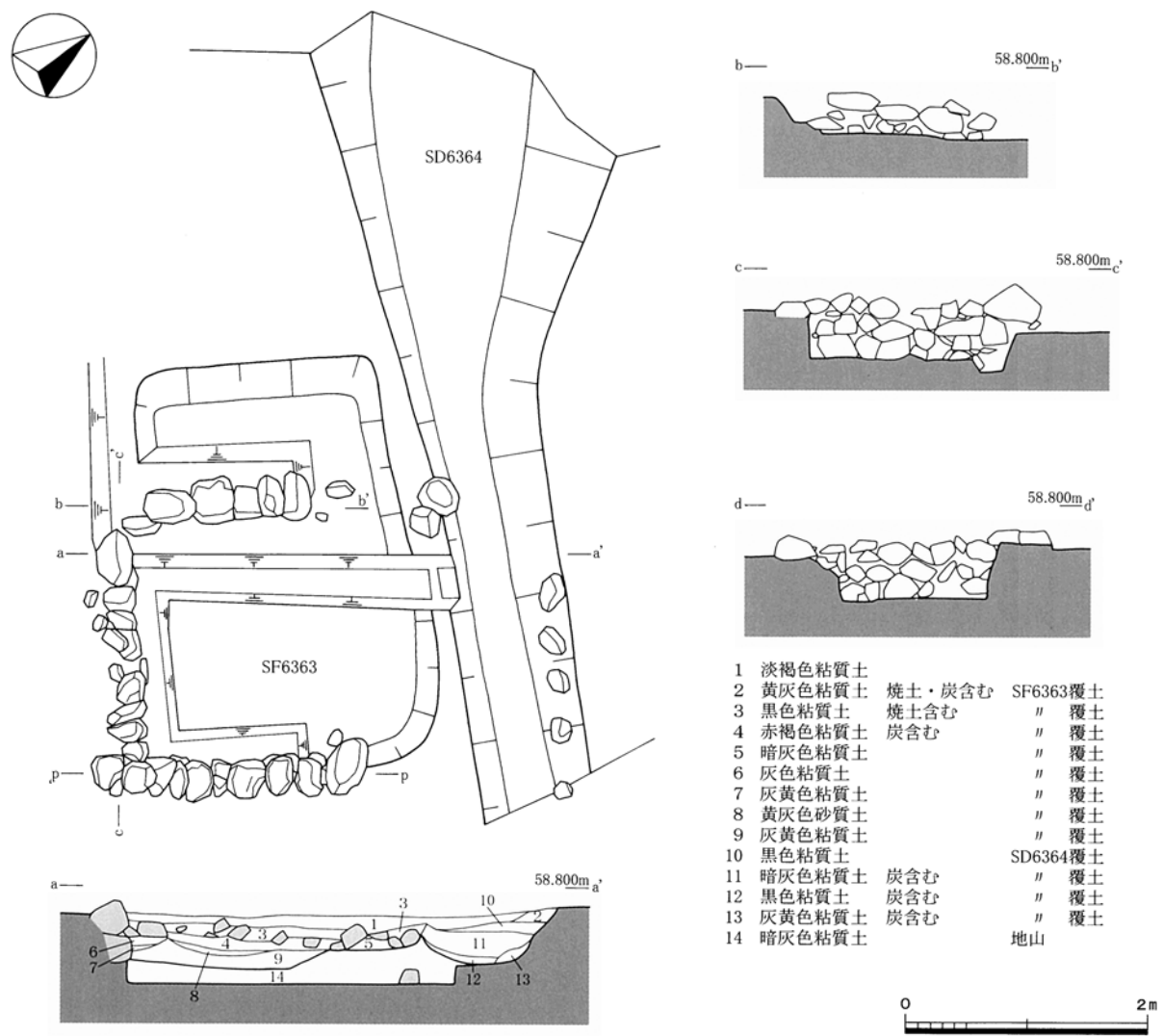
B 6 区(第14図、挿図33、PL.17)

土塀SA6360で南辺を区切る区画である。検出された遺構は、下層遺構の可能性もあろう。

SF6363 東西約1.8m、南北約2.2m、深さ約0.3mを測る石積施設で、砂質に富む灰色粘質土上に、固く締まる砂質土と熱で赤色化した焼土層があり、その上に石組施設の崩落石と炭を含む黒褐色土を認める。被熱の痕跡からは何らかの火を扱う作業をしたことを想定できる。

SD6362 溝SD6341・6357・6358と交わる深さ約0.3mを測る溝で、何度も掘削されて後世にも利用されたと判断できる堆積状況を確認した。なお、南側では深さ約0.2mを測る溝SD6361を検出した。

SD6364 西側に向けて幅の広がる溝で、炭を多く含む黒色土と暗灰色土が互層で堆積する。



挿図33 SF6363・SD6364遺構平面図・断面図(縮尺1/60)

以上、A区・B区の順に検出した遺構について述べてきた。結果、本調査区が大溝の伴う土塁で区画された屋敷地である点、屋敷地の北東部では、ガラス製遺物を製作していた点を確認した。また、B 6区では火を扱う作業をしたと考える遺構を認めるため、近辺に火を用いる施設が存在することも想定できよう。

IV 遺物

門ノ内地区出土遺物は、総数37,962点で、その内訳は表2に示すとおりである。

表2 出土遺物一覧表

器種		点数	%		
越前焼	壺	2,704	9.63		
	壺	281			
	鉢	195			
	描鉢	448			
	桶	22			
	卸皿	3			
	花生	2			
	計	3,655			
	土師質	皿		29,442	77.82
		壺		7	
土釜		59			
丸皿		3			
耳皿		6			
香炉		3			
土鈴		9			
その他		2			
計	29,531				
鉄釉	碗	167	0.65		
	皿	3			
	壺	65			
	鉢	1			
	桶	8			
	花生	1			
	茶入	1			
	計	246			
灰釉	碗	19	0.39		
	皿	66			
	壺	2			
	鉢	46			
	香炉	4			
	卸皿	9			
	燭台	1			
その他	1				
計	148				
瓦質	香炉	9	0.14		
	風炉	29			
	壺	2			
	瓦燈	2			
	その他	13			
計	55				
国産他	土師器	16	0.35		
	須恵器	7			
	壺	1			
	桶	1			
	蓋	4			
	信楽	1			
	備前	3			
	近世陶磁器	92			
その他	7				
計	132				
小計	33,767	88.98			

器種	点数	%	
青磁	碗	193	1.34
	皿	115	
	壺	5	
	鉢	65	
	盤	52	
	酒会壺	27	
	香炉	2	
	瓶	30	
	托	2	
	水注	13	
	その他	7	
	計	511	
	白磁	碗	
皿		926	
坏		44	
その他		11	
計		998	
染付	碗	157	1.20
	皿	219	
	坏	14	
	壺	4	
	鉢	1	
	盤	38	
	瓶	15	
	合子	6	
	その他	3	
	計	457	
褐釉	壺	1	0.01
その他	青白磁壺	1	0.38
	壺	132	
	碗	4	
	皿	6	
	その他	2	
計	145		
朝鮮製	小計	2,112	5.66
	そば茶碗	4	
	皿	1	
	鉢	22	
	壺	13	
陶磁器	5	0.12	
小計	45	0.12	
輸入陶磁器合計	2,157	5.68	

器種	点数	%	
金属製品	釘	243	1.45
	飾金具	14	
	刀子	1	
	小柄	3	
	鞆尻	1	
	責髯	1	
	鉄錐	1	
	鍔	1	
	簪	1	
	火箸	2	
	紅皿	1	
	キセル	1	
	銅銭	102	
	銅製品	8	
	その他	60	
小計	563		
石製品	バンドコ	162	1.08
	鉢	43	
	盤	16	
	臼	4	
	硯	43	
	砥石	21	
	玉石	14	
	五輪塔	1	
	その他	107	
	小計	411	
木製品	漆碗	29	2.08
	漆皿	6	
	漆製品	35	
	木筒	4	
	間香札	3	
	墨書板	1	
	曲物	30	
	ヘラ	4	
	折敷	25	
	箸	9	
	桶	19	
	栓	1	
	杓	1	
	櫛	4	
	下駄	5	
	箱物	4	
	糸車	1	
	脚	1	
	楔	2	
	錐	2	
	柱根	30	
	角材	11	
	板材	101	
竹材	53		
建築材	131		
加工木	73		
製材屑	26		
その他	177		
小計	788		
その他	ガラス玉	156	0.73
	鉛	14	
	鉱滓	97	
	石英	3	
	雲母	3	
	水晶	4	
	羽口	10	
	駒石	1	
	骨	9	
	籠	1	
	縄	1	
	布	1	
	壁土	27	
種子	33		
不明	27		
小計	276		
総合計	37,962	100.00	

1㎡当りの平均出土点数は7.6点と、一乗谷では少ない部類である。この数値の低さの要因は、土地改良工事の際の削平によると考える。内訳は、土師質皿が全体の約78%と大半を占める一方で、そのほかの陶磁器類の出土量は少ない。これは、後世の削平により遺物包含層が失われたこととも関わるが、土師質皿が儀式や宴会などハレの場で多く使用されたためと考えられる。遺物組成は、第V章で述べるため触れないが、元様式の染付大皿など奢侈品が多いことを述べておく。

遺物は出土地点ごとに整理した。出土地点は前章で述べた区画を基準とし、一定程度まとまりのある遺構群で分けた。次に表土、遺構、遺構面出土遺物の順に提示し、溝および石積施設のように、遺構単位で扱えるものについては、遺構毎にまとめた。遺物および写真図版もこれに従い作成したが、遺構単位の出土量の少ないものは、他の遺構とともに述べ、図版内で遺構名を明記した。異なる遺構出土の遺物は、破片数の多い方に含めて図化した。なお、門ノ内地区では多くの建築部材やガラス玉が出土している。それらの遺物は、その特殊性を考慮して、ほかの遺物とは別に扱う。また、土師質皿の法量図を挿図37、灯明痕の有無の割合を表5に示すことで、大量に報告した土師質皿の理解の一助としたい。

遺物の分類は、越前焼大甕・播鉢は、『県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』1983、土師質土器の皿類は、『一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅶ』1999、中国製陶磁器は『国立歴史民俗博物館資料調査報告書 日本出土の貿易陶磁』1998に準拠する。個々の遺物の詳細については観察表を参照されたい。なお、土師質皿の分類は表3に示した。

表3 土師質皿概要表 『一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告書Ⅶ』を一部改変

大分類	小分類	法量(口径×器高)cm	門ノ内地区出土遺物の概要(色調・成形技法・調整方法など)	門ノ内地区での出土量
A類	A 1類	6-7×1.5	底部外面を押し出す口径7cm前後の「へそ皿」。	数点出土。灯明痕なし。
	A 2類	8-9×2.0	底部外面を押し出す口径9cm前後の「へそ皿」。	出土なし。
B類	B 1類	6-7×1.5	手づくね成形痕を残す一群の皿。口径7cm前後で口縁部が不揃い	出土なし。
	B 2類	8-9×2.0	手づくね成形痕を残す一群の皿。口径8cm以上で口縁部が不揃い	出土なし。
C類	C 1類	6×1.5	体部内面は「の」の字ナデ成形で、口縁部を揃み上げる。	少量出土。灯明痕なし。
	C 2類	7×1.5	体部内面は「の」の字ナデ成形で、口縁部を揃み上げる。	少量出土。灯明痕なし。
	C 3類	8-9×2.0	体部内面は「の」の字ナデ成形で、口縁部を揃み上げるものが多い。白色系と褐色系を認める。	大量出土。灯明痕あり。
D類	D 1類	9×2.0	体部内面は「2」の字ナデ成形で、口縁部を揃み上げるものが多い。白色系と褐色系を認める。見込に圏線あり。	大量出土。灯明痕あり。
	D 2類	10-13×2.5	体部内面は「2」の字ナデ成形で、口縁部を揃み上げるものが多い。白色系と褐色系を認める。見込に圏線あり。	大量出土。灯明痕あり。
	D 3類	14-16×2.5	体部内面は「2」の字ナデ成形で、口縁部を揃み上げるものが多い。白色系と褐色系を認める。見込に圏線あり。	中量出土。灯明痕あり。
	D 4類	17-23×2.5	体部内面は「2」の字ナデ成形で、口縁部を揃み上げるものが多い。白色系と褐色系を認める。見込に圏線あり。	少量出土。灯明痕なし。
G類		5-6×1.5	丸皿。	数点出土。灯明痕あり。
H類		6-7×4-5	耳皿。	数点出土。

A 1 区表土出土遺物(第26図、PL18)

越前焼 1は頸部が短く立ち上がる壺で、肩部に突帯が巡る。2は播鉢Ⅳ群である。9条1単位の播目を施す。3は鉢で、体部内面に櫛状工具で密な横位の櫛目を施す。4は卸皿である。摩耗が激しいが、体部内面には円弧状の刻文が2箇所残る。本調査区での出土量は、あまり多くない。

中国製陶磁器 5～8は染付である。5は碗B群で、見込に界線と花卉文を描く。6は小形の碗で、体部上半の内外面ともに白抜き部位に草花文を描く。7は見込に梵字を描く坏であるが、底部を残して打ち欠いている。坏を他用途に転用したと推測する。底部外面は露胎である。8の坏は、見込に界線と山水図を描き、高台置付の釉を拭き取る。高台内には「福」銘がある。

弥生土器 9～11は弥生時代後期の甕の口縁部と底部である。一乗谷では下城戸近辺で多くみられる。

金属製品 12～15は銅銭である。銭種など詳細は表16を参照されたい。

B 地区表土出土遺物(第26・27図、PL.18・19)

土師質土器 16はC類、17はG類の皿である。

中国製陶磁器 18は口縁部が反る白磁皿E群で、高台畳付の釉を拭き取る。

B 1 区表土出土遺物(第26図、PL18)

越前焼 19は水指である。やや外傾する底部から直線的に立ち上がる体部先端を強く撫で、口縁部下に突起を形成する。口縁部は中位から横へ薄く引き出すため、内端が上へ僅かに盛り上がる。

中国製陶磁器 20はへら描きの蓮弁文をもつ青磁碗B 4類、21は割高台をもつ白磁皿D群で、見込には溶着痕が残る。22は口縁部が反る白磁皿E群である。23は見込に印花文をもつピロースクタイプの白磁皿B群である。高台は低く、露胎である。一乗谷での出土量は極めて少ない資料である。24・25は染付である。24は、やや広い平坦な見込に蓮華文を描く碗D群で、体部が直線的にやや開く。25は坏の細片である。

B 2 区表土出土遺物(第27図、PL.19)

越前焼 26は内傾口縁をもつ鉢で、体部内面下半は摩耗が顕著である。

土師質土器 少量。27はC 3類の皿である。

瀬戸・美濃焼 28は灰釉香炉である。竹の節を模した筒形の体部をもち、内側に肥厚する口縁部の外面と体部に3本の沈線が巡る。体部内面は露胎である。

瓦質土器 29は風炉である。口縁端部を横へ薄く引き出し、頸部外面には断面三角形の縦格子状の装飾を認める。30は風炉の「獣脚」と呼ぶ脚部で、両側に穿孔と途中まで穿孔された孔がある。

中国製陶磁器 31・32は直口縁をもつ無文の青磁碗E類で、31は高台内側の釉を拭き取る。33～35は口縁部が反る白磁皿E群であるが、33は直線的に体部が外反し、35は腰部に稜が巡る。34は高台畳付の釉を拭き取った高台内面に窯底の砂が付く。37は染付碗E群、36は染付皿B 1群である。37は外面に如意雲、見込に界線と如意雲を描き、高台畳付の釉を拭き取る。高台内には「大明年製」銘をもつ。36の外面の唐草文は、形が崩れており、見込には十字花文をもつ。

B 3 区表土出土遺物(第27図、挿図34、PL.19・42)

越前焼 38は筒形を呈する掛花生の底部と考える。体部外面に、縦位の調整痕を認める。

土師質土器 量は少ない。40はC 3類、39はD 2類の皿である。

瀬戸・美濃焼 41は天目茶碗である。口唇部が僅かに屈曲し、腰部に薄い錆釉を施す。42は鉄釉の平碗である。輪高台の脇の削り幅は狭く、腰部に濃い錆釉を施す。外面に窯道具痕が残る。

中国製陶磁器 43は青磁稜花皿で、口縁内面に3条の花弁文、内面には草花文を描く。44～48は口縁部が反る白磁皿E群で、高台畳付の釉を拭き取る。49は染付の坏で外面に草花文を描く。50は染付の瓶で60と対をなす。体部外面に花卉文、底部外面と高台外面に4本の界線を描く。体部内面には、接合痕を筋状に認める。60以外にも花卉文を体部に描く別個体がある。

B 5 区表土出土遺物(第27図、挿図34、PL.19)

越前焼 51は播鉢皿群である。11条1単位の播目を体部内面と見込に施す。

土師質土器 量は少ない。52はC 2類、53はD 2類で、53は灯明痕をもつ。

瀬戸・美濃焼 54は底部先端が尖る灰釉容器である。内面には顕著な絞り痕を認める。55は灰釉香炉である。内側に肥厚する口縁部の外面付近には2条1単位の沈線が巡る。内面は口縁を除き露胎である。

中国製陶磁器 56は青磁で、小形の壺か瓶である。高台畳付は、磨きによる摩滅で平滑であるため、他用途に転用したと考える。57は白磁皿で、口縁部を強く撫でて、体部に稜を形成する。外面は腰部が露

胎である。58は白磁坏で、腰部から体部が直線的に立ち上がる。釉は、高台置付を拭き取り、見込も蛇の目状に拭き取る。見込露胎部には溶着痕が残る。59は染付皿で、口縁部を横へ引き出す。60は染付の瓶である。体部外面には花卉文を描く。外反気味の高い高台の置付は、露胎で平坦である。

そのほかの遺物(第28図、PL.20)

金属製品 61・62は環付飾金具で、表面に菊花状の装飾を施す。63は輪単体の環状金具である。64は鞘尻、65は小柄、67は鉄鏃である。66の筭は、表面の上半部の両端を木瓜型で囲み、中に長形状の装飾を施す。下部は湾曲しているが、耳搔き部分は残存する。68は用途不明品である。円錐形を呈する器形は内部空洞で、表面を金で装飾する。69は蝶番である。平面形態は半円に近く、下端部には細長い孔をもつ。留め孔は2箇所、釘が残る。70は火箸である。71は20cm近くを測る鉄釘である。未図化だが、この大きさの釘をもう1本認める。72～87は銅銭である。銭種など詳細は表16を参照されたい。86の洪武通寶には背に文字がある。

石製品 88は平面D型のバンドコの蓋で笏谷石製である。89は、平面円形で三脚をもつ笏谷石製の盤である。全体にノミ痕を残すが、特に外面と外底面が顕著である。

SA6365出土遺物(第29図、PL.21)

越前焼 90は桶である。体部に断面三角形の突帯が巡り、上面には木工具で右上がりの刻み目を施す。

中国製陶磁器 91は細い線描き蓮弁文をもつ青磁碗B 4類で、見込脇にヘラで略した劃花文を施す。

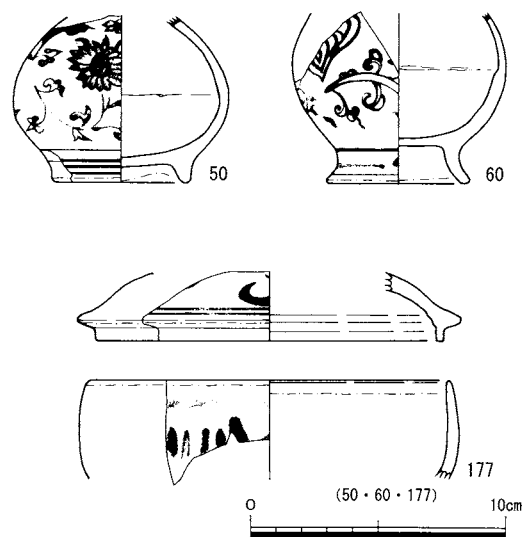
石製品 92は平面D型のバンドコの身、93は平面O型のバンドコの蓋である。笏谷石製である。

SD6279出土遺物(第29～31図、挿図34、PL.21～23)

越前焼 94・95は播鉢IV群で、各々11条・10条1単位の播目を施す。96は大型の浅鉢である。口縁部直下はやや窪み、その下部には粘土帯の積み上げた痕跡が残る。また、周囲に指頭圧痕が残る。

土師質土器 103は底部を上に出すA 1類の皿である。98～102、104～117はC 1類、C 3類の皿である。C類の皿は体部内面を右上に撫で抜き、口縁端部を摘み上げるものが多いが、方頭形を呈する109も認める。色調と器壁の厚さに関連があり、白色系の107は器壁が薄い。灯明痕を認めるものと認めないものは、半々の割合である。118～168はD類の皿である。D 3類の皿は口径10cm前後と12cm前後に分かれる。見込に圈線をもつ。口縁部を摘み上げるものが大半だが、口縁内側に広い面を有する149の例もある。見込の圈線は149を除き浅い。見込の圈線は深い程、新しい様相であると認識されている。C類同様、色調と器壁の厚さに関連があり、白色系は118、120、130のように器壁の薄いものが多い。168は口径20cmを測るD類の皿で、食膳具に用いた可能性がある。D類は、灯明痕を認めるものと認めないものは、前者の割合が多い。169はG類の皿で、口縁部内面に帯状の灯明痕がある。170は土釜である。羽部の大半を欠く。

瀬戸・美濃焼 171は天目茶碗である。体部は碗型で口唇部がやや括れる。高台脇の削り幅は狭く、腰部にやや濃い錆釉を施す。体部形態と錆釉の濃さから172も、輪高台の天目茶碗と考える。



挿図34 表土及びSD6279出土遺物(縮尺1/3)

中国製陶磁器 173の青磁碗は口縁外面に略した波状文が巡る器高の低い碗、174は鎬蓮弁文をもつ青磁碗B類である。175は無文の青磁碗E類で、見込には印花文をもち、高台内の釉は拭き取る。176は口縁部が外折する稜花盤で、丸みを帯びる体部内外面には鎬文を配する。際に沈線が巡る見込には草花文を施す。高台内縁辺の釉を蛇の目状に拭き取り、同箇所には溶着痕がある。177は染付の合子である。身・蓋の細片である。身は口縁部、蓋は裏全面を露胎とする。

金属製品 178は銅製の脚飾金具で、脚端部を入れる方形の空洞部上には留め孔があり、両側面も中央部を方形に切り取る。179は銅製の棒状製品である。用途は不明だが、両端にむけてやや窄まる。

石製品 180・181は平面D型のバンドコの身と蓋で、身は底部側辺に脚をもつ。笏谷石製である。

木製品 182は小型の黒漆皿で、体部内外面に赤漆で草花文を描く。183は両面に赤漆を施す板状製品である。短辺部は漆を施さないが、斜めに切り落とすことから箱の部材と考える。184～186は判読不能の聞香札である。184のみ裏面にも文字がある。187～189は折敷の脚部、190～192は曲物の底部、193は木ヘラである。曲物は大小あり、192は留め孔がある。194は刀の鏝で、方形に加工しているが、装飾性はみられない。195は小型の連歯下駄である。孔が3箇所みられるが、鼻緒を通す先端の孔は、ほかの2孔と比較して径がやや小さい。下駄は大型のものも他に1点確認できた。

A 1 区出土遺物

SF6703出土遺物(第32図、PL.24)

土師質土器 196～198はC 3類、199～201はD 2類の皿である。196は外面の灯明痕が著しい。

金属製品 銅銭3枚のうち1点は判読不能である。202は皇宋通寶で、203は嘉祐元寶である。

包含層出土遺物(第32図、PL.24)

越前焼 204は頸部が短く立ち上がる壺で、突帯の巡る可能性がある。

土師質土器 205・206はC 3類の皿で、206は器高が低い特徴を有する。

瀬戸・美濃焼 208の天目茶碗は209よりも大型で、口唇部が僅かに括れる。腰部に薄い錆釉を施す。207は灰釉卸皿で、口縁部内面には小突起を形成し、体部内面に粗い播目を格子状に刻み込む。

中国製陶磁器 210は細い線描きの蓮弁文をもつ青磁碗B 4類、211は青磁小皿である。212は白磁坏である。腰部から体部がやや外反しつつ立ち上がる。釉は、高台畳付を拭き取り、見込も蛇の目状に拭き取る。213は染付皿B 1群で、外面に界線と渦状の略した唐草文、内面にはアラバスクの文様を描く。

金属製品 214～218は銅銭である。銭種など詳細は表16を参照されたい。

B 1 区出土遺物

遺構面出土遺物(第32図、PL.24)

土師質土器 219・220はC 2類、221・222はD 3類の皿で、大型の皿も含まれる。

瀬戸・美濃焼 223の天目茶碗は、口唇部が僅かに括れ、腰部には濃い錆釉を施す。

B 2 区出土遺物

SD6341出土遺物(第32図、PL.24)

土師質土器 224～226はC 1類、227はC 2類、228～234はC 3類、235はD 2類の皿である。

瀬戸・美濃焼 236は灰釉皿である。237は灰釉小皿で、腰部がやや屈曲し、底部外面に土鎮痕が残る。

中国製陶磁器 238は青磁皿である。体部が広い見込から内湾気味に立ち上がり、口縁端部を外側に僅かに引き出す。際に段が巡る見込に草花文を施し、全面施釉後に高台内の釉を蛇の目状に拭き取る。

骨製品 239は骨を磨いて正円形とした駒石である。表裏面ともに中央部が断面三角形状に浅く窪む。

SX6344出土遺物(第33図、PL.25)

土師質土器 240は底部を上押し出すA 1類の皿、241～245はD 1類、246はD 4類の皿である。246は器壁が薄く灯明痕も認めない。

SB6359出土遺物(第33図、PL.25)

金属製品 銅銭である。248は元祐通寶で、249は洪武通寶である。

SP6392出土遺物 247は白磁皿D群である。体部は内湾して立ち上がり、輪高台と腰部は露胎である。

遺構面出土遺物(第33図、PL.25)

土師質土器 250～252はC 1類、253はC 3類、254はD 2類の皿である。

中国製陶磁器 255は青磁で、小型の碗の底部である。腰部は強く屈曲する。

金属製品 銅銭である。256は元豊通寶で、257は乾元重寶である。

B 3区出土遺物

SD6250出土遺物(第33図、PL.25)

中国製陶磁器 258は大部分を欠くが、青磁の托である。259は青白磁の瓜形水注で、片側には把手の一部が残り、反対側に葉文の上部が残る。体部内面は口縁部まで青白色の釉を認める。体部外面に鏤文を施す類例は西山光照寺跡でもみられる。260～262は口縁部が反る白磁皿E群である。262は腰部に鋭い稜を認める。高台畳付の釉は拭き取る。

須恵器 263は須恵器の蓋である。口縁部を摘み下げ、天井を広く削る。

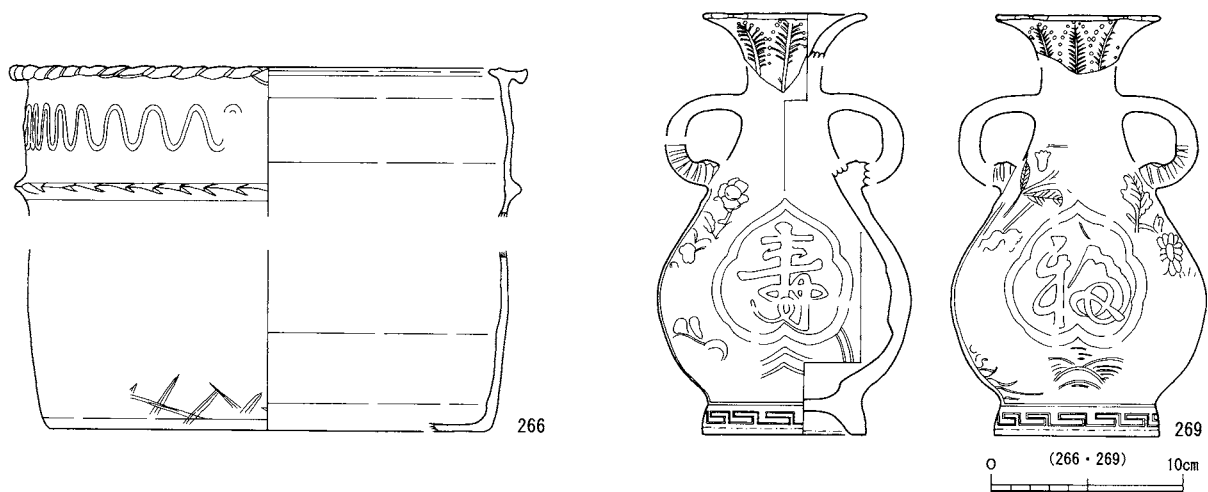
SD6252出土遺物(第33図、挿図35、PL.25・42)

中国製陶磁器 264は腰折れが鋭い青磁の鉢である。八角形で、口縁内面に3条の花弁文を施す以外は無文である。高台内の釉を輪状に拭き取る。265は口縁部が反る白磁皿E群で、高台畳付の釉は拭き取る。266は中国製の桶である。内外に肥厚した口縁部外面と体部の突帯に刻みの装飾を施す。口縁と突帯間には波状文、底部付近にも格子状の刻みを施す。口縁部上面には幅の広い溶着痕がある。

SD6253出土遺物(第33図、挿図35、PL.25・42)

土師質土器 267は土鈴である。内部には頂部を捻じり上げた際の絞り目が明瞭に残る。

瀬戸・美濃焼 268は四耳壺で、丸く張る肩部をもつ。内傾する頸部から口縁部を横に引き出す。外面は褐色の釉が刷毛塗りされ、成形痕が顕著な内面は、上半部のみ施釉する。残りは悪い。



挿図35 SD6252・SD6253出土遺物(縮尺1/4)

中国製陶磁器 269は青磁不遊環瓶である。横に膨らむ体部が徐々に窄まり、頸部に表面を線刻で装飾した双耳をもつ。低い高台に雷文帯が巡る。体部中央の枠内の文字は「福」・「寿」であり、側面に2種の草花文を施す。稜花の形を呈する口縁部の両外面に芭蕉葉文を施す。一乗谷では希少な例である。

金属製品 270は、銅製の輪状金具である。

SD6335出土遺物(第33図、PL.25)

越前焼 271は口縁部が内湾する鉢である。

土師質土器 272～274はC 1類、275～280はC 2類、281・282はD 2類の皿である。

木製品 283は櫛歯数が20本の解櫛である。表面に漆を塗布した痕跡は認めない。

SD6338出土遺物(第33図、PL.25)

土師質土器 284はG類の皿である。腰部は屈曲し、口縁を短く立ち上げる。

瀬戸・美濃焼 285は灰釉鉢の底部である。底面は露胎で三脚を貼り付ける。

金属製品 286は銅銭で、祥符元寶である。

SD6336出土遺物(第34図、PL.26)

越前焼 287は播鉢IV群と類似する口縁をもつ鉢で、体部の立ち上りは播鉢より強い。

土師質土器 288はミニチュアの皿である。289～291はC 2類、292はC 3類、293～295はD 2類、296は21cm程を測るD 4類の皿である。食膳具に用いた可能性がある。

瀬戸・美濃焼 297は鉄釉の平碗である。輪高台の脇の削り幅は狭く、体部両面に黒褐色と茶褐色の釉をまだらに施す。外面に窯道具痕が残る。

金属製品 298は銅製の棒状製品で断面は方形である。先端部は鍵状である。

SD6337・SD6358・SP6394出土遺物(第34図、PL.26)

土師質土器 299・300はD 2類、301はC 3類の皿、302は耳皿である。

SF6352 II層出土遺物(第34図、PL.26)

越前焼 303は大甕IV群、304は播鉢IV群である。10条1単位の播目を施すが、見込には認められない。

土師質土器 305はC 1類、306～313のC 3類の皿、314・315はD 1類、316～321はD 2類の皿である。314は外に小さな角柱状の異物が刺さり、その部分が内に膨らむ。321は外面に筋状痕を認める。口縁部を摘み上げるものが多い。C類の約半数は灯明痕が認められる。一方、D類では全て認められる。

石製品 322は平面O型のバンドコの身で、笏谷石製である。

木製品 323は脚の一部で、上面と片側側面に赤漆を施す。赤漆を施さない反対側面と上面側端部は斜めに鋭く加工する。

SF6352 III層出土遺物(第35図、PL.27)

越前焼 324は播鉢IV群で、11条1単位の播目を施す。体部内面全体が摩耗する。

土師質土器 327はC 1類、328～331はC 3類の皿、332・333はD 1類、334～337はD 2類の皿である。337はやや大振りの皿で、灯明痕もなく、食膳具に用いた可能性がある。I・II層同様、口縁部を摘み上げるものが多い。灯明痕の有無は半々の割合である。325・326は土鈴である。

木製品 338は小型の黒漆椀である。体部内外面に赤漆で草花文を描く。

SF6352 IV層出土遺物(第35・36図、PL.27・28)

越前焼 339は播鉢IV群で、8条1単位の播目を施す。340は、口縁と体部が内湾する桶である。

土師質土器 I～III層までみられたC 1類の皿はなく、341～345のC 3類の皿も少ない。346～388はD

類の皿である。口径10～12cm前後、13～14cm前後のD 2類が大半で、348・349など見込の圏線の深いものもみられる。359は、内部に沈澱物が厚く溜まる特異な例である。C・D類ともに口縁部を摘み上げるものが多く、見込の圏線はⅠ～Ⅲ層同様、浅い。色調と器壁の厚さに関連があり、白色系の346・356・360・380などは器壁が薄い。387は口径18cm程、388は口径23cm程のD 4類の大皿で、酒皿に用いた可能性がある。灯明痕を認めるものと認めないものでは、前者の割合が多い。389は小壺である。

中国製陶磁器 390は小形の白磁鉢である。輪花形の可能性がある。

金属製品 391は銅製の用途不明品である。持手側を輪状、反対側は三つ又にする。

木製品 392は黒漆椀である。高台内に赤漆の「上」の文字を認める。393も黒漆椀で、赤漆で外面に3つ、内面と見込には計4つの木瓜文を描く。394・395の板状製品は、側端と中央部に留め孔を認める。

SF6353出土遺物(第37図、PL.29)

土師質土器 396はC 1類、397はC 2類、398～401はC 3類、402・403はD 2類の皿である。

中国製陶磁器 404は大型の青磁碗E類である。体部内面と見込に草花文をへら描きし、外面を斜めに削る高台内の釉を輪状に拭き取る。こうした大型の青磁碗は、一乗谷ではあまりみられない。

SP6395出土遺物(第37図、PL.29)

金属製品 405は銅銭で、元祐通寶である。

遺構面出土遺物(第37図、PL.29)

越前焼 406は壺である。丸い肩部をもち、直立する頸部に至る。口縁上面は平坦で、口縁直下と基部は強く撫でるために窪む。体部内面の継ぎ目の指頭圧痕は著しい。407は口縁と体部が内湾する桶である。408は筒形の花生である。竹の節を模しており、畳付は平坦で逆台形の高台をもつ。

土師質土器 409～413はC 1類、414～419はC 3類、420・421はD 2類の皿である。

瀬戸・美濃焼 422の天目茶碗は口唇部が僅かに括れ、腰部には濃い錆釉を施す。423は口縁部を欠く。

中国製陶磁器 424～427は口縁部が反る白磁皿E群である。424は内面に型押しで花卉文を施し、427は直線的に体部が外反する。全て、高台畳付の釉は拭き取る。428染付瓶、429は染付坏で、429は外面に界線と水草文を描く。430は五彩合子である。色絵の剥落は著しいが、体部外面には獅子文を認める。

金属製品 431～434は、銅銭である。銭種など詳細は表16を参照されたい。

黒色炭混土出土遺物(第38図、PL.30)

土師質土器 435・436はC 1類、437～439はC 3類、440～443はD 2類の皿で、444はG類の皿である。

瀬戸・美濃焼 445は灰釉皿で、口縁部が反る。底部外面には、窯道具痕が残る。

中国製陶磁器 446は口縁部が反る白磁皿E群である。高台畳付の釉は拭き取る。

I 遺構埋土出土遺物 1(第38図、PL.30)

土師質土器 447～454はD 2類、455～459はD 3類、460～462はD 4類の皿で、447・448・450・453・454には灯明痕を認める。口径18～20cm程を測る大振りの皿は食膳具に用いた可能性が高い。

中国製陶磁器 463はへら描きの蓮弁文をもつ青磁碗B 3類で、蓮弁文を等間隔に施す。

I 遺構埋土出土遺物 2(第38図、PL.30)

瀬戸・美濃焼 464は鉄釉鉢である。口縁部を内側に折り返し、露胎の底部外面に三脚を貼り付ける。

中国製陶磁器 465は白磁碗である。丸味を帯びる腰部から外反気味に口縁部が立ち上がる。見込際に段が巡り、高台外側の端部と内面を斜めに削る高台内は、露胎である。466は口縁部が反る白磁皿E群で、口縁端部を横に少し引き出し、上面に狭い平坦面を作る。高台畳付と内側の釉を広く拭き取る。

金属製品 467は小柄である。

木製品 468は厚く細長い木札、469はやや薄く幅広い木札である。468は表面に「五升」と墨書する。469は両面に文字を認めるが判読不能である。470は木ヘラである。

B4区出土遺物

SD6272出土遺物(第39図、PL.31)

瀬戸・美濃焼 471は内反高台をもつ天目茶碗である。体部は直線的で口唇部が括れる。高台脇の削り幅は広く、腰部に薄い錆釉を施す。

木製品 472は樽の栓で、表面全面に赤漆を塗る。溝からは多くの建築部材も出土している。

SK6259～6271出土遺物(第39・40図、PL.31・32)

越前焼 原位置を保つものは1点と少ない。大甕7点、中甕3点を認める。478は大甕Ⅲ群で、肩部に格子目と凸字の「本」の押印文を施す。474～477、479は大甕Ⅳ群で、Ⅲ群と比べて肩部が膨らむ傾向がある。口縁部の肥厚具合により475～477はⅣ群a、474・479はⅣ群bに分類した。両類とも、肩部に格子目と凹字の「本」の押印文を施す。481～483は中甕で、口縁部が長く、大甕と異なり押印文を認めない。473は体部内面に円弧状の刻文を施す鉢である。丸みを帯びる口縁下に沈線はない。

金属製品 499は銅製の環付飾金具で、表面を菊花状に刻み、金で装飾する。各埋甕遺構からは鉄釘が出土した。490・491はSK6260、492～495はSK6264、496～498はSK6269、500～504はSK6267出土で、490のように大型の釘もあるが、大半は5～10cmに収束する。出土品全体の法量は表4に示した。釘の頭部は端部延圧後に巻くものと折り曲げるものを多く認める。B4区は建築部材の出土が目立ち、釘も集中する点から、両者の関連性は非常に高いと判断できよう。全長計測可能な釘の長さを計測した結果、4.5～6.0cmのものが多いことが判明した。当時の建築部材との関連性を表す事例として提示する。事例・データなどの蓄積を待ちたい。

木製品 各埋甕遺構から木製品が出土した。484～486はSK6260、487・488はSK6265、489はSK6271、504はSK6268出土である。484～486は曲物の底部で、大型品の表面には木の節を認める。487・488は用途不明の環状製品で表面には黒漆を塗る。489の折敷の脚は、上面側端部に木釘が2箇所残る。504は柄杓で、杓は檜のへぎ板を丸めて側板を作り、桜の皮で縫い合わせて補強した後に柄を入れる孔を穿っている。柄の長さは23cmと短い。一乗谷では第36次発掘調査でも出土している。

I遺構面出土遺物

(第41図、PL.33)

越前焼 505は搦鉢と類似する形態の鉢である。506は大型の浅鉢である。口縁部直下は窪み、体部内面に粘土帯を積み上げた痕跡が認められる。周囲には指頭圧痕が顕著に残る。96と比べると器壁がやや薄い。

表4 鉄釘計測表

区画	遺構名	地区	法 量(cm)											
			1.5～3.0	3.0～4.5	4.5～6.0	6.0～7.5	7.5～9.0	9.0～10.5	10.5～12.0	12.0～13.5	13.5～15.0			
B4	I遺構確認面	J2						1						
B4	I遺構確認面	K1		2	4		1						1	
B4	I遺構確認面	K2		6	17		4	8						
B4	I遺構確認面	L1	1		4									
B4	I遺構確認面	L2			3		1	1						
B4	I遺構確認面	M1		2	3			2						
B4	I遺構確認面	M2	1		1									
B4	II遺構確認面	N1			2									
B4	I遺構埋土	K1						1						
B4	SK6268	K1		1	5		1	4			1			
B4	SD6272	K1		1			2	1						
B4	SK6270	K2			1			2						
A1	SD6279	D18						1						
B4	SD6273	J3						1						
A1	トレンチ	H9		1										
B4	遺構面	K2			3		1			1				
B4	SK6265	K2			1		1			1				
B4	SK6262	L2		2	7		2	1						
B4	SK6261	K2			1		2	1						1
B4	SK6259	K2			2									
B4	SK6271	K2		2	4			1						
B4	SK6263	L2			1									
合 計			2	17	59	15	27	2	1	1	1			

土師質土器 507は土釜で、体部上方に断面三角形の羽部をもつ。内面の指頭圧痕は、特に底部に顕著で、平坦な底部外面を作り出す。体部外面よりも体部内面の方が炭化痕が顕著である。

瀬戸・美濃焼 508・509は天目茶碗である。体部は碗型で、口唇部がやや括れる。高台脇の削り幅が広い509は腰部に濃い錆釉を施す。508の腰部の錆釉は薄い。

金属製品 510・511は銅製の環付飾金具で、510は菊花状金具に環付き金具を挿す。512は銅製の輪状金具で、いずれも表面を金で装飾する。513～517は鉄釘である。各々12cm、9cm、6cm程のものに分かれるが、いずれも使用されているため、頭部の端部を巻き込む。

木製品 518は曲物である。檜のへぎ板を2枚丸めて側板を作り、桜の皮で縫合する。底板は、桜の皮で側板と3箇所縫合するが、側板よりも僅かに上げ底とする。519は、中央を窪ませた細長い板材である。側端部に釘が残り、中央部にも釘孔を認めるため、2本を組み合わせる組物の一部と考える。

Ⅱ 遺構面出土遺物(第41図、PL.33)

越前焼 520は外反する頸部をもつ小型の壺で、口縁部を丸く収める。

中国製陶磁器 521は青磁小皿である。口縁部は外反し、端部を波状に削る。522～525は口縁部が反る大振りの白磁皿E群で、全ての高台畳付の釉を拭き取る。

金属製品 526は鉄製の肘金、527は角張る箇所につける銅製の飾金具で、留め孔を2箇所認める。

I 遺構埋土出土遺物(第42図、PL.34)

越前焼 528は播鉢と類似形態の鉢である。体部内面下半が摩耗している。体部内面に刻文を施す。

瀬戸・美濃焼 529・530は天目茶碗である。口唇部が僅かに括れ、530には腰部に濃い錆釉を施す。

中国製陶磁器 531・532は染付の碗である。531はC群で外面に波濤文と草花文、532はB群で外面に草花文を描く。内面には界線のみを認める。

金属製品 533は銅製の環付飾金具である。菊花状金具の表面を金で装飾する。534は銅製の鏝である。

木製品 535はアーチ状を呈する脚部材で、遺存した片面には黒漆を施す。536は小型の刀の鏝である。

B 5 区出土遺物

SD6368出土遺物(第41図、PL.33)

越前焼 537は中甕である。538は胴部中位が最大径となる中壺である。頸部は外頸して玉縁状の口縁部がつく。539は播鉢IV群で、10条1単位の播目を施す。体部内面下半は摩耗している。

土師質土器 540～542はC 1類の皿である。

瀬戸・美濃焼 543は内反高台をもつ天目茶碗である。体部は直線的で口唇部が括れる。高台脇の削り幅は広く、腰部に薄い錆釉を施す。

中国製陶磁器 544は青磁の盤である。広い見込をもち、高台内縁辺の釉を拭き取る。545・546は口縁部が反る白磁皿E群で、高台畳付の釉は拭き取る。547は白磁小皿で、体部外面に放射状の線刻を施し、口縁部を波状に削る。底部は碁笥底状の露胎で、見込際の釉を蛇の目状に拭き取る。同箇所には他器種の溶着痕がみられる。見込には草花文を認める。

金属製品 548は銅製の紅皿で、輪花状の体部表面を金で装飾する。549は銅製の環付飾金具である。

石製品 550は平面D型のバンドコの身である。551は平面円形の盤で、体部内外を丁寧に磨き、ノミ痕を消す。552は砥石である。1面のみ欠落が激しいが、残り5面の使用痕は顕著である。中砥である。石質から浄教寺砥石と判断する。

SD6373出土遺物(第43図、挿図36、PL.35・42)

越前焼 553は播鉢Ⅳ群で、9条1単位の播目を施す。554は口縁部が内湾する鉢、555は口径の大きい浅鉢である。554は口縁外面に段が巡り、555は口縁部下に沈線が巡る。体部内面下半が摩耗する。556は桶である。底部より口縁部がやや広い。口縁部は方形を呈し、体部内面には粘土帯を積み上げてナデ付けた痕を認める。類似する形態の桶が340・407などやや目立つ。

瀬戸・美濃焼 557は鉄釉瓶である。体部外面に鉄釉を施し、腰部と体部内面に錆釉を施す。

中国製陶磁器 559は口縁が外折する稜花盤である。腰部が僅かに張る体部の外面に鎬文を施し、口縁部上面に3条の花弁文を、体部内面に草花文をヘラで施す。560は体部外面に鎬文を配する酒会壺で、最大径をもつ肩部が張る。内傾する頸部外面は無文である。内外両面を斜めに削る高台と畳付、口縁部上面の釉を拭き取る。高台内に両面施釉した粘土円盤を嵌める。561は口縁が外折する元の染付皿である。見込際に二重界線を2箇所描き、見込に芭蕉草花文、体部に蓮唐草文、口縁上面には菱形文を描く。高台は断面が台形に近く、外側は釉を施す。高台畳付より内側は削り出し露胎とする。562も元の染付皿である。561同様、見込に芭蕉草花文を認める点から、2個体存在したと判断できる。

金属製品 564は銅製の環付飾金具である。表面に緻密な文様を線刻し、表面を金で装飾する。565・566は銅製の飾金具で、565はT字状、566はI字状である。各々の側端部に留め孔を認める。

石製品 563は小型長方硯である。底部外面は、全体が薄く剥離している。

SD6388出土遺物(第43図、PL.35)

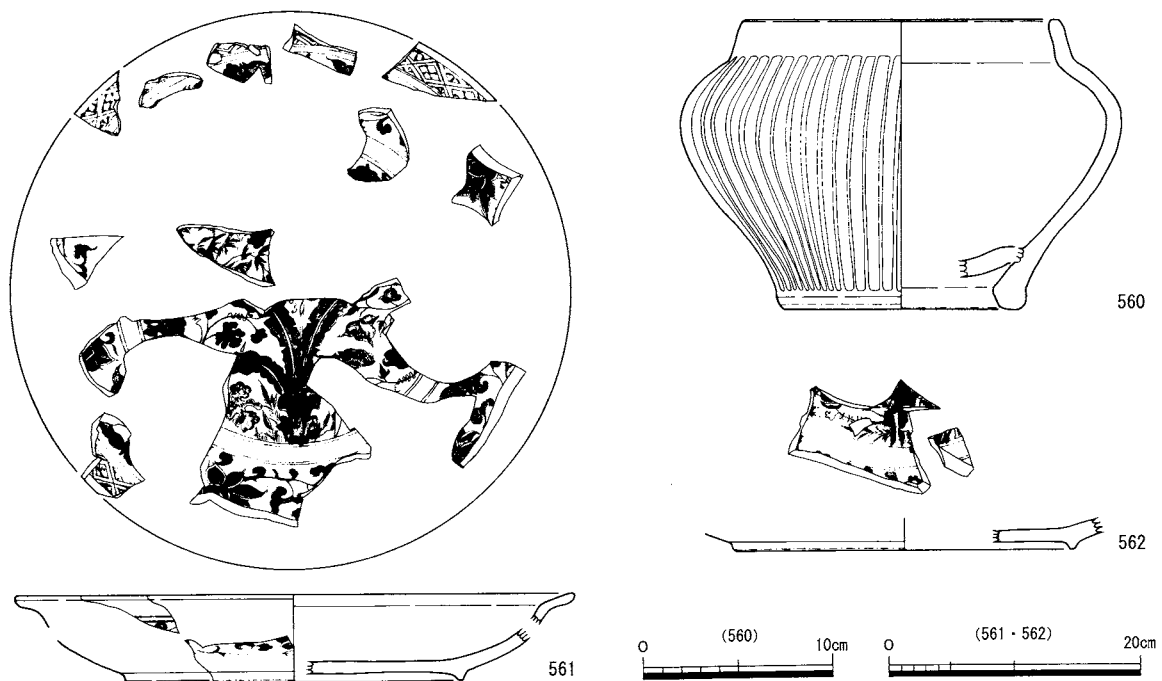
越前焼 567は大甕Ⅳ群cである。肩部に格子目と凹字の「本」の押印文を施す。

土師質土器 568～570はC1類の皿である。いずれにも灯明痕は認められない。

金属製品 571～573は銅銭で、571は景德元寶、572は祥符元寶、573は皇宋通寶である。

SK6386出土遺物(第43図、PL.35)

土師質土器 574・575はC2類、576・577はC3類、578・579はD2類の皿である。



挿図36 SD6373出土遺物(縮尺1/4・1/6)

SK6383・SK6384出土遺物(第43・44図、PL.35・36)

越前焼 582は大甕Ⅳ群cである。肩部に格子目と凹字の「本」の押印文を施す。583・584は中甕、585・586は小甕で、口縁部が長く、大甕とは異なり押印文を認めない。587は播鉢Ⅳ群である。9条1単位の播目を施し、体部内面下半が摩耗する。592の中甕は、埋甕土坑に東接するSK6384出土である。

土師質土器 580はC 2類、581はC 3類の皿である。

瀬戸・美濃焼 588は鉄釉の四耳壺で内傾する頸部に玉縁状の口縁をもつ。外面に釉を刷毛塗りするが、成形痕が顕著な内面は、口縁部内面を除き露胎である。

中国製陶磁器 589は口縁部が反る白磁皿E群で、高台豊付の釉は拭き取る。

石製品 590は平面O型のバンドコの蓋、591は盤である。591は体部外面のみノミ痕が顕著に残る。

SX6385出土遺物(第45図、PL.37)

越前焼 593は播鉢Ⅳ群で、播目は6条1単位とほかより条数が少ない。体部内面下半が摩耗する。

遺構面出土遺物(第45図、PL.37)

越前焼 594は播鉢Ⅲ群で、9条1単位の播目を施す。

土師質土器 595はC 2類、596はC 3類、597はD 2類、598・599はD 3類の皿である。

瀬戸・美濃焼 600は灰釉の燭台で、中央の空洞の筒の周囲に受け皿が付き、底部はやや浮き上がる。

中国製陶磁器 601は白磁坏である。腰部が屈曲し、玉縁状の口縁部に至る。高台内面は内反りに削り出し、外面も複数回削り垂直にする。腰部は露胎で、見込は全面に釉を施す。

金属製品 602は銅製の責袴である。環状の輪2つを中央部で繋ぎ合わせる。

石製品 603・604は仕上げ砥で、603は4側面、604は6面に研痕を認める。

木製品 605は折敷の底板で、約半分を欠失するが、角は斜めに切っている。

B 6 区出土遺物

SD6362出土遺物(第45図、PL.47)

土師質土器 606はC 3類、607はD 2類、608はD 3類の皿である。

金属製品 609は銅銭で、熙寧元寶である。

SD6361出土遺物(第45図、PL.47)

土師質土器 610～612はC 1類の皿である。

SD6364出土遺物(第45図、PL.47)

土師質土器 613・614はC 1類、615はD 2類、616はD 3類の皿である。

瀬戸・美濃焼 617は鉄釉坏で、体部外面は口縁部を除き露胎である。

SF6363出土遺物(第45図、PL.47)

瀬戸・美濃焼 618は灰釉鉢の底部である。体部外面に「門」の字を墨で書く。

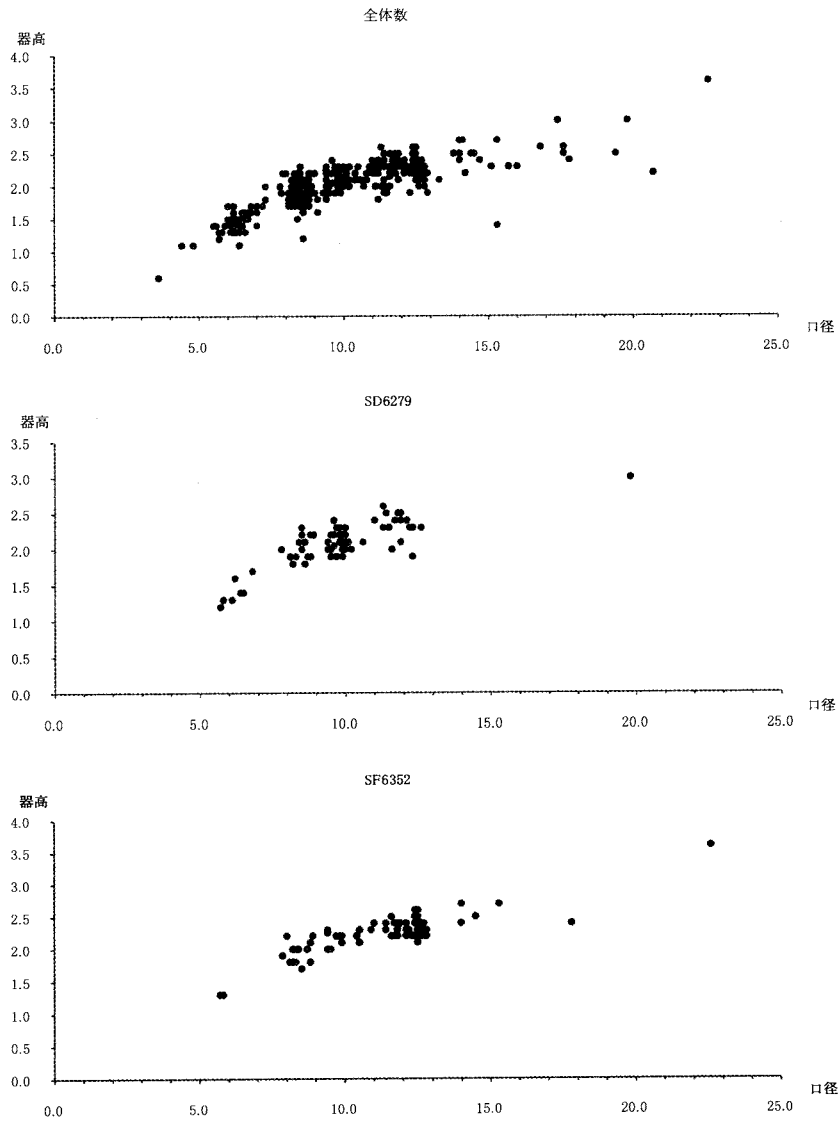
遺構面出土遺物(第45図、PL.47)

土師質土器 619・620はC 1類、621・622はC 3類、623・624はD 2類の皿である。

瀬戸・美濃焼 625は天目茶碗である。体部は直線的で口唇部が括れる。高台脇の削り幅は広く、腰部に薄い錆釉を施す。

最後に、土師質皿の法量別の用途を述べると、C 3・D 1・D 2類を灯明皿に多用したことが分かる。一方でD 3・D 4類に認めないことから、この2種は食膳具として用いたものと理解できる。本調査区の特徴はD 4の大皿が多い点である。D 4は出土地点に限られる傾向があり、先述したように、土師質

皿の比率が高いことを考え合わせると、儀式や宴が多く催されたものと理解できる。また、土師質皿が大量に出土した遺構でも、SF6352はIV層出土の土師質皿D 2類のみに灯明痕が多いことが理解できる。全体の出土数と遺構別の分析を進めることが、各調査区の性格を考慮する際には1つの情報源となると思われる。



挿図37 土師質皿の法量分布図(全体数・SD6279・SF6352出土遺物)

表5 土師質皿の灯明痕の割合

	灯明痕有無	C 1類	C 2類	C 3類	D 1類	D 2類	D 3類	D 4類	遺構別%
SD6279 計72個	あり	0	0	9	20	22	0	0	70%
	なし	6	0	6	5	3	0	1	30%
SF6352 II層 計17個	あり	0	1	3	3	4	0	0	65%
	なし	1	0	4	1	0	0	0	35%
SF6352 III層 計11個	あり	0	0	3	2	2	0	0	64%
	なし	1	0	1	0	1	1	0	36%
SF6352 IV層 計48個	あり	0	0	1	0	31	1	0	69%
	なし	0	0	4	1	6	2	2	31%
SF6352 計76個	あり	0	1	7	5	37	1	0	67%
	なし	2	0	9	2	7	3	2	33%
出土総数 計281個	あり	0	2	28	26	76	1	0	47%
	なし	40	6	48	7	35	13	9	53%
法量別%	あり	0%	1%	10%	10%	26%	0%	0%	-
	なし	13%	2%	16%	2%	12%	5%	3%	-

建築部材(第46・47図、PL.39・40)

SB6359出土の柱根 626～632は柱穴に伴う丸太の柱根である。残存長16～75cmを測り、いずれも径12cm内外の芯持材である。樹種は広葉樹で627はコナラ節、ほかは全てクリである(顕微鏡観察による)。底面には縦斧(ヨキ、マサカリ等)による加工痕が残り、角が粗く研られている。627・631に顕著な様に樹皮を残したまま利用されおり、全体に成形の程度が低い。628は掘立柱として機能するうえで必要のないホゾ穴(約3.8cm四方)の仕口が残されており、転用材であることを示す。

SB6331出土の柱根 633～639は柱穴に伴う角材の柱根である。残存長58～83cmを測り、径は636が15cm角程、ほかは全て12cm角程である。木取りは633・636・637が芯持材、634・635・638・639が芯去材である。樹種は針葉樹で、633はコウヤマキ、634・637・638はアスナロ、635・636・639はヒノキである(顕微鏡観察による)。底面には縦斧による加工痕が残り、角が粗く研られている。掘立柱の地中部にあたるためか、角柱でも、表面の仕上げはなされていない。芯去材は大径材を半裁して得られており、木表の角に丸味を残し、木裏に顕著な加工痕を認める。635・638・639の加工痕は横斧(チョウナなど)とみられ、上端から下端に向かって研られており、638・639の刃こぼれ痕から推定される刃幅は9cm以上である。一方、634は木表に顕著な加工痕を残し、下端から上端に向かって研られている。刃痕の入りが比較的深く、横斧とは別の道具である可能性がある。縦斧であれば、刃痕の向きが一致するため、刃の左右を使った両刃の縦斧が想定される。

SB6258出土の建築部材 640は長さ59.6cm、幅20cm、厚さ1.6cmの板材である。加工痕はみられないが、四辺に角釘痕を残す。長辺の釘の間隔は11.7cm、短辺は6cmで、四隅に釘は打たれていない。板面に認める筋状の付着物は、板に別材が打ち付けられていた際の入隅部に溜まった塗装、もしくは塵が凝固したものと考えられる。箱状の構造が想定されるため、家具や調度品であった可能性も考えられる。

641～653は南雨落溝SD6272、654～657は北雨落溝SD6256から一括で出土した部材である。いずれも一方の端が炭化しており、当初の全長やその端の形状などは不明であるが、炭化状況の一致と部材構成などから、屋根の先端部が焼け落ちたものと推定される(表6)。

641～644は残存長15～32.6cm、幅5～7.7cm、厚さ0.2～0.3cmの板目のそぎ板(へぎ板)である。複数枚重なった状態で出土している。このほかにも出土点数は多く、割肌を残すことが共通するが、釘穴や加工痕は見られない。

表6 SB6258の出土建築部材

出土建築部材	雨落溝	部材	種類	数量	備考		
SB6258の出土建築部材	南雨落溝SD6272	木材	角材	ア) 2寸×3.5寸角材	6点	648～653	
			イ) 約2寸幅材	4点	全体が炭化		
			ウ) 4.2寸角材	1点	全体が炭化		
			板材	エ) 0.5～1分厚板	7地点	641～644ほか	
			オ) 5分厚板	2点	全体が炭化		
		竹材	丸竹	カ) 1.2寸竹	11地点	645～647ほか	
				キ) 2寸竹	3点		
				北雨落溝SD6256	木材	角材	ア) 2寸×3.5寸角材
		イ) 約2寸幅材	10点	みかん割材など			
		竹材	丸竹	カ) 1.2寸竹		6点	
				ク) 0.2寸竹(茅)		1点	
	複合材	ケ) 格子状竹製品	1点	挿図25・26			

645～647は径4cm内外の丸竹である。竹の節は二重でマダケやハチクと思われる。645・646は残存長18cmで、先端が30度程に鋭角に切り落とされている。647は残存長28cmで先端は欠損している。表裏の同位置には0.2cm内外の穿孔があり、竹の空洞部には鉄の角釘が残っているため、穿孔は貫通した釘穴と推定される。なお、竹に直接釘を打つと割れることから錐などで予め穴を開けたものと思われる。

648～653は、残存長45.7～48.5cm、断面長辺9.2～10cm、短辺6～7.4cmの断面長方形の角材で、芯持材の角に丸身を残す。649の木口には横挽鋸の加工痕が残る。このほかの痕跡は明瞭ではないが、6本とも近似した断面寸法を持ち、燃え残った長さがほぼ揃う状況は特異である。

654～657は、残存長53.9～65.6cm、断面長辺8.8～10cm、短辺6～6.9cmの断面長方形の角材で、芯持材の角に丸身を残す。

断面寸法と木取りが近似する648～653及び654～657は、雨落溝に焼け落ちたと思われる同様の出土状況から、同じ用途の部材とみられる。このうち残存長の長い655～657は、木口から55cm内外(それぞれ54.7cm、55.6cm、53.4cm)の位置に鉄の角釘が貫通していることから、はね出し状の構造部材であったと想定される。また釘は短辺方向に貫通していることから、五平に部材を用いたと理解できる。なお、釘の残る位置は炭化しているため、相手となる部材の痕跡は認められない。

格子状竹製品(挿図25・26)は、北雨落溝SD6256の調査範囲の西端約0.6m四方に広がって残存していた。幅2cm内外の割竹に直交し、径0.5cmの茅2～3本程のまとまった束が6cm内外の間隔で並ぶ。複合材であることを示すものの華奢な材のため欠損が著しく、また、仕口や縄などの固定方法は不明である。残存長35.5cmを測る割竹を見る限り炭化はしていない。なお、竹の節は二重で、マダケやハチクと考えられる。

なお、これらの建築部材から導き出すことのできる内容の詳細は、論考1で検討する。

SF6352出土の板材 長板(挿図23)は、石積施設に伴って3枚重なった状態で出土した。長さ約180cm、幅約30cm、厚さ約1.5cmを測る。樹種はオニグルミである(顕微鏡観察による)。用途は不明だが、長さは石積み施設の短辺約2mよりもわずかに短い程度である。赤身部分と白太部分が明瞭な両耳付きの板で、いずれもやや弧を描いて曲がっていることから、3枚は同一原木で、材長に渡って平行に二面を挽いて得られたものと考えられる。板の両面には縦挽鋸の加工痕を認める。縁部も直線的に切り落とされ角に丸みも少ないことから、風食がすすむ前に廃棄されたものと考えられる。

その他の建築部材 本報告で取り扱う部材が全てではないが、上記の他にも建築部材と思われる木材が出土している。

658は残存長7.8cm、長辺11.6cm、短辺9.8cmの角材である。芯持材で、木口には四方から打ちこまれた刃幅1.8cmのノミ(鑿)の加工痕を残す。側面にはやや偏心して幅1.6cm、深さ0.2cmの溝1条が施される。溝には板が嵌め込まれたものと思われ、板壁を構成していた可能性がある部材である。659は残存長7.2cm、径8cmの芯持の角材である。木口には、四方から打ちこまれた刃幅1.8cmのノミの加工痕を残す。660は残存長27.9cm、残存幅6.2cm、厚さ1.1cmの板である。面取りが施されている面に加工痕はないが、反対側の面に縦挽鋸の加工痕を認める。661は長さ15.2cm、径8.3cm、断面が半円形の芯持材である。平坦面に角釘2本が打ち付けられている。角釘は1本が貫通しており、裏面には直交する部材を受けると考えられる浅い仕口が設けられている。木口には横挽鋸の加工痕が残るが、端部を欠き込む際の切れ目の痕も残っており、アサリ幅0.16cmの横挽鋸が用いられたことがわかる。切れ目はV字型をしており横挽鋸の刃先が鋭利だった可能性を示す。

ガラス玉製作関連遺物(第48・49図、PL40・41)

SB6375内のガラス工房跡に関連した遺物は、ガラス玉と溶解ガラスのガラス製遺物156点、原材料の可能性のある鉛や銅の溶解した塊や、石英や水晶のほか、鞆の羽口や砥石である。しかし、溶かした原材料量を入れる坩堝・トリベは出土していない。

ガラス玉で製品と認めたものは直径2.5~4.5mmを測る小玉が大部分だが、686・708と5mm台のものもある。製作技法は、ガラス玉の孔と直交方向に巻き付けの痕跡や筋状の腐食の痕や、端面に巻き付け始める、あるいは巻き付けの終わりの痕跡と考えられる突起を認めるため、芯棒に熱で軟化した紐状のガラスを2~3回巻き付ける「巻き付け法」により製作したと判断できる。ガラス玉の色調には水色系(淡青色不透明・濃青色半透明)、緑色(緑色透明)、紫色(紫色透明)、白色(白色不透明)がみられる。なお、ガラス玉の色調ごとの量比、直径と重量の相関関係は表に整理したが、結果、最も多い色合いは水色系の47%、次に緑色の32%、紫色の18%で、直径は2.7~4.3mm、厚さは1.5~3.3mm程のものが多くみられる。以上から、本調査区出土のガラス玉には、水色系の小玉が多いものと判断できる。また、長径と重量にも相関関係がみられ、直径が大きいものほど重量も増加すると表8で判断できる。なお、本調査区出土のガラス玉は0.02~0.08g台、特に0.03gが多いことがわかる。

溶解ガラス片は複数のガラス玉が融着した731・732もある。727~729・733は水色系、730・731・734・737・738は緑色と単色だが、異なる色が混在する732などの例も認めるが、上記の4色以外ない。単色の溶解ガラス片は一端が細長く伸びているものが多いことが特徴で、小玉の製作に伴う副産物の可能性もある。一方で、複数のガラス玉が融着したものは、製品が何らかの理由で熱を受けた可能性を示している。生産技術などを含めた検討が必要と考える。以上のガラス製遺物は遺構出土遺物のほか、遺構面精査の際の排土洗浄で認めたものも含めてみると、建物跡の南東側で集中して出土することが明らかである。グリット別での分布状況を見ると、AC9区が76点と最も多く、AC・AD9のSK6383の覆土の35点が続く、AC10の14点、AC8の11点、AD10の8点と多く、AD9は4点、AD8は2点、AB9・AC11・AD11・AE10およびAC・SD9間の小穴で、各々1点分布するが、建物内の炉近くには認められない。

ガラス製遺物以外は739~750の鉛塊と751~757の鞆の羽口を図化した。鉛は鉛ガラスの原材料量で、溶解鉛も数点みられる。このほかにガラスの着色に深く関わる銅も認める。銅はSA6365の南に位置するSD6368で多く出土する。全体的に薄い剥片で溶解銅は少量である。751~757の鞆の羽口は遺存状況が悪く細片だが、直径6.6cmに復元でき、炉跡付近のAD12で多く認める。

ガラス製遺物、特にガラス玉の成分については、論考2を参照されたい。

表7 ガラス玉色別数

色調	個数	%
水色	31	47
緑色	21	32
紫色	12	18
白色	2	3

表8 ガラス玉長軸と重量相関表

長軸(mm)	重量(g)											合計
	0.010~0.019	0.020~0.029	0.030~0.039	0.040~0.049	0.050~0.059	0.060~0.069	0.070~0.079	0.080~0.089	0.090~0.099	0.100~0.109	0.110~	
2.50~2.69	1											1
2.70~2.89	1	2	2	2								7
2.90~3.09	1	2	5		1							9
3.10~3.29		2	3	3								8
3.50~3.69				1	1							2
3.70~3.89			2	1		1						4
3.90~4.09				1	3	2						6
4.10~4.29		1			1	2	2		2			8
4.30~4.49						1	2					3
4.50~4.69											1	1
4.70~4.89							1	1				2
4.90~5.09									1	1		2
5.10~5.29										1		1
5.70~5.89											1	1
合計	3	7	12	8	6	6	5	1	3	2	2	55

番号	図版	PL	種類		区画	地区	層/遺構	法量(cm)			胎土	焼成	色調外	色調内	備考	
			大別	器種				口径	器高	底径					分類	その他
109	29	21	土師質	皿		F9	SD6279	8.5	2.0	-	①	良	灰黄	灰黄	C類	灯明痕あり
110			土師質	皿		F12	SD6279	8.5	2.3	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	C類	
111			土師質	皿		F8	SD6279	8.6	1.8	-	①	良	黄橙	黄橙	C類	
112			土師質	皿		E17	SD6279	8.6	2.1	-	①	良	灰白	灰白	C類	
113			土師質	皿		F9	SD6279	8.6	2.1	-	①	良	黄橙	黄橙	C類	灯明痕あり
114			土師質	皿		F9	SD6279	8.7	1.9	-	①	良	黄灰	黄灰	C類	
115			土師質	皿		F8	SD6279	8.8	2.2	-	①	良	黄橙	黄橙	C類	灯明痕あり
116			土師質	皿		F9	SD6279	8.8	1.9	-	①	良	灰白	灰白	C類	
117			土師質	皿		F8	SD6279	8.9	2.2	-	①	良	灰黄	黄橙	C類	灯明痕あり
118			土師質	皿		F9	SD6279	9.4	2.0	-	①	良	黄橙	黄橙	D類	
119			土師質	皿		K8	SD6279	9.4	2.0	-	①	良	灰黄	灰黄	D類	
120			土師質	皿		E2	SD6279	9.4	2.1	-	①	良	灰黄	黄橙	D類	灯明痕あり
121			土師質	皿		F8	SD6279	9.5	1.9	-	①	良	灰白	灰白	D類	灯明痕あり
122			土師質	皿		F8	SD6279	9.5	1.9	-	①	良	黄橙	淡黄	D類	
123			土師質	皿		F8	SD6279	9.5	2.2	-	①	良	浅黄	浅黄	D類	灯明痕あり
124			土師質	皿		F9	SD6279	9.5	2.0	-	①	良	黄橙	黄橙	D類	灯明痕あり
125			土師質	皿		K8	SD6279	9.6	2.2	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	D類	
126			土師質	皿		F8	SD6279	9.6	2.4	-	①	良	黄橙	黄橙	D類	灯明痕あり
127			土師質	皿		F9	SD6279	9.7	2.3	-	①	良	黄橙	橙	D類	灯明痕あり
128			土師質	皿		F9	SD6279	9.7	1.9	-	①	良	灰白	灰白	D類	灯明痕あり
129			土師質	皿		F8	SD6279	9.9	2.0	-	①	良	浅黄	浅黄	D類	灯明痕あり
130	30	22	土師質	皿		F9	SD6279	9.6	2.1	-	①	良	浅黄	灰白	D類	灯明痕あり
131			土師質	皿		F9	SD6279	9.7	1.9	-	①	良	黄橙	橙	D類	灯明痕あり
132			土師質	皿		F9	SD6279	9.8	2.1	-	①	良	黄橙	黄橙	D類	
133			土師質	皿		F9	SD6279	9.8	2.1	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	D類	灯明痕あり
134			土師質	皿		K8	SD6279	9.8	2.1	-	①	良	浅黄	浅黄	D類	灯明痕あり
135			土師質	皿		F9	SD6279	9.8	2.3	-	①	良	黄橙	黄橙	D類	灯明痕あり
136			土師質	皿		F9	SD6279	9.8	2.2	-	①	良	黄橙	黄橙	D類	灯明痕あり
137			土師質	皿		F9	SD6279	9.9	2.1	-	①	良	灰白	灰白	D類	灯明痕あり
138			土師質	皿		K8	SD6279	9.9	1.9	-	①	良	淡黄	灰白	D類	灯明痕あり
139			土師質	皿		F9	SD6279	9.9	2.0	-	①	良	黄橙	黄橙	D類	灯明痕あり
140			土師質	皿		F9	SD6279	9.9	2.0	-	①	良	黄橙	黄橙	D類	灯明痕あり
141			土師質	皿		F9	SD6279	9.9	2.1	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	D類	灯明痕あり
142			土師質	皿		E14	SD6279	9.9	2.2	-	①	良	黄橙	黄橙	D類	灯明痕あり
143			土師質	皿		K8	SD6279	10.0	2.1	-	①	良	黄橙	黄橙	D類	灯明痕あり
144			土師質	皿		F8	SD6279	10.0	2.2	-	①	良	黄橙	黄橙	D類	灯明痕あり
145			土師質	皿		F9	SD6279	10.0	2.3	-	①	良	灰白	灰白	D類	灯明痕あり
146			土師質	皿		F9	SD6279	10.0	2.0	-	①	良	灰白	灰白	D類	灯明痕あり
147			土師質	皿		F9	SD6279	10.1	2.1	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	D類	灯明痕あり
148			土師質	皿		E2	SD6279	10.2	2.0	-	①	良	浅黄橙	灰白	D類	灯明痕あり
149			土師質	皿		D18	SD6279	10.6	2.1	-	①	良	黄橙	黄橙	D類	灯明痕あり
150			土師質	皿		F9	SD6279	11.0	2.4	-	①	良	黄橙	黄橙	D類	灯明痕あり
151			土師質	皿		F8	SD6279	11.3	2.3	-	①	良	浅黄	浅黄橙	D類	灯明痕あり
152			土師質	皿		F9	SD6279	11.3	2.6	-	①	良	淡黄	灰白	D類	灯明痕あり
153			土師質	皿		F9	SD6279	11.4	2.5	-	①	良	灰白	灰白	D類	灯明痕あり
154			土師質	皿		F8	SD6279	11.5	2.3	-	①	良	灰白	灰白	D類	灯明痕あり
155			土師質	皿		F9	SD6279	11.6	2.0	-	①	良	黄橙	黄橙	D類	灯明痕あり
156			土師質	皿		F9	SD6279	11.7	2.4	-	①	良	灰白	灰白	D類	灯明痕あり
157			土師質	皿		F9	SD6279	11.8	2.5	-	①	良	灰白	灰白	D類	灯明痕あり
158			土師質	皿		K8	SD6279	11.9	2.4	-	①	良	灰白	灰白	D類	
159			土師質	皿		F8	SD6279	11.9	2.1	-	①	良	黄橙	黄橙	D類	灯明痕あり
160			土師質	皿		F9	SD6279	11.9	2.1	-	①	良	灰黄	灰黄	D類	
161			土師質	皿		F8	SD6279	11.9	2.5	-	①	良	淡黄	淡黄	D類	灯明痕あり
162			土師質	皿		F9	SD6279	11.9	2.4	-	①	良	黄橙	黄橙	D類	灯明痕あり
163			土師質	皿		F9	SD6279	12.1	2.4	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	D類	灯明痕あり
164			土師質	皿		F9	SD6279	12.2	2.3	-	①	良	灰白	灰白	D類	灯明痕あり
165			土師質	皿		F8	SD6279	12.3	2.3	-	①	良	黄橙	黄橙	D類	灯明痕あり
166			土師質	皿		F8	SD6279	12.3	1.9	-	①	良	明黄褐	明黄褐	D類	
167			土師質	皿		F9	SD6279	12.6	2.3	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	D類	灯明痕あり
168			土師質	皿		F9	SD6279	19.8	3.0	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	D類	
169			土師質	皿		F8	SD6279	7.8	2.0	-	①	良	黄橙	黄橙	G類	灯明痕あり
170			土師質	土釜		E6・F8	SD6279	8.8	7.2	-	①	良	黄橙	黄橙		
171			鉄軸	碗		D19	SD6279	11.6	6.9	4.1	①	良	黒褐	黒褐	大窯1段階	
172			鉄軸	碗		C21	SD6279	12.8	-	-	①	良	黒褐	黒褐	大窯1段階	
173			青磁	碗		F8・9	SD6279	13.0	-	-	①	良	淡緑	淡黄		
174			青磁	碗		F7	SD6279	13.8	-	-	①	良	濃緑	濃緑	B類	
175			青磁	碗		D18	SD6279	-	-	4.6	①	良	濃緑	濃緑	E類	
176			青磁	盤		E16他	SD6279	33.0	6.4	15.2	①	良	濃緑	濃緑		
177			染付	合子蓋		B7・D8	SD6279	13.6	-	-	①	良	明緑灰	明緑灰		
177			染付	合子身		C16・B1・E7・F8・9	SD6279	14.0	-	-	①	良	明緑灰	明緑灰		
196	32	24	土師質	皿	A1	E26	SF6703	8.6	1.8	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	C類	灯明痕あり
197			土師質	皿		E26	SF6703	9.0	1.9	-	①	良	黄橙	黄橙	C類	
198			土師質	皿		E26	SF6703	9.4	2.2	-	①	良	浅黄	浅黄	C類	灯明痕あり
199			土師質	皿		E26	SF6703	10.2	2.1	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	D類	灯明痕あり
200			土師質	皿		E26	SF6703	11.6	2.2	-	①	良	淡黄	淡黄	D類	
201			土師質	皿		E26	SF6703	12.0	2.3	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	D類	灯明痕あり
204			越前	壺		D23他	包含層	14.0	-	-	①②	良	黄灰	灰褐		
205			土師質	皿		C24	包含層	8.4	2.2	-	①	良	黄橙	黄橙	C類	灯明痕あり
206			土師質	皿		E26	包含層	9.1	1.6	-	①	良	黄橙	橙	C類	灯明痕あり
207			灰軸	御皿		S15	包含層	14.8	-	-	①	良	灰白	灰白		二次被熱
208			鉄軸	碗		B25他	包含層	11.4	-	-	①	良	黒褐	黒褐	大窯2段階	
209			鉄軸	碗		-	包含層	9.0	-	-	①	良	黄褐	黄褐	大窯2段階	
210			青磁	碗		B9・L7	包含層	11.0	7.5	4.8	①	良	灰白	灰白	B類	二次被熱
211			青磁	皿		E7	包含層	8.4	-	-	①	良	淡緑	淡緑		

番号	図版	PL	種類		区画	地区	層/遺構	法量(cm)			胎土	焼成	色調外	色調内	備考										
			大別	器種				口径	器高	底径					分類	その他									
309	34	26	土師質	皿	B3	Y13	SF6352Ⅱ層	8.5	1.7	-	①	良	灰白	浅黄橙	C類										
310								Y13	SF6352Ⅱ層	8.7	2.0	-	①	良	灰白	灰白	C類	灯明痕あり							
311								Y13	SF6352Ⅱ層	8.8	2.1	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	C類	灯明痕あり							
312								Y13	SF6352Ⅱ層	8.8	1.8	-	①	良	黄橙	黄橙	C類	灯明痕あり							
313								Y13	SF6352Ⅱ層	9.4	2.3	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	C類								
314								Y13	SF6352Ⅱ層	9.4	2.3	-	①	良	灰白	灰白	D類	灯明痕あり							
315								Y13	SF6352Ⅱ層	9.7	2.2	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	D類	灯明痕あり							
316								Y12	SF6352Ⅱ層	9.9	2.1	-	①	良	黄橙	黄橙	D類	灯明痕あり							
317								Y13	SF6352Ⅱ層	10.5	2.1	-	①	良	黄橙	黄橙	D類	灯明痕あり							
318								X13	SF6352Ⅱ層	11.6	2.2	-	①	良	黄橙	黄橙	D類	灯明痕あり							
319								Y13	SF6352Ⅱ層	11.6	2.5	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	D類	灯明痕あり							
320								Y13	SF6352Ⅱ層	11.8	2.3	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	D類	灯明痕あり							
321								X13	SF6352Ⅱ層	12.1	2.2	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	D類	灯明痕あり							
324								35	27	土師質	土鉢		Y12	SF6352Ⅲ層	35.0	11.4	15.2	②③	不良	橙	橙	Ⅳ群	掃目11条		
325															Y12	SF6352Ⅲ層	-	-	-	①	良	浅黄橙	明黄褐		
326															Y12	SF6352Ⅲ層	-	-	-	①	良	灰白	灰白		
327															Y13	SF6352Ⅲ層	5.8	1.3	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	C類	
328															Y12	SF6352Ⅲ層	8.3	1.8	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	C類	
329	Y12	SF6352Ⅲ層	8.3	1.8	-	①	良								灰白	灰白	C類	灯明痕あり							
330	X13	SF6352Ⅲ層	8.4	2.0	-	①	良								灰白	灰白	C類	灯明痕あり							
331	Y12	SF6352Ⅲ層	9.4	2.0	-	①	良								灰白	橙	C類	灯明痕あり							
332	X・Y12	SF6352Ⅲ層	9.5	2.0	-	①	良								黄橙	浅黄	D類	灯明痕あり							
333	X13	SF6352Ⅲ層	9.9	2.2	-	①	良								黄橙	黄橙	D類	灯明痕あり							
334	Y12	SF6352Ⅲ層	12.1	2.3	-	①	良								橙	橙	D類	灯明痕あり							
335	X・Y12	SF6352Ⅲ層	12.5	2.4	-	①	良								橙	橙	D類	灯明痕あり							
336	X13	SF6352Ⅲ層	12.5	2.6	-	①	良								浅黄橙	浅黄橙	D類								
337	Y12	SF6352Ⅲ層	15.3	2.7	-	①	良								浅黄橙	浅黄橙	D類								
339	越前	掃鉢	W11・X・Y12・Y13	SF6352Ⅳ層	40.0	12.2	16.2								②④	不良	淡黄	淡黄	Ⅳ群	掃目7条					
340	越前	桶	Y12	SF6352Ⅳ層	23.8	20.6	15.2								②③	良	橙	灰褐							
341	土師質	皿	Y13	SF6352Ⅳ層	8.0	2.2	-								①	良	浅黄橙	浅黄橙	C類						
342	土師質	皿	Y13	SF6352Ⅳ層	8.1	1.8	-								①	良	浅黄橙	浅黄橙	C類						
343	土師質	皿	Y13	SF6352Ⅳ層	8.2	2.0	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	C類	灯明痕あり												
344	土師質	皿	Y13	SF6352Ⅳ層	8.3	2.0	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	C類													
345	土師質	皿	Y13	SF6352Ⅳ層	8.9	2.2	-	①	良	浅黄	浅黄橙	C類													
346	土師質	皿	Y12	SF6352Ⅳ層	9.8	2.2	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	D類													
347	土師質	皿	Y12	SF6352Ⅳ層	10.4	2.2	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	D類													
348	土師質	皿	X・Y13	SF6352Ⅳ層	10.5	2.3	-	①	良	灰白	灰白	D類													
349	土師質	皿	Y13	SF6352Ⅳ層	10.9	2.3	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	D類	灯明痕あり												
350	土師質	皿	Y13	SF6352Ⅳ層	11.0	2.4	-	①	良	浅黄橙	黄橙	D類	灯明痕あり												
351	土師質	皿	Y12・13	SF6352Ⅳ層	11.4	2.3	-	①	良	浅黄	黄橙	D類	灯明痕あり												
352	土師質	皿	Y12	SF6352Ⅳ層	11.4	2.4	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	D類	灯明痕あり												
353	土師質	皿	Y13	SF6352Ⅳ層	11.6	2.2	-	①	良	灰白	灰白	D類	灯明痕あり												
354	土師質	皿	X13・Y12	SF6352Ⅳ層	11.7	2.2	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	D類	灯明痕あり												
355	土師質	皿	Y12	SF6352Ⅳ層	11.7	2.4	-	①	良	黄橙	黄橙	D類	灯明痕あり												
356	土師質	皿	Y13	SF6352Ⅳ層	11.8	2.4	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	D類	灯明痕あり												
357	土師質	皿	Y13	SF6352Ⅳ層	11.8	2.2	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	D類	灯明痕あり												
358	土師質	皿	Y13	SF6352Ⅳ層	12.1	2.2	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	D類	灯明痕あり												
359	土師質	皿	Y12	SF6352Ⅳ層	12.4	2.6	-	①	良	黄橙	黄橙	D類	灯明痕あり												
360	36	28	土師質	皿		Y13	SF6352Ⅳ層	11.9	2.4	-	①	良	浅黄橙	黄橙	D類	灯明痕あり									
361								Y13	SF6352Ⅳ層	11.9	2.4	-	①	良	黄橙	黄橙	D類	灯明痕あり							
362								Y13	SF6352Ⅳ層	12.1	2.2	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	D類								
363								Y13	SF6352Ⅳ層	12.1	2.4	-	①	良	黄橙	黄橙	D類	灯明痕あり							
364								Y12	SF6352Ⅳ層	12.1	2.3	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	D類								
365								Y12	SF6352Ⅳ層	12.1	2.2	-	①	良	黄橙	黄橙	D類	灯明痕あり							
366								Y13	SF6352Ⅳ層	12.2	2.3	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	D類								
367								Y13	SF6352Ⅳ層	12.3	2.2	-	①	良	淡黄	黄橙	D類	灯明痕あり							
368								Y13	SF6352Ⅳ層	12.4	2.5	-	①	良	黄橙	黄橙	D類	灯明痕あり							
369								Y12	SF6352Ⅳ層	12.4	2.4	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	D類	灯明痕あり							
370								Y13	SF6352Ⅳ層	12.4	2.2	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	D類	灯明痕あり							
371								Y13	SF6352Ⅳ層	12.5	2.4	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	D類	灯明痕あり							
372								Y12	SF6352Ⅳ層	12.5	2.3	-	①	良	黄橙	黄橙	D類	灯明痕あり							
373								Y13	SF6352Ⅳ層	12.5	2.1	-	①	良	灰黄	灰黄	D類	灯明痕あり							
374								Y13	SF6352Ⅳ層	12.5	2.5	-	①	良	黄橙	黄橙	D類	灯明痕あり							
375								Y12	SF6352Ⅳ層	12.5	2.5	-	①	良	浅黄橙	黄橙	D類	灯明痕あり							
376								Y12・13	SF6352Ⅳ層	12.5	2.2	-	①	良	黄橙	黄橙	D類	灯明痕あり							
377								Y13	SF6352Ⅳ層	12.6	2.2	-	①	良	浅黄橙	黄橙	D類	灯明痕あり							
378	Y13	SF6352Ⅳ層	12.6	2.3	-	①	良	浅黄橙	黄橙	D類	灯明痕あり														
379	Y13	SF6352Ⅳ層	12.6	2.4	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	D類	灯明痕あり														
380	Y13	SF6352Ⅳ層	12.7	2.4	-	①	良	灰白	黄橙	D類	灯明痕あり														
381	Y13	SF6352Ⅳ層	12.7	2.2	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	D類	灯明痕あり														
382	Y12	SF6352Ⅳ層	12.8	2.2	-	①	良	黄橙	浅黄	D類	灯明痕あり														
383	Y13	SF6352Ⅳ層	12.8	2.3	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	D類															
384	Y12	SF6352Ⅳ層	14.0	2.7	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	D類	灯明痕あり														
385	Y12	SF6352Ⅳ層	14.0	2.4	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	D類															
386	Y13	SF6352Ⅳ層	14.5	2.5	-	①	良	浅黄	浅黄橙	D類															
387	Y12・13	SF6352Ⅳ層	17.8	2.4	-	①	良	黄橙	黄橙	D類															
388	Y12	SF6352Ⅳ層	22.6	3.6	-	①	良	浅黄橙	淡黄	D類															
389	土師質	小壺	Y13	SF6352Ⅳ層	2.4	-	-	①	良	浅黄橙	灰白														
390	白磁	小鉢	X・Y13	SF6352Ⅳ層	3.8	-	-	①	良	明緑灰	明緑灰														
396	37	29	土師質	皿		X・Y13	SF6353	6.0	1.7	-	①	良	黄橙	黄灰	B類										
397								X・Y13	SF6353	6.8	1.6	-	①	良	黄橙	黄橙	C類								
398								X・Y13	SF6353	9.0	1.9	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	C類								
399								X・Y13	SF6353	9.0	1.9	-	①	良	黄橙	黄橙	C類								
400								X・Y13	SF6353	9.1	1.6	-	①	良	黄橙	黄橙	C類	灯明痕あり							

番号	図版	PL	種類		区画	地区	層/遺構	法量(cm)			胎土	焼成	色調外	色調内	備考	
			大別	器種				口径	器高	底径					分類	その他
401	37	29	土師質	皿	B3	X12・13	SF6353	9.4	1.9	-	①	良	黄橙	黄橙	C類	灯明痕あり
402			土師質	皿		X・Y13	SF6353	11.7	2.2	-	①	良	黄橙	黄橙	D類	灯明痕あり
403			土師質	皿		X12・13	SF6353	11.9	2.1	-	①	良	黄橙	黄橙	D類	灯明痕あり
404			青磁	碗		X12・13	SF6353	-	-	6.0	①	良	淡緑	淡緑	E類	二次被熱
406			越前	壺		T9他	遺構面・黒色炭混土	12.2	19.1	13.6	①③	良	褐灰	褐灰		
407			越前	桶		S11	遺構面	16.8	19.3	14.8	②③	良	灰黄	灰黄		
408			越前	花生		O10	遺構面	-	-	5.0	①②	良	灰黄	灰黄		
409			土師質	皿		T12	遺構面	5.5	1.4	-	①	良	黄橙	黄橙	C類	
410			土師質	皿		V10	遺構面	6.3	1.3	-	①	良	灰白	灰白	C類	
411			土師質	皿		S11	遺構面	6.4	1.3	-	①	良	灰白	灰白	C類	
412			土師質	皿		R9	遺構面	6.4	1.4	-	①	良	灰白	灰白	C類	
413			土師質	皿		S11	遺構面	6.4	1.3	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	C類	
414			土師質	皿		T12	遺構面	8.2	2.0	-	①	良	灰白	灰白	C類	
415			土師質	皿		T12	遺構面	8.2	2.1	-	①	良	黄橙	灰白	C類	
416			土師質	皿		T12	遺構面	8.3	2.0	-	①	良	灰白	灰白	C類	
417			土師質	皿		W13	遺構面	8.4	1.8	-	①	良	黄橙	黄橙	C類	灯明痕あり
418			土師質	皿		Y14	遺構面	8.7	1.7	-	①	良	灰白	灰白	C類	
419			土師質	皿		V10	遺構面	8.8	1.7	-	①	良	灰黄	灰白	C類	灯明痕あり
420			土師質	皿		R11	遺構面	10.4	2.2	-	①	良	黄橙	黄橙	D類	
421			土師質	皿		T12	遺構面	10.8	2.2	-	①	良	浅黄	浅黄	D類	
422			鉄釉	碗		R9	遺構面	11.8	-	-	①	良	黒	黒	大窯2段階	
423			鉄釉	碗		N8他	遺構面	-	-	-	①	良	黄褐	黄褐	大窯2段階	
424			白磁	皿		Y14	遺構面	15.2	3.9	7.4	①	良	灰白	灰白	E群	
425			白磁	皿		Y14	遺構面	17.2	3.4	9.9	①	良	灰白	灰白	E群	
426			白磁	皿		Y14	遺構面	18.0	3.5	9.8	①	良	灰白	灰白	E群	
427			白磁	皿		U11	遺構面	11.5	2.8	6.5	①	良	灰白	灰白	E群	
428			染付	瓶		O9	遺構面	3.8	-	-	①	良	明緑灰	明緑灰		
429			染付	坏		Y13他	遺構面	6.7	-	-	①	良	明緑灰	明緑灰		
430			五彩	合子		X13、Y14他	遺構面	8.4	-	-	①	良	灰白	灰白		
435	38	30	土師質	皿		U9	黒色炭混土	6.6	1.3	-	①	良	黄橙	黄橙	C類	
436			土師質	皿		U9	黒色炭混土	8.3	1.9	-	①	良	浅黄	浅黄	C類	
437			土師質	皿		U9	黒色炭混土	8.4	1.5	-	①	良	灰白	灰白	C類	
438			土師質	皿		U11	黒色炭混土	8.5	2.3	-	①	良	黄橙	黄橙	C類	
439			土師質	皿		P9	黒色炭混土	8.7	1.9	-	①	良	灰白	灰白	C類	
440			土師質	皿		T9	黒色炭混土	10.8	2.1	-	①	良	灰黄	灰白	D類	
441			土師質	皿		V9	黒色炭混土	11.1	2.2	-	①	良	黄褐	黄褐	D類	灯明痕あり
442			土師質	皿		T9	黒色炭混土	11.2	2.4	-	①	良	黄橙	黄褐	D類	灯明痕あり
443			土師質	皿		T9	黒色炭混土	13.8	2.5	-	①	良	黄橙	黄橙	D類	
444			土師質	皿		I10	黒色炭混土	4.4	1.1	-	①	良	灰白	灰白	G類	
445			灰釉	皿		V9	黒色炭混土	11.0	2.4	6.0	①	良	浅黄	浅黄	大窯期	土鎮痕あり
446			白磁	皿		T9	黒色炭混土	12.0	3.0	6.6	①	良	灰白	灰白	E群	
447			土師質	皿		I10	I遺構埋土	11.1	2.0	-	①	良	灰白	灰白	D類	灯明痕あり
448			土師質	皿		I9	I遺構埋土	12.1	2.3	-	①	良	黄橙	黄橙	D類	灯明痕あり
449			土師質	皿		I10	I遺構埋土	12.2	2.3	-	①	良	淡黄	淡黄	D類	
450			土師質	皿		I9	I遺構埋土	12.6	2.2	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	D類	灯明痕あり
451			土師質	皿		I11	I遺構埋土	12.8	2.1	-	①	良	灰白	灰白	D類	
452			土師質	皿		I11	I遺構埋土	12.8	2.0	-	①	良	灰白	灰白	D類	
453			土師質	皿		I11	I遺構埋土	12.8	2.3	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	D類	灯明痕あり
454			土師質	皿		I9	I遺構埋土	12.9	2.2	-	①	良	灰白	灰白	D類	灯明痕あり
455			土師質	皿		I10	I遺構埋土	14.0	2.5	-	①	良	灰白	灰白	D類	
456			土師質	皿		I10	I遺構埋土	14.1	2.7	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	D類	
457			土師質	皿		I10	I遺構埋土	14.7	2.4	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	D類	
458			土師質	皿		I11	I遺構埋土	15.1	2.3	-	①	良	灰白	灰白	D類	
459			土師質	皿		I11	I遺構埋土	15.7	2.3	-	①	良	淡黄	灰白	D類	
460			土師質	皿		I10	I遺構埋土	17.6	2.6	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	D類	
461			土師質	皿		I10	I遺構埋土	17.6	2.5	-	①	良	灰白	灰白	D類	
462			土師質	皿		I9	I遺構埋土	19.4	2.5	-	①	良	浅黄橙	灰白	D類	
463			青磁	碗		I3、J7	I遺構埋土	13.7	-	-	①	良	濃緑	濃緑	B類	
464			鉄釉	鉢		I9、T10他	I遺構埋土	24.0	-	9.6	①②	良	灰褐	灰褐		
465			白磁	碗		M・N7	I遺構埋土	17.4	10.5	7.0	①	良	灰白	灰白		
466			白磁	皿		F8他	I遺構埋土	21.0	4.2	13.4	①	良	灰白	灰白	E群	
471	39	31	鉄釉	碗	B4	K1他	SD6272他	11.9	6.2	4.0	①	良	黒	黒	大窯2段階	
473			越前	鉢		L2他	SK6263他	25.8	10.4	13.0	②③	良	灰黄	褐		
474			越前	鉢		J・K・L1・2	SK6265・SK6267他	88.2	-	-	②③	良	暗褐	灰褐	IV群	押印あり
475			越前	鉢		K2、L2、N1	SK6263・SK6264・SK6265他	92.0	-	-	②③	良	黒褐	暗赤褐	IV群	押印あり
476			越前	鉢		J1、K・L1・2	SK6265・SK6266・SK6267他	77.2	-	-	②③	良	灰褐	灰褐	IV群	押印あり
477			越前	鉢		I1、J2・3、K1・2	SK6265・SK6271・SK6279他	82.0	-	-	②③	良	赤褐	灰褐	IV群	押印あり
478			越前	鉢		K1・2、J3、F9	SK6264・SD6279他	67.4	-	-	②③④	良	褐灰	褐灰	III群	押印あり
479			越前	鉢		K2、N1	SK6263・SK6265・SK6266他	82.8	-	-	②③④	良	灰褐	灰褐	IV群	押印あり
480			越前	鉢		K2、N1	SK6265・SK6266他	-	-	23.4	②④	良	灰褐	灰褐		
481	40	32	越前	鉢		J2、K2	SK6260・SD6273他	45.4	70.0	21.8	②③④	良	黒	黒		
482			越前	鉢		K0・1・2、J1・2・3、L1・3・M2・N1	SK6268・SD6272他	46.0	65.0	23.4	②③	良	黒褐	灰褐		
483			越前	鉢		K1・2、J2・3、L2・3	SK6265・SK6266他	38.4	-	-	②③	良	赤褐	赤褐		
505	41	33	越前	鉢		K2他	I遺構確認面他	27.2	9.0	12.8	②	良	灰	灰		
506			越前	鉢		L0他	I遺構確認面他	51.4	-	-	②③	良	灰褐	褐灰		
507			土師質	土釜		L0	I遺構確認面	9.6	9.8	-	①	良	黄橙	黄橙		
508			鉄釉	碗		L1他	I遺構確認面他	12.0	-	-	①	良	黒	黒	大窯2段階	
509			鉄釉	碗		L0	I遺構確認面	11.8	-	-	①	良	黒褐	黒褐	大窯2段階	
520			越前	壺		N1他	II遺構確認面他	11.6	-	-	②③	良	灰褐	灰褐		

番号	図版	PL	種類		区画	地区	層/遺構	法量(cm)			胎土	焼成	色調外	色調内	備考	
			大別	器種				口径	器高	底径					分類	その他
521	41	33	青磁	皿	B4	N1	II遺構確認面	5.4	-	-	①	良	淡緑	淡緑		
522			白磁	皿		N1他	II遺構確認面他	16.8	3.6	9.8	①	良	灰白	灰白	E群	
523			白磁	皿		N1他	II遺構確認面他	18.8	4.0	12.0	①	良	灰白	灰白	E群	
524			白磁	皿		N1他	II遺構確認面他	19.2	3.4	10.6	①	良	灰白	灰白	E群	
525			白磁	皿		N1他	II遺構確認面他	19.6	3.8	10.8	①	良	灰白	灰白	E群	
528	42	34	越前	鉢		J1	I遺構埋土	25.0	9.6	11.6	②③	良	褐灰	黄灰		刻文あり
529			鉄軸	碗		J1	I遺構埋土	12.0	-	-	①	良	黒	黒	大窯2段階	
530			鉄軸	碗		K2	I遺構埋土	11.0	-	-	①	良	黒	黒	大窯2段階	
531			染付	碗		K1、L2	I遺構埋土	13.1	-	-	①	良	明緑灰	明緑灰	C類	
532			染付	碗		J1	I遺構埋土	13.8	-	-	①	良	明緑灰	明緑灰	B類	
537			越前	壺	B5	AF11他	SD6368他	43.6	-	-	②	良	灰黄	灰褐		
538			越前	壺		AF10・11他	SD6368他	18.6	-	-	①③	良	灰白	黒褐		
539			越前	播鉢		AE13他	SD6368他	32.6	10.6	15.0	②③	良	灰褐	褐灰	IV群	播目10条
540			土師質	皿		AE13	SD6368	6.0	1.5	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	C類	
541			土師質	皿		AE13	SD6368	6.1	1.4	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	C類	
542			土師質	皿		AE13	SD6368	7.0	1.6	-	①	良	灰白	灰白	C類	
543			鉄軸	碗		AF10・11他	SD6368他	12.0	6.4	4.6	①	良	黄灰	黄灰	大窯2段階	
544			青磁	盤		AF10・11他	SD6368他	-	-	11.6	①	良	淡緑	淡緑		
545			白磁	皿		AF10他	SD6368他	11.1	3.1	5.8	①	良	灰白	灰白	E群	
546			白磁	皿		AE12・13他	SD6368他	11.2	2.8	5.3	①	良	灰白	灰白	E群	
547			染付	皿		AF12	SD6368	6.0	-	-	①	良	明緑灰	明緑灰		
553	43	35	越前	播鉢		AC8・9他	SD6373他	43.6	14.2	17.0	②③	良	赤褐	赤褐	IV群	播目9条
554			越前	鉢		AC8・9、AD9	SD6373・SK6383他	15.2	-	-	②	良	橙	橙		
555			越前	鉢		AC9他	SD6373他	35.8	8.6	16.4	②③	良	褐灰	黄灰		
556			越前	桶		AC9、AD10他	SD6373・SK6383他	21.0	-	-	②④	良	褐灰	褐灰		刻文あり
557			鉄軸	瓶		AB11他	SD6373他	-	-	6.6	①	良	黄褐	黄灰	大窯期	
558			白磁	碗		AC9	SD6373	16.8	-	-	①	良	灰白	灰白		
559			青磁	皿		AC9、AA17他	SD6373・SD6361	26.2	4.4	10.8	①	良	濃緑	濃緑		
560			青磁	壺		AC10、AD9他	SD6373・SK6383他	16.4	15.3	12.4	①	良	淡緑	淡緑		
561			染付	皿		AB10、AC9・10他	SD6373・SK6383他	44.2	7.0	26.6	①	良	明緑灰	明緑灰		
562			染付	皿		AC10他	SD6373他	-	-	26.4	①	良	明緑灰	明緑灰		
567			越前	壺		Z7他	SD6388他	60.2	-	-	②③	良	暗褐	暗褐	IV群	押印あり
568			土師質	皿		Z7	SD6388	6.2	1.7	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	C類	
569			土師質	皿		Z7	SD6388	6.2	1.4	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	C類	
570			土師質	皿		Z7	SD6388	6.5	1.6	-	①	良	灰白	灰白	C類	
574			土師質	皿		AA7	SK6386	7.3	1.8	-	①	良	黄橙	黄橙	C類	灯明痕あり
575			土師質	皿		AA7	SK6386	7.3	2.0	-	①	良	黄橙	黄橙	C類	
576			土師質	皿		AA7	SK6386	8.3	2.2	-	①	良	黄橙	黄橙	C類	
577			土師質	皿		AA7	SK6386	9.4	2.2	-	①	良	灰黄	灰黄	C類	
578			土師質	皿		AA7	SK6386	11.4	2.0	-	①	良	黄橙	黄橙	D類	
579			土師質	皿		AA7	SK6386	13.3	2.1	-	①	良	黄橙	黄橙	D類	穿孔あり
580			土師質	皿		AD11	SK6383	6.6	1.6	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	C類	
581			土師質	皿		AD9	SK6383	8.4	2.1	-	①	良	黄橙	黄橙	C類	灯明痕あり
582	44	36	越前	壺		AD9、AC9・10他	SK6383・SD6373他	88.2	-	-	②③	良	灰褐	褐灰	IV群	押印あり
583			越前	壺		AD9、AC9他	SK6383・SD6373他	46.8	64.0	22.5	②③④	良	黒	黒		
584			越前	壺		AD7・8・9	SK6383・SK6384他	33.8	-	-	②③④	良	黒褐	灰黄褐		
585			越前	壺		AD9、AC9他	SK6383・SD6373他	34.0	-	-	②③	良	灰褐	灰褐		
586			越前	壺		AD9、AC8他	SK6383・SD6373他	22.6	-	-	①③	良	黄橙	橙		
587			越前	播鉢		AD9、AC10	SK6383・SD6373	33.6	11.0	14.4	②④	良	黄橙	黄橙	IV群	播目10条
588			鉄軸	壺		AD9他	SK6383他	9.8	-	-	①	良	暗黄灰	暗黄灰	大窯期	二次被熱
589			白磁	皿		AD9	SK6383	12.0	3.0	6.4	①	良	灰白	灰白	E群	
592			越前	壺		AD7	SK6384	-	-	20.2	②③	良	灰褐	灰褐		
593	45	37	越前	播鉢		AA9	SX6385	32.5	12.1	14.6	②④	良	黄橙	黄橙	IV群	播目7条
594			越前	播鉢		AD11・12、AE12	遺構面	34.4	11.9	14.3	②③	良	灰褐	灰褐	II群	播目9条
595			土師質	皿		AA9	遺構面	6.6	1.3	-	①	良	黄橙	黄橙	C類	
596			土師質	皿		AA9	遺構面	8.6	1.6	-	①	良	灰白	灰白	C類	灯明痕あり
597			土師質	皿		AB8	遺構面	10.7	2.0	-	①	良	黄橙	黄橙	D類	灯明痕あり
598			土師質	皿		AB8	遺構面	15.3	1.4	-	①	良	浅黄	浅黄	D類	
599			土師質	皿		AB8、AA9	遺構面	17.4	3.0	-	①	良	黄橙	黄橙	D類	
600			灰軸	燭台		AA9	遺構面	-	-	5.1	①	良	灰白	灰白		
601			白磁	坏		AA8	遺構面	7.2	3.3	2.9	①	良	灰白	灰白		
606			土師質	皿	B6	AA15	SD6362	8.2	1.9	-	①	良	灰白	灰白	C類	
607			土師質	皿		AA14	SD6362	11.1	2.3	-	①	良	黄橙	黄橙	D類	
608			土師質	皿		AA16	SD6362	14.2	2.2	-	①	良	浅黄橙	灰白	D類	
610			土師質	皿		AA15	SD6361	6.1	1.5	-	①	良	灰白	灰白	C類	
611			土師質	皿		AA16	SD6361	6.1	1.4	-	①	良	灰白	灰白	C類	
612			土師質	皿		AA16	SD6361	6.7	1.5	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	C類	
613			土師質	皿		AC18	SD6364	8.5	1.7	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	C類	灯明痕あり
614			土師質	皿		AE17	SD6364	8.9	1.9	-	①	良	灰白	灰白	C類	
615			土師質	皿		AC・AD17	SD6364	10.6	2.1	-	①	良	灰白	灰黄	D類	灯明痕あり
616			土師質	皿		AC・AD17	SD6364	16.0	2.3	-	①	良	灰白	灰白	D類	
617			鉄軸	皿		AE17	SD6364	6.6	-	-	①	良	褐	褐	大窯期	
618			灰軸	鉢		AC17	SF6363	-	-	13.0	①	良	灰白	灰白	古瀬戸	墨書あり
619			土師質	皿		AA15	遺構面	5.9	1.4	-	①	良	黄橙	黄橙	C類	
620			土師質	皿		AA15	遺構面	6.1	1.3	-	①	良	黄橙	黄橙	C類	
621			土師質	皿		AA15	遺構面	8.7	2.1	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	C類	
622			土師質	皿		AA15	遺構面	8.6	2.1	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	C類	
623			土師質	皿		AA15	遺構面	10.4	2.1	-	①	良	浅黄橙	浅黄橙	D類	
624			土師質	皿		AA15	遺構面	12.7	2.1	-	①	良	灰黄橙	灰黄橙	D類	
625			鉄軸	碗		AD17	遺構面	11.4	-	-	①	良	黒褐	黒褐	大窯2段階	

表10 金属製品観察表 法量は器類については器長が口径、器幅が底径、器厚が器高を示す

番号	図版	PL	種類		区画	地区	層/遺構	法量(cm)			備考
			属性	種類				器長	器幅	器厚	
67	28	20	鉄製品	鏃	B	AA8	表土	4.35	1.3	1.3	残存長値
71			鉄製品	釘		Y10	表土	19.1	2.3	0.75	計測箇所値(器厚)
490	40	32	鉄製品	釘	B4	K2	SK6260	13.5	1.0	0.55	計測箇所値(器厚)
491			鉄製品	釘		K2	SK6260	7.0	0.75	0.3	計測箇所値(器厚)
492			鉄製品	釘		K1	SK6264	5.5	1.0	0.25	計測箇所値(器厚)
493			鉄製品	釘		L2	SK6264	4.95	0.9	0.3	計測箇所値(器厚)
494			鉄製品	釘		L2	SK6264	4.5	1.0	0.3	計測箇所値(器厚)
495			鉄製品	釘		K1	SK6264	3.9	0.8	0.3	計測箇所値(器厚)
496			鉄製品	釘		K1	SK6269	7.5	0.65	0.35	計測箇所値(器厚)
497			鉄製品	釘		K1	SK6269	6.9	0.8	0.35	計測箇所値(器厚)
498			鉄製品	釘		K1	SK6269	6.4	1.1	0.4	計測箇所値(器厚)
500			鉄製品	釘		K1	SK6267	10.7	1.2	0.4	計測箇所値(器厚)
501			鉄製品	釘		J1	SK6267	8.65	1.0	0.4	計測箇所値(器厚)
502			鉄製品	釘		K1	SK6267	5.2	1.1	0.4	計測箇所値(器厚)
503			鉄製品	釘		J1	SK6267	7.4	1.0	0.3	計測箇所値(器厚)
513	41	33	鉄製品	釘		K1	I 遺構確認面	12.5	1.5	0.55	計測箇所値(器厚)
514			鉄製品	釘		K2	I 遺構確認面	8.6	1.05	0.4	計測箇所値(器厚)
515			鉄製品	釘		K2	I 遺構確認面	8.8	1.25	0.45	計測箇所値(器厚)
516			鉄製品	釘		K2	I 遺構確認面	5.95	0.9	0.35	計測箇所値(器厚)
517			鉄製品	釘		K2	I 遺構確認面	5.2	1.0	0.3	計測箇所値(器厚)
526			鉄製品	肘金		M1	II 遺構確認面	13.0	2.8	0.5	残存値
534	42	34	鉄製品	鏃		M1	I 遺構埋土	6.9	2.3	0.7	
61	28	20	青銅製品	環付飾金具	B	-	表土	2.5	2.45	0.05	
62			青銅製品	環付飾金具		N7	表土	1.45	1.5	0.05	
63			青銅製品	環付飾金具		R17	表土	1.9	2.0	0.3	
64			青銅製品	鞘尻		AD10	表土	4.25	2.7	0.1	
65			青銅製品	小柄		-	表土	9.15	1.4	0.5	残存長値
66			青銅製品	筭		R9	表土	15.7	1.2	0.2	
68			青銅製品	円錐状金具		X17	表土	3.1	0.8	-	
69			青銅製品	蝶番		X17	表土	3.75	2.45	0.1	
70			青銅製品	火箸		T16	表土	10.3	0.3	0.3	
178	31	23	青銅製品	脚付飾金具		D19	SD6279	8.4	3.0	0.1	残存長値
179			青銅製品	棒状金具		D18	SD6279	50.9	1.1	1.1	
270	33	25	青銅製品	輪状金具	B3	N6	SD6253	-	-	0.8	
298	34	26	青銅製品	棒状金具		T9	SD6336	10.7	0.65	0.5	残存長値、計測箇所値(器厚)
391	36	28	青銅製品	棒状金具		Y12	SF6352IV層	12.1	-	0.3	残存長値、計測箇所値(器厚)
467	38	30	青銅製品	小柄		U9	遺構面	6.9	1.3	0.45	残存長値
499	40	32	青銅製品	環付飾金具	B4	K1	SK6268	3.05	3.0	0.05	
510	41	33	青銅製品	環付飾金具		K2	I 遺構面	3.0	3.0	0.05	
511			青銅製品	環付飾金具		K2	I 遺構面	3.0	3.0	0.05	
512			青銅製品	環状金具		K2	I 遺構面	3.6	3.7	0.05	
527			青銅製品	飾金具		M1	II 遺構面	4.4	6.6	0.15	残存値
533	42	34	青銅製品	環付飾金具		L1	I 遺構埋土	2.9	2.95	0.05	
548			青銅製品	紅皿	B5	AE12	SD6368	5.6	2.65	2.5	
549			青銅製品	環付飾金具		AF11	SD6368	3.35	3.65	-	環付値
564	43	35	青銅製品	環付飾金具		AC9	SD6373	4.0	3.7	-	
565			青銅製品	飾金具		AB11	SD6373	4.7	8.2	0.1	
566			青銅製品	飾金具		AC10	SD6373	1.0	7.0	0.1	
602	45	37	青銅製品	責鞋		AE9	遺構面	2.55	1.2	0.3	

表11 石製品観察表 法量は器類については器長が口径、器幅が底径、器厚が器高を示す

番号	図版	PL	種類		区画	地区	層/遺構	法量(cm)			備考
			石質	器種				器長	器幅	器厚	
88	28	20	笏谷石	バンドコ	B	-	表土	15.5	18.2	3.5	
89			笏谷石	盤		-	表土	32	30.0	12.6	
92	29	21	笏谷石	バンドコ		-	SA6365	17.2	23.0	15.0	
93			笏谷石	バンドコ		-	SA6365	-	-	2.5	
180	31	23	笏谷石	バンドコ		F7・8	SD6279	14.2	16.4	12.5	
181			笏谷石	バンドコ		F9	SD6279	10.2	14.3	2.3	
322	34	26	笏谷石	バンドコ	B3	Y13	SF6352 I層	-	-	13.3	
550	42	34	笏谷石	バンドコ	B5	AE13	SD6368	19.0	21.5	14.5	
551			笏谷石	鉢		AE13	SD6368	41.8	-	-	
552			凝灰岩	砥石		R・S11	SD6368	-	3.3	-	
563	43	35	頁岩	硯		AC10	SD6373	8.8	3.9	0.2	
590	44	36	笏谷石	バンドコ		AD9	SK6383	-	-	2.8	
591			笏谷石	握鉢		AD8・9	SK6383	40.6	18.0	15.8	
603	45	37	粘板岩	砥石		AD9	遺構面	7.4	3.0	6.0	
604			粘板岩	砥石		AA8	遺構面	8.1	2.5	1.2	
759		41	頁岩	砥石	B3	T10	遺構面	4.2	2.6	0.6	

表12 漆製品観察表 法量は器類については器長が口径、器幅が底径、器厚が器高を示す

番号	図版	PL	種類		区画	地区	層/遺構	法量(cm)			備考
			漆	器種				器長	器幅	器厚	
182	31	23	黒	漆皿	B3	E11	SD6279	9.8	-	-	
183			赤	箱材		F9	SD6279	12.9	3.8	0.4	
323	34	26	赤	脚材		Y12	SF6352 I層	6.9	3.2	1.0	
338	35	27	黒	漆椀		Y13	SF6352 III層	-	-	-	
392	36	28	黒	漆椀	B4	Y12	SF6352 IV層	-	-	-	
393			黒	漆椀		Y12	SF6352 IV層	14.6	-	-	
472	39	31	赤	栓か	K1	SD6272	-	6.2	-		
487	40	32	黒	輪状製品	K2	SK6265	-	-	1.1		
488			黒	輪状製品	K2	SK6265	-	-	1.1		
535	42	34	赤	脚材	K1	I遺構埋土	11.05	3.7	-		

表13 木製品観察表 法量は器類については器長が口径、器幅が底径、器厚が器高を示す

番号	図版	PL	器種	区画	地区	層/遺構	法量(cm)			備考	
							器長	器幅	器厚		
184	31	23	聞香札	B3	F8	SD6279	3.8	1.8	0.2	墨書あり	
185			聞香札		F7	SD6279	3.7	1.7	0.2	墨書あり	
186			聞香札		F8	SD6279	3.3	1.8	0.2	墨書あり	
187			折敷		F8	SD6279	10.7	6.4	0.2		
188			折敷		F8	SD6279	10.7	-	0.1		
189			折敷		F8	SD6279	-	-	0.2	転用品か	
190			曲物		F8	SD6279	10.0	9.9	0.4		
191			曲物		E14	SD6279	16.5	16.1	0.4		
192			曲物		F8	SD6279	-	-	0.5		
193			へら		F8	SD6279	18.4	2.9	0.4	持手器厚	
194			鏝		F7	SD6279	7.7	7.5	0.5		
195			下駄		F9	SD6279	15.0	6.1	1.3	中央器厚	
283	33	25	櫛		B3	W11	SD6335	4.2	8.2	1.2	残存長値
394	36	28	板			Y12・13	SF6352 IV層	22.8	2.3	0.5	
395			板			Y12・13	SF6352 IV層	22.7	2.4	0.6	
468	38	30	板	B4	N10	I遺構埋土	-	2.6	0.9	墨書あり	
469			板		P7	I遺構埋土	16.0	6.7	0.4	墨書あり	
470			へら		U9	黒色炭泥土	-	2.5	0.4		
484	40	32	曲物		K2	SK6260近辺	10.0	-	0.6		
485			曲物	K2	SK6260近辺	8.6	8.7	0.7			
486			曲物	K2	SK6260近辺	-	-	1.3			
489			折敷	K2	SK6271	-	3.4	0.5			
504			柄杓	K1	SK6268	-	-	5.2	柄長さ230		
518	41	33	曲物	B4	K2	I遺構確認面	13.3	13.3	6.0		
519			燭台		K2	I遺構確認面	22.4	-	2.4	残存厚値	
536	42	34	鏝		J3	I遺構埋土	5.1	4.9	0.6		
605	45	37	折敷	B5	AB7	遺構面	21.9	10.0	0.1		

表14 建築部材観察表

番号	図版	PL	種類		区画	地区	層/遺構	法量 (cm)			木取り等	備考				
			器種	樹種				長さ	幅	厚さ						
626	46	21	柱根	クリ	B2		SB6359	58.0	13.7	12.7	芯持					
627			柱根	コナラ				58.5	14.0	12.5	芯持					
628			柱根	クリ				34.7	11.7	8.8	芯持					
629			柱根	クリ				42.0	12.0	12.4	芯持					
630			柱根	クリ				16.0	8.4	7.0	芯持					
631			柱根	クリ				48.8	13.3	11.2	芯持					
632			柱根	クリ				75.0	13.0	11.0	芯持					
633			柱根	コウヤマキ				57.4	12.5	10.7	芯持					
634			柱根	アスナロ				62.7	14.2	13.3	芯去					
635			柱根	ヒノキ				70.4	14.5	12.5	芯去					
636			柱根	ヒノキ				68.4	15.0	15.5	芯持					
637			柱根	アスナロ				80.9	11.7	12.7	芯持					
638			柱根	アスナロ				83.3	15.35	12.7	芯去					
639			柱根	ヒノキ				76.2	14.0	10.0	芯去					
640	47	22	板材					B4		SB6258	59.8	19.9	2.0			
641			削板								SB6258(SD6272)				板目	
642			削板								SB6258(SD6272)				板目	
643			削板								SB6258(SD6272)				板目	
644			削板								SB6258(SD6272)				板目	
645			竹材	タケ	SB6258(SD6272)											
646			竹材	タケ	SB6258(SD6272)											
647			竹材	タケ	SB6258(SD6272)											
648			角材		SD6272	46.6	11.3				6.0	芯持				
649			角材		SD6272	48.5	10				6.2	芯持				
650			角材		SD6272	48.1	12				6.5	芯持				
651			角材		SD6272	48.9	10.1				6.7	芯持				
652			角材		SD6272	45.7	10.0				6.6	芯持				
653			角材		SD6272	47.9	7.4				7.4	芯持				
654			角材		SD6256	53.9	9.4				6.8	芯持				
655			角材		SD6256	61.4	8.8				6.9	芯持				
656			角材		SD6256	65.6	10.1				6.0	芯持				
657			角材		SB6258	62.2	10.15				6.6	芯持				
658			角材		I遺構確認面	8.0	12.2				9.9					
659			角材			7.2	9.2				8.1					
660			板材			28.4	5.2				1.1	板目				
661			角材			15.2	8.3	5.8								

表15 ガラス玉製作関連遺物観察表

番号	図版	PL	種類	材質	区画	地区	層／遺構	法量(mm)			孔径		重量(g)	色調	備考		
								長軸	短軸	厚さ	最大	最小					
662	48	40	ガラス玉	ガラス	B5	AC10	SD6373	2.88	2.75	2.00	1.00	0.78	0.025	水色			
663			ガラス玉	ガラス		AC9	SD6373	3.00	3.00	1.62	0.78	0.75	0.031	水色			
664			ガラス玉	ガラス		AC9	SD6373	2.75	2.75	1.25	1.03	1.00	0.020	水色			
665			ガラス玉	ガラス		AC10	SD6373	3.12	3.12	2.00	1.28	1.25	0.026	水色			
666			ガラス玉	ガラス		AC9	SD6373	2.88	2.88	1.50	1.28	1.28	0.031	水色			
667			ガラス玉	ガラス		AC9	SD6373	3.12	3.00	2.25	1.28	1.50	0.034	水色			
668			ガラス玉	ガラス		AC9	SD6373	3.00	3.00	2.38	1.00	0.78	0.031	水色			
669			ガラス玉	ガラス		AC10	SD6373	3.12	3.00	2.38	1.00	0.75	0.038	水色			
670			ガラス玉	ガラス		AC9	SD6373	3.75	3.50	2.00	1.78	1.50	0.032	水色			
671			ガラス玉	ガラス		AC9	SD6373	3.00	3.00	2.75	1.00	0.75	0.036	水色			
672			ガラス玉	ガラス		AC9	SD6373	3.12	3.12	3.00	1.78	1.50	0.041	緑色			
673			ガラス玉	ガラス		AC9	SD6373	3.62	3.62	2.88	1.78	1.75	0.044	緑色			
674			ガラス玉	ガラス		AC9	SD6373	3.54	3.52	1.75	2.00	1.78	0.051	緑色			
675			ガラス玉	ガラス		AC9	SD6373	3.95	3.88	2.50	1.00	1.00	0.050	緑色			
676			ガラス玉	ガラス		AC9	SD6373	3.95	3.90	1.95	2.00	1.50	0.064	緑色			
677			ガラス玉	ガラス		AC9	SD6373	4.12	3.88	2.25	1.75	1.75	0.053	緑色			
678			ガラス玉	ガラス		AC8	SD6373	4.38	3.88	3.00	1.75	1.52	0.078	緑色			
679			ガラス玉	ガラス		AC9	SD6373	4.75	4.38	2.38	2.00	1.78	0.074	紫色			
680			ガラス玉	ガラス		AC9	SD6373	4.50	4.25	4.50	1.28	1.28	0.146	紫色			
681			ガラス玉	ガラス		AC9	SD6373	4.30	4.05	2.25	2.00	2.00	0.065	緑色			
682			ガラス玉	ガラス		AC9	SD6373	4.88	4.88	3.00	1.78	1.50	0.082	緑色			
683			ガラス玉	ガラス		AC9	SD6373	5.00	5.00	1.50	1.78	1.75	0.103	紫色			
684			ガラス玉	ガラス		AC9	SD6373	5.25	4.75	4.00	1.52	1.50	0.102	紫色			
685			水晶玉	水晶		AE12	SD6368	4.60	4.50	4.00	1.78	1.75	0.120	透明			
686			水晶玉	水晶		AE9	SD6368	5.75	5.50	3.50	1.78	1.75	0.151	透明			
687			ガラス玉	ガラス		AD9	SK6383	2.50	2.25	1.50	1.00	0.78	0.019	水色			
688			ガラス玉	ガラス		AD9	SK6383	2.70	2.70	2.50	1.00	1.00	0.046	水色			
689			ガラス玉	ガラス		AD9	SK6383	3.00	2.75	2.00	1.00	1.00	0.037	水色			
690			ガラス玉	ガラス		AD9	SK6383	3.02	3.00	2.50	0.53	0.50	0.053	水色			
691			ガラス玉	ガラス		AD9	SK6383	4.00	4.00	2.12	2.00	1.75	0.054	緑色			
692			ガラス玉	ガラス		AD9	SK6383	4.25	3.75	2.25	1.50	1.02	0.070	緑			
693			ガラス玉	ガラス		AD9	SK6383	5.00	4.00	3.50	1.78	1.25	0.090	緑			
694			ガラス玉	ガラス		AC9	SD6373	4.15	4.00	2.50	1.50	1.28	0.097	紫			
695			ガラス玉	ガラス		AD10	SP6396	4.25	3.25	2.75	1.28	1.00	0.060	緑			
696			ガラス玉	ガラス		AC12	SP6397	2.25	2.00	2.00	0.50	0.38	0.014	黒	湯玉		
697			ガラス玉	ガラス		AC9	遺構面	2.75	2.75	3.00	1.00	1.00	0.046	水色			
698			ガラス玉	ガラス		AC10	遺構面	2.95	2.95	2.50	1.00	0.78	0.033	水色			
699			ガラス玉	ガラス		AD9	遺構面	3.12	2.88	3.00	1.00	1.00	0.039	水色			
700			ガラス玉	ガラス		AD9	遺構面	3.75	2.75	2.00	0.78	0.75	0.048	水色			
701			ガラス玉	ガラス		AC9	遺構面	2.75	2.75	2.30	1.00	0.75	0.035	水色			
702			ガラス玉	ガラス		AC9	遺構面	2.95	2.80	1.55	0.78	0.75	0.026	水色			
703			ガラス玉	ガラス		AC9	遺構面	2.88	2.75	1.38	1.00	1.00	0.016	水色			
704			ガラス玉	ガラス		AC8	遺構面	3.00	2.95	1.50	1.00	1.00	0.019	水色			
705			ガラス玉	ガラス		AC10	遺構面	3.25	3.00	2.00	1.00	1.00	0.025	水色			
706			ガラス玉	ガラス		AC9	遺構面	3.10	2.88	1.90	1.00	1.00	0.040	水色			
707			ガラス玉	ガラス		AC10	遺構面	3.75	3.50	2.10	1.02	1.00	0.031	水色			
708			ガラス玉	ガラス		AB8	遺構面	5.75	5.55	5.30	1.28	1.28	0.205	白色			
709			ガラス玉	ガラス		AC9	遺構面	3.95	3.75	2.82	2.00	1.75	0.062	緑色			
710			ガラス玉	ガラス		AC9	遺構面	4.00	3.88	2.38	1.50	1.25	0.053	緑色			
711			ガラス玉	ガラス		AC10	遺構面	3.95	3.62	2.55	1.75	1.50	0.040	緑色			
712			ガラス玉	ガラス		AC8	遺構面	4.13	3.82	2.80	2.25	1.75	0.069	緑色			
713			ガラス玉	ガラス		AC10	遺構面	3.88	3.88	3.00	1.50	1.28	0.068	紫色			
714			ガラス玉	ガラス		AD10	遺構面	4.25	4.12	2.50	1.28	1.25	0.076	紫色			
715			ガラス玉	ガラス		AC9	遺構面	4.25	4.10	3.00	1.75	1.25	0.095	紫色			
716			ガラス玉	ガラス		AC9	遺構面	4.12	3.88	1.88	2.50	2.25	0.029	紫色			
717			ガラス玉	ガラス		AD10	遺構面	4.45	4.20	2.88	2.00	1.75	0.078	紫色			
718			ガラス玉	ガラス		AC8	遺構面	3.00	2.90	1.95	1.52	1.00	0.021	水色			
719			ガラス玉	ガラス		AC8	遺構面	3.25	3.05	2.52	1.00	1.00	0.045	白色			
720			溶解ガラス	ガラス		AC9	遺構面	3.25	3.25	3.00	-	-	0.055	青色			
721			溶解ガラス	ガラス		AE10	遺構面	5.50	4.00	2.75	-	-	0.087	青色			
722			溶解ガラス	ガラス		AC9	SD6373	15.00	10.75	5.50	-	-	0.428	青色			
723			溶解ガラス	ガラス		AC9	SD6373	12.75	8.50	5.00	-	-	0.401	緑色			
724			溶解ガラス	ガラス		AC9	SD6373	12.00	7.15	4.88	-	-	0.331	緑色			
725			溶解ガラス	ガラス		AD9	SK6383	12.50	5.25	2.50	-	-	0.102	水色			
726			溶解ガラス	ガラス		AD9	SK6383	16.00	8.00	4.75	-	-	0.432	水色			
727			溶解ガラス	ガラス		AD9	SK6383	12.75	11.05	5.00	-	-	0.577	緑色			
728			49	41		溶解ガラス	ガラス	AC10	遺構面	7.50	7.38	5.35	-	-	0.148	青色	
729						溶解ガラス	ガラス	AC9	遺構面	6.75	5.50	4.55	-	-	0.200	青色	
730						溶解ガラス	ガラス	AC9	遺構面	9.25	9.00	5.00	-	-	0.535	水色	
731						溶解ガラス	ガラス	AD10	遺構面	10.00	9.75	5.05	-	-	0.588	緑色	
732						溶解ガラス	ガラス	AD9	遺構面	7.75	5.50	3.95	-	-	0.186	緑色	
733						溶解ガラス	ガラス	AC9	遺構面	6.25	4.55	5.00	-	-	0.170	紫、緑色	
734						溶解ガラス	ガラス	AC10	遺構面	12.13	6.25	4.00	-	-	0.134	水色	
735	溶解ガラス	ガラス			AC9	遺構面	10.75	4.51	4.75	-	-	0.123	緑色				
736	溶解ガラス	ガラス			AD9	遺構面	10.25	5.65	4.00	-	-	0.161	水、緑色				
737	溶解ガラス	ガラス			AC9	遺構面	10.50	7.10	4.50	-	-	0.321	紫、緑色				
738	溶解ガラス	ガラス			AC9	遺構面	9.50	9.10	2.75	-	-	0.212	緑色				
739	溶解ガラス	ガラス			AC9	遺構面	13.55	7.00	6.50	-	-	0.266	緑色				

番号	図版	PL	種類	材質	区画	地区	層/遺構	法量(mm)			孔径		重量(g)	色調	備考
								長軸	短軸	厚さ	最大	最小			
740	49	41	金属	鉛	B5	AC10	SD6373	7.00	3.40	3.80	-	-	0.106		
741			金属	鉛		AD9	SK6383	15.50	8.40	7.00	-	-	0.732		
742			金属	鉛		AD9	SP6399	16.00	15.50	9.00	-	-	2.635		
743			金属	鉛		AC10	遺構面	4.80	3.50	3.00	-	-	0.131		
744			金属	鉛		AC10	遺構面	7.10	7.00	3.50	-	-	0.137		
745			金属	鉛		AE9	遺構面	14.00	5.30	4.10	-	-	1.351		
746			金属	鉛		AD10	遺構面	15.50	13.30	4.50	-	-	3.226		
747			金属	鉛		AC11	表土	18.00	10.00	6.00	-	-	3.795		
748			金属	鉛		AC11	表土	28.00	23.50	8.00	-	-	20.732		
749			金属	鉛		AC11	表土	15.50	15.00	14.00	-	-	8.941		
750			金属	鉛		AB10	表土	29.00	17.30	10.00	-	-	12.720		
751			金属	鉛		AA10	表土	16.00	14.10	7.00	-	-	2.093		
752			羽口	土師質		Y12	SF6352 IV層	7.75	6.75	4.00	-	-			残存値
753			羽口	土師質		AC11	SX6376	4.30	2.80	2.75	-	-			残存値
754			羽口	土師質		AD12	表土	7.15	5.50	2.70	-	-			残存値
755			羽口	土師質		AC10	表土	5.45	4.95	3.35	-	-			残存値
756			羽口	土師質		AD12	表土	5.20	3.85	2.80	-	-			残存値
757			羽口	土師質		AD12	表土	4.80	3.60	1.60	-	-			残存値
758	羽口	土師質	AD12	表土	4.55	3.40	1.50	-	-			残存値			

表16 銅銭観察表

番号	図版	PL	区画	地区	層/遺構	銭貨名	書体	書铸年	法量			備考	
									径(m/m)	厚(m/m)	重さ(g)		
12	26	18	A	-	表土	開元通寶	真書	唐	621	2.4	0.14	3	
13				B・C22	表土	皇宋通寶	真書	北宋	1038	2.5	0.13	3.1	
14				B・C22	表土	嘉祐元寶	真書	北宋	1056	2.35	0.12	3	
15				B25	表土	聖元元寶	篆書	北宋	1101	2.37	0.13	2.7	
72	28	20	B	X15	表土	開元通寶	真書	唐	621	2.47	0.11	2.4	
73				U11	表土	開元通寶	真書	唐	621	2.47	0.15	2.9	
74				-	耕土	天聖元寶	真書	北宋	1023	2.46	0.11	2.4	
75				-	耕土	大聖元寶	篆書	北宋	1023	2.41	0.12	2	
76				AD12	表土	皇宋通寶	真書	北宋	1038	2.44	0.12	1.7	
77				S16	表土	嘉祐通寶	真書	北宋	1056	2.28	0.11	2	
78				Q18	表土	熙寧元寶	篆書	北宋	1068	2.43	0.12	2.3	
79				Q18	表土	熙寧元寶	篆書	北宋	1068	2.48	0.14	2.5	
80				T15	表土	元祐通寶	篆書	北宋	1086	2.39	0.1	1.5	
81				X13	表土	元祐通寶	篆書	北宋	1086	2.41	0.14	3.6	
82				S14	表土	元符通寶	行書	北宋	1098	2.37	0.15	2.9	
83				Z17	表土	大觀通寶	真書	北宋	1107	2.43	0.15	3.1	
84				S16	表土	紹興元寶	真書	南宋	1131	2.45	0.16	2.4	
85				O12	表土	阜宋元寶	真書	南宋	1253	2.43	0.15	2.9	
86				S17	表土	洪武通寶	真書	明	1368	2.12	0.13	1.8	
87				Q8	表土	永樂通寶	真書	明	1408	2.53	0.12	2.3	
202	32	24	A1	E26	SF6703	皇宋通寶	真書	北宋	1038	2.26	0.12	2	
203				E26	SF6703	□□□□	真書	-	-	2.38	0.16	1.9	
214				C21	SD6279	天禧通寶	真書	北宋	1017	2.5	0.13	2.9	
215				B28	包含層	皇宋通寶	真書	北宋	1038	2.45	0.09	1.8	
216				E24	包含層	皇宋通寶	真書	北宋	1038	2.45	0.11	2.4	
217				F27	包含層	元豐通寶	行書	北宋	1078	2.39	0.11	1.4	
218				B25	包含層	洪武通寶	真書	明	1368	2.2	0.14	2.3	
248	33	25	B2	Y16	SP6393	元祐通寶	篆書	北宋	1086	2.46	0.12	2.6	
249				Z16・17	SP6398	洪武通寶	真書	明	1368	2.21	0.15	2.2	
256				Z15	遺構面	元豐通寶	行書	北宋	1078	2.52	0.13	2.3	
257				Z17	遺構面	軋元重寶	真書	唐	758	2.38	0.12	2.8	
286				S9	SD6338	祥符元寶	真書	北宋	1008	2.43	0.11	2.8	
405	37	29	B3	V12・13	SP6395	元祐通寶	行書	北宋	1086	2.43	0.11	2.7	
431				W13	遺構面	大聖元寶	篆書	北宋	1023	2.45	0.12	2.8	
432				T12	遺構面	聖元元寶	行書	北宋	1101	2.38	0.14	3.1	
433				OP9	遺構面	大觀通寶	真書	北宋	1107	2.4	0.11	2.2	
434				R9	遺構面	紹聖元寶	篆書	南宋	1131	2.34	0.16	3	
571	43	35	B5	Z8	SD6388	景德元寶	真書	北宋	1004	2.47	0.13	2.9	
572				Z8	SD6338	祥符元寶	真書	北宋	1008	2.51	0.14	2.9	
573				Z7	SD6338	皇宋通寶	真書	北宋	1038	2.46	0.15	2.7	
609	45	37	B6	AA17	SD6362	熙寧元寶	真書	北宋	1068	2.41	0.11	3	

表17 骨製品観察表

番号	図版	PL	種類	区画	地区	層/遺構	法量(cm)			備考
							器長	器幅	器厚	
239	32	24	駒石			SD6341	1.75	1.75		

V 自然科学分析

<分析1>一乗谷朝倉氏遺跡第130次調査出土柱根の樹種同定

1 はじめに

特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡の発掘調査で出土した柱根の樹種同定結果を報告する。

2 試料と方法

調査対象の試料は、第130次発掘調査の建物跡から出土した柱根25点である。SB6359からNo.1～8の計8点が、SB6331からNo.9～21の計13点が出土している。残る4点はSB6792周辺出土である。

調査対象の試料から剃刀を用いて3断面(横断面・接線断面・放射断面)の切片を採取し、ガムクロールで封入してプレパラートを作製した。これを光学顕微鏡で観察・同定し、写真撮影を行った。

3 結果

針葉樹はコウヤマキ、ヒノキ、アスナロの3分類群、広葉樹はクリ、コナラ属コナラ節の2分類群、計5分類群を確認した。遺構別の樹種の構成を表18、結果を表19に示した。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、各分類群の光学顕微鏡写真を図版に示す。

表18 遺構別の樹種構成

分類群/遺構	SB6359		SB6792周辺		SB6331		計
					角柱	丸柱	
コウヤマキ					1		1
ヒノキ					2		2
アスナロ			1		4		5
クリ	6		1		2	3	12
コナラ属コナラ節	2		2			1	5
計	8		4		9	4	25

1 コウヤマキ *Sciadopitys verticillata*(Thunb.) Siebold et Zucc. コウヤマキ科 挿図38 1a-1c(No.9)

仮道管と放射組織からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は比較的緩やかである。晩材部の幅がきわめて狭い。分野壁孔は、窓状である。

コウヤマキは、福島県以南の温帯から暖帯上部に生育する常緑針葉高木である。材は耐朽性・耐湿性が強い。

2 ヒノキ *Chamaecyparis obtusa*(Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科 挿図38 2a-2c(No.12)

仮道管、放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は緩やかである。樹脂細胞は主に晩材部に接線状に配列する。分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で1分野に2個存在する。

ヒノキは、福島県以南の温帯から暖帯に分布する常緑高木である。材は加工容易で割裂性は大きく、耐朽性・耐湿性は著しく高く狂いが少ない。

3 アスナロ *Thujaopsis dolabrata* Siebold et Zucc. ヒノキ科 挿図38 3a-3c(No.14)

仮道管、放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は比較的緩やかである。樹脂細胞は晩材部に散在し、放射組織内にも豊富に樹脂を含む。分野壁孔は小型のスギ～ヒノキ型で、1分野に不揃いに3～4個存在する。

アスナロは温帯に分布する常緑高木である。材の加工性・割裂性は中庸で、耐朽性・保存性が高い。

4 クリ *Castanea crenata* Siebold et Zucc. ブナ科 挿図38 4a-4c(No.16) 5a(No.23)

大型の道管が年輪のはじめに数列程並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、主に単列である。道管放射組織間壁孔は柵列状となる。

クリは温帯下部から暖帯に分布する落葉高木で、材は耐朽性・耐湿性に優れて、保存性が高い。

5 コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 挿図38 6a-6c(No.22)

大型の道管が年輪のはじめに1列程並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性、単列と広放射組織の2種類がある。

コナラ節は温帯下部および暖帯に分布する落葉高木で、カシワ、ミズナラ、コナラ、ナラガシワなどを認める。材は全体的に重硬で加工困難である。

4 考察

SB6359出土の柱根はクリ6点、コナラ節2点、SB6331出土の柱根は、丸柱ではクリ3点とコナラ節1点で、角材ではコウヤマキ1点、ヒノキが2点、アスナロが4点、クリが2点である。SB6359ではクリとコナラ節が多く、SB6331では角材を中心に針葉樹の割合が高い。SB6792周辺では、広葉樹が多い。

針葉樹のコウヤマキ、ヒノキ、アスナロは比較的軽軟で加工も容易であり、耐朽性・保存性に優れた材である。一方、広葉樹のクリとコナラ節は重硬で加工は困難だが保存性の高い材である。このため、柱材には針葉樹、広葉樹ともに保存性の高い樹種が利用されたと推測される。また、角柱は加工容易な針葉樹の利用が多く、丸柱には重硬な広葉樹が多く利用されているため、加工方法で樹種を選択した可能性が考えられよう。

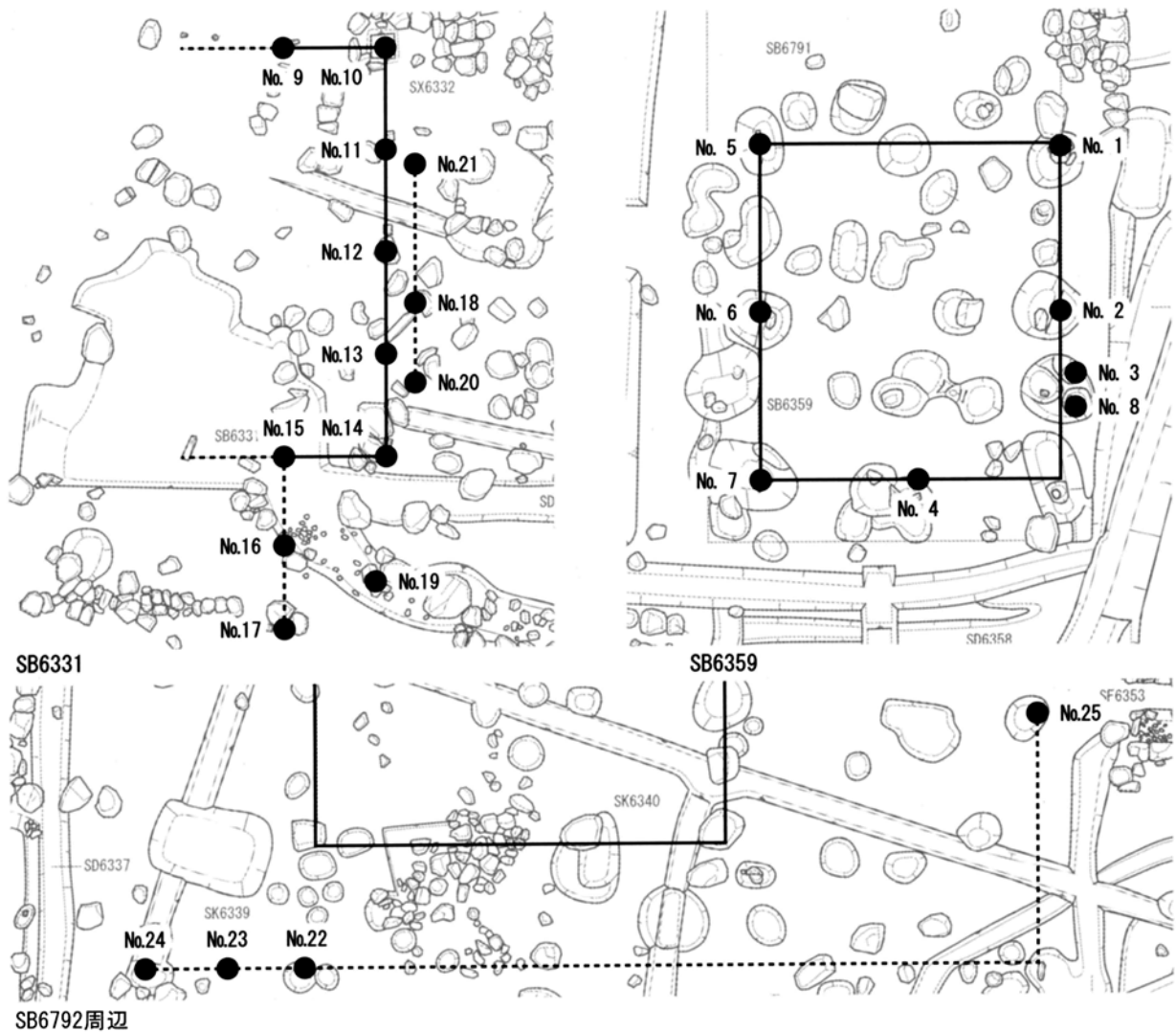
北陸地方を含む日本海側ではスギが多用される傾向があるが、今回の調査ではスギの利用は認められなかった。同遺跡の戦国時代の木製品でも、以前に行われた樹種同定の結果、スギよりヒノキが多く、広葉樹でも多種類が利用されていた(山田1993)。したがって本調査の柱材も、ほかの木製品と同様に、ヒノキ科や広葉樹を中心とした木材利用傾向があったと考える。

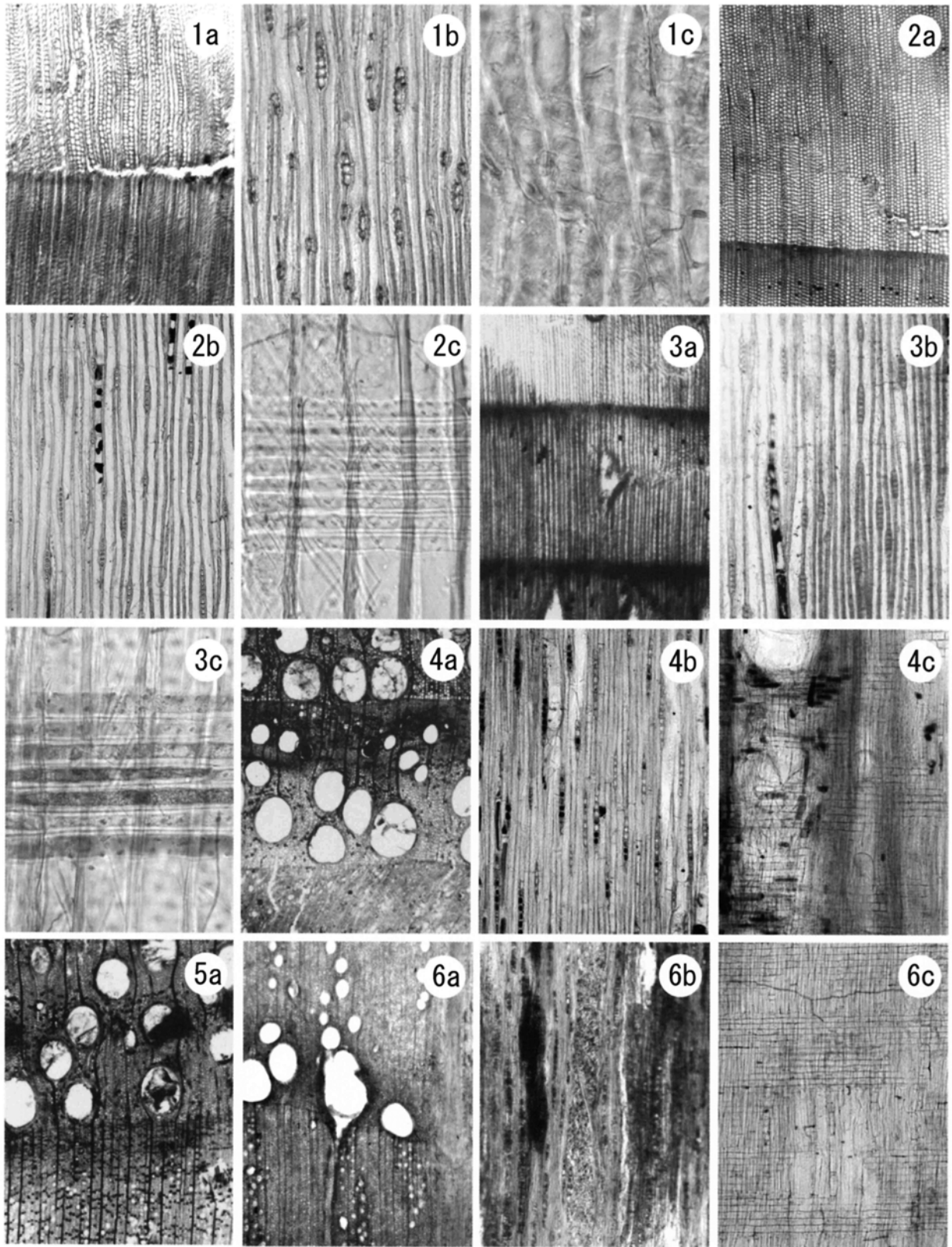
引用文献

山田昌久 1993「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成—用材から見た人間・植物関係史」『植生史研究特別』第1号 242p. 日本植生史学会.

表19 樹種同定結果

試料番号	報告番号	遺物名	出土地点	出土遺構	樹種	木取り	備考
No. 1	626	柱根	Z16・17	SB6359	クリ	芯持丸木	
No. 2	627	柱根	Z16	SB6359	コナラ属コナラ節	芯持丸木	
No. 3	628	柱根	Z15・16	SB6359	クリ	芯持丸木	
No. 4	629	柱根	Z15	SB6359	クリ	芯持丸木	
No. 5	630	柱根	Y16	SB6359	クリ	芯持丸木	
No. 6	631	柱根	Y15	SB6359	クリ	芯持丸木	
No. 7	632	柱根	Y15	SB6359	クリ	芯持丸木	
No. 8		柱根	Z15・16	SB6359	コナラ属コナラ節	芯持丸木	
No. 9	633	角柱	Q11	SB6331	コウヤマキ	角材(芯持)	
No.10	634	角柱	Q11	SB6331	アスナロ	角材(芯持)	
No.11	635	角柱	Q10	SB6331	ヒノキ	角材(芯持)	
No.12	636	角柱	Q10	SB6331	ヒノキ	角材(芯持)	
No.13	637	角柱	Q9	SB6331	アスナロ	角材(芯持)	
No.14	638	角柱	Q9	SB6331	アスナロ	角材(芯持)	
No.15	639	角柱	Q9・8	SB6331	ヒノキ	角材(芯持)	
No.16		角柱	Q8	SB6331	クリ	角材(芯持)	
No.17		角柱	Q8	SB6331	クリ	角材(芯持)	
No.18		丸柱	Q9	SB6331	クリ	芯持丸木	
No.19		丸柱	Q8	SB6331	コナラ属コナラ節	芯持丸木	
No.20		丸柱	Q9	SB6331	クリ	芯持丸木	
No.21		丸柱	Q10	SB6331	クリ	芯持丸木	
No.22		柱根	T10	—	コナラ属コナラ節	芯持丸木	
No.23		柱根	T10	—	クリ	芯持丸木	
No.24		柱根	T10	—	コナラ属コナラ節	芯持丸木	
No.25		柱根	W12	—	アスナロ	芯持丸木	





挿図38 第130次調査出土柱根の光学顕微鏡写真

1a-1c. コウヤマキ(No.9)、2a-2c. ヒノキ(No.12)、3a-3c. アスナロ(No.14)、4a-4c. クリ(No.16)、5a. クリ(No.23)、6a-6c. コナラ属コナラ節(No.22)

a:横断面(スケール=500 μ m)、b:接線断面(スケール=200 μ m)、c:放射断面(スケール=1c-3c:50 μ m、4c-6c:200 μ m)

<分析2>一乗谷朝倉氏遺跡第136次調査の土壌分析

1 はじめに

第136次調査区は、城下町を防御する上城戸跡より約100m北に位置する。本調査区付近では、これまでの発掘調査で土塁および大溝が周囲に巡る屋敷跡が検出されている。この屋敷跡の南西に隣接する本調査区からは石積施設2基が検出された。本遺跡の石積施設は、平面が1～2m四方の方形を呈する遺構であり、屋敷跡で井戸と合わせて検出されることが多い。その性格について便所と推定されるもののほか、地下式倉庫、溜枡と想定される遺構も多数みられる。

本報告では第136次調査区で検出された石積施設の性格の検討する目的で、自然科学分析を行った。

2 試料

調査対象試料は、本調査区より検出された石積施設SF6703・SF6702で採取した土壌である。石積施設の規模は、SF6703は平面が約1.1×1.1mの方形で、深さ0.4mを測る。SF6702は平面が約0.7×0.5mの方形で、深さ0.4mを測る。分析した土壌試料は、いずれも各遺構底面より10cm上から採取した。各試料は、SF6703が灰色砂質シルト、SF6702が炭化物を含む灰色砂質シルト～粘土で認識した。

土壌試料は珪藻分析、花粉分析、寄生虫卵分析、植物珪酸体分析と種実遺体分析に用いた。

3 分析方法

①珪藻分析

試料は湿重で5g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法(4時間放置)順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プレウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する(化石の少ない試料はこの限りではないが、全面を走査する)。種の同定は、原口ほか(1998)、Krammer(1992)、Krammer & Lange-Bertalot(1986、1988、1991a、1991b)、渡辺ほか(2005)、小林ほか(2006)などを参照し、分類基準はRound et al.(1990)に、壊れた珪藻殻の計数基準は柳沢(2000)に従っている。

同定結果は中心型珪藻類(Centric diatoms: 広義のコアミケイソウ綱Coccinodiscophyceae)と羽状型珪藻類(Pennate diatoms)に分け、羽状型珪藻類は無縦溝羽状珪藻類(Araphid pennate diatoms: 広義のオビケイソウ綱Fragilariophyceae)のほかには有縦溝羽状珪藻類(Raphid pennate diatoms: 広義のクサリケイソウ綱Bacillariophyceae)に分け、有縦溝羽状珪藻類は、上・下殻の片方の殻だけに縦溝のある単縦溝類、上・下殻ともに縦溝のある双縦溝類、縦溝が管の上を走る管縦溝類、縦溝が翼管の上を走る翼管縦溝類、殻端部に短い縦溝がある短縦溝類に分ける。

各種類の生態性については、Vos & de Wolf(1993)を参照し、塩分濃度に対する区分はLowe(1974)に従い真塩性種(海水生種)、中塩性種(汽水生種)、貧塩性種(淡水生種)に類別する。貧塩性種は、生態区分で分け、塩分・水素イオン濃度(pH)・流水への適応能も示す。そして産出個体数100個体以上の試料については産出率1.0%以上の種類について主要珪藻化石群集の散布図を作成し、淡水生種の生態性についても、100個体以上の試料については図示する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安

として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析は、淡水生種(貧塩性種)は安藤(1990)、陸生珪藻は伊藤・堀内(1991)、汚濁耐性は渡辺ほか(2005)の環境指標種を参考とする。

②花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムで泥化、篩別、重液(臭化亜鉛、比重2.3)で有機物の分離、フッ化水素酸で鉱物質の除去、アセトリシス(無水酢酸9：濃硫酸1の混合液)処理で植物遺体に含むセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートの作成を行い、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数を行う。同定は分析委託社保有の現生標本や島倉(1972)、中村(1980)などを参考にする。

結果は一覧図・表として表示する(挿図39・表20)。

③寄生虫卵分析

試料10ccを正確に取り、水酸化カリウムで泥化、篩別、重液(臭化亜鉛、比重2.3)で有機物の分離、物理・化学的処理を施して、寄生虫卵・花粉・胞子を分離・濃集する。処理後の残渣を定容してから一部を取り、グリセリンで封入してプレパラートの作成を行い、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査して出現する全ての寄生虫卵を同定して計数を行う。同定は、当社保有の現生標本や佐伯ほか(1998)、斉藤・田中(2007)などを参考にする。なお花粉個数も計数する(表21)。

結果は、堆積物1ccあたりに含まれる寄生虫卵および花粉個数を一覧表として表示する。その際、有効数字を考慮して100単位で表示し、100個体未満は、「<100」で表示する(表21)。

④植物珪酸体分析

試料を過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を施し、植物珪酸体を分離・濃集し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリユウラックスで封入してプレパラートを作成する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査して、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞由来の植物珪酸体(短細胞珪酸体)と葉身機動細胞由来の植物珪酸体(機動細胞珪酸体)を、近藤(2010)の分類を参考に同定・計数する。分析の際は分析試料の乾燥重量のほかにプレパラートの作成時に用いた分析残渣量、検鏡時のプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、乾土1gでの植物珪酸体含量(同定した数を乾土1gあたりの個数に換算)を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表として表示する。その際、各分類群の含量は100単位で表示し、100個/g未満は「<100」で示す。また植物珪酸体含量と珪化組織片の産状を図示する(挿図39・表22)。

⑤種実遺体分析

試料50ccを水に浸し、粒径0.5mmの篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定が可能な種実遺体と、主に径4mm以上の炭化材、骨片などの遺物を抽出する。

種実遺体の同定は、現生標本および石川(1994)、中山ほか(2000)などを参考に実施し、個数を数えて一覧表で表示する。種実遺体以外の抽出物は、一覧表下部にまとめて示し、炭化材と骨片は乾燥重量と最大径を記録する。分析後は、種実遺体を分類群毎に容器に入れて保管する。水湿を帯びた種実遺体は約70%のエタノール溶液で液浸させ保管する。

3 結果

①珪藻分析(挿図39・表20)

両石積施設とも珪藻化石の産出頻度は少ないが、堆積環境を検討する上では有意な数量の珪藻化石が産出する。完形殻の出現率はSF6703が約50%、SF6702が約30%であった。産出分類群数は合計27属66分類群を抽出した。

SF6703は産出種を塩分濃度に対するカテゴリーで類別すると淡水域に生育する淡水生種(水生珪藻)で構成される。淡水生種の中には、陸上のコケや土壌表面など多少の湿り気を保持した好氣的環境にも耐性のある陸生珪藻も約40%産出する。淡水生種の生態性(塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応性)の特徴は、貧塩不定性種、pH不定性種と好+真アルカリ性種、流水不定性種と好+真流水性種が優占か多産する。主要種は、陸生珪藻の中でも耐乾性の高い陸生珪藻A群のHantzschia amphioxysが約10%を占めるほかに、好流水性で付着性のPlanothidium lanceolatum、Placoneis elginensis var. neglecta、流水不定性で付着性のLemnicola hungarica、Amphora copulata、Gomphonema parvulumなどが低率で産出する。このうちPlanothidium lanceolatumは、沼よりも浅く水深1m前後で一面に水生植物が繁茂している沼沢および水深の浅い湿地で優勢な出現のみられる沼沢湿地付着生種でもある。

SF6702は、水生珪藻よりも陸生珪藻の方が多く、全体の約60%を占める。主要種は、陸生珪藻A群のHantzschia amphioxysが約20%、Luticola muticaが約17%、Pinnularia borealis約11%産出する。水生珪藻は、流水不定性で付着性のAmphora copulata、Cymbella tumida、Gomphonema parvulumなどが低率ではあるが産出する。

②花粉分析・寄生虫卵分析(表21)

両石積施設とも花粉化石の産出状況が悪い。さらに産出した花粉化石は保存状態も悪く、花粉外膜が破損か溶解したものが多い。検出された分類群の本本花粉はモミ属、ツガ属、マツ属、スギ属、ニレ属、ケヤキ属、タニウツギ属、草本花粉はイネ科、アカザ科、アブラナ科、タンポポ科である。一方、寄生虫卵は、両石積施設ともに検出されなかった。また花粉個数も少なく100個体/cc未満であった。

③植物珪酸体分析(挿図40・表22)

両石積施設とも植物珪酸体は検出されるが、保存状態は悪く表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。植物珪酸体含量はSF6703が2,500個/g、SF6702が3,500個/gで、両者とも同様の群集が認められる。特に栽培植物であるイネ属の産出が多く、イネ属は籾(穎)に形成される穎珪酸体および葉部に形成される短細胞列などの組織片も検出される。葉部由来の珪酸体の含量は、短細胞珪酸体が約800~1,200個/g、機動細胞珪酸体が約500~600個/gである。このほかにタケ科やススキ属などが認められるが、100個/gか100個/g未満と、含量が極めて低い。

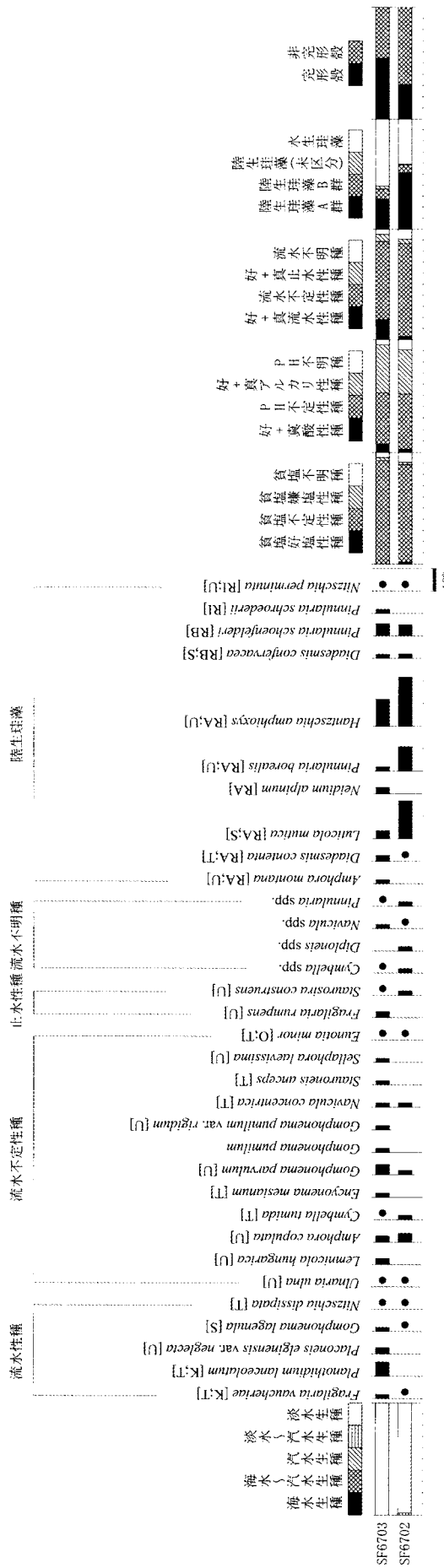
④種実遺体分析(表23)

SF6703からは炭化した栽培種のイネの穎の破片3個、草本のヒメミカンソウの種子2個、炭化材が0.01g未満(最大2mm)、骨片2個(0.01g未満、最大2mm)が検出された。骨片は小片で種類や部位は同定には至らなかった。SF6702は炭化材0.35g(最大6mm)が検出された。分析残渣は、砂礫が主体である。SF6302は炭化材の微細片が含まれる。以下、検出された種実の形態的特徴を記す。

イネ(*Oryza sativa* L.)イネ科イネ属

穎(果)は、炭化しており黒色。完形なら長さ6~7.5mm、幅3~4mm、厚さ2~3mm程の偏平な長楕円体で基部に1対の護穎を有す。その上に外穎(護穎)と内穎がある。外穎は5脈、内穎は3脈で、

插图39 主要珪藻化石群集



海水・汽水・淡水生種産出率・各種産出率・壳形産出率は全体耳数、淡水生種の生態性の比較は淡水生種の合計を基数として百分率で表した。

いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は1%未満を示す。

【環境指標種】

K: 中～下流柱河川指標種, O: 沼沢湿地付着性種, S: 好汚濁性種, U: 広域適応性種, T: 好清水性種, RA: 陸生珪藻A群, RB: 陸生珪藻B群, RI: 未区分陸生珪藻。

表20 珪藻分析結果

分 類 群	生 態 性			環 境 指 標 種	第136次調查	
	塩分	pH	流水		SF6703	SF6702
Bacillariophyta (珪藻植物門)						
Araphidineae (無縱溝類)						
<i>Fragilaria capucina</i> Desmazieres	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	1
<i>Fragilaria perminuta</i> (Grun.) Lange - Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind		-	1
<i>Fragilaria rumpens</i> (Kuetz.) G.W.F. Carlson	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	3	-
<i>Fragilaria tenera</i> (W. Smith) Lange - Bertalot	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	1	-
<i>Fragilaria vaucheriae</i> (Kuetz.) Petersen	Ogh-ind	al-il	r-ph	K, T	2	1
<i>Stausosira construens</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	1	2
<i>Ulnaria ulna</i> (Nitzsch) Compere	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	1
Raphid Pennate Diatoms (有縱溝羽狀珪藻類)						
Monoraphid Pennate Diatoms (單縱溝羽狀珪藻類)						
<i>Achnanthes crenulata</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	1	-
<i>Lemnicola hungarica</i> (Grunow) Round & Basson	Ogh-ind	al-il	ind	U	3	-
<i>Planothidium lanceolatum</i> (Breb. ex Kuetz.) Lange - Bertalot	Ogh-ind	ind	r-ph	K, T	7	-
Biraphid Pennate Diatoms (雙縱溝羽狀珪藻類)						
<i>Amphora copulata</i> (Kuetz.) Schoeman et R.E.M. Archibald	Ogh-ind	al-il	ind	U	3	4
<i>Amphora montana</i> Krasske	Ogh-ind	al-il	ind	RA, U	2	-
<i>Cymbella aspera</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	O	1	-
<i>Cymbella tumida</i> (Breb.) Van Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	1	2
<i>Cymbella</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	2
<i>Encyonema mesianum</i> (Kholnoky) D.G. Mann	Ogh-ind	ind	ind	T	2	-
<i>Placoneis elginensis</i> var. <i>neglecta</i> (Krasske) H. Kobayasi	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	3	-
<i>Gomphonema gracile</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O, U	-	1
<i>Gomphonema lagenula</i> Kuetzing	Ogh-ind	ind	r-ph	S	2	1
<i>Gomphonema parvulum</i> (Kuetz.) Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	5	2
<i>Gomphonema pseudoaugur</i> Lange - Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	S	1	-
<i>Gomphonema pumilum</i> (Grun.) Reichardt & Lange - Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind		2	-
<i>Gomphonema pumilum</i> var. <i>rigidum</i> E. Reichardt et Lange - B.	Ogh-ind	al-il	ind	U	2	-
<i>Diploneis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	2
<i>Navicula concentrica</i> Carter	Ogh-ind	ind	ind	T	2	2
<i>Navicula notanda</i> Pantocsek	Ogh-ind	al-il	ind		1	-
<i>Navicula rostellata</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-ph	K, U	1	-
<i>Navicula venerabilis</i> Hohn & Hellerman	Ogh-ind	al-il	l-ph		1	-
<i>Navicula</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	1
<i>Craticula ambigua</i> (Ehr.) D.G. Mann	Ogh-ind	al-il	ind	S	-	1
<i>Stauroneis anceps</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	T	2	-
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O, U	1	-
<i>Stauroneis smithii</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	1	-
<i>Stauroneis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	1
<i>Frustulia vulgaris</i> (Thwait.) De Toni	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	1
<i>Diadismis biceps</i> Arnott ex Grunow in Van Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	RA, T	1	-
<i>Diadismis confervacea</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RB, S	2	2
<i>Diadismis contenta</i> (Grun. ex Van Heurck) D.G. Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA, T	3	1
<i>Luticola mutica</i> (Kuetz.) D.G. Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA, S	4	17
<i>Luticola saxophila</i> (Bock ex Hustedt) D.G. Mann	Ogh-ind	ind	ind	RB	1	-
<i>Neidium alpinum</i> Hustedt	Ogh-ind	ac-il	ind	RA	3	-
<i>Neidium ampliatum</i> (Ehr.) Krammer	Ogh-ind	ac-il	l-ph		-	1
<i>Neidium hercynicum</i> A. Mayer	Ogh-ind	ac-il	ind	U	-	1
<i>Caloneis aerophila</i> Bock	Ogh-ind	ac-bi	ind	RA, S	1	-
<i>Caloneis bacillum</i> (Grun.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	1	-
<i>Caloneis silicula</i> var. <i>gibberula</i> (Kuetz.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		1	-
<i>Pinnularia borealis</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA, U	2	11
<i>Pinnularia borealis</i> var. <i>linearis</i> M. Per.	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	1
<i>Pinnularia rupestris</i> Hantzsch	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	1
<i>Pinnularia schoenfelderi</i> Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RB	6	5
<i>Pinnularia schroederii</i> (Hust.) Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	2	-
<i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB, S	1	-
<i>Pinnularia subcapitata</i> var. <i>paucistriata</i> (Grun.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	U	1	-
<i>Pinnularia subgibba</i> Krammer	Ogh-hob	ac-il	ind		1	-
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	2
<i>Sellaphora laevis</i> (Kuetz.) Mann	Ogh-ind	ind	ind	U	2	-

分類群	生態性			環境指標種	第136次調査	
	塩分	pH	流水		SF6703	SF6702
管縦溝類						
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RA, U	13	22
<i>Hantzschia amphioxys</i> var. <i>capitata</i> O.Muller	Ogh-ind	al-il	ind	RA	1	-
<i>Nitzschia inconspicua</i> Grunow	Ogh-Meh	al-il	ind	U	-	1
<i>Nitzschia angustata</i> (W.Smith) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		1	-
<i>Nitzschia dissipata</i> (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	1	1
<i>Nitzschia nana</i> Grunow	Ogh-ind	ind	ind	S	-	1
<i>Nitzschia parvuloides</i> Cholnoky	Ogh-ind	ind	ind	U	-	1
<i>Nitzschia perminuta</i> (Grun.) Peragallo	Ogh-ind	al-il	ind	RI, U	1	1
<i>Nitzschia umbonata</i> (Ehr.) Lange-B.	Ogh-ind	ind	ind	U	-	1
<i>Nitzschia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-
<i>Rhopalodia gibberula</i> (Ehr.) O.Muller	Ogh-Meh	al-il	ind	U	-	1
<i>Rhopalodia gibba</i> (Ehr.) O.Muller	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	1
翼管縦溝類						
<i>Surirella angusta</i> Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	-	1
<i>Surirella minuta</i> Brebisson	Ogh-ind	ind	r-ph	U	1	-
短縦溝類						
<i>Eunotia minor</i> (Kuetz.) Grunow	Ogh-hob	ind	ind	O, T	1	1
<i>Eunotia pectinalis</i> (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O, T	1	-
<i>Eunotia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	1
海水生種					0	0
海水～汽水生種					0	0
汽水生種					0	0
淡水～汽水生種					0	2
淡水生種					109	99
珪藻化石総数					109	101

舟形を呈する。縫合しやや扁平な長楕円形の稲朶を構成する。破片は果実基部にある斜切状円柱形の果実序柄(小穂軸)で、大きさは0.7mm程で果皮は薄い。皮表面には、顆粒状突起が縦列する。

ヒメミカンソウ(*Phyllanthus ussuriensis* Rupr. et Maxim.) トウダイグサ科 コミカンソウ属

種子は灰～灰黒褐色。長さ0.9～1mm、径0.8mm程の半広倒卵体で背面は丸みを帯び腹面の正中線は稜状である。基部正中線上に細い臍があり種皮表面は粗面である。

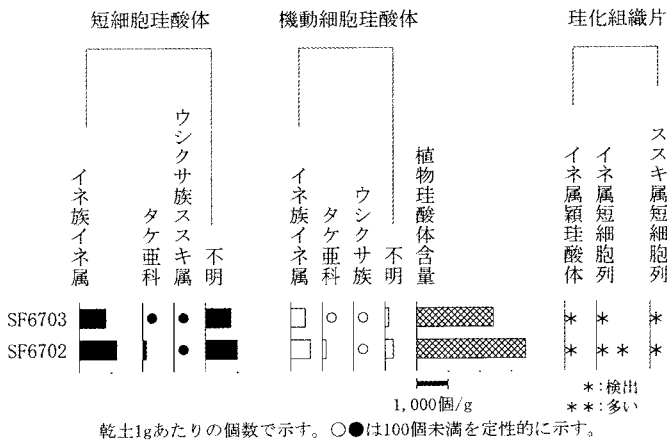
4 考察

本調査区で検出された石積施設は、遺構の規模から便所遺構の可能性があると考えられた。土壌分析調査ではこれまでの事例から、便所遺構である場合、海産物に付着する珪藻や有機汚濁の進んだ水域に生育する好汚濁性の珪藻化石の多産、花ごと食べる種類の花粉の産出と、寄生虫卵の多産、さらに糞便などに消化されず排泄される種実や動物遺存体の検出などが考えられた。

表21 花粉分析・寄生虫卵分析結果

種類	第136次調査	
	SF6703	SF6702
木本花粉		
モミ属	1	-
ツガ属	1	-
マツ属複雑管束亜属	6	1
マツ属(不明)	3	1
スギ属	-	1
ニレ属-ケヤキ属	1	-
タニウツギ属	1	-
草本花粉		
イネ科	1	6
アカザ科	-	2
アブラナ科	1	5
タンポポ亜科	1	1
不明花粉		
不明花粉	1	-
シダ類胞子		
シダ類胞子	31	21
合計		
木本花粉	13	3
草本花粉	3	14
不明花粉	1	0
シダ類胞子	31	21
合計(不明を除く)	47	38
寄生虫数[個/cc]	0	0
花粉数[個/cc]	<100	<100

<100: 100個体未満。



挿図40 植物珪酸体含量

表22 植物珪酸体含量 (個/g)

分類群	第136次調査	
	SF6703	SF6702
イネ科葉部短細胞珪酸体		
イネ族イネ属	800	1,200
タケ亜科	<100	100
ウシクサ族ススキ属	<100	<100
不明	800	1,000
イネ科葉身機動細胞珪酸体		
イネ族イネ属	500	600
タケ亜科	<100	100
ウシクサ族	<100	<100
不明	100	300
合計		
イネ科葉部短細胞珪酸体	1,800	2,400
イネ科葉身機動細胞珪酸体	700	1,100
合計	2,500	3,500
珪化組織片		
イネ属穎珪酸体	*	*
イネ属短細胞列	*	**
イネ属機動細胞列	*	*

珪化組織片 - : 未検出. * : 検出. ** : 多い.
<100 : 100個体未満.

SF6703とSF6702の底面付近より採取された土壌の調査の結果、珪藻分析では水生珪藻と生息環境が異なった陸生珪藻が比較的高い割合で混在する状況が認められた。この結果から、石組遺構底部付近の埋積物は、普段は乾いた環境であり、しばしば水の影響を受ける様な堆積環境かそうした環境にあった堆積物に由来すると考えられる。産出した水生珪藻は、割合の高いSF6703では、中～下流性河川指標種を含んだ流水性種が比較的多くあり、SF6702も産出の割合は異なるが、同様の水生珪藻が検出された。調査地付近は一乗谷川が流下することからも、流水の影響あるいは河川水の影響を受けた土砂埋積などの双方の可能性が考えられる。

次に花粉化石および寄生虫卵の産状についてみると、花粉化石は両石積施設ともに産出と保存状態が悪く、寄生虫卵については一個体も検出されなかった。一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常時、酸化状態にある場合、花粉は酸化や土壌内微生物で分解・消失するとされている(中村1967、徳永・山内1971、三宅・中越1998など)。検出された花粉化石は、いずれも分解の影響を受けている状況が認められたほか、比較的分解に強い分解の影響を受けても同定可能な種類であった。さらに、寄生虫卵の分解に対する抵抗性は、花粉化石と同程度とされている。こうした結果や上述した珪藻分析結果などを踏まえると、花粉化石や寄生虫卵は堆積後の経年変化などで分解・消失している可能性がある。

植物珪酸体は、両石積施設ともに栽培種のイネ属の葉部や穎、ススキ属の葉部由来の珪化組織片がみられた。珪化組織片は植物体を燃やした灰などに認められることがあり、種実遺体分析では、SF6703で炭化したイネの穎がみられた。このほか植物質食料となりうる種実は検出されず、SF6703で骨片が微量に確認された程度であるため、排泄物や食物残渣などの明確な痕跡を指摘することは難しい。なお、屋敷地内の遺構であることを考慮すると、栽培種のイネやススキの珪化組織片は、資材として利用された植物体の痕跡の可能性もある。

以上の各分析結果によれば、検出した石積施設については便所遺構と判断するには至らない。なお、一乗谷朝倉氏遺跡では、一乗谷周辺の農民が住民の糞尿や生塵を肥料として利用するために集めていたとされている(大田区立郷土博物館、1997)ことから、遺構埋積物中にこれらの痕跡が残されていない可

表23 種実遺体分析結果

種類	部位	状態	136次上城戸		備考
			SF6703	SF6702	
種実遺体					
イネ	穎(基部)	炭化	3	-	
ヒメミカンソウ	種子		2	-	
炭化材			<0.01g 2mm	0.35g 6mm	最大径
骨片			2 <0.01g 2mm	- - -	最大径
分析残渣					
砂礫・炭化材			-	0.35g	
砂礫主体			22.87g	6.03g	
分析量			50cc 97.80g	50cc 79.47g	

能性もある。また、土塁と大溝が巡る屋敷地内で検出された石積施設SF6352の調査結果では、珪藻と花粉化石の産状が良好であり、特に珪藻化石群集では水生珪藻が多産する層が認められた。珪藻の汚濁耐性から、水質の汚濁の程度を検討した結果、遺構内には水が溜められており、水質は村落地帯の河川から河川の上流部程度であるという指摘がなされている。さらに、種実遺体を含む大型植物化石は木本15分類群、草本34分類群が確認され、栽培種はイネ、ソバ、ヒョウタン類、シソ属、ナス近似種などが検出されている。今回の分析結果と比べると、経年変化の影響が推定された花粉化石の保存や大型植物化石の産出状況が異なることから、石積施設においても、覆土の埋積環境や埋没過程の経緯の異なることが示唆される。

なお、微量に検出された花粉化石から、周辺にモミ属、ツガ属、マツ属、スギ属、ニレ属-ケヤキ属、タニウツギ属などの木本類の生育が窺える。特にツガ属を除く分類群は、石積施設SF6352よりも葉や種実が検出されていることから、比較的近傍に分布したと推定される。また、草本類ではタケ亜科やスキ属などを含むイネ科、アカザ科、アブラナ科、ヒメミカンソウ、タンポポ科などが確認された。これらは、明るく開けた場所に生育する、いわゆる人里植物に属する分類群であることから、本調査区周辺や林縁などの草地に生育していたと考えられる。

補記 一乗谷朝倉氏遺跡(第130次調査)の自然科学分析

以下、第130次発掘調査で検出した石積施設SF6352(以下、石積施設)についての土壌分析の結果を略述する。すでに『一乗谷朝倉氏遺跡資料館紀要2010』で報告済みのため、結果は、同書を参照していただきたい。本書では、土壌分析に至る経緯、分析資料と分析項目などを述べる。記述内容は本報告書が優先する。

1 石積施設の規模

本報告で述べたとおり、東西2.8m、南北1.8m、深さ1.1m程を測り、石積施設SF6353が付属する。

2 土壌分析に至る経緯

第130次発掘調査では、一乗谷朝倉氏遺跡の検出例の中で比較的規模の大きい石積施設を検出した。

施設内の堆積土は下層に暗灰色粘質土が水平堆積しており、水が溜められたと想定でき、用途は溜枘の可能性が考えられた。この石積施設より底面の高い石積施設SF6353と連結する洗い場のような機能の施設であった可能性も考えられた。更に、出土遺物にオニグルミの板材、竹材、漆器椀などの木製品のほかにも、便所で用いられた籬木に似た薄いへぎ板を多量に認めるため、便所遺構である可能性も検討する必要があった。

一乗谷朝倉氏遺跡では、多くの石積施設が検出されているが、規模や用途は様々で便所遺構と用途が判明したものもあるが、用途不詳のものも多い。そのため、石積施設の用途の解明を目的に、土壌分析が行われた。

3 委託機関 パリノ・サーヴェイ株式会社

4 実施期間 平成22年10月1日～平成23年2月15日

5 分析資料 平成21年度第130次発掘調査で検出した石積施設(SF6352)内堆積土壌サンプル4点

* 1サンプルあたり500g

資料番号① 本報告書Ⅲ層 台帳番号130-25997

資料番号② 本報告書Ⅲ層 台帳番号130-25999

資料番号③ 本報告書Ⅲ層 台帳番号130-25978

資料番号④ 本報告書Ⅲ層 台帳番号130-25976

6 分析項目 ①珪藻分析、②寄生虫卵分析、③種実遺体分析、④植物珪酸体分析、⑤花粉分析

7 分析箇所 各層の分析地点並び分析項目

①珪藻分析 4地点(資料番号①～④)

②寄生虫卵分析 2地点(資料番号②・④)

③種実遺体分析 4地点(資料番号①～④)

④植物珪酸体分析 2地点(資料番号②・④)

⑤花粉分析 2地点(資料番号②・④)

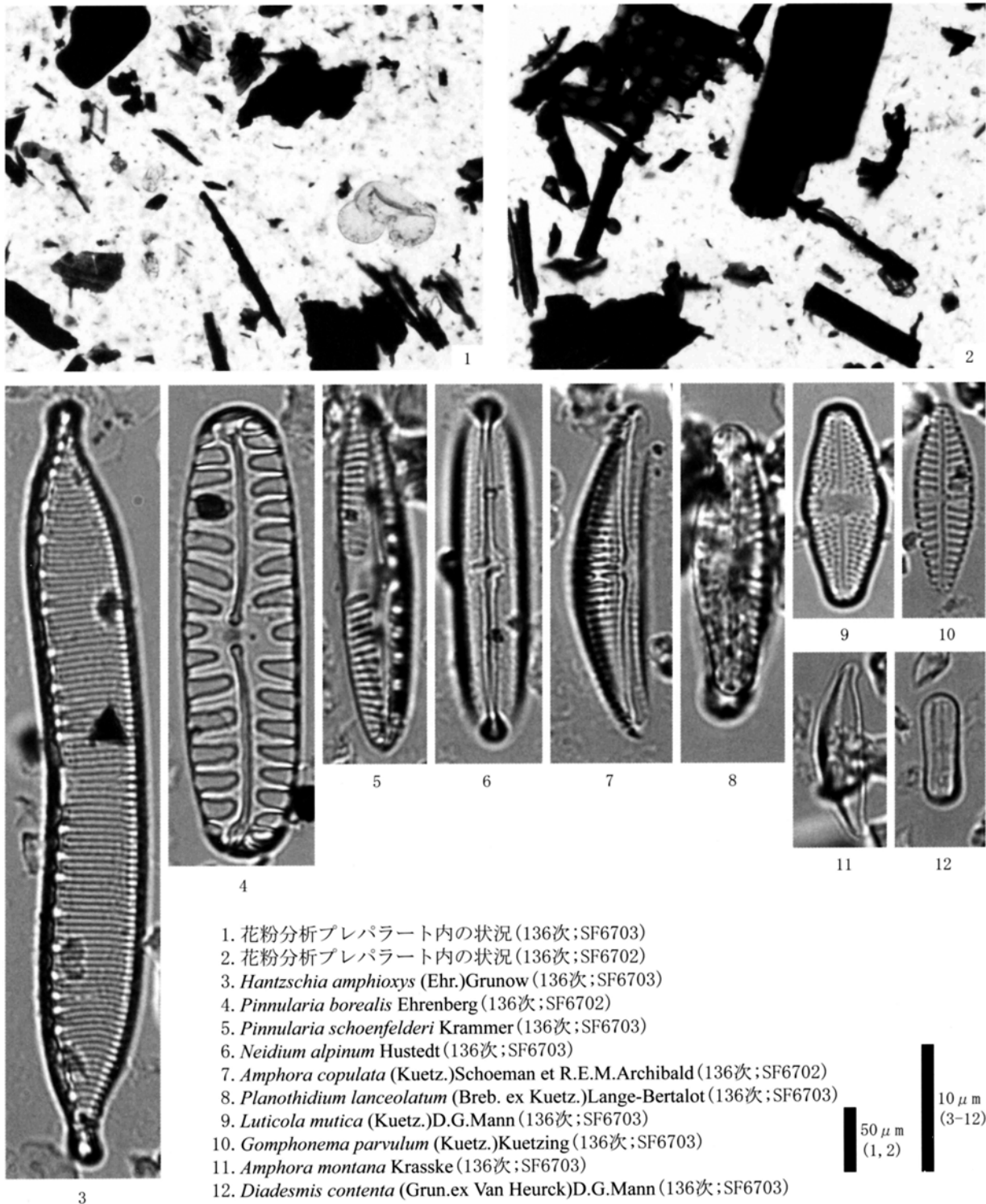
8 分析結果の概要

珪藻化石からみた水質は、Ⅳ層がある程度汚濁した水域から比較的きれいな水域、Ⅲ層では河川上流部程度であることが確認でき、さらに、寄生虫卵が少ないことから、便所遺構ではないことが判明した。なお、産出した珪藻化石が現地性を保つものと推定した場合は、遺構を設けた場所は、屋内よりも光の十分当たる野外と考えられる。

引用文献

- 安藤一男1990「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42, 73-88
- Asai, K. & Watanabe, T., 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2) Saprophylic and saproxenous taxa. *Diatom*, 10, 35-47
- 原口和夫・三友清史・小林 弘1998「埼玉の藻類 珪藻類」『埼玉県植物誌』埼玉県教育委員会, 527-600
- 石川茂雄1994「原色日本植物種子写真図鑑」石川茂雄図鑑刊行委員会, 328
- 伊藤良永・堀内誠示1991「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」『珪藻学会誌』6, 23-45
- 金原正明・金原正子1992「花粉分析および寄生虫 藤原京跡の便所遺構」『右京七条一坊西北坪』奈良国立文化財研究所, 12-15
- 金原正明・金原正子1993「史跡松江城二ノ丸番所跡SK04内堆積土の分析」『史跡松江城発掘調査報告書』松江市教委委員会, 51-56
- 金原正明・金原正子・中村亮仁1995「大宮坊跡(厠跡)における自然科学的分析」『史跡石動山環境整備事業報告Ⅱ』石川県鹿島町教育委員会, 51-70
- 小林 弘・出井雅彦・真山茂樹・南雲 保・長田啓五2006『小林弘珪藻図鑑』第1巻 内田老鶴圃, 531
- 近藤鍊三2010『プラント・オパール図譜』北海道大学出版会, 387
- Krammer, K., 1992, PINNULARIA. eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26. J. CRAMER, 353p
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1986, Bacillariophyceae. 1. Teil: Naviculaceae. Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/1. Gustav Fischer Verlag, 876
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1988, Bacillariophyceae. 2. Teil: Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/2. Gustav Fischer Verlag, 536
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1991a, Bacillariophyceae. 3. Teil: Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/3. Gustav Fischer Verlag, 230
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1991b, Bacillariophyceae. 4. Teil: Achnanthaceae, Kritische Ergaenzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/4. Gustav Fischer Verlag, 248
- Lowe, R. L., 1974, Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms. Environmental Monitoring Ser. EPA Report 670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U.S. Environ. Protect. Agency, Cincinnati, 334
- 三宅 尚・中越信和1998「森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態」『植生史研究』6, 15-30
- 中村 純1967『花粉分析』古今書院, 232
- 中村 純1980『日本産花粉の標徴Ⅰ・Ⅱ 図版』大阪市立自然史博物館収蔵資料目録』第12・13集, 91
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志2000『日本植物種子図鑑』東北大学出版会, 642
- 大田区立郷土博物館1997『トイレの考古学』東京美術, 229
- Round, F. E., Crawford, R. M. & Mann, D. G., 1990, The diatoms. Biology & morphology of the genera. Cambridge University Press, Cambridge, 747
- 佐伯秀治・升 秀夫・早川典之1998『臨床検査シリーズ寄生虫鑑別アトラス—オールカラー版』メディカルサイエンス社, 162
- 齊藤崇人・田中義文2007「寄生虫卵殻の形態分類」『徳永重元博士献呈論集』バリノ・サーヴェイ株式会社, 407-416
- 島倉巳三郎1973「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館収蔵目録』第5集, 60
- 徳永重元・山内輝子1971『花粉・胞子 化石の研究法』共立出版株式会社, 50-73
- Vos, P. C. & H. de Wolf, 1993, Diatoms as a tool for reconstructing sedimentary environments in coastal wetlands; methodological aspects. *Hydrobiologica*, 269/270p, 285-296p
- 渡辺仁治・浅井一視・大塚泰介・辻 彰洋・伯耆晶子2005『淡水珪藻生態図鑑』内田老鶴圃, 666
- 柳沢幸夫2000「Ⅱ-1-3-2-(5)計数・同定」『化石の研究法—採集から最新の解析法まで—』化石研究会 共立出版株式会社, 49-50

挿図41 花粉分析プレパラート内の状況・珪藻化石

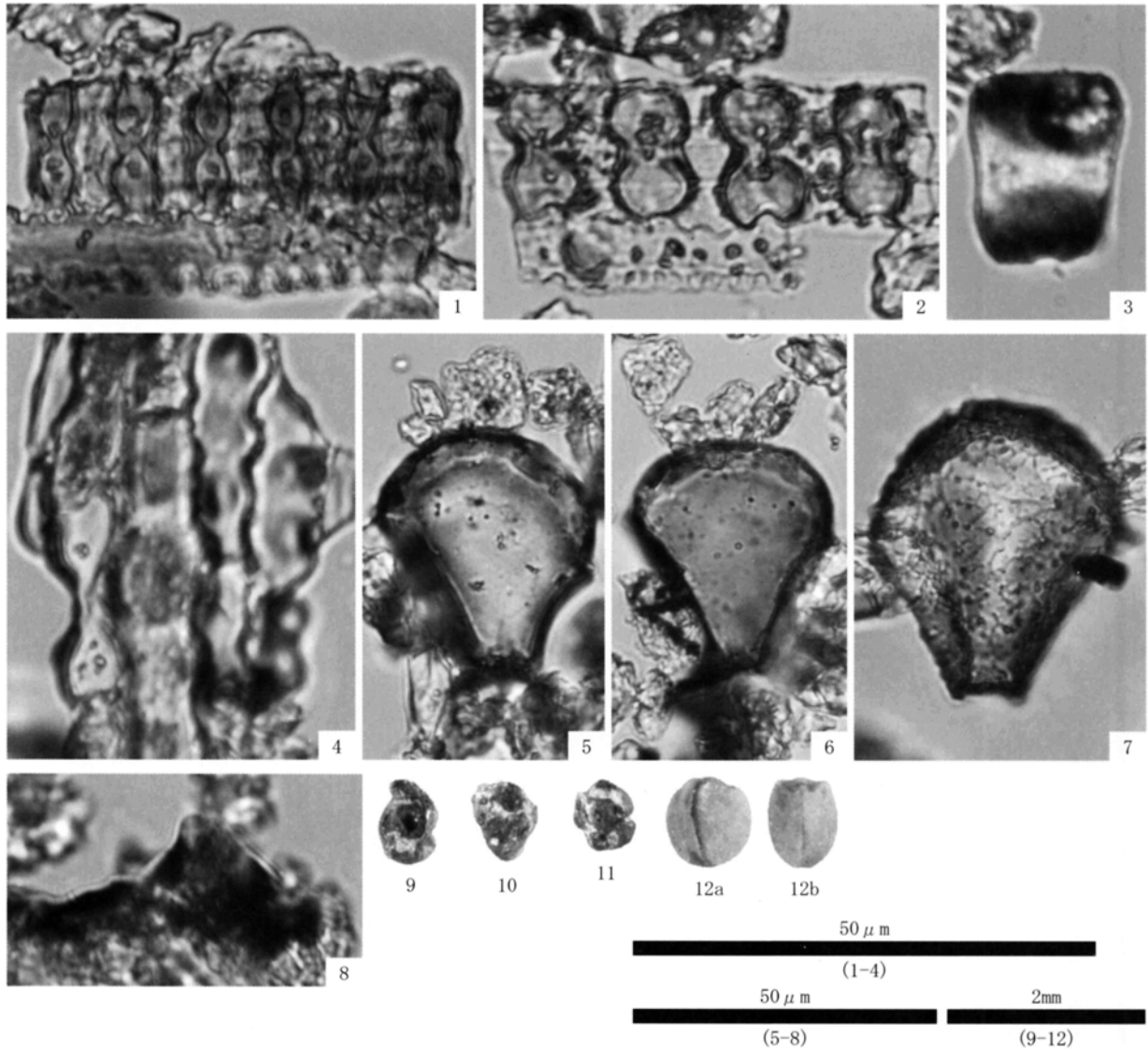


1. 花粉分析プレパラート内の状況 (136次;SF6703)
2. 花粉分析プレパラート内の状況 (136次;SF6702)
3. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.)Grunow (136次;SF6703)
4. *Pinnularia borealis* Ehrenberg (136次;SF6702)
5. *Pinnularia schoenfelderi* Krammer (136次;SF6703)
6. *Neidium alpinum* Hustedt (136次;SF6703)
7. *Amphora copulata* (Kuetz.)Schoeman et R.E.M.Archibald (136次;SF6702)
8. *Planothidium lanceolatum* (Breb. ex Kuetz.)Lange-Bertalot (136次;SF6703)
9. *Luticola mutica* (Kuetz.)D.G.Mann (136次;SF6703)
10. *Gomphonema parvulum* (Kuetz.)Kuetzing (136次;SF6703)
11. *Amphora montana* Krasske (136次;SF6703)
12. *Diadesmis contenta* (Grun.ex Van Heurck)D.G.Mann (136次;SF6703)

50 μm
(1, 2)

10 μm
(3-12)

挿図42 植物珪酸体・種実遺体



1. イネ属短細胞列 (136次; SF6703)
3. タケ亜科短細胞珪酸体 (136次; SF6702)
5. イネ属機動細胞珪酸体 (136次; SF6703)
7. タケ亜科機動細胞珪酸体 (136次; SF6703)
9. イネ 穎 (136次; SF6703)
11. イネ 穎 (136次; SF6703)

2. イネ属短細胞列 (136次; SF6702)
4. ススキ属短細胞列 (136次; SF6702)
6. イネ属機動細胞珪酸体 (136次; SF6702)
8. イネ属穎珪酸体 (136次; SF6702)
10. イネ 穎 (136次; SF6703)
12. ヒメミカンソウ 種子 (136次; SF6703)

VI まとめ

本調査区は全体的に過去の土地改良事業による削平を受けており、B1区のように広範囲に遺構が残存していなかった地区もみられ、上層に存在したと推定する建物遺構の大部分は失われるか原位置を留めていなかった。しかし一方で、掘立柱建物の柱穴のほか、溝、石積施設など地下を掘り込んだ遺構は比較的良好な状態で検出された。

大溝SD6279に伴う土塁SA6712・6713は、SA6713北側が石垣も含めて削平されているものの、遺存状況は比較的良好で、屋敷地の南辺と西辺とを区切る施設であるといえる。北方の土塁SA6365までは約63mを測り、東西方向の長さも不明確だが66m以上を測る。規模は、朝倉式部大輔景鏡館の南北約96mに及ばないものの、斉藤・平井地区の大規模武家屋敷に相当する。

A1区では多くの遺構を認める。ただ、礎石建物の規模も小さくなく、遺物の出土量も少ない。南接する上城戸地区での調査が進むと、遺構の性格も明らかになる。

B1区の南半部は、遺構の大部分が消失している。ただ、北半部には本調査区で最も規模の大きい礎石建物の北半が残り南西部に隅櫓の土台と考える施設があるため、同区内に主要建物が存在したと判断できる。量が少ないため、遺物から区画内の性格を把握することは困難だが、大きい土師質皿が南東部の土塁沿いにみられるのは酒宴後の廃棄物と思われる。

B2区の南半部は、礎石の抜け痕や礎石の抜き取り痕と考える溝があり、数は不明だが建物が存在した可能性が高い。北半部には掘立柱建物のほか、その上に建て替えた礎石建物を認める。掘立柱建物の柱は樹皮を残した丸柱やホゾ穴の付いた再利用の角材と比較的粗雑な柱材のため、簡素な作業小屋的な建物と思われる。

B3区の南半部で、礎石建物と角柱列の建物および池状遺構とその付随遺構を認める。池状遺構は、西側はB1区の礎石建物、北側はB3区の礎石建物に囲まれる点から中庭と考えられる。北半部の礎石建物の東側と北側には掘立柱列がみられ、部分的な検出ながら垣根である可能性もある。屋外施設と思われる溜枳を区切るための垣根とすると、池状遺構周辺の建物は「ハレ」の空間であると考えられる。南半部では青磁浮遊環付瓶、青白磁水注など奢侈品が出土している。なお、溜枳に水を注いだ竹管は、B5区南方の石垣をもつ溝か建物の南側の溝のいずれかにつながるものと考えられる。

B4区では、上・下層遺構面を認める。上層遺構は溝1条のみだが、下層遺構面で埋甕遺構を内側にもつ礎石建物や蔵跡を認める。周囲の雨落ち溝からは上部構造を知る手掛かりとなる建築部材が大量に出土している。角材がみられる建物の詳細については論考を参照されたい。

B5区では、炉跡を伴う礎石建物と、ガラス製遺物とその原材料を多く認める。炉跡は被熱により硬化しており、鞆の羽口も出土したことから同区はガラス製遺物の生産に関わった職人の作業空間と判断する。なお、建物南側の溝から元の染付大皿や青磁酒会壺などの奢侈品が出土したが、工房に伴う遺物とは考え難く、東側斜面上方にある平坦面からの転落品と思われる。諏訪館跡以南の段丘上に、有力者の屋敷跡のある可能性が指摘されよう。

B6区では、数条の溝と石積施設を認める。土塁の延長線上にあるため、下層遺構の可能性もある。

次に、本調査区の屋敷地の性格を遺物の組成から検討する。ただし、ガラス製遺物は第IV章で既に述べており、ガラス玉の科学分析については論考2で述べるため、土器・陶磁器の組成について検討する。

本調査区の出土遺物の割合をみると、土師質皿が最も多く約78%を占める。土師質皿はC・D類が多

く灯明皿として多く用いられる一方で、口径17cm以上のD4類も少量認められる。このような大皿は、一乗谷で普及した土師質皿の規格を超えるもので、出土地点も少なく、朝倉館跡とその周辺、当主義景の母の居住地といわれる中の御殿跡、下城戸跡外濠や下城戸内側の武家屋敷跡などである。武家儀礼は、式三献などの献盃儀礼とその後に行う宴会に分かれ、宴会では大小多法量の土師質皿を用いたとされる。文献資料から、七度入や十五度入などの皿の用途は酒盃にほぼ限られ、宴会では、廻し飲みなどの遊興的な場面で使用されたという¹。大皿の使用方法を酒盃のみに限ることはできないが、他調査区では多くない大皿が定量ある点は重要だろう。次に比率の高い越前焼は、埋甕遺構を多く認めるため、甕が約74%と多い。ガラス工場の東端に埋甕施設が並列するが、用途は不明である。ただ、米津地区でも金属工場の炉跡に付随すると思われる埋甕施設を確認した点から考えると、金属やガラス製遺物を製作する工房に必要不可欠な施設と考えられる。続く中国製陶磁器は約5.6%を占める。白磁は、青磁・染付のほぼ倍で、器種別では青磁は碗が目立ち、白磁は皿が大半を占め、染付も皿の方が多。青磁酒会壺・浮遊環瓶・托・角坏のほか、元の染付大皿や青白磁水注の奢侈品のある点が注目できる。瀬戸・美濃焼は約1%と少ない。鉄釉は灰釉のほぼ倍である。鉄釉は天目茶碗、灰釉は皿・鉢が多い。朝鮮製陶磁器は僅かで、図化できたものはない。後世の削平により遺物包含層が失われたことを考慮すべきだが、この数値を一乗谷の館群、同名衆屋敷、上・中級武家屋敷群、寺院、町屋などと比較すると(表24)、土師質皿の割合が上級武家屋敷群に近く、町屋群の約50%とは大きく異なることがわかる。また、皿類では白磁皿の割合が灰釉皿と比較して高いことも町屋とは異なる。屋敷の規模と遺物の組成から本調査地の性格を考えると、上級武家屋敷群に匹敵する有力者の屋敷と判断できよう。工房を伴う同規模の屋敷の例には、平井地区の北辺に位置する屋敷がある。屋敷の奥側に、内部に鑄造炉をもつ掘立柱建物(SB4274)があり、屋敷内に職人を抱えていたと考えられている。本調査区の工房も有力者の屋敷内に抱えられた職人の作業空間であると考えられるが、朝倉館や主要屋敷に近接する地区にある点やガラス製品という一般には流通しない希少品を製作している点から、米津地区(第124次調査)で確認した刀装具を製作する金工師の屋敷とともに、朝倉氏直属の職人集団が製作を行った場所と考えられる。

表24 一乗谷出土の遺物組成表 岩田隆「一乗谷の消費と流通」² 第2、3表を改変

館群は、朝倉館・中の御殿・南陽寺跡の集計。同名衆屋敷は朝倉屋敷館と59次調査地区の集計。上級武家屋敷は、平井地区の山根の武家屋敷群の集計。中級武家屋敷は、49次武家屋敷、50次武家屋敷、医師の家の集計。町屋は36次調査区。寺院は40次寺院、サイゴ寺、西山光照寺の集計。

	館群		同名衆屋敷		上級武家屋敷		中級武家屋敷		町屋群		寺院群		米津地区		門ノ内地区		
	破片数	比率	破片数	比率	破片数	比率	破片数	比率	破片数	比率	破片数	比率	破片数	比率	破片数	比率	
土師質土器	121,300	0.92	66,991	0.92	33,223	0.70	13,895	0.58	32,583	0.57	36,107	0.58	21,533	0.59	29,531	0.87	
越前焼	6,111	0.04	3,264	0.04	9,951	0.21	6,413	0.27	16,949	0.30	18,447	0.30	13,842	0.38	3,655	0.10	
鉄釉	碗	444	0.36	266	0.39	281	0.23	274	0.34	615	0.33	777	0.47	261	0.30	167	0.30
	皿	5	0.00	4	0.00	3	0.00	25	0.01	34	0.00	31	0.00	36	0.01	3	0.00
その他	113	14.00	120	0.24	118	0.19	105	0.29	369	0.47	837	0.50	157	0.07	76	0.15	
灰釉	碗	49	0.40	32	0.04	113	0.09	48	0.06	119	0.06	94	0.05	31	0.03	19	0.03
	皿	110	0.05	127	0.10	96	0.04	152	0.06	853	0.20	523	0.14	269	0.12	66	0.04
その他	108	0.14	58	0.11	173	0.28	30	0.08	70	0.09	170	0.10	90	0.23	63	0.13	
青磁	碗	241	0.19	167	0.24	469	0.39	242	0.30	672	0.36	237	0.14	358	0.41	193	0.34
	皿	264	0.13	97	0.08	251	0.11	430	0.19	488	0.11	284	0.07	232	0.10	115	0.08
その他	300	0.38	80	0.16	213	0.34	159	0.45	251	0.32	518	0.31	56	0.14	203	0.42	
白磁	碗	16	0.01	12	0.01	41	0.03	12	0.01	32	0.01	126	0.07	13	0.01	17	0.03
	皿	1,208	0.61	626	0.53	1,304	0.61	1,121	0.50	1,564	0.37	1,528	0.42	992	0.44	926	0.69
その他	177	0.02	48	0.09	77	0.12	49	0.13	51	0.06	72	0.04	78	0.20	55	0.11	
染付	碗	458	0.38	202	0.29	280	0.23	218	0.27	418	0.22	397	0.24	204	0.23	157	0.28
	皿	366	0.19	319	0.27	469	0.22	493	0.22	1,259	0.29	1,215	0.33	703	0.31	219	0.16
その他	84	0.10	184	0.37	35	0.05	9	0.02	36	0.04	64	0.03	8	0.02	81	0.16	
碗合計	1,208		679		1,184		794		1,856		1,631		867		553		
皿合計	1,953		1,173		2,123		2,221		4,198		3,581		2,232		1,329		
他合計	782		490		616		352		777		1,661		389		478		

註・参考文献

- 1 阿部来「土器皿から見た中世後期の越前」『一乗谷朝倉氏遺跡資料館紀要2008』福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 2009年
- 2 岩田隆「一乗谷の消費と流通」『戦国大名朝倉氏と一乗谷』水野和雄・佐藤圭編 高志書院 2002年

Ⅶ 論考

＜論考1＞礎石建物SB6258の上部構造の復元考察

1 はじめに

礎石建物SB6258(挿図43)の検出状況は火事場の様相を呈しており、大量の炭化物とともに雨落溝からまとまって出土した木製品は、焼け残った屋根の端の部材と推定されてきた¹(挿図44)。これら建築部材の形状と技法は本報告書「Ⅳ. 遺物 建築部材」で述べたとおりである。本項では、中世都市一乗谷を構成する建物の形状と技法の一端を明らかにすることを目的として、礎石建物SB6258の上部構造について復元考察を試みたい。具体的には検出遺構と出土部材の直接資料と、一乗谷朝倉氏遺跡(以下、一乗谷)におけるこれまでの調査の成果から、SB6258の平面構成と基礎廻りおよび軒廻りを中心とした屋根について検討する。そのうえで現存する建築に関する建築史の調査研究の成果、ならびに絵画や文字史料の間接資料から検討を加え、最後に中世末期の建物構造としての知見をまとめる。

¹ なお、今回の復元考察では、建材の断片をもとに全体を矛盾なく構築することを目指したが、用途を特定できる部材は限られ、推測の範囲を出ない部分も大きい。資料の制約のため、上部構造すべてを検討しきれない限界をもつことをあらかじめお断りしておきたい。

2 遺構の立地と概要

今回の調査地は「門ノ内」と称される地字で、城下町の玄関口である上城戸から北に約100mの距離に位置する地区である。検出面の年代は削平された上層、つまり一乗谷が廃絶した1573年(天正元年)直前よりも古い時期の16世紀代が中心とみられる。

地区の性格については、大溝SD6279と土塁SA6712・6713・6365により区画される東西60m、南北70mほどの大規模な屋敷地と推定される。その主な根拠は、土塁で囲繞されることに加え、土塁内には一乗谷では普遍的に検出される井戸や街路という都市基盤がなく、一般の都市空間との相違が顕著であり、また、一乗谷の大規模な屋敷地内で検出される例のある工房的施設(ガラス工房SB6375・SX6376)が存在するためである。そして、青白磁水注などの出土遺物にみる居住者の高い階層性は、ここが大規模な屋敷地と考えられることと矛盾しない。遺構の遺存状況が良好ではなかったことから、全体の空間構成を明らかにする上では制約が大きいですが、少なくとも「門ノ内」地区は一乗谷における武家屋敷を規定



挿図43 礎石建物SB6258全景(南より)



挿図44 SB6258雨落溝の遺物出土状況(一部)

する遺構と遺物が認められる地区である²。

こうした大規模な屋敷地内で検出された礎石建物SB6258は、土塁と山裾が接続する屋敷地内の隅に建てられている。建物内の一部が埋甕遺構SK6259～6271で占められていることから、屋敷地の中心建物ではなく、貯蔵機能を備えた付属屋のひとつとみられる。屋敷地の入口と推定される、土塁を切り設けられた道SS6275に近接するのも、貯蔵施設として運搬の便が考慮されているのかもしれない。なお、石敷建物SB6257が北東に隣接していたようであるが、山裾に埋まっており詳細は不明である。

SB6258の周囲には、南と東および北の三方を囲むように雨落溝SD6272・6256がある。遺構は西側の調査区外へ続くため、さらに西側へ延びた平面形が予想される。雨落溝の内部には、平行して礎石列が配置され、さらに礎石列内部には先述の複数の甕が南半に集中して埋設されている。この埋甕の上位には、廃絶時の火災の影響とみられる炭と大量の焼土の堆積が顕著である。多くの鉄釘の出土も火災後の様子として矛盾がない。礎石の遺存状況は比較的良好であるが、建物内部の礎石の有無は不明で、また礎石上面に柱痕跡は残っていなかった。しかし、東端の礎石列中央には、柱礎石と見られる大きな礎石が配されており、またほかの礎石列にも、石の大小と配置の規則性により柱位置を読み取ることができる。

3 検出遺構にもとづく平面構成と基礎廻りの構造

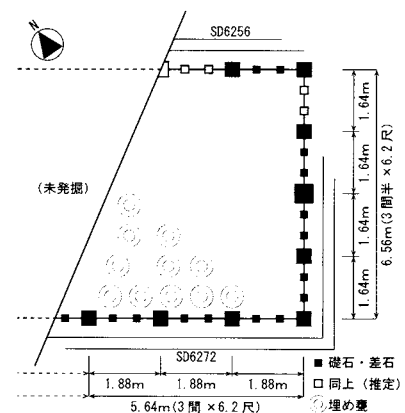
まず、検出遺構を主要な材料として、平面構成および基礎廻りの構造を検討してゆく。

① 平面形式 平面形式を述べるにあたり、検出された平面形がほぼ正方形に近いため、最初に桁行と梁行の方向を確定しておく。東端礎石列の南北方向中央の礎石は、棟持柱礎石とみられ、径0.3～0.5mを測るほかの礎石に比べ、長径0.7m、短径0.6mと際立って大きい。建物内部ではなく、側廻りに棟持柱が立つ建物の屋根形式としては、入母屋造や寄棟造ではなく切妻造が知られる。よって、SB6258は東妻壁に棟持柱が立ち、東西方向に棟が走る切妻造であったことが推定される。したがって、東西方向が桁行で、南北方向が梁行と考えられる。

平面形式は、桁行と梁行の方向や礎石の大小、雨落溝との位置関係などを勘案すると、桁行3間以上、梁行4間となる(挿図45)。梁行2間とみることも不可能ではないが、柱間を飛ばすには若干広く、礎石の間隔から梁行全長を4等分したと考えられる。また、内部空間は無柱では構造的に限界と思われるほど柱を飛ばしているため、少なくとも埋甕の途切れる調査区西端の柱筋には礎石があったと予測され、今後の追調査が待たれる。

平面規模は桁行5.64m(18.6尺)以上、梁行6.56m(21.7尺)で、柱間寸法は桁行方向は1.88m(6.2尺)の等間、梁行方向は1.64m(5.4尺)の等間である。一乗谷で一般的な6.2尺を1間とする基準寸法の換算では、規模は桁行3間以上、梁行3間半である。柱間の寸法は、桁行方向は1間、梁行方向は梁行全長3間半を4つ割りした7/8間となる。つまり、平面規模は一乗谷で一般的な基準寸法で計画されており、また、柱位置の決定方法には桁行と梁行とで違いが認められる。

こうした平面計画の仕方は、一乗谷の礎石建物としては変則的といえるものの類例がある。例えば、第29次調査の町屋SB1022³は、6.2尺を1間として桁行3間半、梁行2間半の規模で、桁行方向は半間毎に礎石が配されているが、梁行方向は梁行全長を2



挿図45 SB6258模式図

つ割りした位置に大きな礎石が配されており、SB6258と類似する平面形式を持つ。こうした事例を踏まえると、建物の平面規模は基準寸法で決定される一方、梁行全長が2間半や3間半など完数とならない場合や、奇数となる建物において、その棟通りにあたる中央列に柱を配置することを意図した場合に、偶数の等割りによる柱位置の決定が生じた可能性が考えられる。

② **基礎と床** 礎石は、桁行と梁行で配置される間隔が異なるものの、柱礎石間に差石⁴を2石並べることが共通しており、基礎の構造には桁行と梁行で違いはみられない。また、柱礎石と差石の大きさは異なるものの、天端の高さはほぼ水平で揃っており、土台などの水平材をわたすことのできるつくりとなっている。隙間なく並ぶ礎石列の場合、礎石のう上に土台を廻らす土台建がこれまでの調査成果でも知られている⁵。しかし、SB6258の礎石には、柱配置や個々の柱径に応じた規則性が読み取れることから、柱と礎石の間に土台が介在したというよりは、礎石に柱が直接立っていた可能性が高いとみられる。つまり、差石は地覆座の働きをしたと思われ、礎石に柱を直接立て、柱と柱の間に地覆をわたした基礎構造であったと推定される。

床は、屋内の一部が埋甕で占められていることから明らかなように土間床である。基礎に認められた特徴も、土間床であることと整合的である。礎石間の地覆は、柱間装置の足元の見切りが地面近くに設けられていたことを示唆する。また、礎石の面(ツラ)が屋内側で揃えられていることから、屋内側は床張りではなかったと考えることができる。ところで、今回の検出範囲には内部に柱がなく、柱を飛ばした一室空間であったことが窺えたが、こうした土間床で貯蔵機能を備えた建物としては妥当な間取りといえよう。

③ **柱と壁** 柱痕跡はないが、柱の大きさは礎石上面の平坦部に載る、径20cm以下程であったと考えられる。6.2尺基準の柱間寸法を用いることや、その柱間寸法で建てられた建物で、これまでに確認されている柱痕跡の柱径など⁶を勘案すれば、柱径は4.3寸程(約13cm)が妥当であろう。傍証として雨落溝からは全体が炭化して欠損が激しいが、軸部材と考えられる材径13cm程の角材(表6-ウ)が出土している。

先述のとおり、東妻壁中央の柱は棟持柱と考えられ、礎石は長径0.7m、短径0.6mと際立って大きく、柱径も4.3寸角よりも太かったと考えられる。近似する大きさの礎石の事例として、一乗谷最大の建物遺構である朝倉館跡の礎石建物SB10(常御殿)がある。SB10は長径0.8m、短径0.5m程度の礎石が多く、また柱痕跡から、柱径が5～6寸程(約15～18cm)であったことが明らかにされている⁷。このことから推定すれば、SB6258の東妻壁中央の柱も5～6寸以上の大きさがあったと考えられる⁸。

また、上部構造を考える手掛かりとして今回注目されるのは、雨落溝で検出した格子状竹製品(挿図25・26、表6-ケ)である。屋根の端部に推定される一具の部材とともに出土したことから、これまで軒裏の木舞組と考えられてきた⁹。しかし、屋根の部材としては細く、付属屋としては瀟洒なことから、本項では壁の木舞組と推定した。幅2cm程を測る割竹が間渡し竹で、それに直交する茅の束(径0.5cm内外、2～3本程)が木舞と考えられる。したがって、壁は土壁であったと推定される。一乗谷のこれまでの発掘調査で、焼土化した土壁片が出土しており、径0.3～0.6cmの茅2～3本を束にして2.4cm程度の間隔で格子状に組んだ木舞があることが知られている¹⁰。今回、出土した壁木舞組は、木舞茅の間隔が6cmと広く、欠損が少なくないが、一乗谷にこれまでに出土している土壁に見られた壁木舞組とよく一致した特徴を示す。ただし、間渡しに割竹が用いていたと考えられることは、一乗谷においては新しい知見といえよう。

4 出土部材にもとづく軒廻りを中心とした屋根の構造

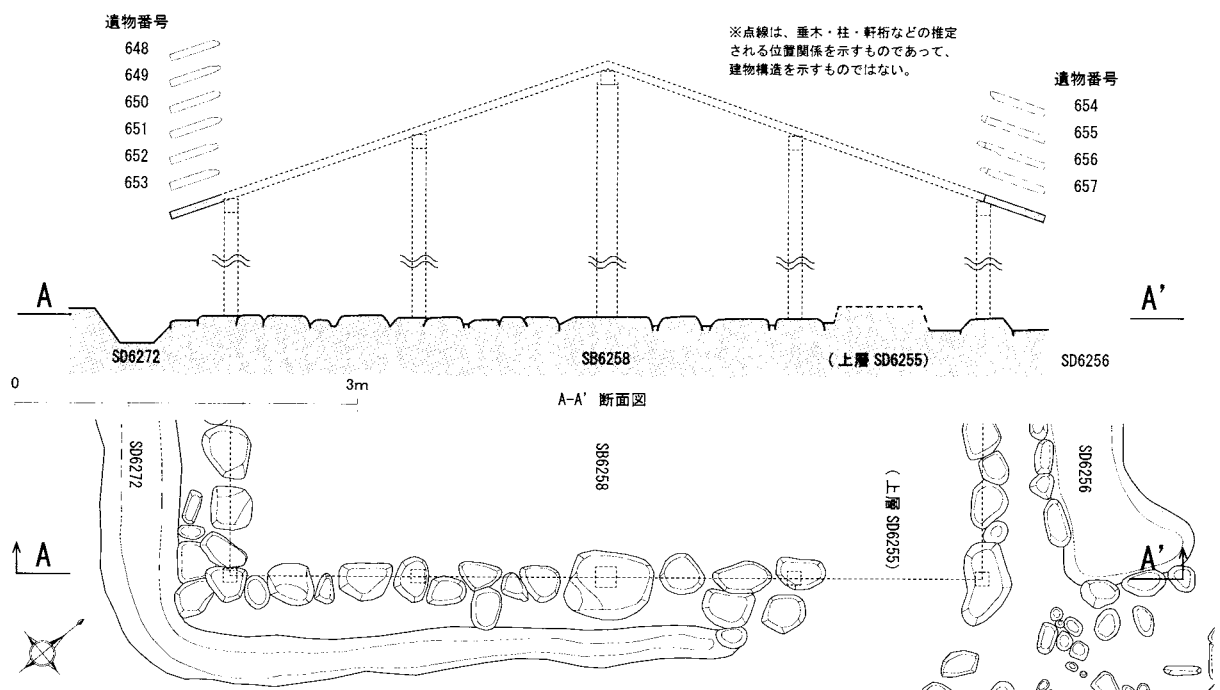
ここからは、出土部材を主要な材料として、軒廻りを中心とした屋根について検討してゆく。

① 軒の出と垂木 先述のとおり、屋根形式は、東妻壁に棟持柱が立ち、東西方向に棟が走る切妻造であったと推定される。その軒の出は雨落溝と建物の位置関係から、ある程度推定することができる。柱芯から雨落溝の内上角までの距離は50cm程であり、そして柱芯から雨落溝の中心までの距離は80cm程である。よって、軒の出は、南北ともに柱芯から屋根葺材外で50~80cm程(2尺程)と考えられる。東妻側の雨落溝の位置から推定される螻羽(ケラバ)の出も同程度とみてよいであろう。

この南北の雨落溝からは、断面長辺3.5寸、短辺2寸というほぼ同じ断面寸法の芯持ちの角材計10本(遺物番号648~657)が出土している。冒頭でも述べた焼け落ちた屋根の端と考えられる部材のひとつである。一方の端が炭化しており完形ではないものの、南北の雨落溝でそれぞれ燃え残った長さが揃っており、遺存状況は特異である。柱としては細いこともあり、これが母屋桁などの小屋組の構成材とこれまで考えられてきた¹¹。しかし、屋根の構成材であるとするれば、跳ねだし状に使用されていたことが釘位置から読み取れることと、それが建物の平側から出土したことから、その用途は母屋桁ではなく、垂木と推定される。

この垂木に推定される角材は、釘が短辺方向に貫通しているため、五平すなわち横長断面に使用されていたことが明らかである。幅3.5寸程と幅広の材になることから、広い間隔で垂木を配する「疎垂木」の形式であった可能性が考えられる。出土した本数が10本程と決して多くないことは、焼失した可能性のほか、疎垂木のためそもそも垂木が少なかったためかもしれない。

いずれにしても、この角材を垂木と推定する上で何よりも注目されるのは、釘が貫通している位置から先端までの長さが、雨落溝から推定される軒の出とほぼ一致する点である。角材のうち、北雨落溝で出土したもの(遺物番号655~657)には、先端から55cm程の位置に鉄の角釘が貫通しており、垂木とすれば軒桁に釘打ちしたことが考えられる。先述の雨落溝から推定される軒の出が50~80cmであること



挿図46 出土角材の釘位置にもとづく軒の出(推定)と雨落溝の位置関係

と、後述のそぎ板から推定される板葺屋根の緩勾配から勘案すれば、先端から55cm程の距離は、軒桁に垂木を釘打ちする位置として妥当な数値といえよう(挿図46右)。南雨落溝から出土したもの(遺物番号648~653)も、釘痕はないものの、残存長45.7~48.5cmと長さがほぼ揃っている。これは、復元される軒桁外面から垂木先端まで、すなわち、壁面より突出した部分の長さとも一致する(挿図46左)。つまり、南面の垂木は火災による廃絶時に、軒桁との接合部が焼失し、間もなく雨落溝に落下したと考えられ、北面の垂木は、軒桁との接合部が完全に焼失する前に何らかの理由で軒桁から脱落し、釘を残したまま雨落溝に落下したものと考えられる。

② 屋根葺材 上述の垂木に推定される角材に伴い、雨落溝から複数枚が重なった状況で出土したそぎ板(遺物番号641~644)は、垂木と共に屋根を構成していた可能性が考えられる部材である。そぎ板の用途を網代と考えることも不可能ではないが、網代として機能するには短く、複数枚出土しているにも関わらず端部が斜めに切断されたものはない。また、ほとんどが板目であり、曲げ物に利用されるものほど年輪も詰まっていない。こうした形態的特徴や出土状況から勘案すると、そぎ板は屋根葺材に比定される。

一乗谷ではこれまで瓦が出土しておらず、屋根葺材は植物性素材であったことが確実視されている。今回のそぎ板の類例には、第51次調査の礎石建物SB3065から大量に出土したそぎ板がある¹²。SB3065のそぎ板もほとんどが板目であり、また幅、厚さもSB6258のそぎ板とよく似ることから、同様の規格のそぎ板が流通していたものと思われる。SB3065のそぎ板には残存長53cm程の2尺に近い長さのものがあるので、完形のもので出土していないSB6258のそぎ板ももう少し長かった可能性が考えられる。

さて、この屋根葺材と考えられるそぎ板の表面には、顕著な割肌が認められるものの、想定される重なりによる風触差は確認できない。しかし注目されるのは、複数枚出土しているにも関わらず、SB3065のものと同様に釘穴が認められないことである。板葺屋根のうち、このように釘を打たずに短いそぎ板を葺く方法は、葺板を竹釘で押さえる「柿葺」ではなく、石や丸太、割竹などで葺板を押さえる「取葺」である¹³。

葺板を押さえる長い割竹や、置き石の出土は今回確認されていない。しかし、みかん割りの部材(表6-I)が出土している。これが屋根葺材と一具の部材であったとすれば、押え木として用いられた可能性が考えられる。すなわち、押え木に置き石を据えた石置板葺屋根であったと推定される。しかし、発掘調査において屋根の置き石の有無を看破するのは困難であり、またこれまでの発掘調査においても屋根の置き石を示唆する明確な成果はないので、石置板葺屋根である妥当性については、間接資料の類例などをもとに後述する。

いずれにしても、板葺屋根であれば、茅葺屋根のような矩勾配や瓦葺のような4寸以上の屋根勾配は考え難く、屋根勾配は4寸以下の緩勾配であったと推定される。

③ 屋根下地 以上の垂木に推定される角材と屋根葺材に推定されるそぎ板に伴い、雨落溝からは丸竹や割れた竹の出土が少なくない(遺物番号645~647、表6-カ・キ)。丸竹は、先端が鋭角に切り落とされているほかには痕跡はない。また割竹も意図的に割ったものなのか判然としないため、用途を断定することは難しい。しかし、屋根に用いられた部材であるとするなら、屋根下地で用いられた可能性が考えられる。葺板を押える割竹と考えることも不可能ではないが、割れた竹より丸竹の出土が多く、丸竹で使用されたものが多かったと考えられる。また、断面寸法は大きく分けて径1.2寸と径2寸の2種があるから、用途としては細い方は木舞、太い方は屋中などが考えられる。しかし、憶測の域を出ないため、今回は用途として考えられる可能性を記すにとどめる。なお、竹の建材利用を考えるうえで参考に

なるものとして、第46次調査で出土した木製の戸¹⁴がある。木の棧を覆う割竹が遺存しており、竹が戸の意匠に用いられることもあったことが知られる。こうした建物の意匠に及ぶ竹の利用は、一乗谷において竹の建材利用が進んでいた事を示唆する。

ところで、先述の垂木には、軒桁への釘打ち以外に仕口や加工痕は認められなかった。しかし、縄を巻いて部材を組む「縄搦み」のような固定方法ならば、仕口などの切削が伴わないため、顕著な痕跡が残らなかった可能性は否定しきれない。よって、垂木の他部材への固定方法は、軒桁などの軸部材に対しては釘打ちで行った一方、竹木舞などの屋根下地に対しては縄搦みで行った可能性が考えられる。推定される板葺屋根が、比較的短期間で更新を要するものであり、職人の手によらずに屋根を葺く「結い」のような民俗事例があることをふまえるなら、屋根下地の固定も、釘打ちよりも手直しの容易な縄搦みが合理的といえる。また、そもそも竹に木を継ぐことを考えれば、竹は釘打ちすると割れるため、竹の固定方法は釘打ちより縄搦みが合理的である。したがって、垂木に屋根下地との接合を示す釘跡がなかったのは、屋根下地の材料が竹であったためと解釈することができる。

5 間接資料による上部構造の検討

推論を重ねたが、発掘調査の成果から考えられる礎石建物SB6258の上部構造は、上記の通りである。では、中世都市を構成する屋敷地に建てられた付属屋のひとつとして、どのような特徴が読み取れるのであろうか。次に現存する建築遺構や絵画史料などの復元の参考となる間接資料から検討を加え、復元されるSB6258の姿について検証してみたい。

① 基礎廻りにみる近世建築との類似点 まず、明らかに言えるのは、SB6258の礎石建の基礎構造および6.2尺基準の柱間寸法は、一乗谷で発掘される建物に普遍的に認められる特徴ということである。さらにこれらの特徴は近世を先取りしたもので、中世における都市の建物の先進性を示唆するものである。礎石建が庶民にも広く普及するのは近世以降であり¹⁵、また6.2尺基準の柱間寸法も、近世に建てられた越前の民家にも広くみられる「越前間」として知られるものである¹⁶。つまり、一乗谷で発掘される建物の基礎廻りの形式と技法は、近世民家のものと大きく変わりがない。

今回検出された茅2本1組の木舞と割竹の間渡しを用いた木舞組も、近世民家における代表的な壁木舞組と同じであり、越前の近世民家もほとんどこの形式の壁木舞組が用いられている¹⁷(挿図47)。2本1組の木舞茅はこれまでに発掘された壁土¹⁸にみられた技法ともよく一致するため、一乗谷においては、近世の壁木舞組と形態的に類似する土壁が既に普及していたことが示唆される。礎石建、越前間の柱間、



挿図47 越前の近世民家の壁木舞組の例(池田町)



挿図48 17世紀の永平寺塔頭の石置板葺屋根建物²⁴

そして見切りの水平材と壁木舞組からなる土壁は、今日みることのできる越前の近世民家の壁の構成と変わりが無い。つまり、礎石建や越前に根強く認められる基準柱間寸法と同様、壁木舞組の技法もまた、一乗谷の時代には既にある程度方向づけられていたと考えられる。

妻壁の棟持柱は一乗谷では類例の少ない形式といえるが、SB6258は、以上の様に基礎廻りと壁木舞組には一乗谷に広く見られる近世と類似した形態的特徴がみられるため、変則的ながら一乗谷の建物の一形式であったとみてよい。

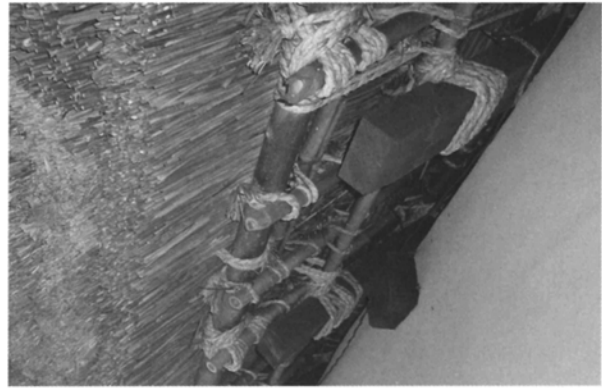
② **妻壁棟持柱と石置板葺屋根** 妻壁棟持柱は現存する日本建築では、神明造(伊勢神宮本殿など)や大社造(出雲大社本殿など)などの古い様式の神社建築を特徴づけるものである。一方で、岐阜県や長野県、山梨県、群馬県など内陸県の一部の民家建築にもみることができる¹⁹。一乗谷と同時代の京都の中世町屋は現存しないが、『洛中洛外図屏風』歴博甲本や上杉本などの描写から妻壁棟持柱が想定されている²⁰。そして一乗谷から直線距離10km程に所在した安達仲屋家住宅(1754年：池田町旧指定文化財：池田町)²¹は、かつて越前に広くみられた石置板葺屋根で²²、妻壁に棟持柱を用いた民家建築であった。妻壁棟持柱は柱が直接棟を支えるもので、軸組と小屋組とが分離した構造を基本とする日本建築では一般的とは言えないが、このように一乗谷と同時代または同地域の民家建築に認められる構造形式のひとつである。

ところで、これら妻壁棟持柱の民家建築は、切妻造の石置板葺屋根であることが多い²³。その理由は、入母屋造や寄棟造の場合は棟が妻壁に達しないため、切妻造以外で妻壁を棟持柱とするのは構造的に不可能だからであり、そして、切妻造の葺材は瓦葺が普及する以前は茅葺よりも板葺が一般的であったからである。近世ではあるが、北陸地方の板葺民家の現存建築を見てみると、国指定重要文化財(以下、「重文」)の松下家住宅(19世紀：金沢市)と白山麓白峰の小倉家住宅(19世紀：重文：白山市)および杉原家住宅(1864年：石川県指定文化財：白山市)などにおける葺板の固定方法は置き石である。一乗谷から地理的に近い例では、先述の安達仲屋家住宅のほか、17世紀の永平寺境内と門前を描いた絵図²⁴にも、石置板葺屋根の町屋と塔頭の建物が認められる(挿図48)。こうした石置板葺屋根は、『邦訳 日葡辞書』で「釘付けにしないで屋根を葺く葺き方」と記されている「Toribuki.トリブキ」と当時呼ばれたものである²⁵。『洛中洛外図屏風』歴博甲本や上杉本でもよく知られるもので、京都の中世町屋の屋根は短い板で葺かれ、押さえの割竹の交点に石を置く、石置板葺屋根が描かれている。したがって、時代的にも地域的にも、SB6258の屋根葺板の押え材は置き石が妥当であると考えられる。

③ **竹の屋根下地と縄搦み** 以上の様に、SB6258は京都の中世町屋や安達仲屋家住宅といった、妻壁棟持柱をもつ切妻造の石置板葺屋根民家に類似した外観の建物であったとすることができる。つまり、近世的な特徴をみせる基礎廻りよりうえの上部構造については、むしろ中世以来の特徴をもった形式であったことが想定される。

SB6258の屋根下地に竹を用いていると考えられる点は、現在知られている石置板葺屋根民家とはやや異なる点である。越前の重文民家に多い茅葺屋根では下地に竹が多用されるが、板葺屋根で下地に竹を用いることは全国的にも一般的ではない。しかし、板葺屋根でも下地に竹を用いる例は僅かだが存在する。中世の絵画資料をみても、京都六角大宮の星光寺にあった屋根葺地蔵の霊験を描く『星光寺縁起絵巻』(15世紀：重文)に石置板葺屋根の町屋の垂木が竹で描かれている²⁶。また、関東の事例になるが、石置板葺屋根民家の茂木家住宅(17世紀：重文：富岡市)と、新井家住宅(1745年：重文：長瀬町)の屋根下地は竹により構成され、茅葺の下地と同じく屋中竹(母屋竹)、降り竹(垂木竹)、そして割竹の

野地木舞をのせ、小屋扱首への固定はあけび蔓を用いた縄搦みとなっている²⁷。なお、竹ではないが、木舞などの材の垂木の固定に蔓や縄搦みが用いられることは、田中家住宅²⁸(18世紀：重文：高山市)などの飛騨地方に現存する石置板葺屋根民家でもよく知られるところである。



挿図49 瓜生家住宅の軒先(鯖江市)

ところで、垂木は、断面が短辺2寸、長辺3.5寸程で、五平(断面が横長)に使用されていると考えられた。福井県下の現存民家でも五平の垂木が確認できるため²⁹、地域の伝統的な使用の仕方とも考えら

れる。なかでも瓜生家住宅(17世紀：重文：鯖江市)は、扱首組の茅葺屋根である点がSB6258と大きく異なるものの、扱首尻の刺さる上屋桁から下屋桁渡される野垂木は五平である(挿図49)。そして、その野垂木は軒桁には釘打ちで固定されている一方で³⁰、竹の屋根下地とは縄搦みで固定されており、今回推定した軒廻りの構造との形態的相似点が多い。

④ **そぎ板の寸法と中世樽の規格** 先述の『星光寺縁起絵巻』には、路上に吹き散らかった屋根の葺板を集める女性も描かれており、脇に何枚も抱える様子からいっても、京都の中世町屋の屋根葺板はそう長いものではない。今回、葺板と推定したそぎ板は、最大残存長32.6cm(1.1尺)、幅7.7cm(2.5寸)、厚さ0.3cm(1分)程である(表25)。葺板としての妥当性を類例の寸法から検証してみたい。

板葺民家の葺板は、一律ではなく様々な大きさがあるが、現存遺構には近似値をもつ事例がある程度認められる(表26)。例えば、瓜生家住宅で修理解体中に発見された「杉こけら板」とされる古材³¹は長

表25 SB6258出土そぎ板の寸法

No	名称	所在	年代	葺方呼称	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	樹種	備考
1	SB6258出土そぎ板	福井県	16C.	—	326	77	3	—	最大残存長

表26 近世民家の屋根葺板の寸法

No	建物名称	所在	年代	葺方呼称	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	樹種	備考
2	瓜生家住宅	福井県	17C.	—	360	100	3	杉	古材、庇
3	安達仲屋家住宅	福井県	18C	樽葺	390~460	110~160	5~7	栗	
4	小倉家住宅	石川県	19C.	平木羽板葺	600	150~	18~	栗	
5	松下家住宅	石川県	19C.	木羽葺	550	120~150	3~4.5	樺	
6	田中家住宅	岐阜県	18C.	割板葺	850	140	7.5~10	栗	
7	浮田家住宅	富山県	19C.	板葺	300	90	3	栗・樺	
8	渡辺家住宅	新潟県	19C.	木羽板葺	360	90~	3	杉	
9	生方家住宅	群馬県	17C.	板葺	300	90	3	栗	
10	茂木家住宅	群馬県	17C.	くれ板葺	300	—	4.5	杉	
11	新井家住宅	埼玉県	18C.	くれ板葺	390	90	6	栗	

表27 中世の屋根葺板の寸法

No	建物名称	所在	年代	葺方呼称	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	樹種	備考
12	大山祇神社本殿	京都府	15C.	—	333~666	60~110	2.7	—	覆屋内

出典：No.2「瓜生家住宅保存修理工事報告書」1975、No.3「安達仲屋家住宅調査報告書」2015、No.4「小倉家住宅修理工事報告書」1964、No.5「旧松下家住宅保存修理工事(移築)報告書」2006、No.6「旧田中家住宅修理工事報告書」1973、No.7「浮田家住宅保存修理工事報告書」1983、No.8「渡辺家住宅修理工事報告書」1984、No.9「生方家住宅移築修理工事報告書」1973、No.10「茂木家住宅保存修理工事報告書」1987、No.11「新井家住宅修理工事報告書」1975、No.12「大山祇神社本殿修理工事報告書」1966

さ36cm、幅10cm内外、厚さ0.3cmというように各寸法が近似する。こうした寸法が中世まで遡れるか定かではないが、応永26年(1419年)建立の京都園部の大山祇神社本殿は、覆屋の中にあつたために当初と考えられる葺板が残されており、その寸法は長33.3～66.6cm、幅6～11cm、厚さ0.27cmであつたことが報告されている(表27)。この長さは、2尺2寸とそれを2つに分割した1尺1寸である。

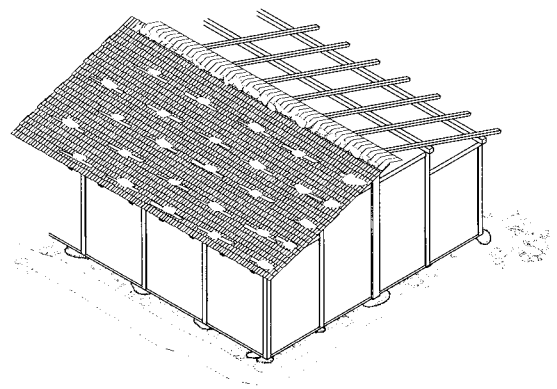
ここで注目されるのが長さ2尺2寸という数字で、中世の畿内で流通したとされる「小樽」の長さ2尺2寸5分に近似する³²。福井県の中世史料に比較的多くみられ流通の様子が知られる材木に「樽」があり、「一乗谷でも瓦は出土しておらず、(中略)当時の屋根葺き用の板材は樽とよばれ、大量に流通し消費された」³³ことは以前から指摘されてきた。越前海岸の河野浦から馬借によって府中(武生)に運ばれた塩・樽をめぐる相論については多くの史料が残されている。樽は塩と同様に馬借で大量に運搬されていたから、古代の『延喜式』にみられた1丈2尺(約3.6m)のように長大な材ではなかつたことは明らかである。つまり、先述の中世の畿内で流通した「小樽」の2尺2寸5分(約0.7m)という長さは馬借で運搬できる大きさとして妥当と考えられる。近世木曾の事例ではあるが、樽に長さ2尺2寸および1尺1寸の規格のものがあつたことは、既に指摘されるところであり³⁴、古代から近世にかけて樽の規格は一般的に短小化する。若狭の事例では、「長禄元年に大飯郡中山寺(一乗寺)の鐘楼を造営するにあたり樽一八一〇支が使われており、その単価は四文余だつた」³⁵と指摘されているが、先述の「小樽」も1支4.3文であり³⁶、価格が同じであることから、若狭に流通した樽の規格も長さ2尺2寸5分だつた可能性がある。またこの中山寺の事例の樽は名田庄産であるが、先述の「小樽」の長さの算出根拠となつた樽は名田庄と接する朽木庄の「四二寸樽」³⁷であり、地理的にも年代的にも若狭で流通した樽が、朽木庄と同規格であつた可能性は考えうるものといえよう。

以上を整理すると「当時の屋根葺き用の板材は樽とよばれ、大量に流通し消費された」³⁸と考えられているが、その樽の規格は、若狭の事例から長さ2尺2寸5分程であつた可能性が指摘できる。したがつて、今回出土したそぎ板の最大長が1尺1寸程というのは、当時流通していた樽を2つ割りして得られた長さと考えることができ、寸法において屋根葺板と推定することは妥当であろう。

6 おわりに

以上検討したように、礎石建物SB6258は、現存する近世民家遺構の基礎廻りに似た技法と、絵画史料などから想定されてきた中世以来の屋根技法が併存していたことが考えられ、中世から近世へ移行する過渡期の建物構造であつたことが示唆される。なお、今回の検討から得られた知見は、一乗谷における建物復元の根拠を補強するものといえるが、なかでも出土部材の検討により、雨落溝が軒の出を示すことが直接的に裏付けられたことは大きな成果であつたと考えている。

最後に、上部構造を具体的にイメージする手掛かりとして、外観の復元案を附しておきたい(挿図50)。本稿で検討されていない架構などの部分については、棟持柱や石置板葺屋根、竹垂木の構法を持つ近世民家の現存遺構³⁹を参考にした。なお、作成した復元図はあくまでも想定される復元の一案に過ぎないもので、今後のさらなる検討が必要と考えている。



挿図50 礎石建物SB6258復元外観アイソメトリック図

註・参考文献

- 1 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡39 平成20年度発掘調査・環境整備事業概報』(2009年, 8頁)および福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館『一乗谷朝倉氏遺跡資料館紀要 2008』(2009年, 13頁)参照。
- 2 60m×70mという屋敷地の規模は、第24次・82次調査の大規模武家屋敷と同じであり、今回の調査地を武家屋敷と解釈するうえで注目される。(福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡 平成5年度発掘調査環境整備事業概要(25)』1994年, 7頁)
- 3 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告V 第29次 第77・78次調査』1995年, 19頁
- 4 通常、狭間石や地覆石と呼ばれる事が多い。
- 5 例えば、第46次調査のSB2719には土台の一部が残されていた(福井県教育委員会・福井県立朝倉氏遺跡資料館『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡X V - 昭和58年度発掘調査整備事業概報-』1984年, 5頁)。また、第120次調査のSB6052には幅約115mmの土台痕跡を確認している(福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡37 平成18年度発掘調査・環境整備事業概報』2007年, 7頁)。
- 6 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡環境整備報告Ⅲ 町並立体復原事業』1996年, 29頁
- 7 福井県教育委員会『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告I - 朝倉館跡の調査-』1976年, 50-51頁
- 8 一乗谷で最も太い角柱は第17次調査の寺院の門SI520で出土した掘立柱門柱で、柱径は8~9寸角(長辺27cm短辺24cm)程である。(福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅶ 第44次第17次調査』2001年, 45頁)
- 9 発掘調査時の所見による。
- 10 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館『「和」の空間 中世の座敷と技術』(2008年, 47頁)、前掲6文献(1996年, 30頁)参照。
- 11 前掲1
- 12 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告X 第51・52次調査』2010年, 15頁・写真図版PL.4
- 13 土屋直人・西山哲雄・早見洋平・土本俊和「取葺と呼ばれた板葺屋根の系譜」『日本建築学会計画系論文集70巻594号』2005年, 155-162頁
- 14 前掲10文献(2008年, 49頁)および前掲5文献(1984年, 第7図)参照。
- 15 浅川滋男・箱崎和久「埋もれた中近世の住まい」(同成社, 2001年, 274-276頁)で、北陸では「一七世紀後半~一八世紀ぐらいで礎石の建物がでてくると考えられる」と述べているように、近年では、礎石の庶民への普及は18世紀まで下と考えられている。
- 16 例えば、福井市教育委員会『旧梅田家住宅移築復原工事報告書』(1989年, 39頁)によれば、一乗谷に近い福井市浄教寺に所在した梅田家住宅(1837年, 福井市指定文化財)の柱間寸法は6.2尺である。
- 17 例えば、谷口家住宅、瓜生家住宅、橋本家住宅、相木家住宅、堀口家住宅(以上、重文)のほか、蓑輪家住宅、城地家住宅、梅田家住宅(以上、福井市指定文化財)の壁木舞組には、いずれも割竹の間渡しと茅2本1組の木舞が用いられている。
- 18 前掲10
- 19 中尾七重「近世民家に残存する中世掘立柱建物の技法 股柱と梁間一間型系棟持柱」武蔵大学総合研究所『武蔵大学総合研究所紀要(22)』, 2012年, 111-119頁
- 20 土本俊和・遠藤由樹「掘立から礎へ 中世後期から近世にいたる棟持柱構造からの展開」『日本建築学会計画系論文集65巻534号』2000年, 263-270頁
- 21 福井県池田町教育委員会『安達仲屋家住宅調査報告書』2015年
- 22 藤田元春『増補 日本民家史』(刀江書院, 1937年)によれば「現在北陸の山手の町、又は海岸地もしくは東国の彼方此方に石をのせた板屋が多く残ってある(81頁)」と述べられており、また「越前大野町に旅行した所、ここは明治の初迄、町家はすべて板屋で円礫をのせてみたが、三十年頃に火事にあつてから、町費補助とか、瓦講とかいふものをつくり、近来多くは瓦葺に変えたのである(414頁)」というように、明治期の越前大野の町屋には石置板葺屋根が多く残っていた事を記す。また前掲21文献(2015年, 22-23頁)でも「勝山市小原も山懐の集落で樽葺き屋根の民家だけで構成されていた」とする。越前の重文民家はほとんどが茅葺屋根であるが、少なくとも明治期までは越前において板葺屋根の民家が多く見られたようである。
- 23 例外的に、山梨県の妻壁棟持柱民家に関しては、茅葺切妻造の屋根形式が多い。
- 24 『吉祥山永平寺全図』は、大本山永平寺所蔵。福井県立美術館『大永平寺展[展示会図録]』(2015年)および福井県編『福井県史 資料編16上 絵図・地図』(1990年)に所収。
- 25 土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳日葡辞書』岩波書店, 1980年, 665頁
- 26 『星光寺縁起絵巻』の作者については諸説あるようであるが、吉田友之『日本美術絵画全集 第五巻 土佐光信』(集英社, 1979年, 126頁)によれば、文明19年(1487)に土佐光信が描いたものとされる。なお、光信はこの絵を描いた後の永正3年(1506)に越前朝倉氏の注文で洛中洛外図の初例とされる屏風を描いているように、一乗谷とはほぼ同時代の京都の町屋を描いたものとして注目される。
- 27 小嶋はるか「埼玉県 重要文化財旧新井家住宅-石置き板葺屋根の技法の比較-」『文建協通信94号』2008年, 17頁
- 28 重要文化財建造物保存技術協会『重要文化財旧田中家住宅修理工事報告書』1973年
- 29 例えば、池田町に所在する飯田家住宅や内藤家住宅など(福井県教育委員会『福井県の近代和風建築 福井県近代和風建築総合調査報告書』2012年, 36-37頁)
- 30 文化財建造物保存技術協会『重要文化財瓜生家住宅保存修理工事報告書』1975年, 10頁
- 31 「杉こけら板」とされるが、釘穴が報告されておらず柿葺か取葺かの差異は明らかではない。なお、福井宇洋『民家』『福井県史資料編14(建築・絵画・彫刻等)』(1989年, 188頁)によれば、瓜生家住宅の北面庇屋根については、現在復元されている柿葺ではなく、実際は樽葺(石置板葺)が妥当と指摘されている。
- 32 盛本昌広「樽・材木の規格と木の種類」『木材の中世』高志書院, 2015年, 149頁
- 33 佐藤圭「城下町の人々のくらし」『福井県史 通史編2 中世』, 1994年, 909頁
- 34 伊藤鄭爾「室町時代の町屋」『中世住居史-封建住居の成立』東京大学出版会, 1958年, 193頁
- 35 佐藤圭「諸産業と職人・商人」『福井県史 通史編2 中世』1994年, 801頁
- 36 前掲32文献(2015年, 152頁)
- 37 前掲32文献(2015年, 150頁)
- 38 前掲33
- 39 本文中でも取り上げた安達仲屋家住宅・茂木家住宅・新井家住宅・田中家住宅など

<論考2>一乗谷朝倉氏遺跡出土ガラス製遺物の自然科学的調査

田村朋美(奈良文化財研究所)

1 はじめに

戦国期の城下町である特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡では、平成21年度の第130次発掘調査において、多量のガラス製遺物が発見された。発掘調査で確認されたガラス製遺物は、主にガラス小玉と溶融ガラス片である。本調査では、ガラス小玉の製作技法を推定し、基礎ガラスの種類および着色材の特徴を把握することを目的として、各種の自然科学的調査を行った。以下、その結果について報告する。

2 資料と方法

1 資料の概要(挿図56～59)

本調査の対象資料は、一乗谷朝倉氏遺跡出土ガラス製遺物149点である。このうち製品と考えられるものは、いずれも直径が2.5～4.5mm程度の小玉である。ガラス小玉以外は、孔が貫通しないガラス小玉様製品や不定形の溶融ガラス片で、ガラス小玉様製品はガラス小玉の未製品または失敗品の可能性がある。溶融ガラス片は、複数のガラス小玉が融着したものも含まれる。製品のガラス小玉はいずれも単色で、多いものから、淡青色不透明、緑色透明、濃青色半透明、白色不透明の4種類の色調が確認された。一方、溶解ガラス片には単色のものと上記の色調が混在するものが存在する。

2 調査の方法

顕微鏡観察 製作技法を推定するため、ガラス玉に含まれる気泡の並び方や形状、ガラス小玉表面および孔壁面状態や孔の形状などに着目して、落射光および透過光下での肉眼と実体顕微鏡観察を実施した。顕微鏡観察に使用した機材はライカ製MZ16で、必要に応じて付属のデジタルカメラ(Nikon DXM1200F)で撮影した。

蛍光X線分析 ガラスの化学組成の調査として蛍光X線分析を実施した。測定にあたっては、顕微鏡下で新鮮な破断面など風化の影響が少ない場所を選択し、測定範囲表層を超音波およびエチルアルコールで洗浄したうえで測定した。測定結果は、測定資料と近似する濃度既知のガラス標準試料を用いて補正した理論補正法(FP法)により、検出した元素の酸化物の合計が100%になるように規格化した。測定に用いた装置は、エネルギー分散型蛍光X線分析装置(エダックス社製EAGLEⅢ)である。励起用X線源はモリブデン(Mo)管球、管電圧は20kV、管電流は100 μ A、X線照射径は112 μ m、計数時間は300秒とし、真空中で測定した。

X線回折分析 ガラス中に含まれる結晶物質を同定するために、X線回折分析を実施した。測定に用いた装置はマック・サイエンス社製M18XHF-SRA型X線回折装置である。励起用対陰極は銅(Cu)、管電圧は40kV、管電流は100mA、スキャンスピードは2,0000(deg/min)である。

3 結果と考察

1 製作技法

製品と考えられるガラス小玉について、顕微鏡観察により、これらのガラス小玉の製作技法を調査した結果、いずれも孔と直角方向に巻き付けの単位や筋状の蝕像(腐食の痕跡)、あるいは端面に巻き付け

始めもしくは巻き付け終りの痕跡と考えられる突起をもつ。以上の特徴から、これらのガラス小玉は、芯棒に軟化した紐状のガラスを複数回巻きつける、いわゆる「巻き付け法」によって製作されたことがわかる。熔融ガラス片のうち、複数のガラス小玉が融着したのものについては、製品が何らかの理由で熱を受けたものである。一方、熔融ガラス片のなかでも単色のものは、一端のみ細長く伸びていることが多い。小玉の製作に伴う副産物の可能性も考えられる。

2 化学組成(挿図51～55)

蛍光X線分析によって得られた化学組成の定量結果を表1に示す。本調査では149点のガラス製遺物について、単色の個体については1点につき1ヶ所、複数の色調が混在している個体については色調別に測定した。測定箇所は合計164ヶ所である。蛍光X線分析の結果、本資料は、酸化鉛(PbO)を平均で31.3(±6.0) %、酸化カリウム(K₂O)を11.4(±2.4) %含有するカリ鉛ガラスであることが明らかとなった。さらに、色調別に材質的なまとまりが認められる(挿図51)が、淡青色不透明のものは、①低K₂O高PbO、②両成分ともに中程度、③高K₂O低PbOの3つのグループに分かれる。①のグループには緑色透明ガラスも重複する。濃青色透明のものは②のグループの近傍に集中して分布するが、ややPbOの含有量が多く、完全に重複しない。③のグループは淡青色不透明のガラスからのみ構成されている。

ガラスの色調に関与する成分に着目すると、緑色透明ガラスには、酸化銅(CuO)が2 %前後含まれており、銅イオンが主な着色因子と考えられる。亜鉛(ZnO)を0.4 %前後伴うのが特徴であり、CuOと一定の相関が認められることから銅原料の不純物と考えることができる(挿図52)。なお、ZnOを伴う銅原料を用いた着色は、奈良時代以前のガラスには知られていない。一方、カリ鉛ガラスでは、一般的に認められるようになる着色剤である。

淡青色不透明ガラスについては、CuOを含むことから、銅イオンが青色の発色に関与していると考えられる。ただし、CuOの濃度にはばらつきがみられ、0.5 %前後、1 %前後、1.5 %前後に分かれて分布し、上で述べた基礎ガラスの3グループと一部相関が認められる。すなわち、③高K₂O低PbOのグループは、CuOを1.5 %前後含有する一群とおおむね一致し、①低K₂O高PbOのグループはCuOが0.5 %前後の少ない値をとる。②K₂O・PbOとも中程度のグループについては、CuOが1 %前後のものと0.5 %前後のものに分かれる。ZnOを伴うものが多いが、含有量はばらつきが大きく、CuOとの明確な相関はみられない。上述の緑色透明ガラスとはCuOとZnOの含有量比が明らかに異なっている。すなわち、一乗谷朝倉氏遺跡のガラス着色剤として利用された銅原料は一種類ではないことがわかる。

濃青色透明ガラスについては、銅(CuO)以外に酸化マンガン(MnO)の含有量が多いのが特徴であり、銅とマンガンにより複合的に濃青色に発色しているものと考えられる(挿図53)。特にマンガンを暗色を呈する主要因であると考えられる。ただし、CuOとMnOには相関がなく、別々に添加されたと考えられる。ZnOをわずかに伴う。CuOとZnOの含有量の分布は一部の淡青色ガラスと重複する。さらに、鉄(Fe₂O₃)の含有量がどの色調のガラスよりも少ない。後述の白色不透明ガラスよりも少ない理由については明らかでないが、色調との相関が強いことから着色技法に関係する可能性があると考えている。

白色不透明ガラスについては、着色に関与する成分をほとんど含有していなかった。なお、白色不透明ガラスを含め、すべての色調のガラスから微量の錫(Sn)が検出された。色調にかかわらず検出されており、由来を特定できなかった。

色調に関連して、淡青色不透明および白色不透明のガラスにはカルシウムが多く含まれる(CaO>3 %)ことがわかった(挿図54)。CaOの含有量は透明感と強く相関があることから、淡青色不透明と白色

不透明ガラスに多く含まれるCaOは、基礎ガラスではなく乳濁剤に由来すると推測された。そこで、淡青色不透明ガラスについて、X線回折分析を実施した結果、二酸化ケイ素(SiO₂)とフッ化カルシウム(蛍石)(CaF₂)が検出された(挿図55)。これらの結晶粒子により意図的に不透明ガラスを作り出していたと考えられる。特に蛍石を含む不透明ガラスは北海道で流通したカリ鉛ガラスやカリ石灰ガラスで検出されており(斎藤2003)、これらのガラスの乳濁技法として一般的に利用されていた。一方、このような乳濁技法は、奈良時代以前のガラスには知られていないことから、カリ鉛ガラスの生産とともに発達した新しい技術と考えられる。

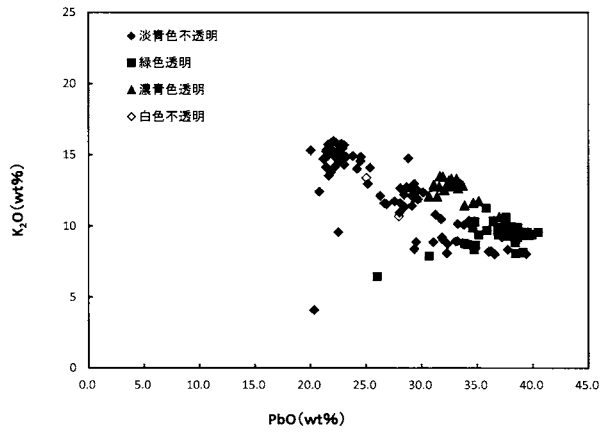
4 ガラスの生産地

ガラス製品の製作は、原料からガラス素材を作る工程と、ガラス素材を玉などの製品に加工する工程に区別される。一乗谷朝倉氏遺跡では、製品としてのガラス小玉だけでなく、熔融ガラス片も多く出土しており、ガラス素材からガラス小玉の加工を行っていた可能性は考えられる。ただし、ガラスそのものの生産は、原料の可能性のある石英や鉛塊などの遺物は出土しているものの、坩堝などガラス素材の生産を直接的に示す遺物は確認されていない。

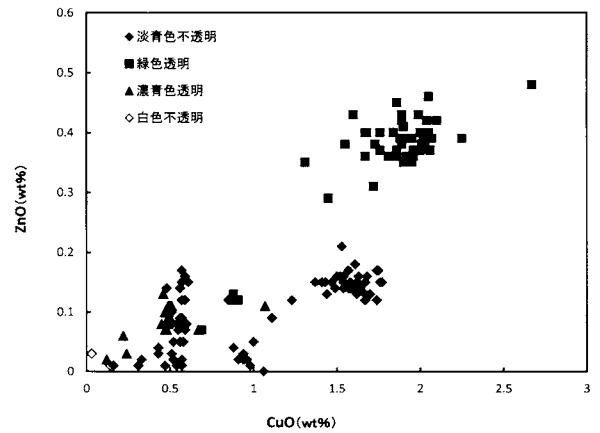
日本列島におけるカリ鉛ガラスの初現は、中国からの舶載品で、985年に製造されたとされる京都府清凉寺の釈迦如来像胎内に納められたガラス瓶である(由水1966、山崎1987)。その後しばらく中国産のカリ鉛ガラスが流入したが、11世紀後半に対馬産(対州鉱山)の鉛鉱石を用いたカリ鉛ガラスの生産が始まるのが鉛同位体比分析で明らかにされている(Koezuka and Yamazaki 1998)。また近年、福岡県博多遺跡群出土のカリ鉛ガラスの鉛同位体比分析が進み、坩堝に付着したガラスの分析から11世紀～12世紀前半には対馬産の鉛以外にも複数の産地の鉛が原料として用いられていたが、12世紀後半以降は対馬産の鉛を原料とする生産へ収斂することも指摘されている(降幡ほか2014)。ただし、中世以降のカリ鉛ガラスについては分析事例が少なく、鉛同位体比についても明らかではない。さらに、現在のところカリ鉛ガラスについては生産地による明確な化学組成の差異は認められておらず、本資料の具体的な生産地についてはこれ以上検討することは難しい。今後は、本遺跡から出土したガラスおよび鉛塊について鉛同位体比分析を実施し、鉛塊がガラスの原料であったかどうかについて検討するとともに、ガラスの原料産地の解明を進めていく必要がある。本稿がこれらの課題を周知し、今後の分析調査の契機となれば幸いである。

参考文献

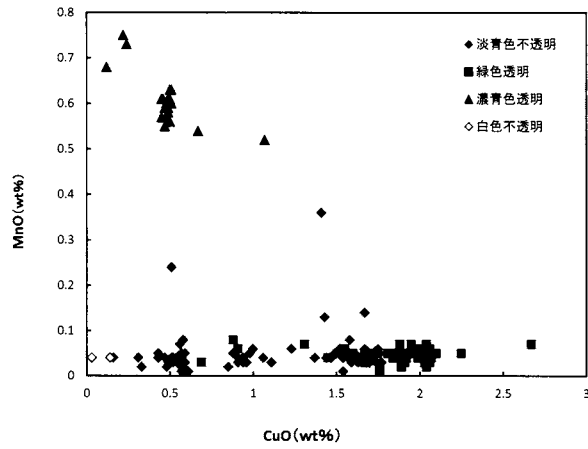
- 斎藤亜三子 2003『アイヌ民族のガラス玉に関する考古化学的研究』財団法人アイヌ民族博物館
降幡順子・比佐陽一郎・齋藤努 2014「中世におけるガラスの国産化の可能性 ―博多遺跡群のガラス生産遺物に関する分析結果から―」『考古学と自然科学』第66号、25-44頁
山崎一雄 1987「日本出土のガラスの化学的研究」『古文化財の科学』
由水常雄 1966「清凉寺・釈迦如来立像の胎内納入物のガラスについて」『美術史研究』第4冊、53-72頁
Koezuka, T., Yamazaki, K. 1998 Investigation of Some K₂O-PbO-SiO₂ Glasses Excavated in Japan. Proceedings of 18th International Congress on Glass. The American Ceramic Society.



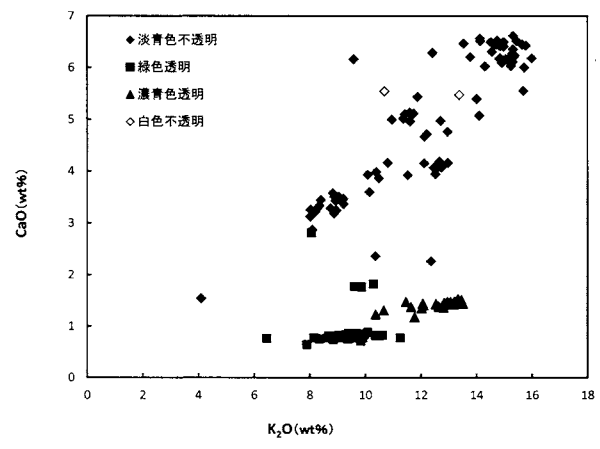
挿図51 基礎ガラスの主成分(PbO-K₂O含有量)



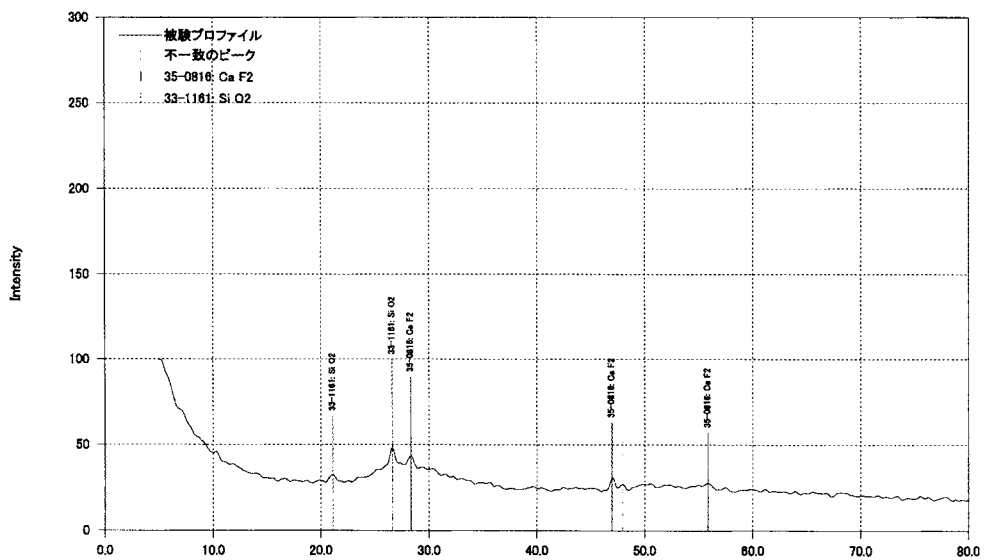
挿図52 着色成分の特性(CuO-ZnO含有量)



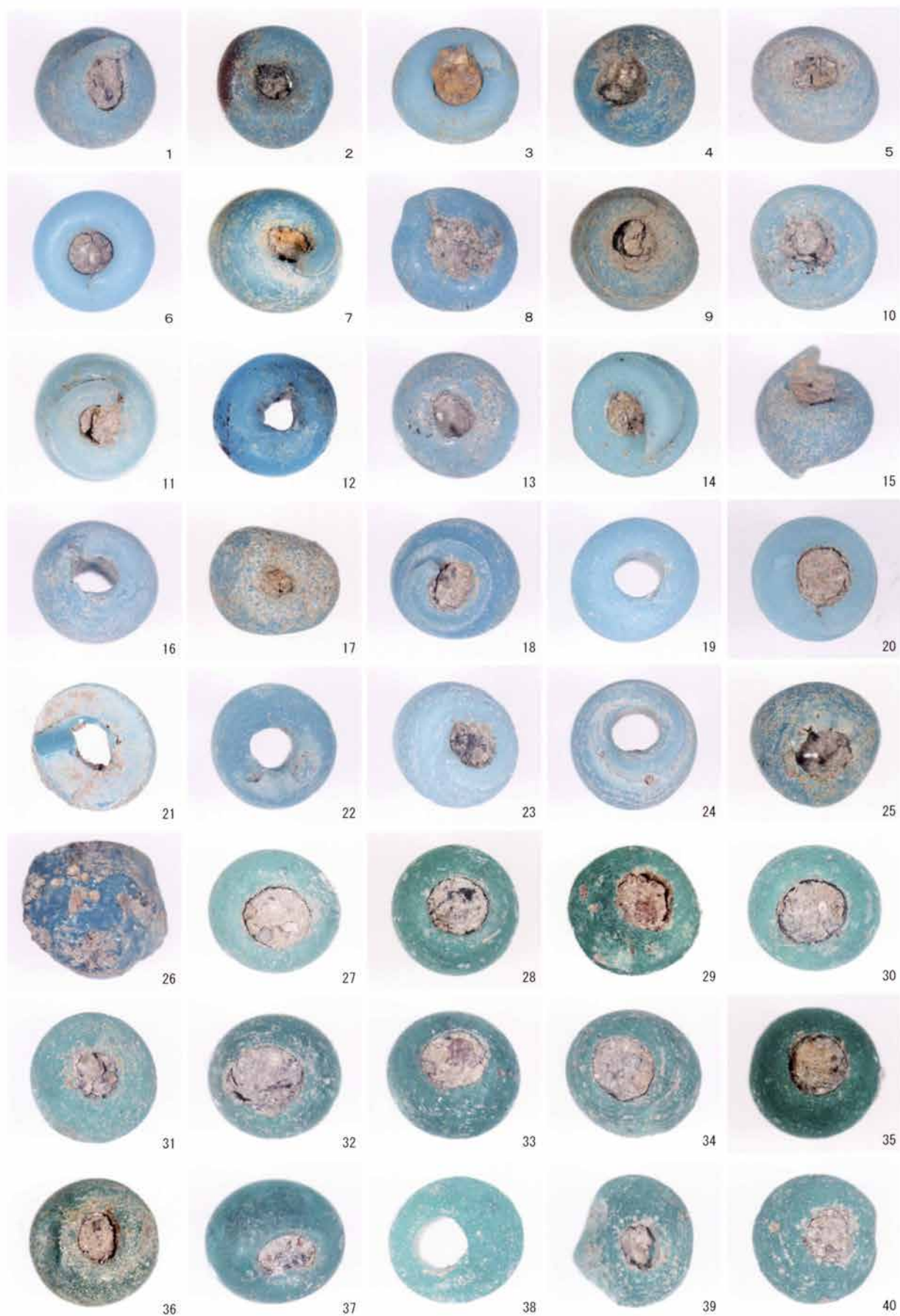
挿図53 着色成分の特性(CuO-MnO含有量)



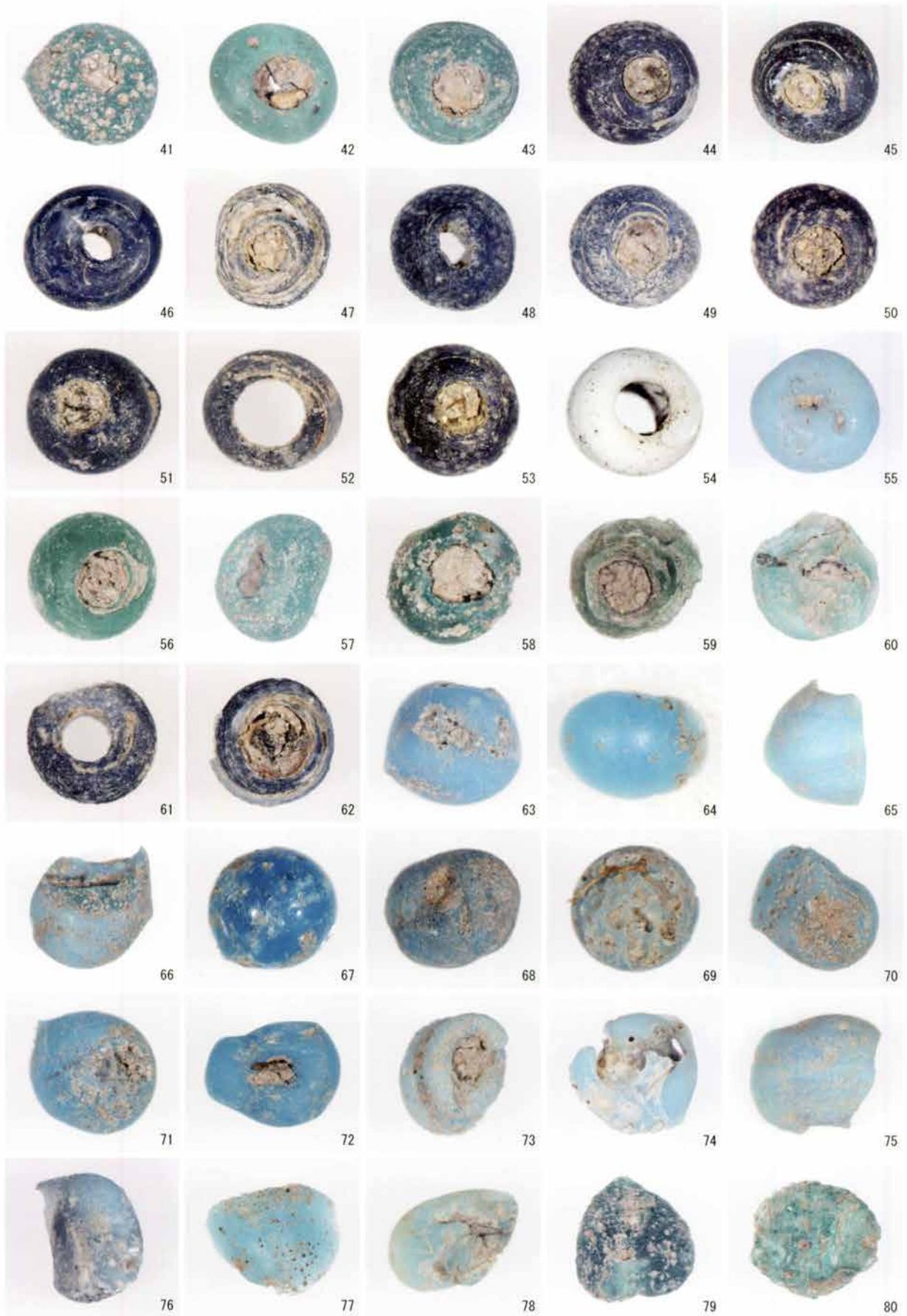
挿図54 各色調のガラス中に含まれるK₂O-CaO含有量



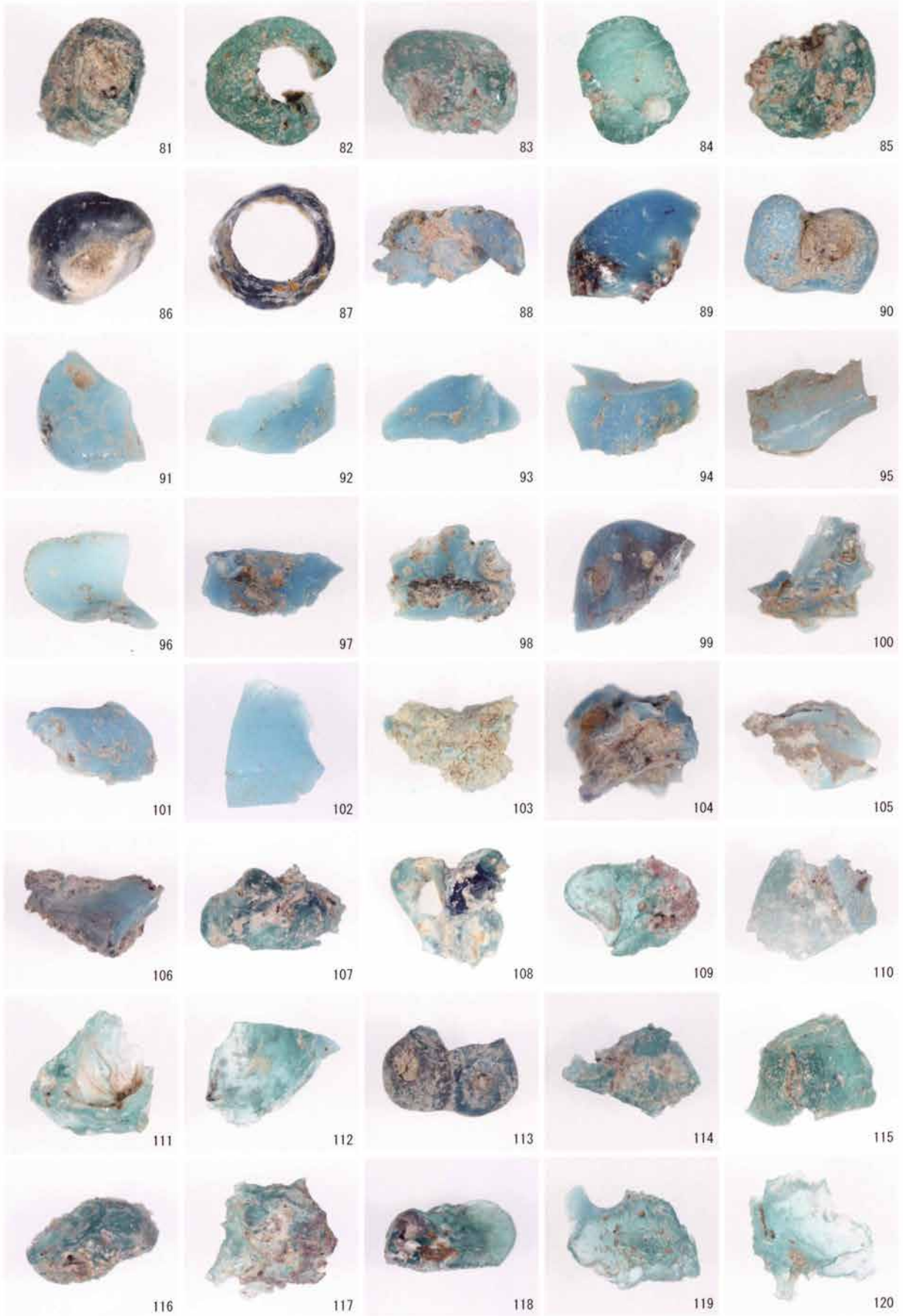
挿図55 淡青色不透明ガラスのX線回析スペクトル



挿図56 第130次発掘調査出土ガラス製遺物(1)



挿図57 第130次発掘調査出土ガラス製遺物(2)

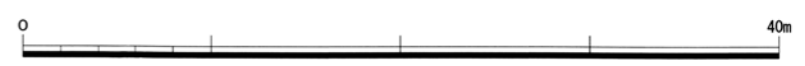
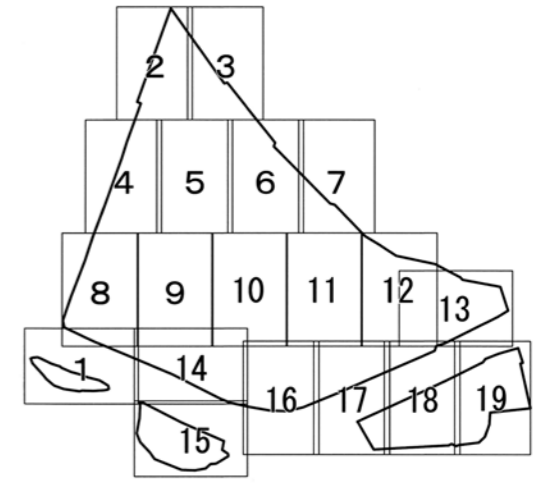
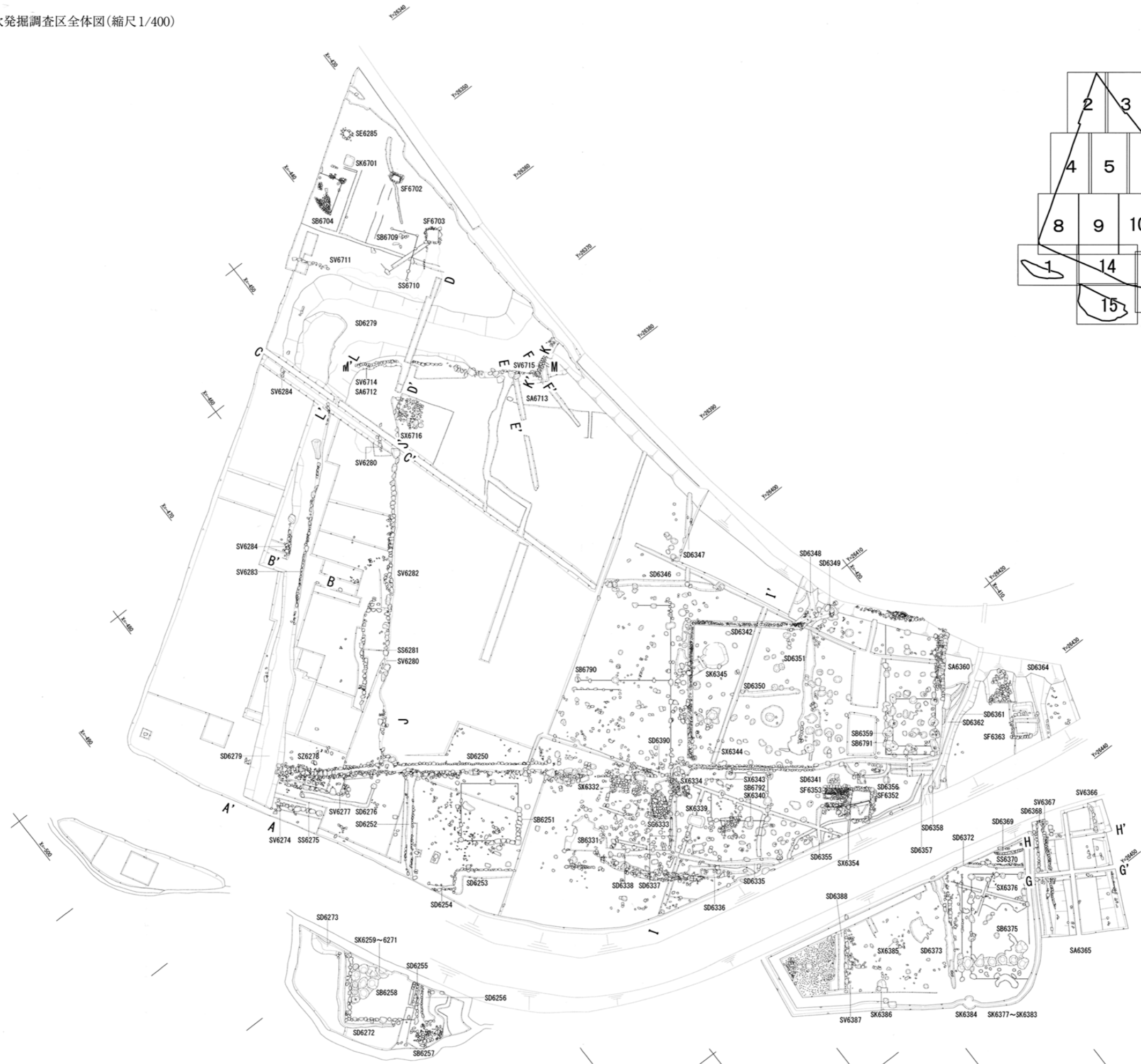
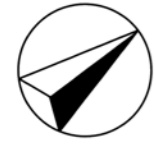


挿図58 第130次発掘調査出土ガラス製遺物(3)

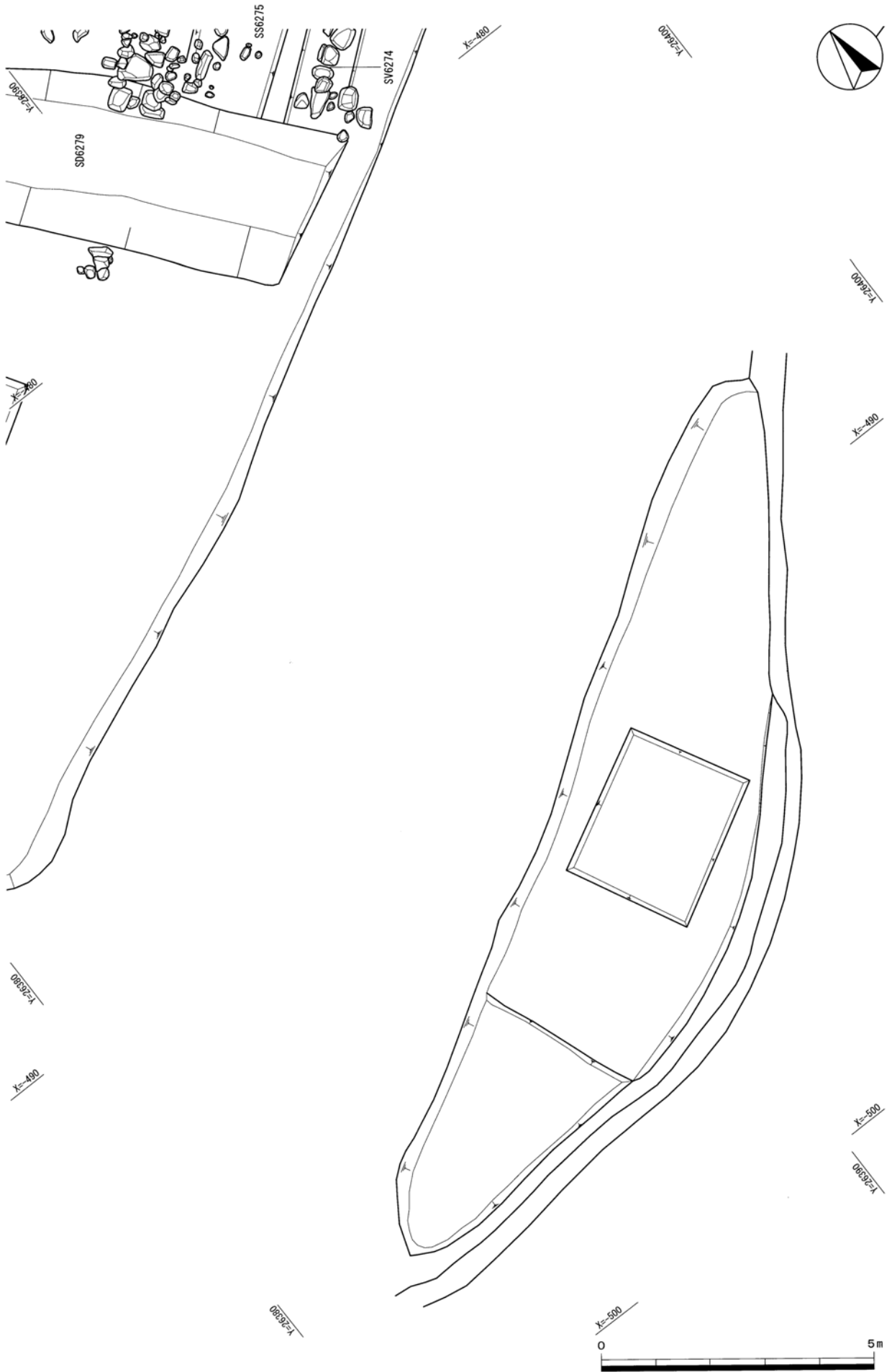


挿図59 第130次発掘調査出土ガラス製遺物(4)

第1図 第127・130・136次発掘調査区全体図(縮尺1/400)



第2図 遺構詳細図(1)(縮尺1/100)



第3図 遺構詳細図(2)(縮尺1/100)



X=440

Y=26340

X=440

Y=26340

X=440

X=440

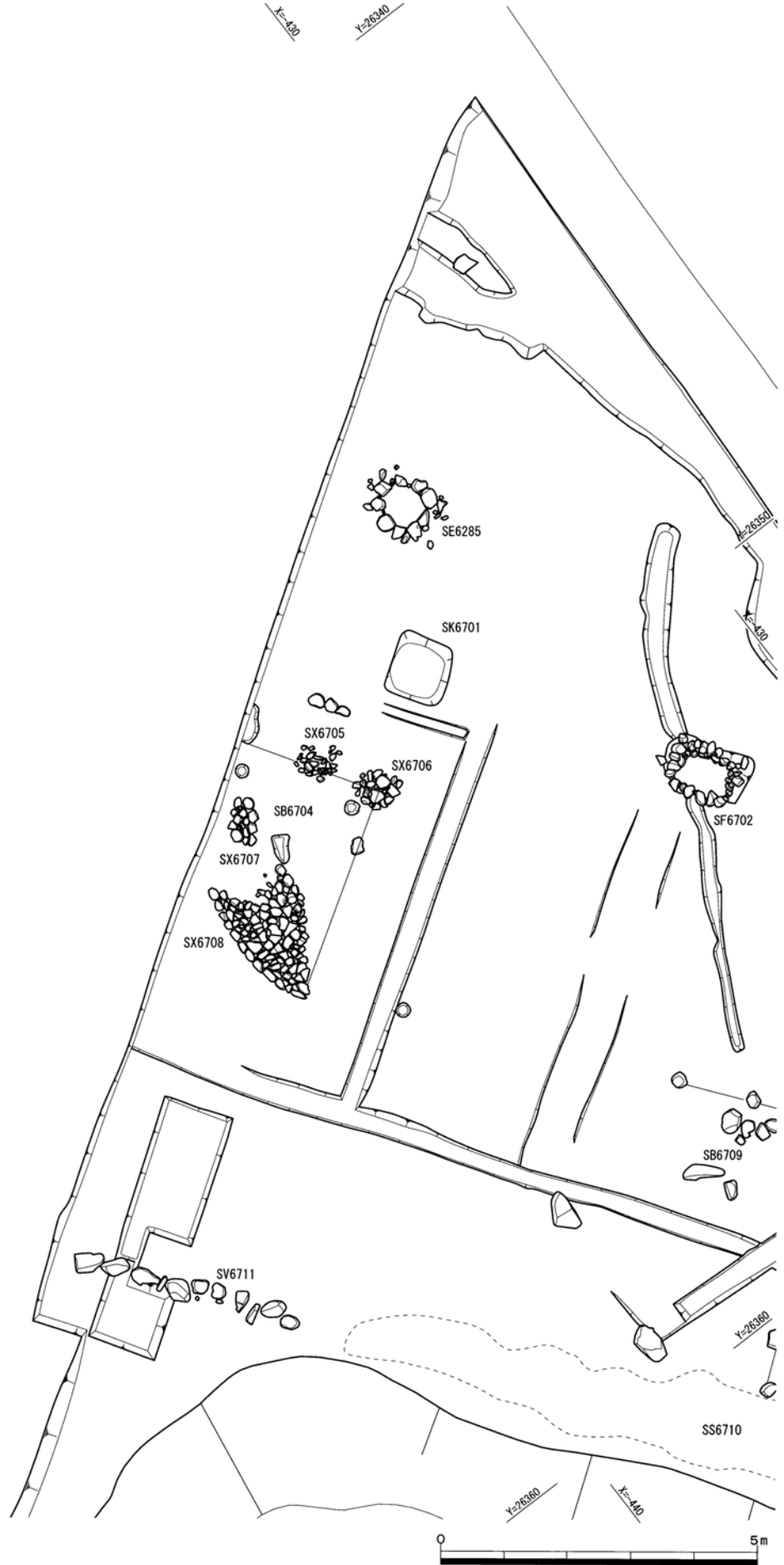
Y=26350

X=450

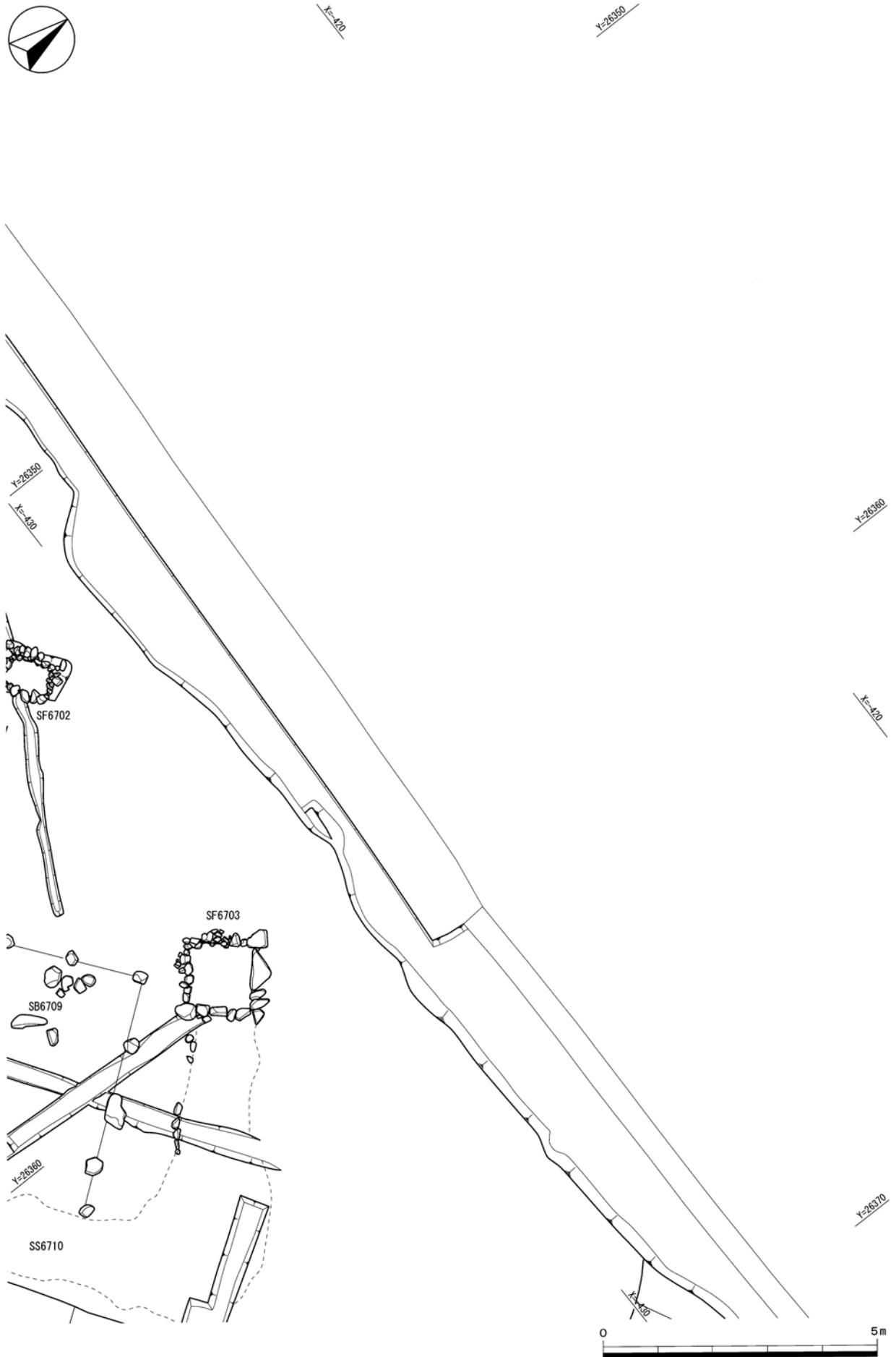
Y=26360

X=440

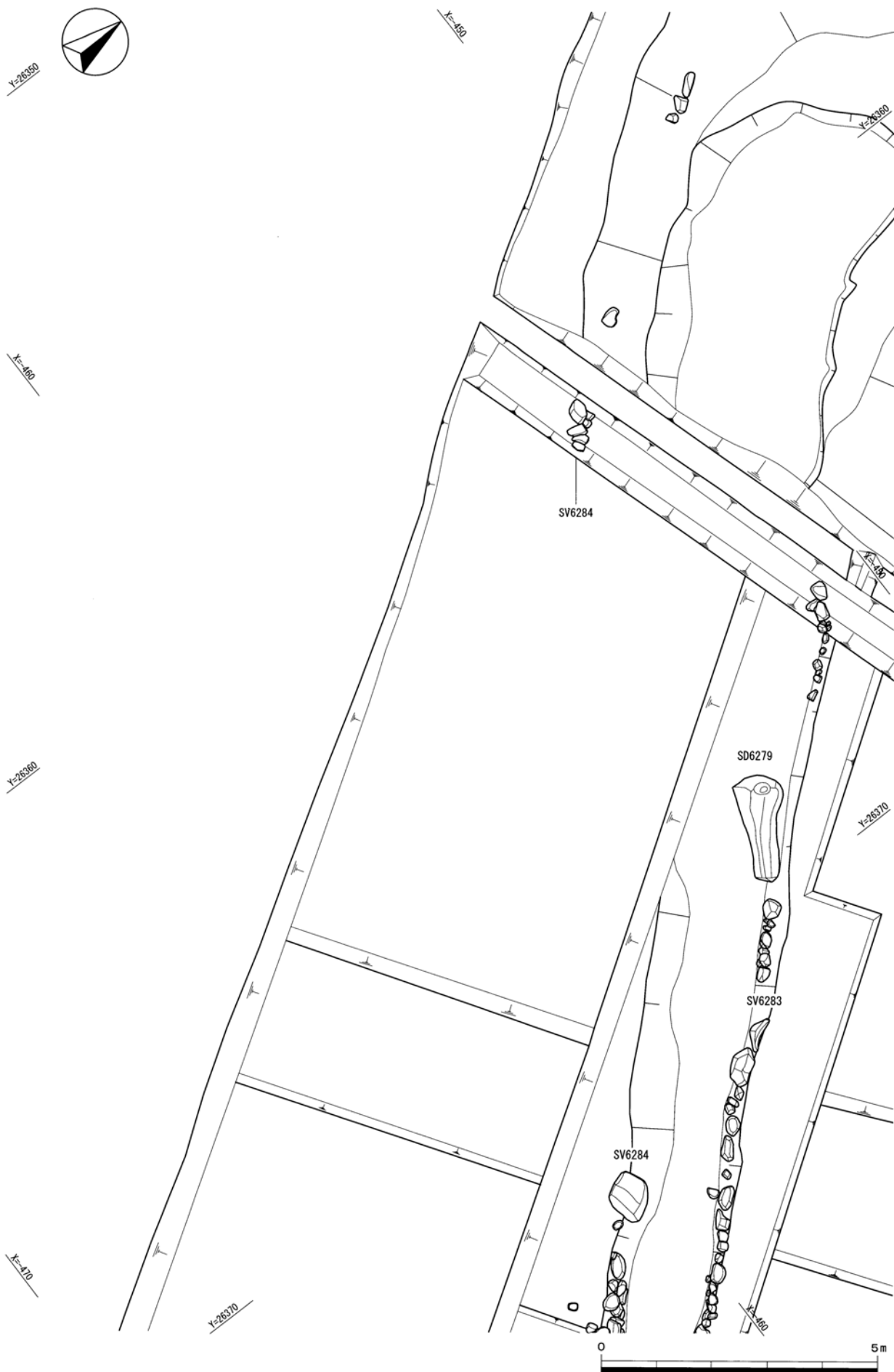
Y=26360



第4図 遺構詳細図(3)(縮尺1/100)



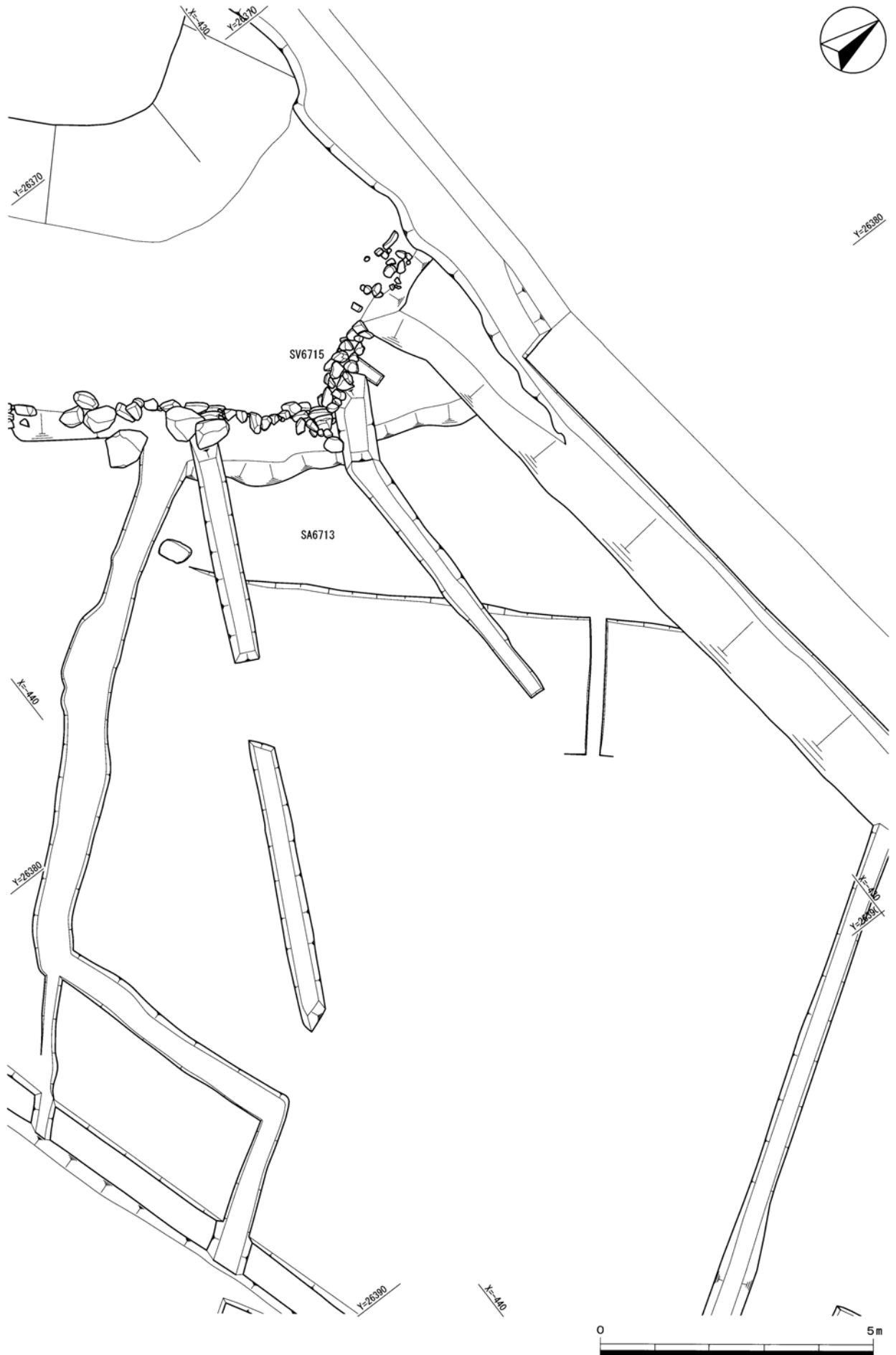
第5図 遺構詳細図(4)(縮尺1/100)



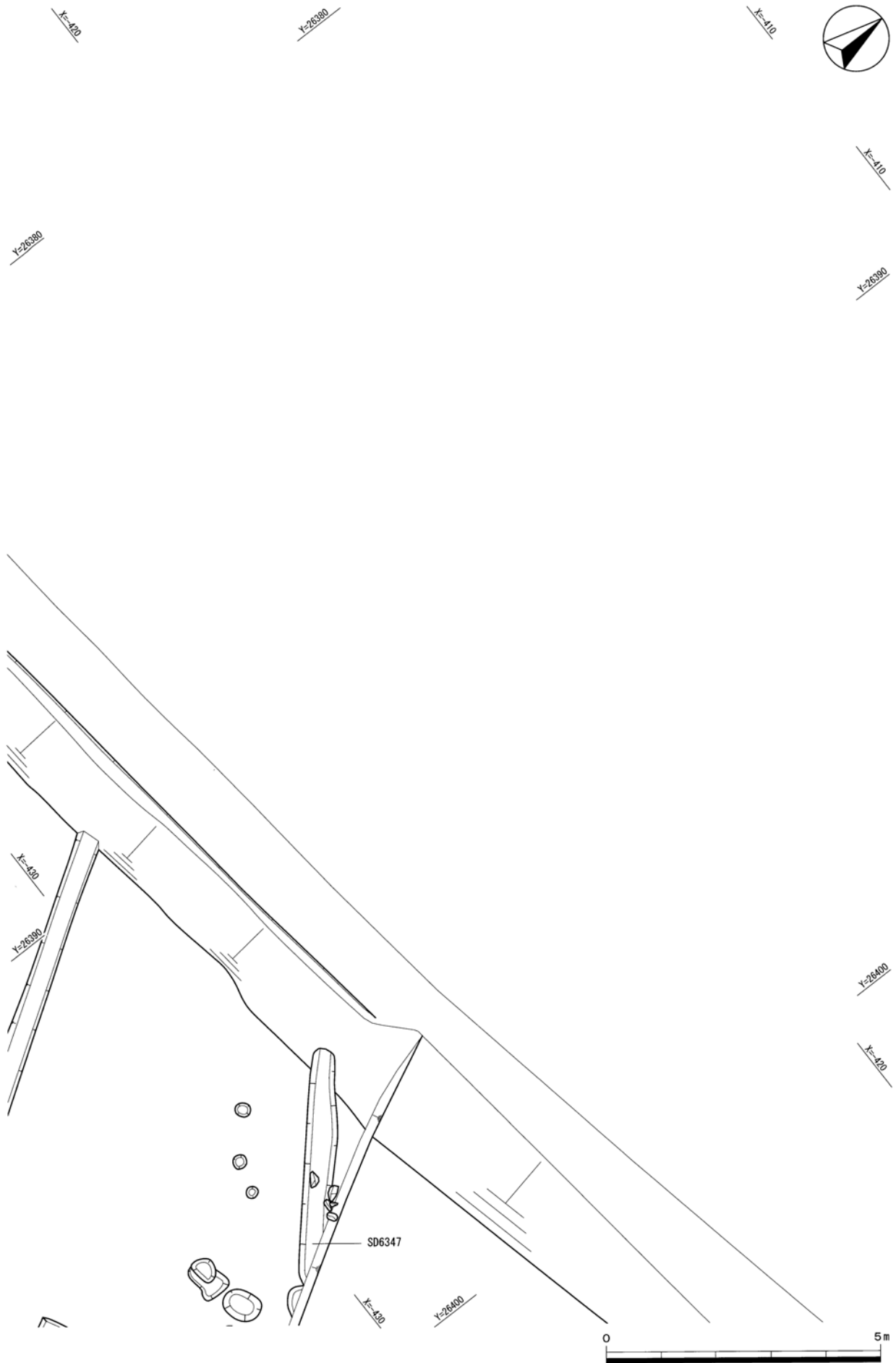
第6図 遺構詳細図(5)(縮尺1/100)



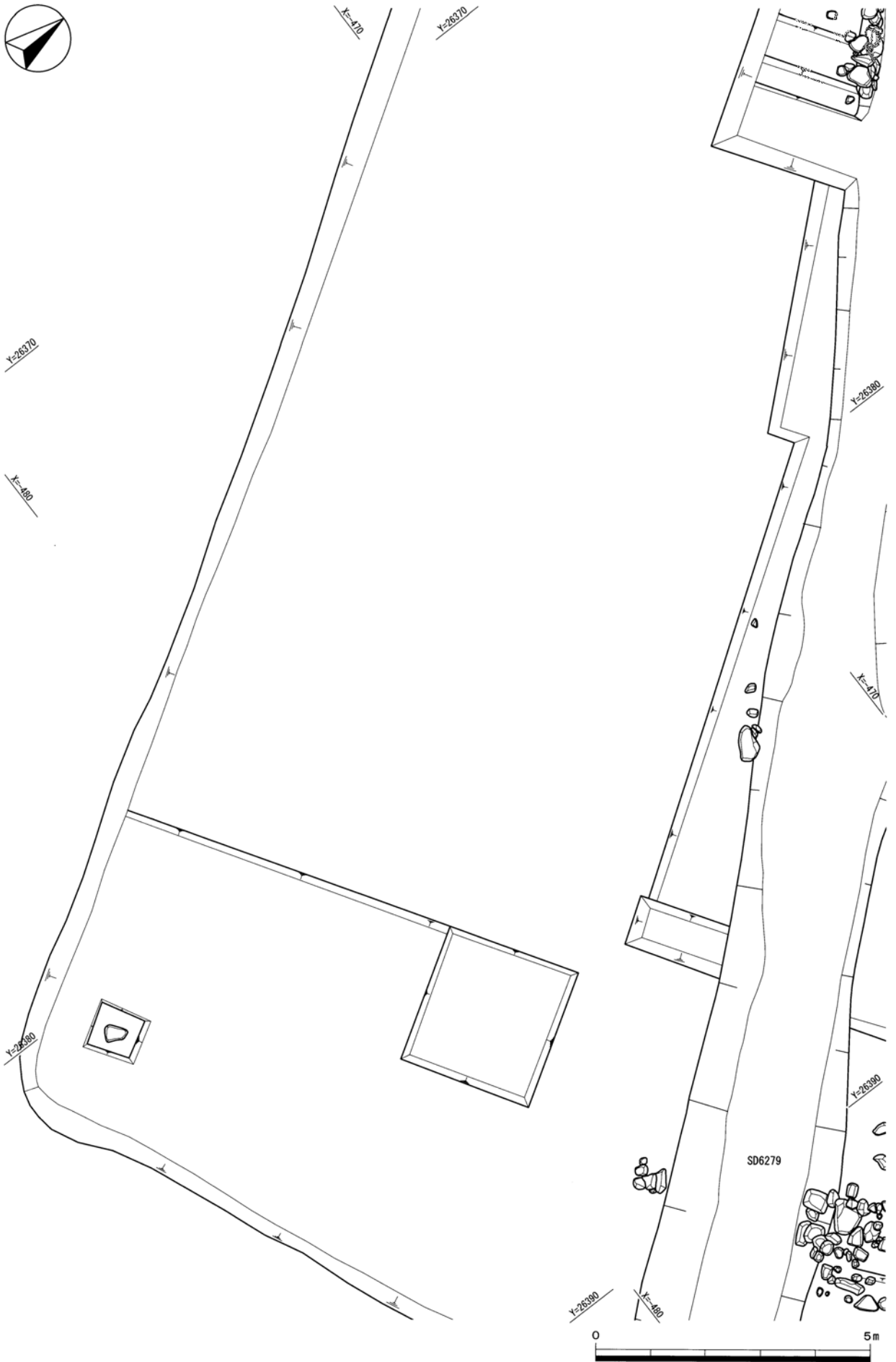
第7図 遺構詳細図(6)(縮尺1/100)



第 8 図 遺構詳細図(7)(縮尺1/100)



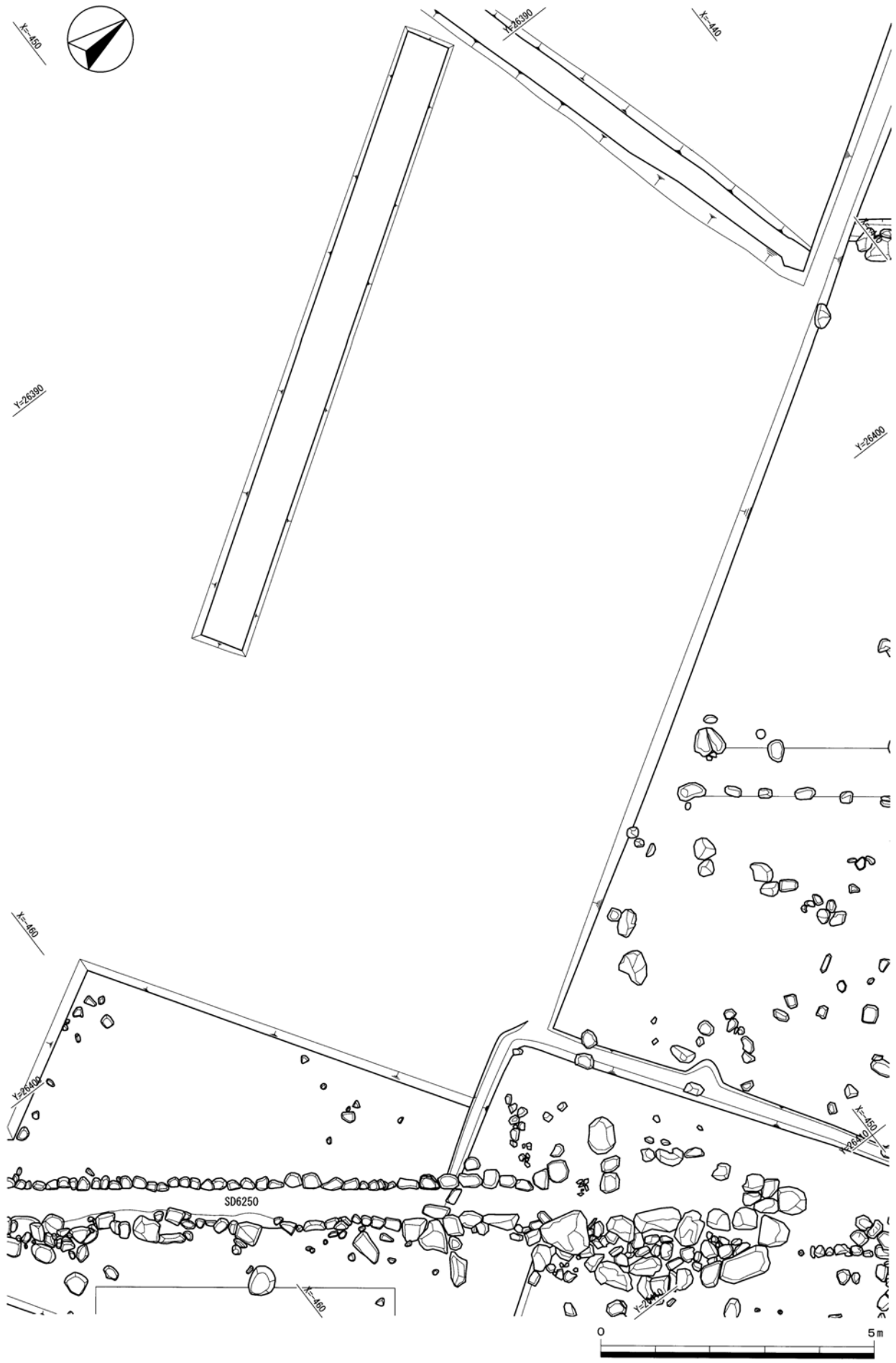
第9図 遺構詳細図(8)(縮尺1/100)



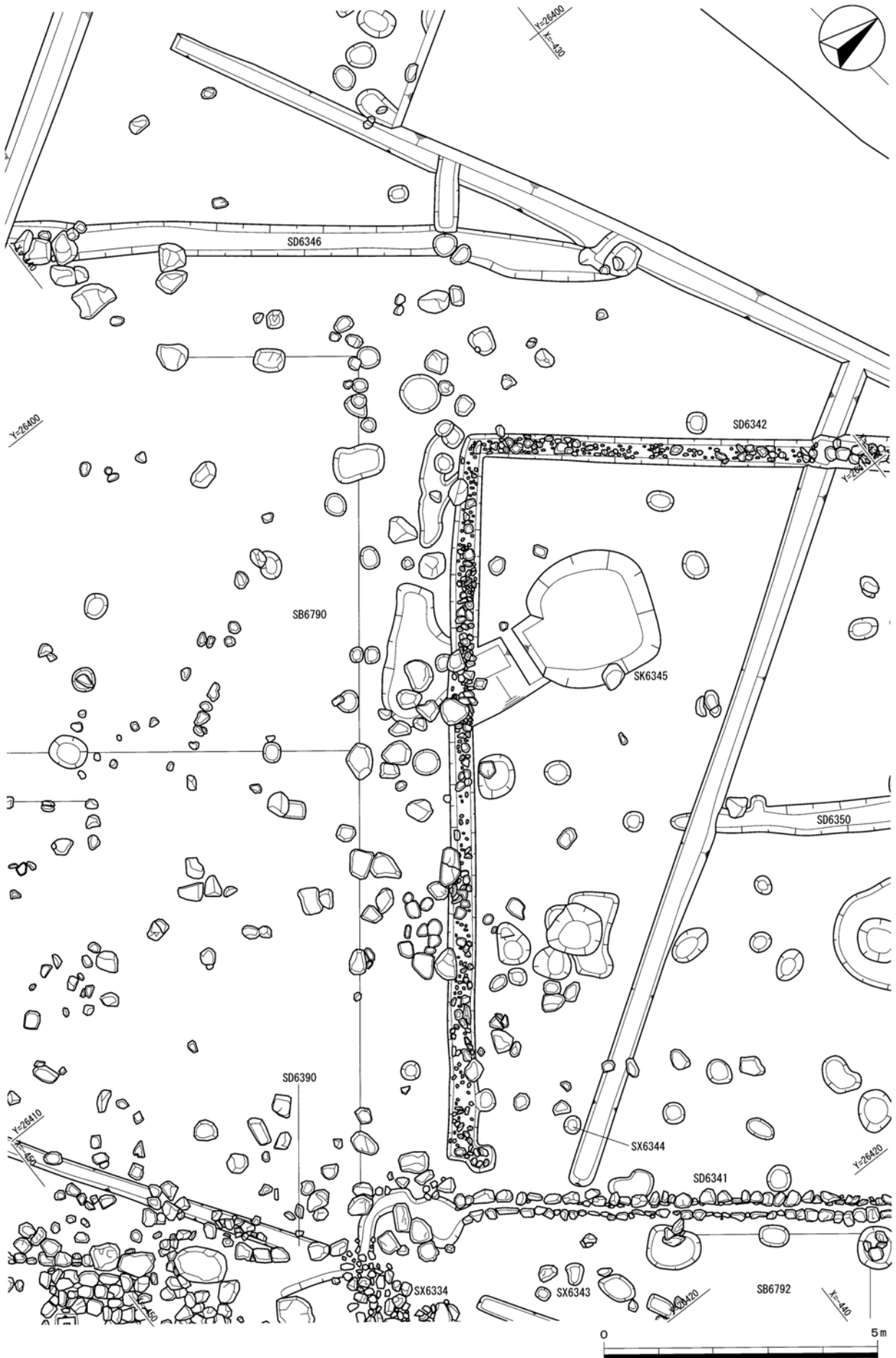
第10図 遺構詳細図(9)(縮尺1/100)



第11図 遺構詳細図(10) (縮尺1/100)



第12図 遺構詳細図(11) (縮尺1/100)



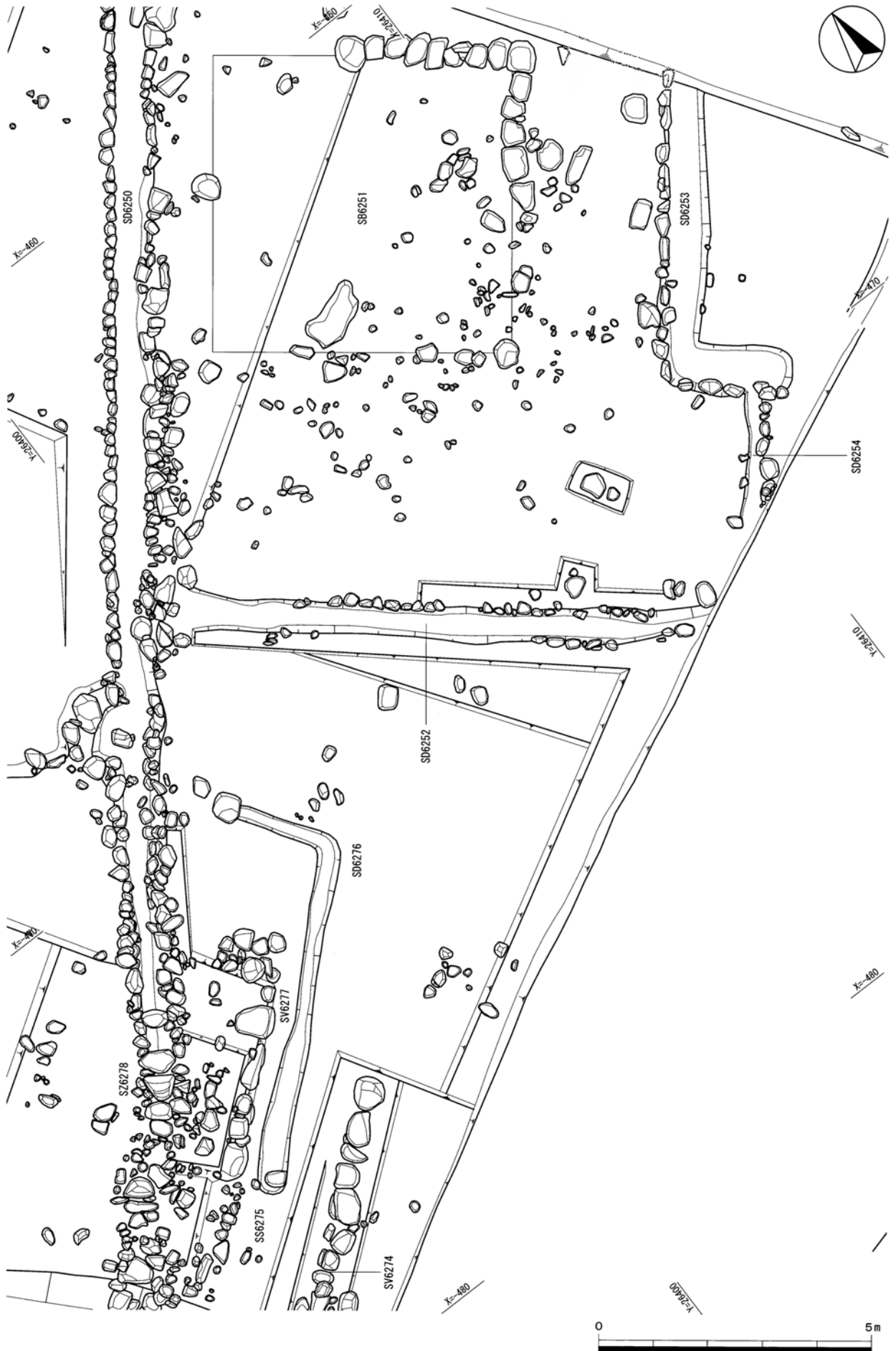
第13図 遺構詳細図(12) (縮尺1/100)



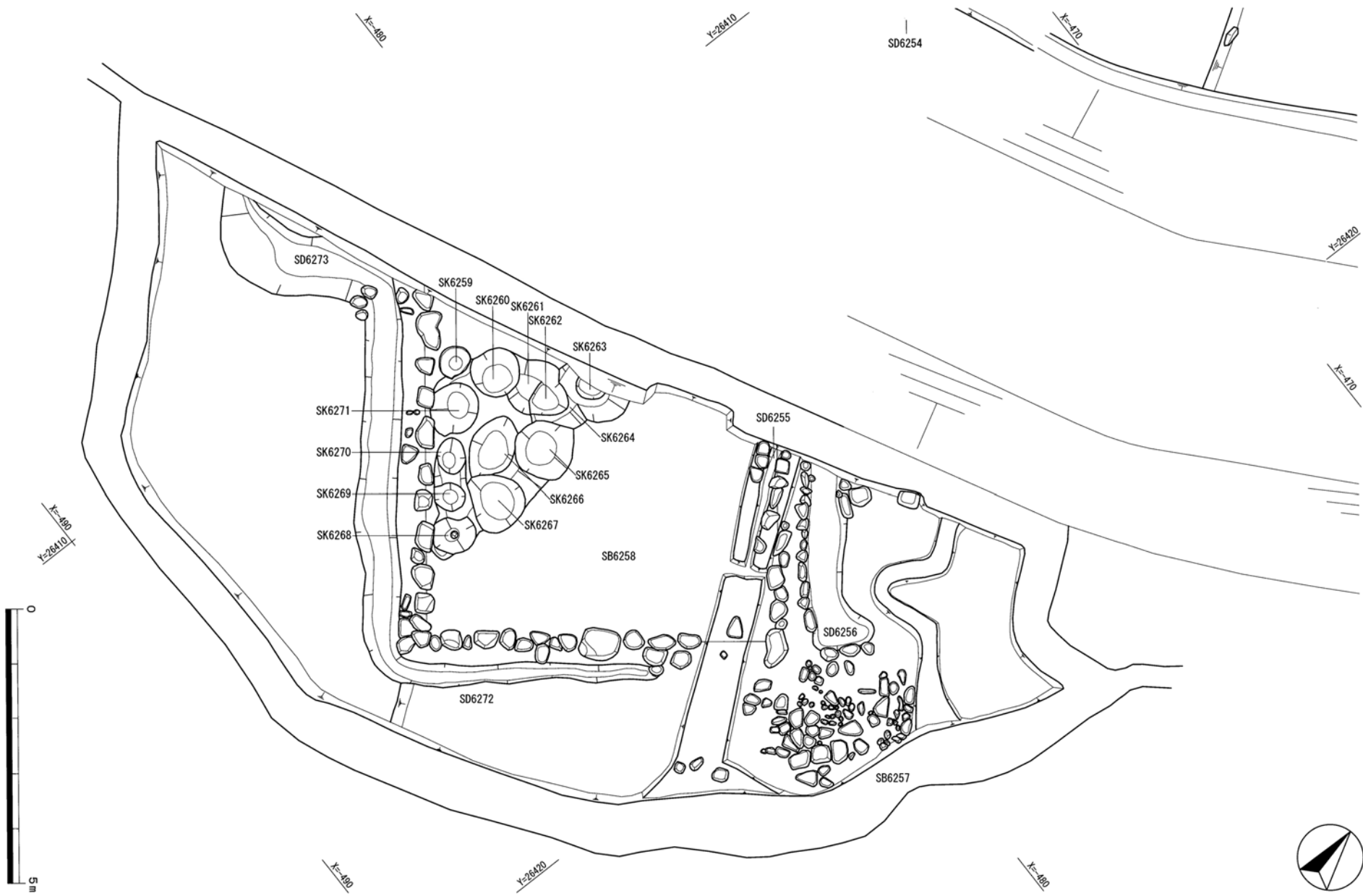
第14図 遺構詳細図(13) (縮尺1/100)



第15図 遺構詳細図(14) (縮尺1/100)



第16図 遺構詳細図(15) (縮尺1/100)



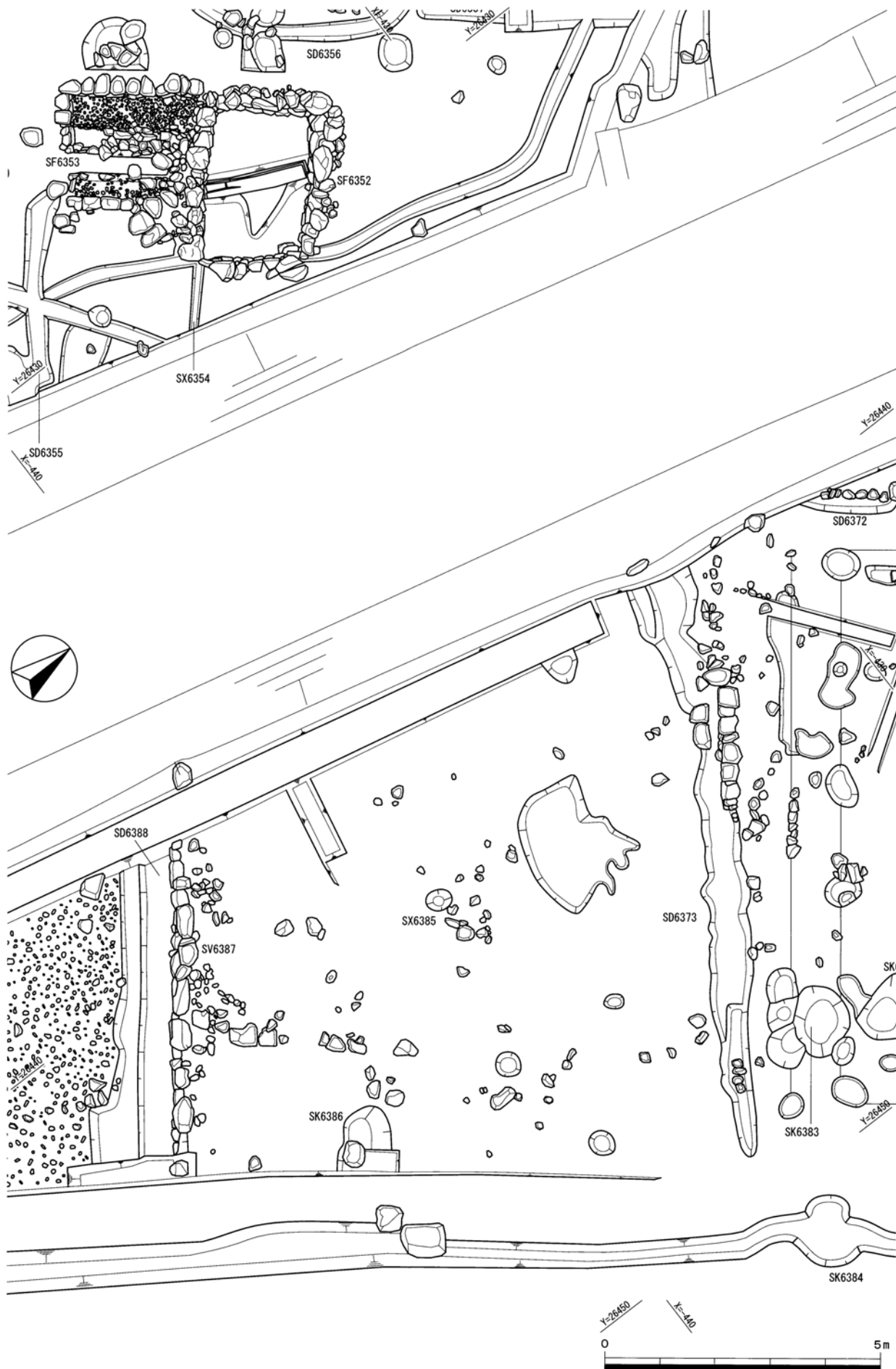
第17図 遺構詳細図(16) (縮尺1/100)



第18図 遺構詳細図(17) (縮尺1/100)



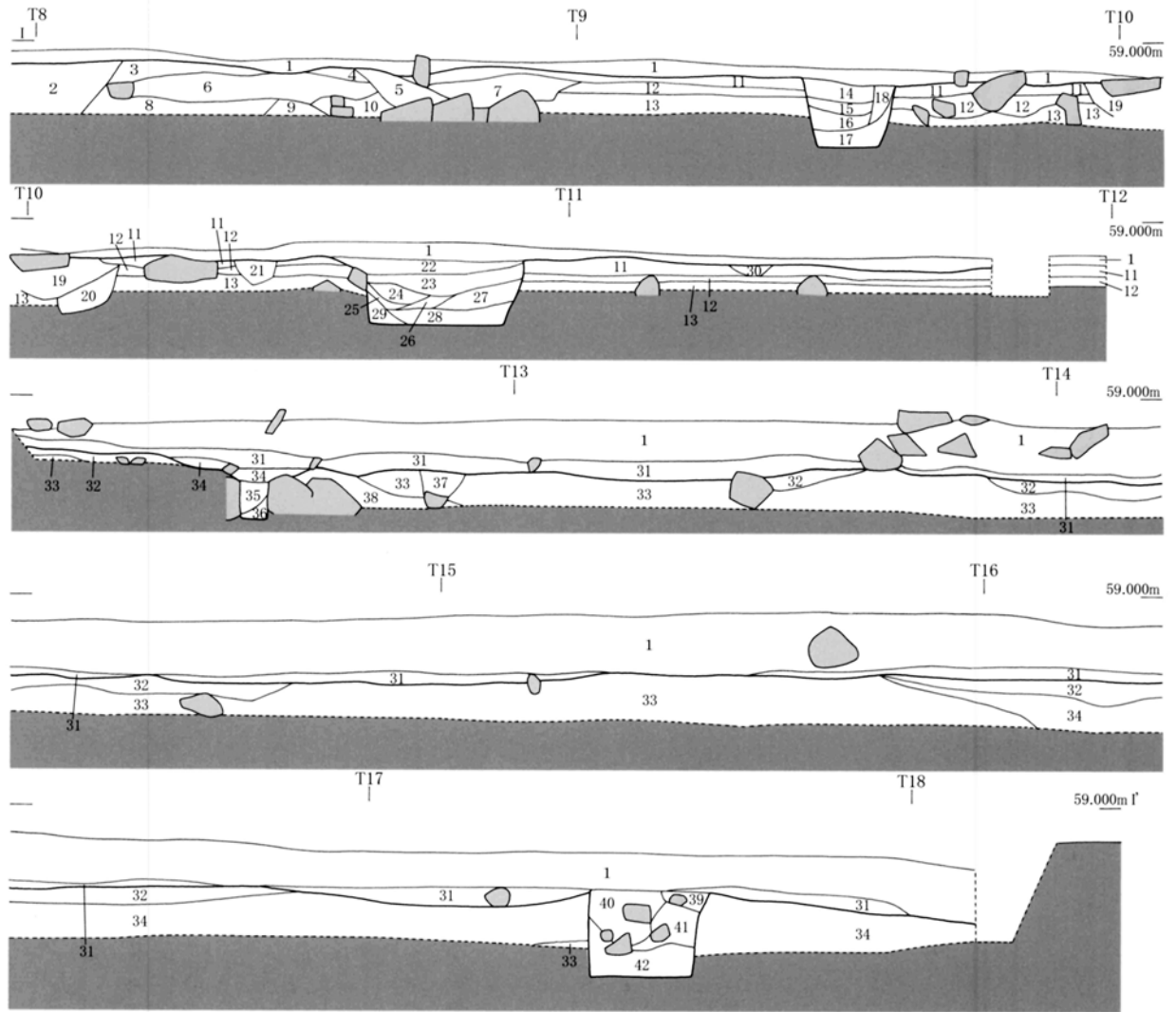
第19図 遺構詳細図(18)(縮尺1/100)



第20図 遺構詳細図(19) (縮尺1/100)

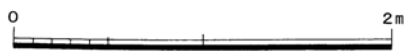


第21图 土层断面图(1)(縮尺1/40)

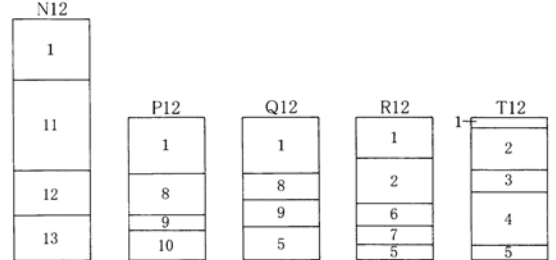


- | | |
|--------------------|--------------------|
| 1 褐色粘質土 | 22 暗灰色粘質土 SK6339覆土 |
| 2 灰色粘質土 | 23 灰褐色粘質土 " 覆土 |
| 3 暗灰色粘質土 | 24 暗青灰色粘質土 " 覆土 |
| 4 暗灰色粘質土 | 25 灰黄色粘質土 " 覆土 |
| 5 暗灰色粘質土 | 26 暗灰色粘質土 " 覆土 |
| 6 灰褐色粘質土 | 27 暗青灰色粘質土 " 覆土 |
| 7 暗灰色粘質土 | 28 暗青灰色粘質土 " 覆土 |
| 8 灰色粘質土 | 29 暗青灰色粘質土 " 覆土 |
| 9 灰色粘質土 | 30 暗灰褐色粘質土 |
| 10 灰色礫混土 | 31 暗灰色粘質土 |
| 11 灰褐色粘質土 | 32 淡灰色粘質土 |
| 12 黄灰色粘質土 | 33 黄灰色礫混土 |
| 13 青灰色粘質土 | 34 黄灰色礫混土 |
| 14 灰褐色粘質土 SD6335覆土 | 34 黑褐色粘質土 |
| 15 灰褐色粘質土 " 覆土 | 35 暗灰色粘質土 SD6341覆土 |
| 16 灰色粘質土 " 覆土 | 36 暗青灰色粘質土 " 覆土 |
| 17 灰色粘質土 " 覆土 | 37 灰色粘質土 |
| 18 灰色粘質土 | 38 灰色粘質土 |
| 19 灰褐色粘質土 | 39 黄灰色粘質土 SD6342覆土 |
| 20 暗灰色粘質土 | 40 淡灰色粘質土 " 覆土 |
| 21 暗灰色粘質土 | 41 暗黄灰色粘質土 " 覆土 |
| | 42 暗黄灰色粘質土 " 覆土 |

T列土层断面图

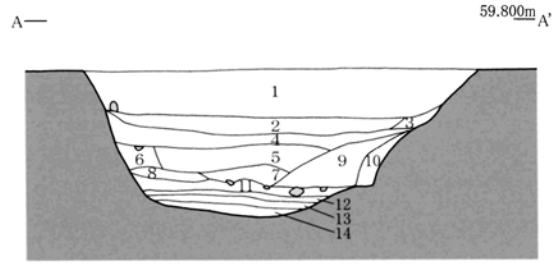


59.200m



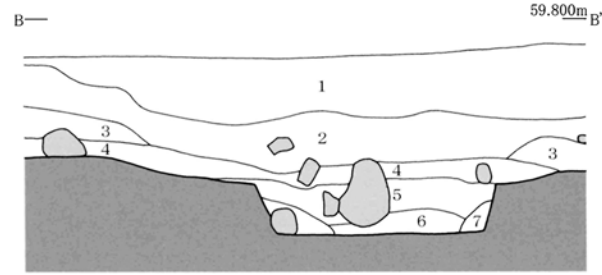
- | | |
|--------------|------------|
| 1 暗灰褐色粘質土 | 8 灰褐色粘質土 |
| 2 灰褐色粘質土 | 9 青灰褐色粘質土 |
| 3 灰褐色粘質土 | 10 灰黄色粘質土 |
| 4 青灰褐色粘質土 | 11 青灰褐色粘質土 |
| 5 灰褐色粘土 | 12 灰褐色粘質土 |
| 6 灰褐色砂質土 | 13 灰褐色粘質土 |
| 7 黑褐色粘質土 炭多量 | |

12列土层柱状模式图



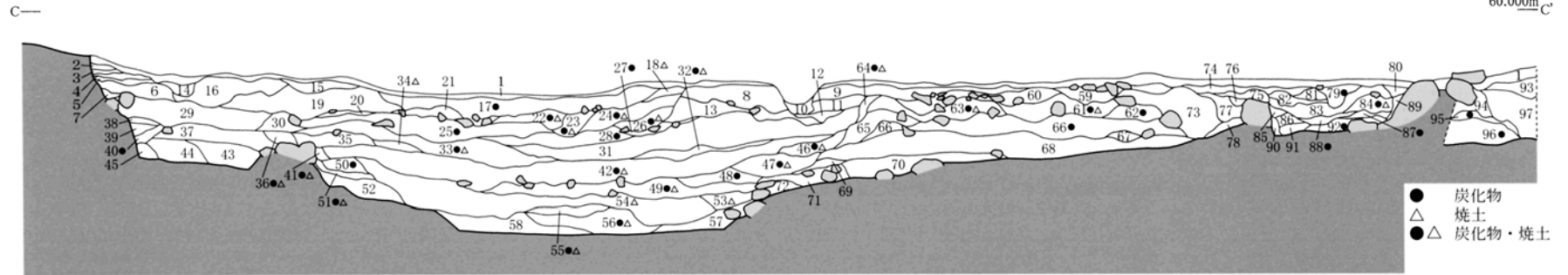
SD6279土层断面图

- 1 暗灰褐色粘质土
- 2 暗灰褐色粘质土
- 3 暗灰褐色粘质土
- 4 暗青灰褐色粘质土
- 5 灰褐色粘质土
- 6 灰褐色砂质土
- 7 暗青灰褐色粘质土
- 8 暗青灰色砂质土
- 9 暗青灰色砂质土
- 10 暗青灰色粘质土
- 11 暗青灰色砂质土
- 12 暗青灰色粘质土
- 13 暗青灰色砂质土
- 14 暗青灰色砂质土



SD6279 · SV6283土层断面图

- 1 暗青灰褐色礫混土 造成土
- 2 暗青灰褐色礫混土 "
- 3 暗青灰褐色砂质土 "
- 4 暗青灰褐色粘质土 "
- 5 暗青灰褐色砂质土 "
- 6 暗青灰褐色砂质土 SD6279覆土
- 7 暗青灰褐色砂 覆土



- 1 暗褐色粘质土
- 2 黄褐色粘质土
- 3 暗褐色粘质土
- 4 暗褐色粘质土
- 5 灰黄褐色粘质土
- 6 灰黄褐色粘质土
- 7 褐灰色粘质土
- 8 灰黄褐色粘质土
- 9 黑褐色粘质土
- 10 黑褐色粘质土
- 11 黄褐色粘质土
- 12 灰黄褐色粘质土
- 13 黄褐色粘质土
- 14 暗褐色粘质土
- 15 黄褐色粘质土
- 16 褐灰色粘质土
- 17 黄褐色粘质土
- 18 灰黄褐色粘质土
- 19 灰黄褐色粘质土
- 20 褐灰色粘质土

- 21 褐灰色粘质土
- 22 灰黄褐色粘质土
- 23 褐灰色粘质土
- 24 灰黄褐色粘质土
- 25 黄灰色粘质土
- 26 黄灰色粘质土
- 27 褐色粘质土
- 28 黑褐色粘质土
- 29 黑褐色砂质土
- 30 灰色砂质土
- 31 黑褐色粘质土
- 32 黑褐色粘质土
- 33 黑褐色粘质土
- 34 黑褐色粘质土
- 35 黑色砂质土
- 36 黑褐色粘质土
- 37 黑褐色粘质土
- 38 灰色砂质土
- 39 黄灰色粘质土
- 40 暗灰色粘质土

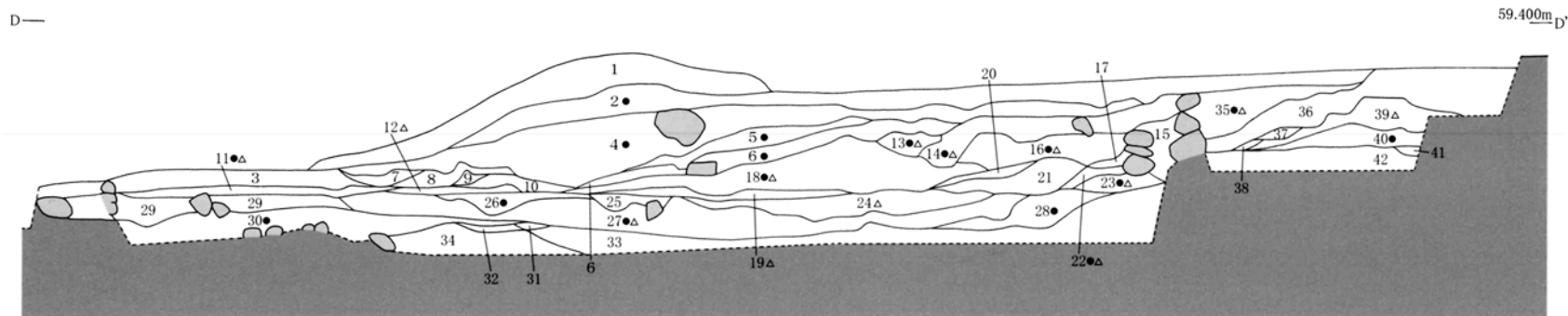
- 41 黑褐色砂质土
- 42 黑褐色粘质土
- 43 暗褐色粘质土
- 44 黄褐色粘质土
- 45 褐色砂质土
- 46 暗褐色砂质土
- 47 黑褐色砂质土
- 48 黑褐色砂质土
- 49 黑褐色砂质土
- 50 黑褐色粘质土
- 51 黑褐色粘质土
- 52 褐色砂质土
- 53 黑褐色粘质土
- 54 黑褐色砂质土
- 55 黑色砂质土
- 56 黑色砂质土
- 57 黑褐色砂质土
- 58 黑褐色粘质土
- 59 暗褐色粘质土
- 60 暗褐色粘质土

- 61 黄褐色粘质土
- 62 黄灰色粘质土
- 63 灰黄褐色粘质土
- 64 灰黄褐色粘质土
- 65 黄灰色粘质土
- 66 黑褐色粘质土
- 67 黑褐色粘质土
- 68 褐灰色粘质土
- 69 黑褐色粘质土
- 70 黑褐色粘质土
- 71 黑色砂质土
- 72 褐色砂质土
- 73 暗褐色砂质土
- 74 褐色粘质土
- 75 暗褐色粘质土
- 76 黄褐色粘质土
- 77 灰黄褐色砂质土
- 78 黄褐色砂质土
- 79 暗褐色砂质土
- 80 褐色粘质土

- 81 黄褐色粘质土
- 82 黄褐色粘质土
- 83 黄褐色粘质土
- 84 黄褐色粘质土
- 85 暗褐色砂质土
- 86 暗褐色砂质土
- 87 褐灰色粘质土
- 88 黄褐色粘质土
- 89 暗褐色粘质土
- 90 暗灰黄色砂质土
- 91 褐色砂质土
- 92 黑褐色粘质土
- 93 褐色粘质土
- 94 灰黄褐色粘质土
- 95 褐灰色粘质土
- 96 黑褐色粘质土
- 97 黄褐色粘质土

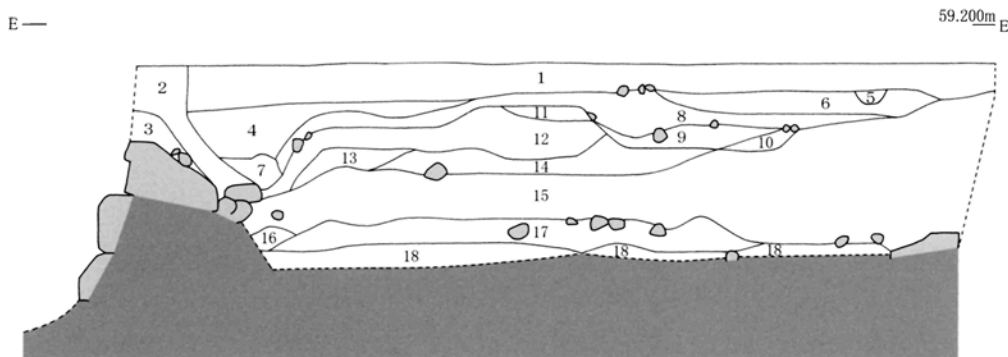
SA6271 · SD6279 · SV6280 · 6282~6284土层断面图





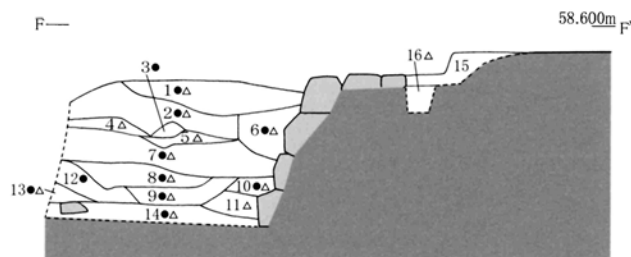
- | | | | | | | |
|----------|------------|------------|-----------|------------|-----------|------------|
| 1 暗褐色粘质土 | 7 灰黄褐色粘质土 | 13 灰黄褐色粘质土 | 19 黑色粘质土 | 25 黑色粘质土 | 31 黑褐色粘质土 | 37 灰黄褐色粘质土 |
| 2 黄褐色粘质土 | 8 灰黄褐色粘质土 | 14 黄褐色粘质土 | 20 黑色粘质土 | 26 灰黄褐色粘质土 | 32 暗灰色砂质土 | 38 暗褐色粘质土 |
| 3 暗褐色粘质土 | 9 灰黄褐色粘质土 | 15 褐色粘质土 | 21 暗褐色砂质土 | 27 黑褐色砂质土 | 33 黑褐色粘质土 | 39 黑褐色粘质土 |
| 4 黄褐色粘质土 | 10 灰黄褐色粘质土 | 16 黑色粘质土 | 22 黑色砂质土 | 28 暗褐色粘质土 | 34 暗灰色砂质土 | 40 黑褐色粘质土 |
| 5 褐色粘质土 | 11 黑褐色粘质土 | 17 灰黄色粘质土 | 23 黑色砂质土 | 29 褐灰色粘质土 | 35 黄褐色粘质土 | 41 黑色砂质土 |
| 6 黄褐色粘质土 | 12 黑褐色粘质土 | 18 黑褐色粘质土 | 24 黑色粘质土 | 30 暗褐色砂质土 | 36 暗褐色粘质土 | 42 黑褐色粘质土 |

SD6279·SV6714土层断面图



- | | |
|----------|------------|
| 1 表土 | 10 暗褐色砂质土 |
| 2 — | 11 灰黄褐色 |
| 3 — | 12 褐色粘质土 |
| 4 — | 13 褐色粘质土 |
| 5 — | 14 黄褐色粘质土 |
| 6 — | 15 黄褐色粘质土 |
| 7 暗褐色粘质土 | 16 暗褐色粘质土 |
| 8 黄褐色粘质土 | 17 黄褐色粘质土 |
| 9 黄褐色粘质土 | 18 灰黄褐色粘质土 |

SA6713·SV6714土层断面图

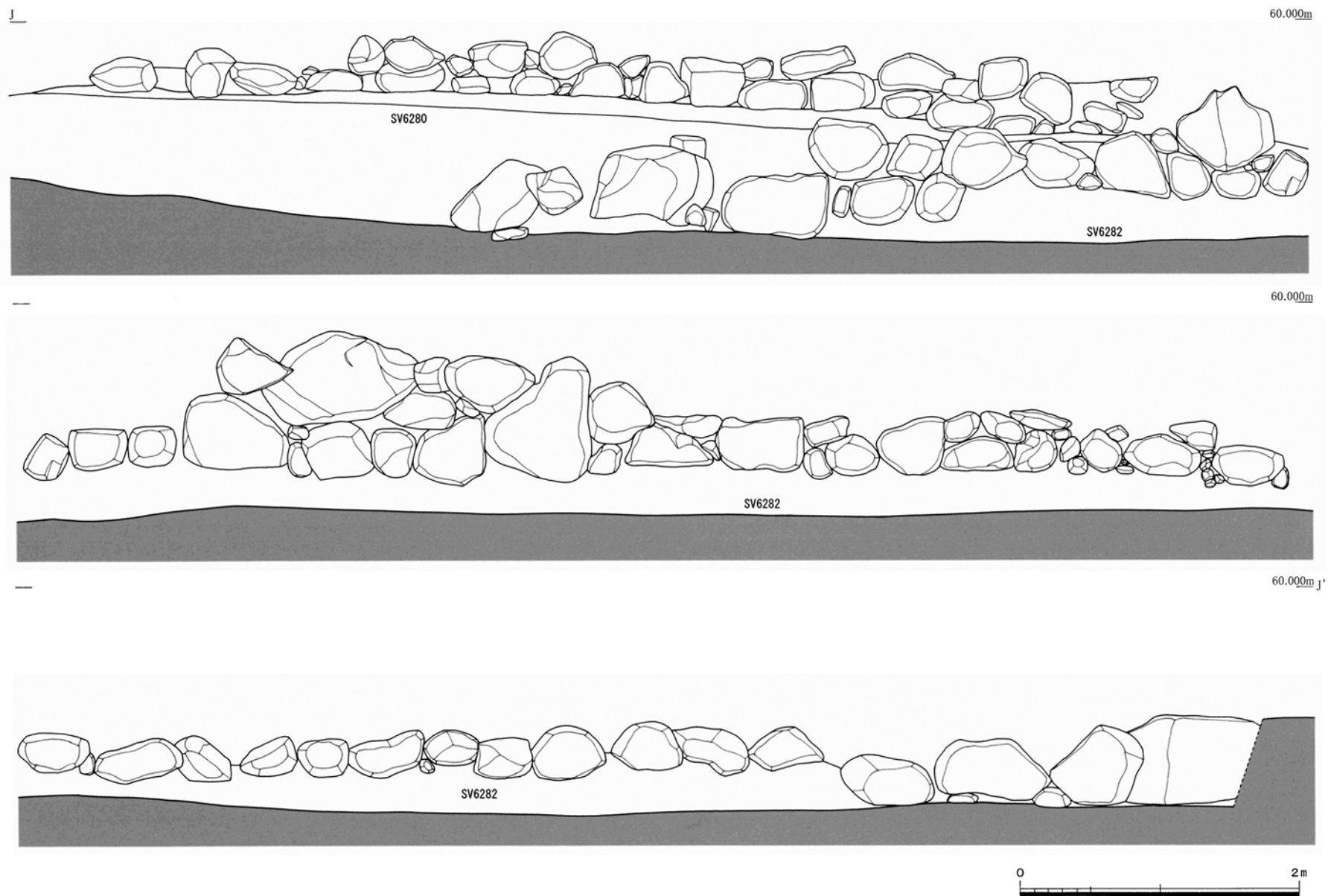


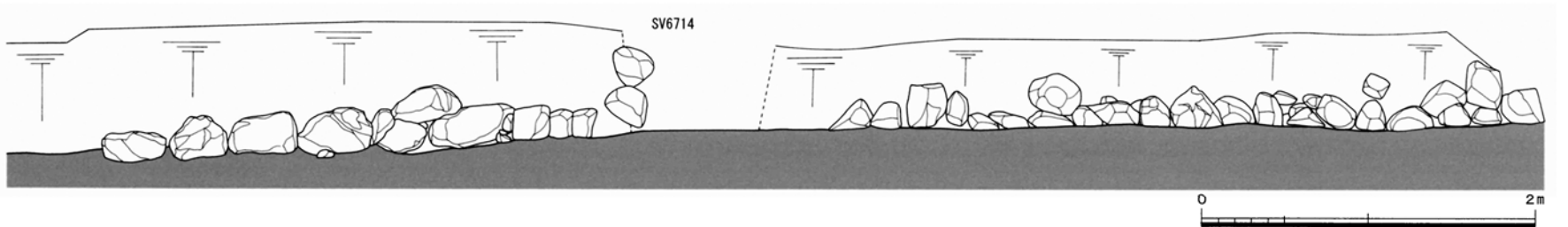
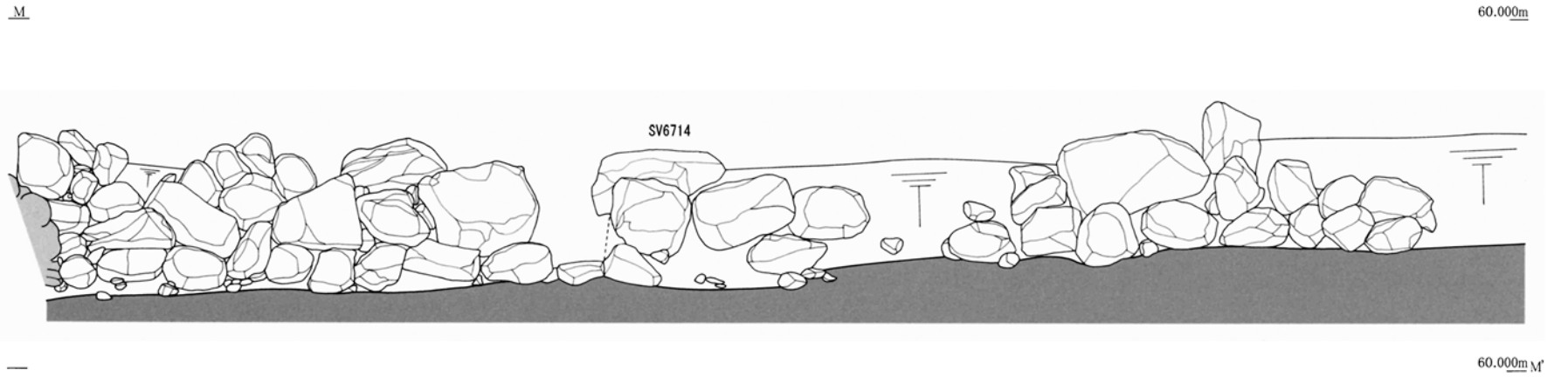
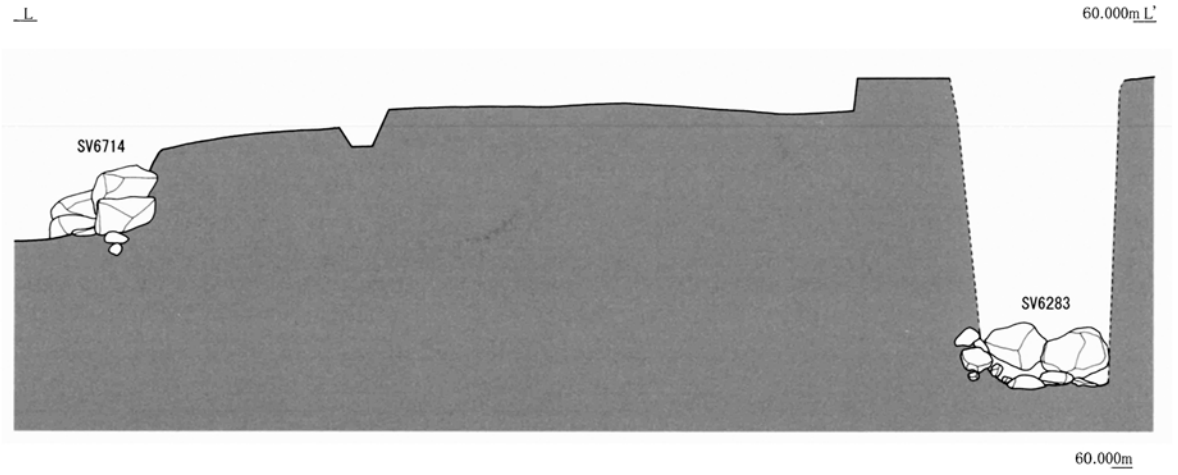
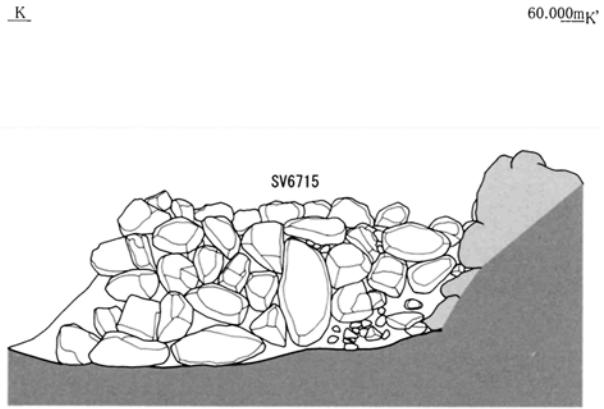
SD6279·SV6715土层断面图

- | | | |
|-----------|-----------|-----------|
| 1 暗褐色粘质土 | 9 黑褐色粘质土 | ● 炭化物 |
| 2 灰黄褐色粘质土 | 10 黑褐色粘质土 | △ 烧土 |
| 3 灰黄褐色粘质土 | 11 暗褐色粘质土 | ●△ 炭化物·烧土 |
| 4 灰黄褐色粘质土 | 12 黑褐色砂质土 | |
| 5 灰黄褐色粘质土 | 13 黑褐色砂质土 | |
| 6 暗褐色粘质土 | 14 黑褐色砂质土 | |
| 7 褐灰色粘质土 | 15 黄褐色粘质土 | |
| 8 褐灰色粘质土 | 16 黄褐色粘质土 | |



第24图 石垣立面图(1)(缩尺1/40)







第127次調査垂直写真



第130次調査垂直写真



第136次調査垂直写真



SA6712・6713・SD6279
(南より)



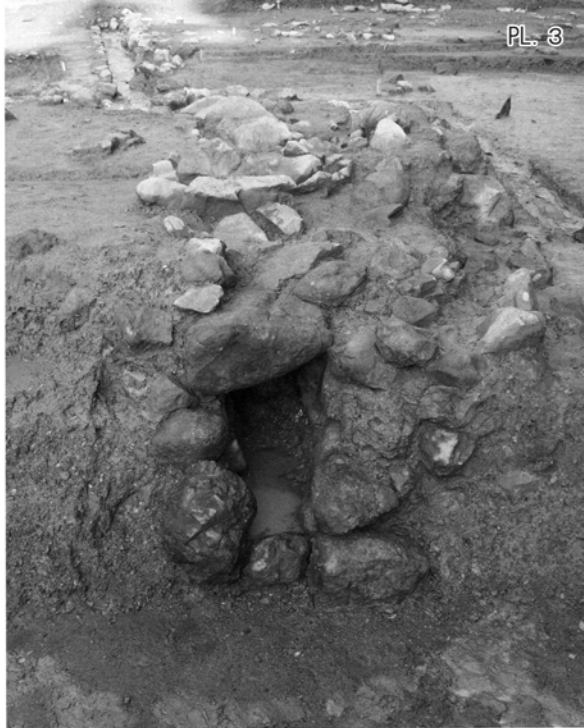
SD6279
(北東より)



SD6279
(西より)



【左】
SD6279
(東より)



【右】
SZ6278
(南より)



SV6284
(北より)



SV6714・6715
(西より)



SV6274・SZ6278
(西より)



SV6277・SZ6278
(東より)



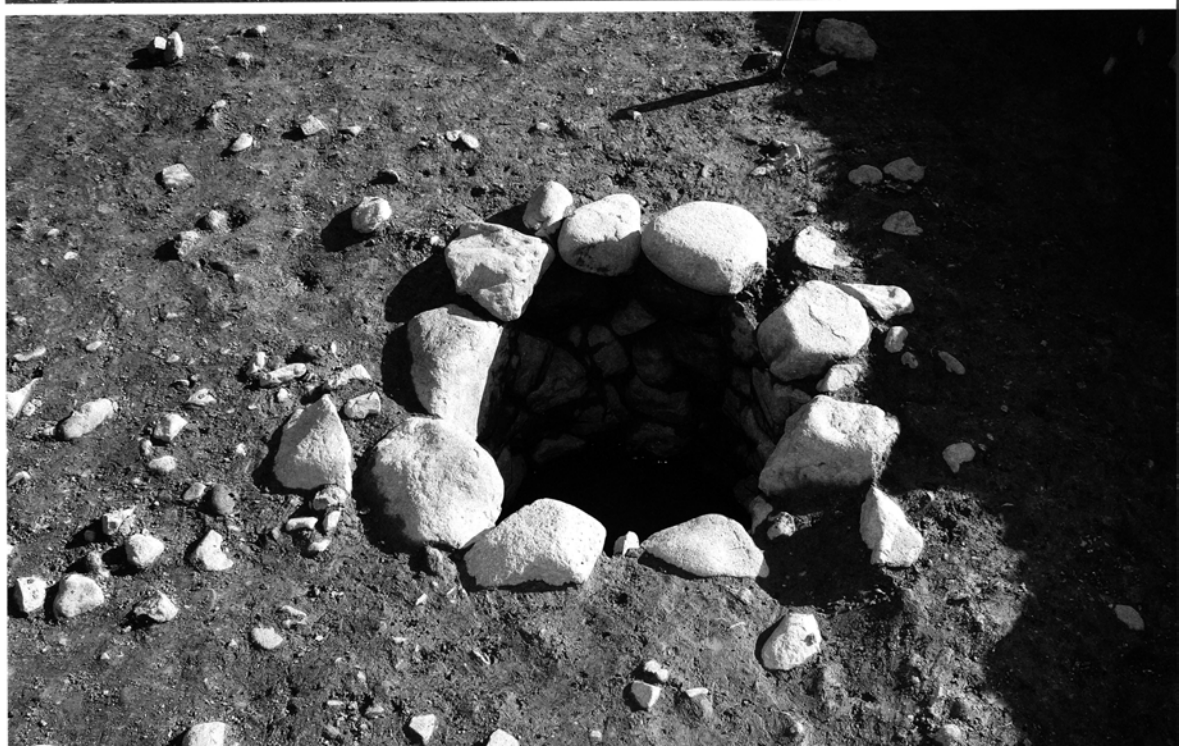
SV6274・6277
SD6276・SZ6278
(北より)



A区下段全景
(西より)



B1区南西部全景
(南西より)



SE6285
(西より)



SF6703
(北より)



SF6703・SS6710
(東より)



SF6702
(東より)



B区全景
(南より)



B1・2区全景
(南より)



B区全景
(東より)



B区全景
(北東より)



B2区南部全景
(東より)



B2区北部全景
(東より)



SB6359
(南より)



SB6359
(西より)



SB6359内柱根
(南より)



SB6251
(東より)



SB6331
(東より)

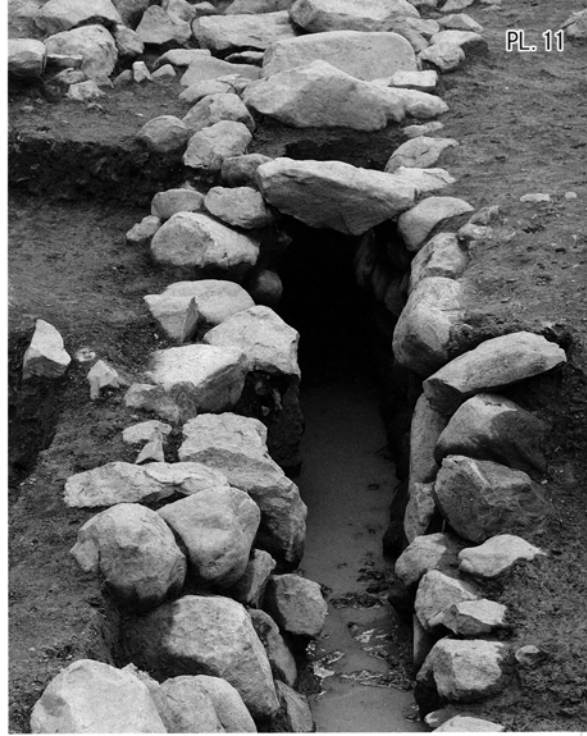


SB6331
(北西より)

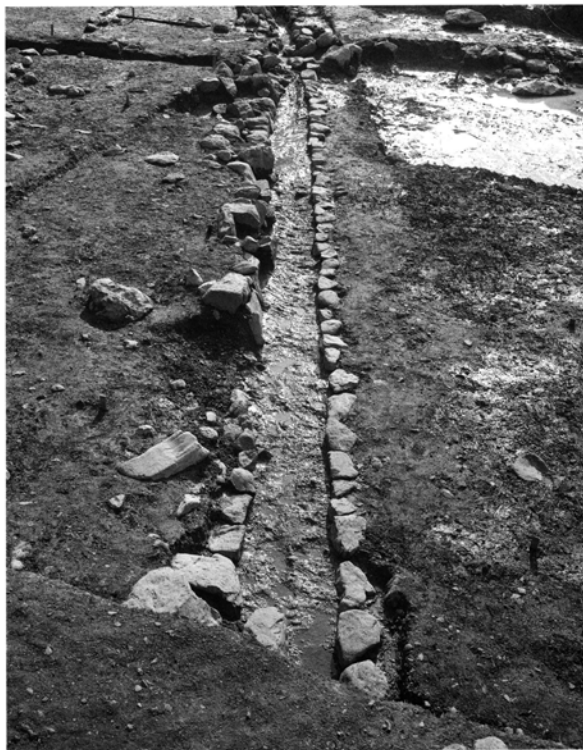
第127・130・136次調査区(11)



【右】
SD6250西半部
(北より)



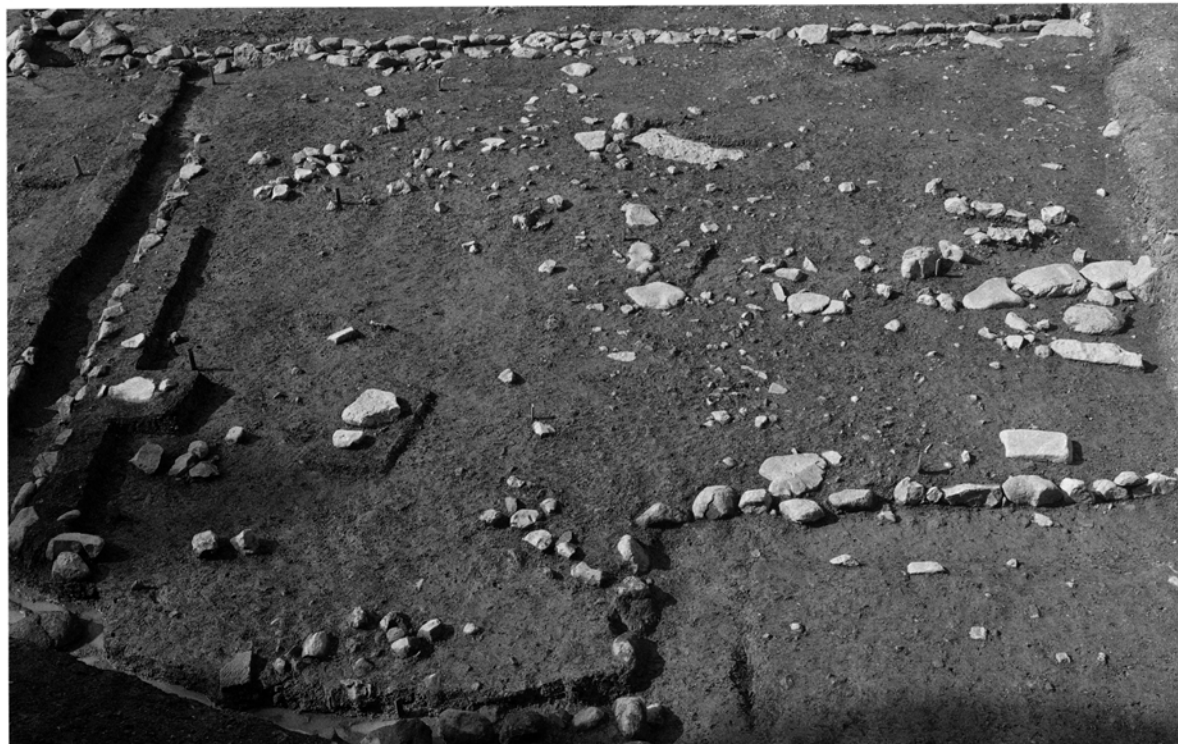
【左】
SD6250・SZ6278近景
(北より)



【右】
SD6252
(東より)



【左】
SD6250東半部
(北より)



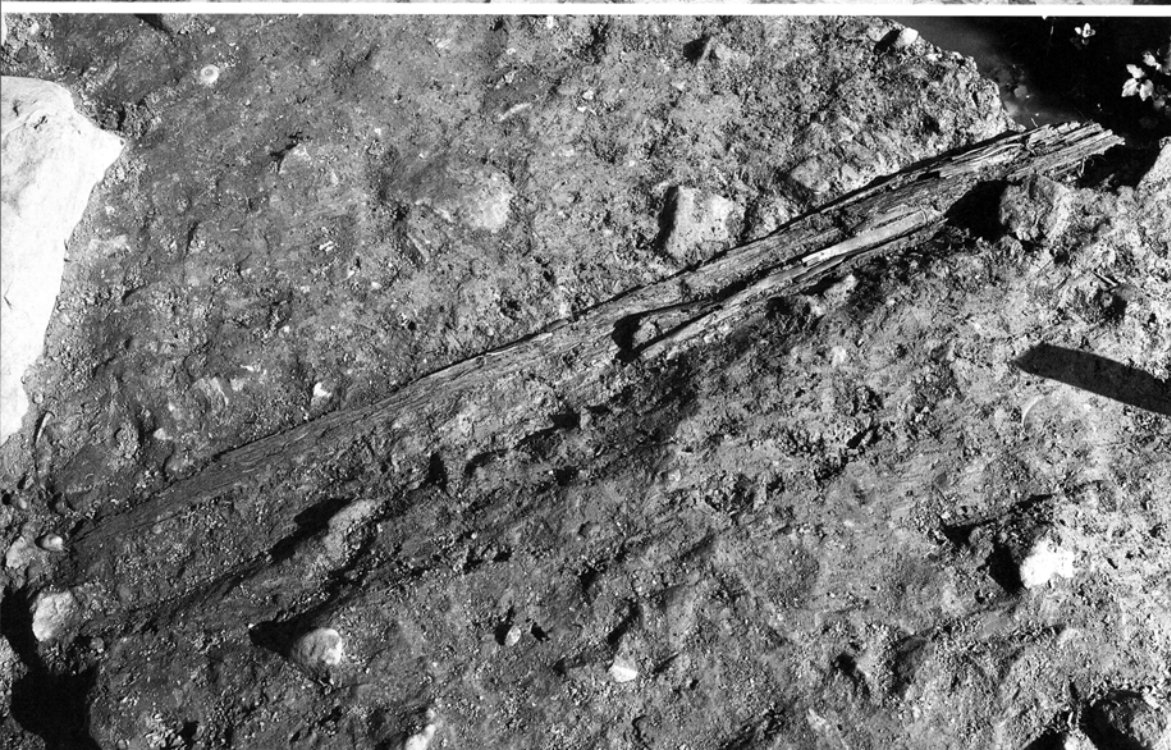
【左】
SD6250・6252・6253
(東より)



SF6352・6353
(南より)



SF6352内部
(北より)



SX6354
(南西より)



SG6333
(東より)



SG6333
(南より)



SX6332
(北より)



B 4区全景
(南西より)



SB6258
(南より)



SK6259~6271
(南より)



B 5 区全景
(南より)



B 5 区全景
(北より)



SB6375
(南より)



SB6375
(西より)



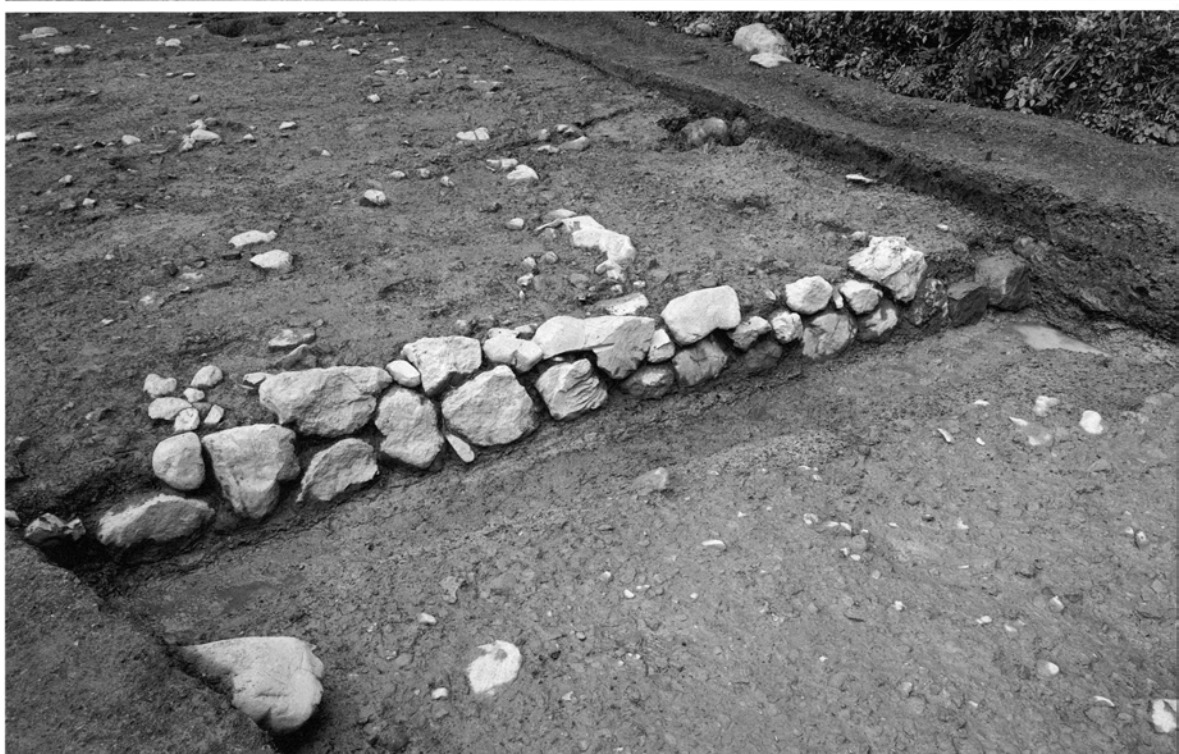
SS6370・SX6376
SD6369・SD6371・SD6372
(南より)



SA6365
(南西より)



B 5 区南端部全景
(西より)



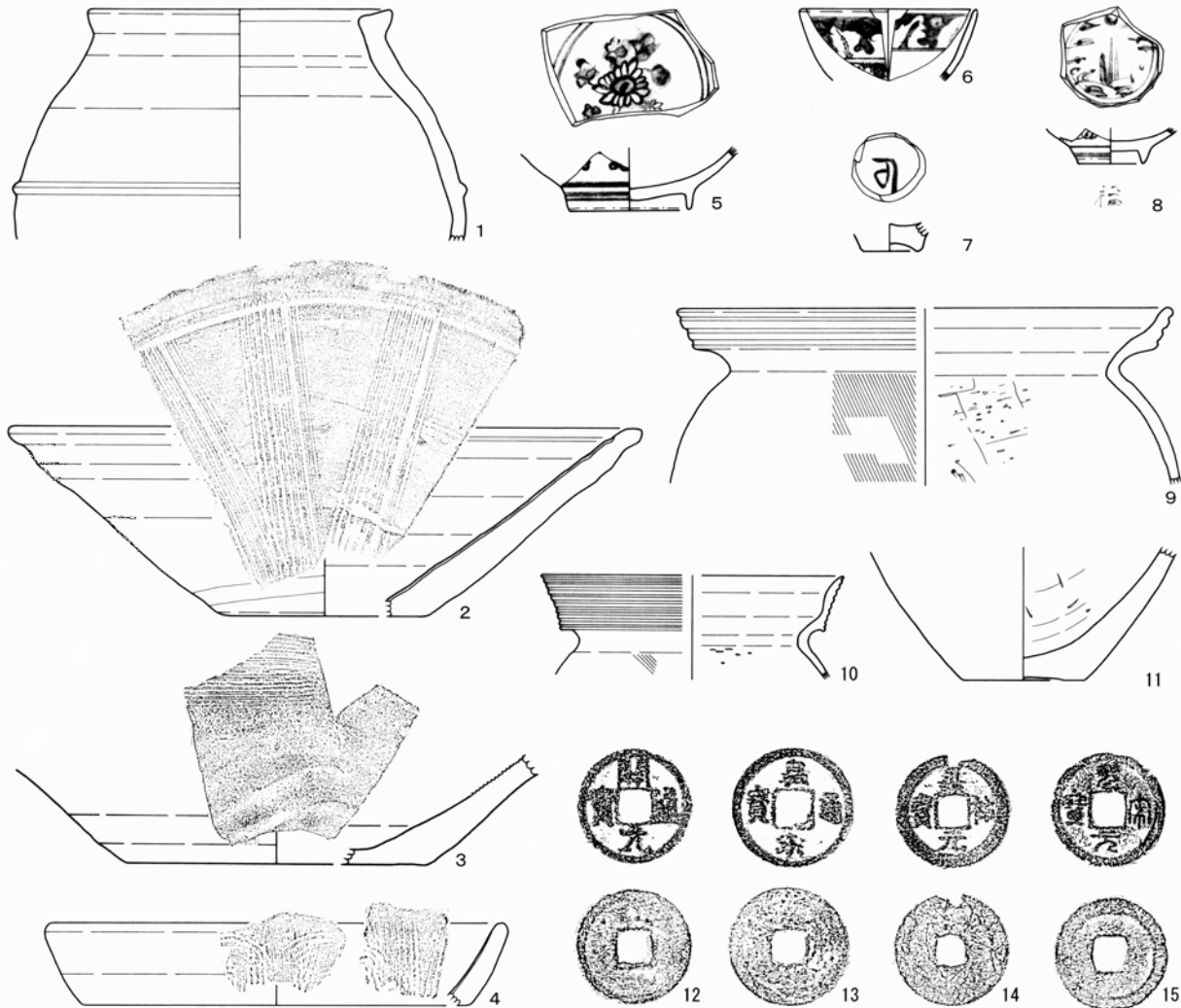
SV6387・SD6388
(南より)



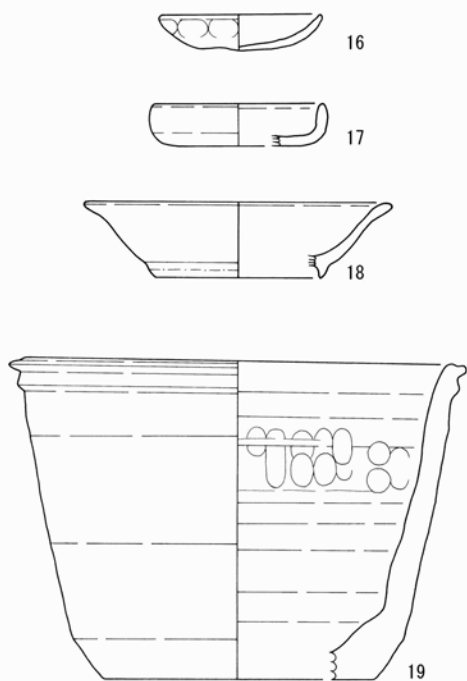
B 6 区全景
(東より)

第26図 出土遺物(1)

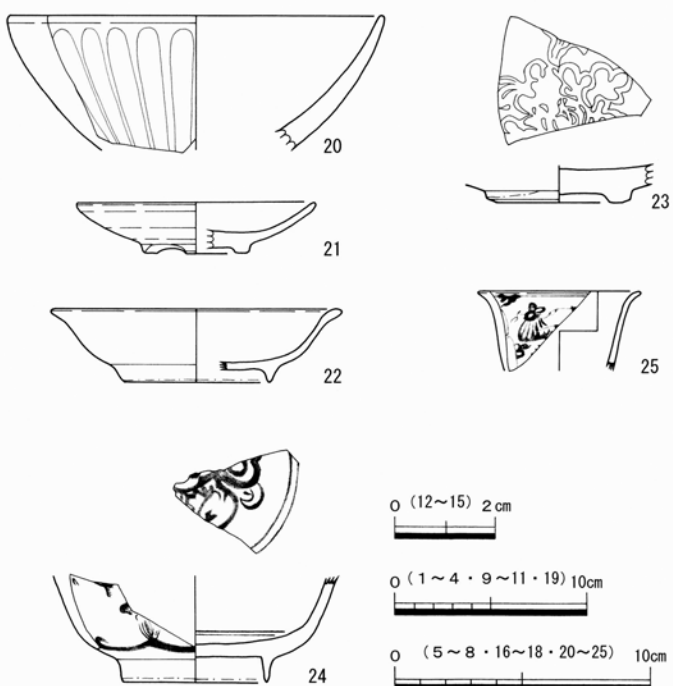
A1区表土(1~15)



B地区表土(16~18)

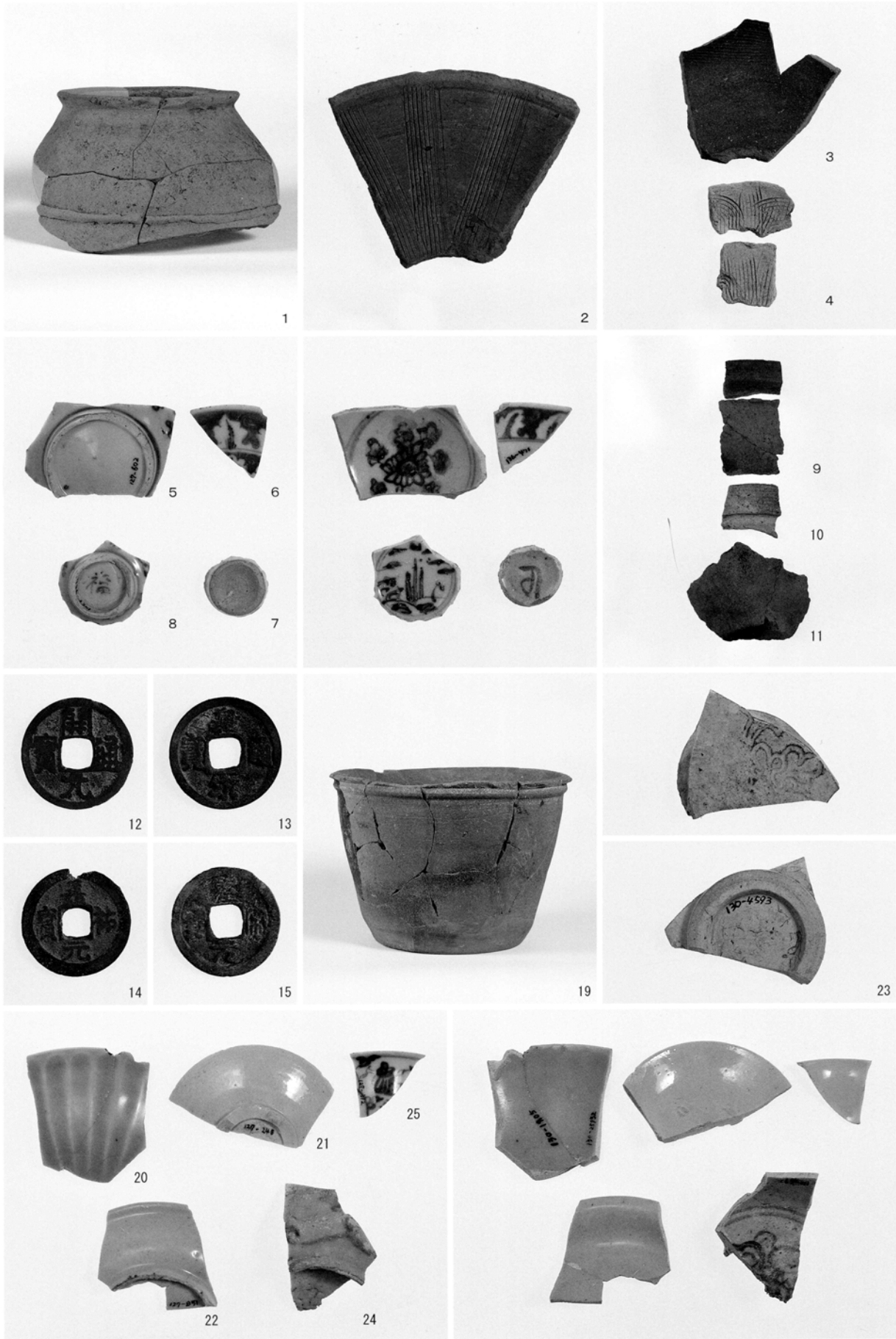


B1区表土(19~25)



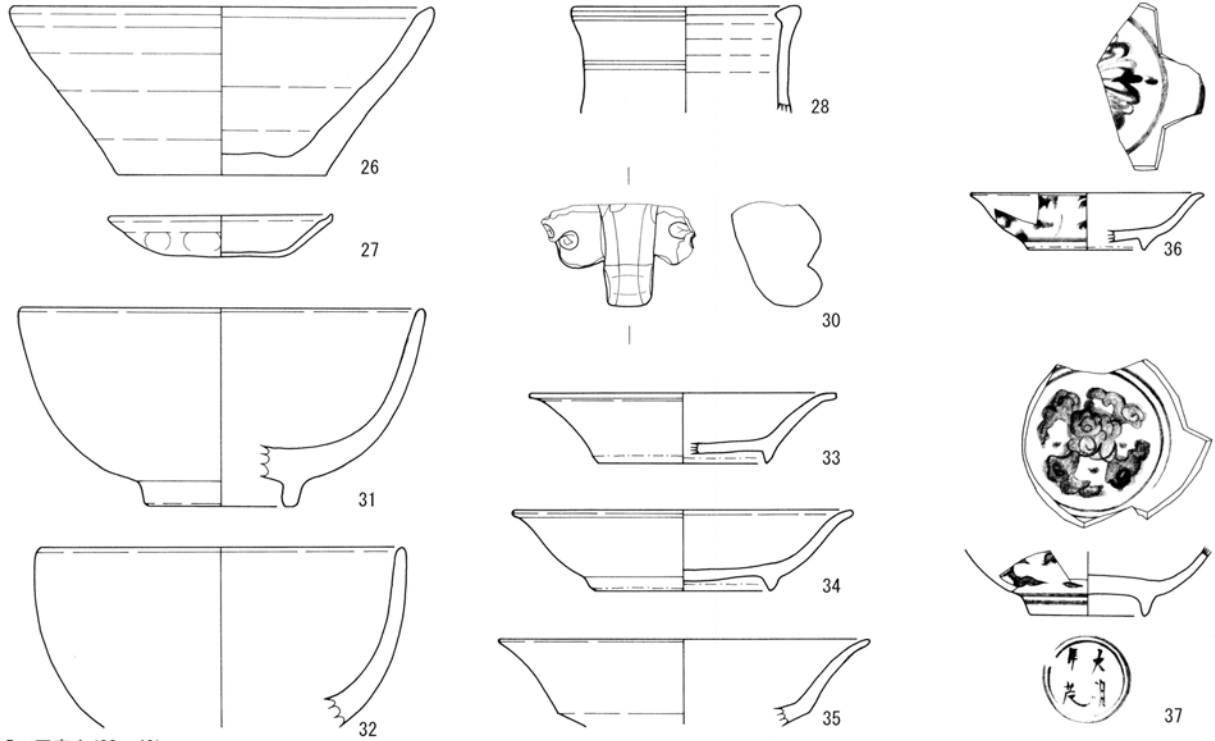
A1区表土 越前焼壺1 播鉢2 鉢3 卸皿4 染付碗5・6 坏7・8 弥生土器9~11 金属製品銅銭12~15

B区表土 土師質皿16・17 白磁皿18 B1区表土 越前焼水指19 青磁碗20 白磁皿21~23 染付碗24 坏25

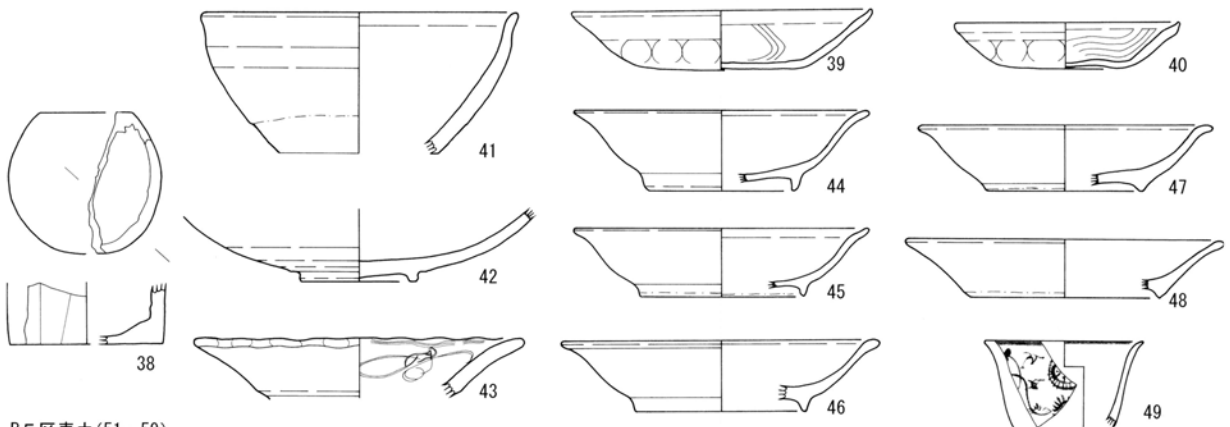


第27図 出土遺物(2)

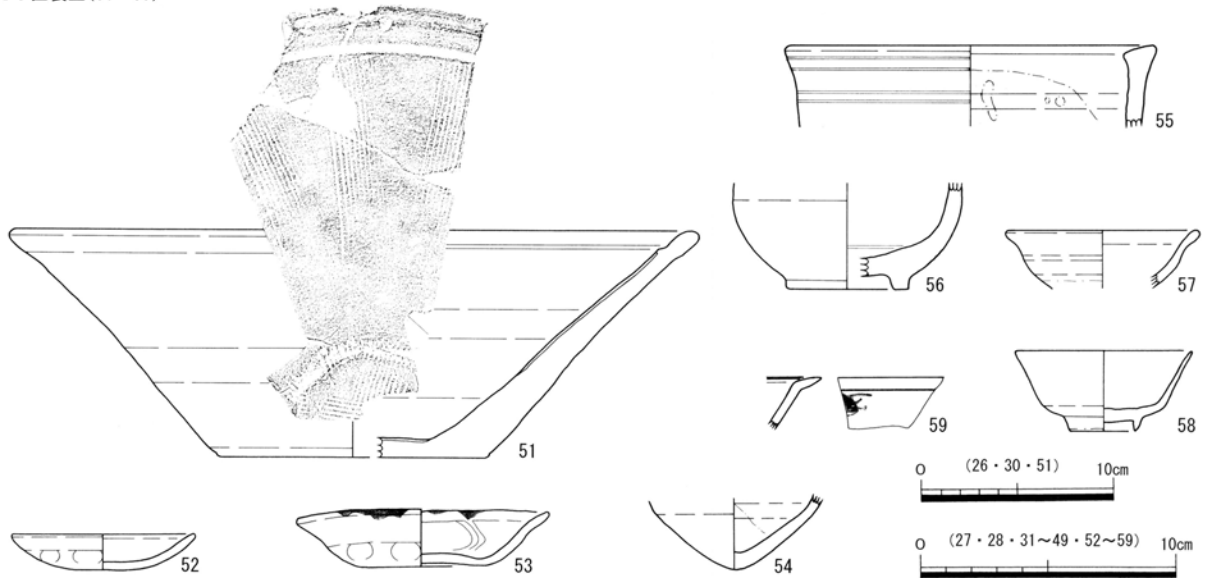
B2区表土(26~28・30~37)



B3区表土(38~49)



B5区表土(51~59)

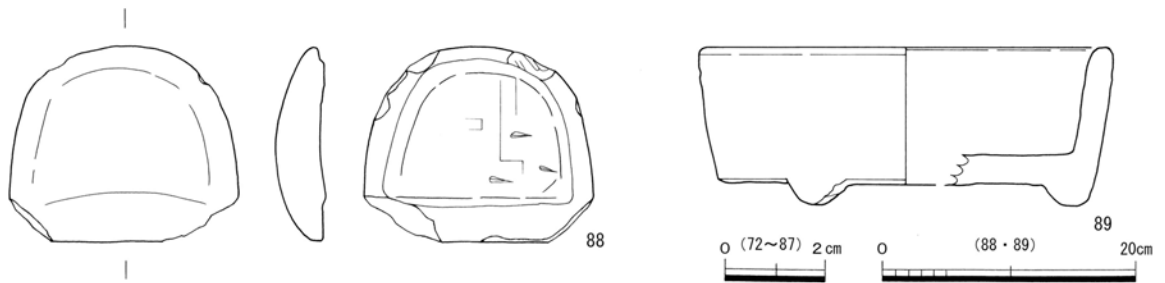
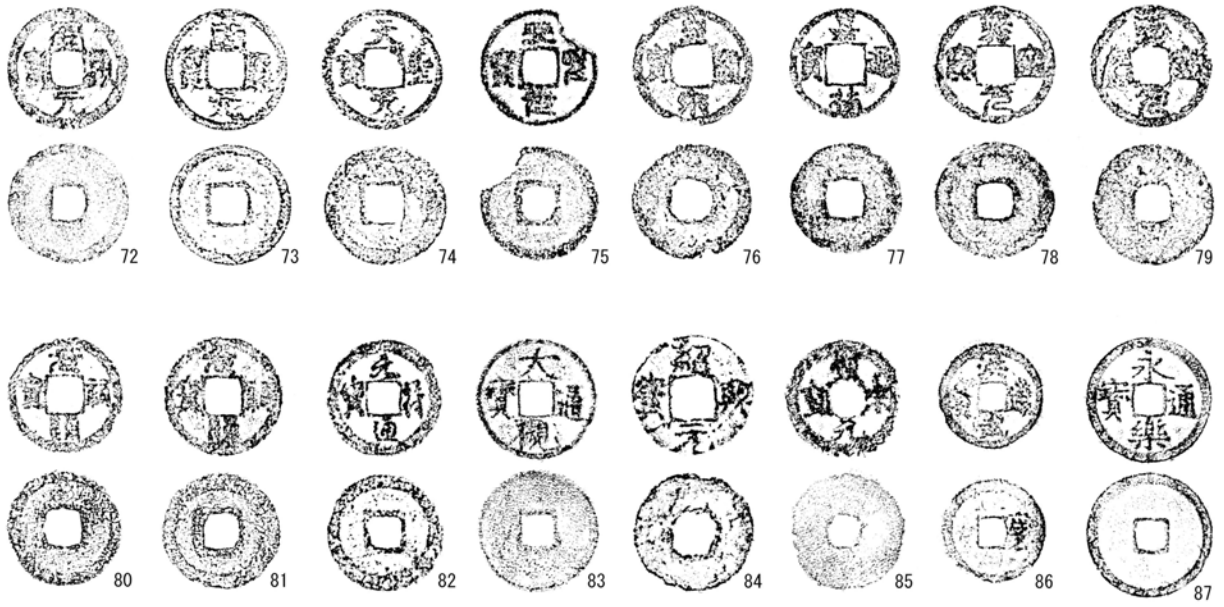
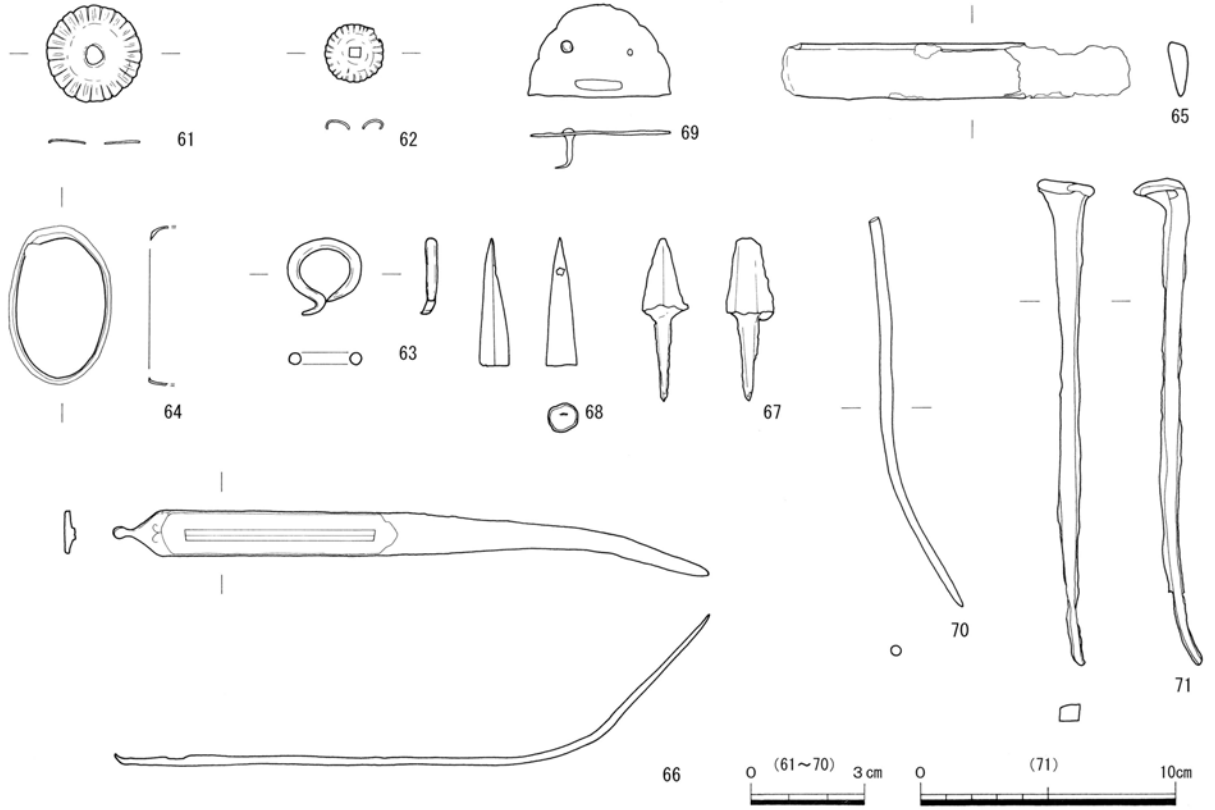


- | | |
|-------|--|
| B2区表土 | 越前焼鉢26 土師質皿27 灰釉香炉28 瓦質風炉29・30 青磁碗31・32 白磁皿33~35 染付皿36 碗37 |
| B3区表土 | 越前焼花生38 土師質皿39・40 鉄釉碗41・42 青磁皿43 白磁皿44~48 染付坏49 |
| B5区表土 | 越前焼播鉢51 土師質皿52・53 灰釉花生54 香炉55 青磁瓶56 白磁皿57 坏58 染付皿59 |

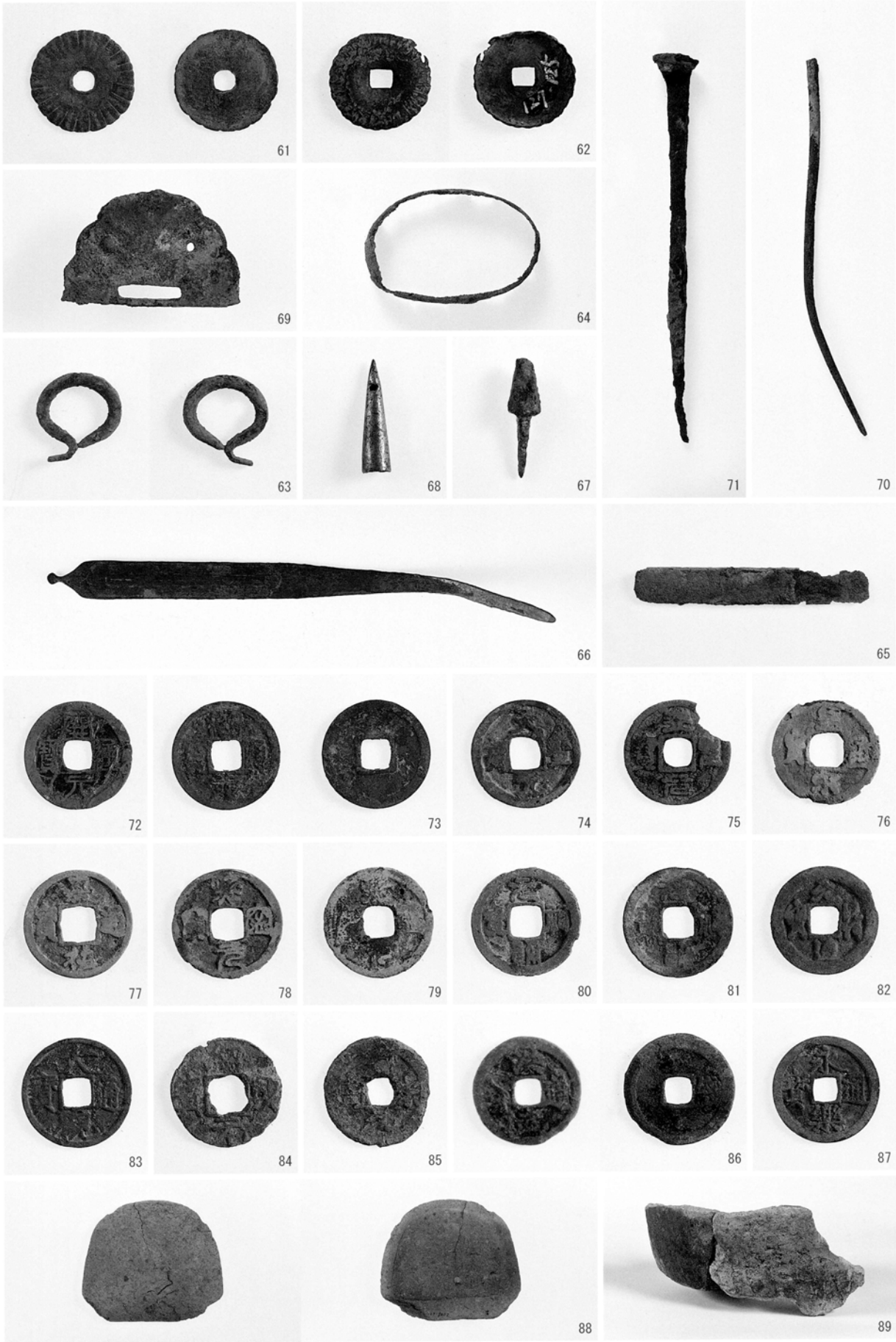


第28図 出土遺物(3)

表土(61~89)

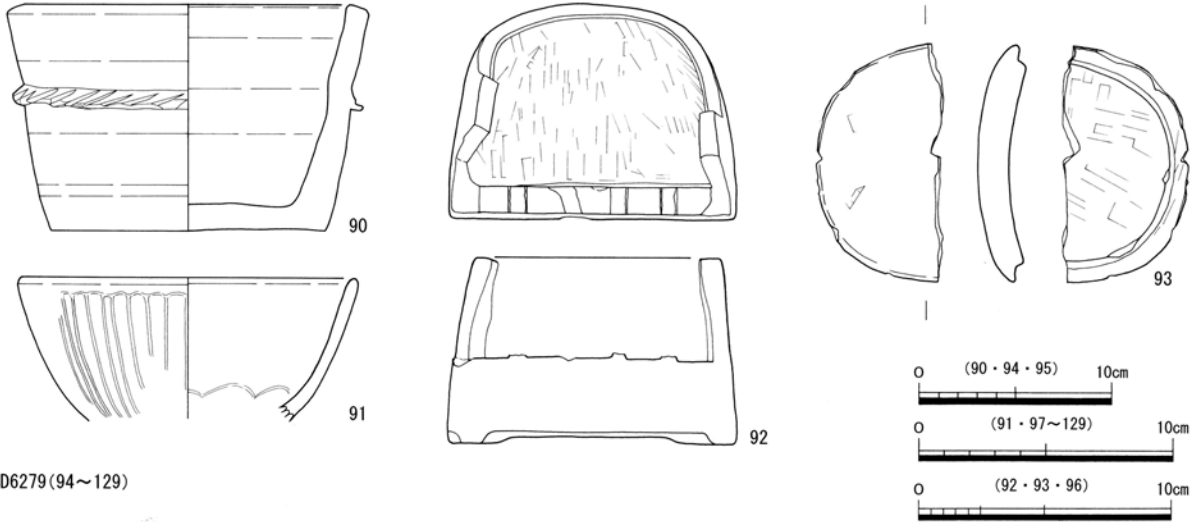


表土 金属製品環付飾金具61~63 鞘尻64 小柄65 筭66 鉄鏃67 円錐状金具68 蝶番69 火箸70 釘71 銅銭72~87 石製品バンドコ蓋88 盤89

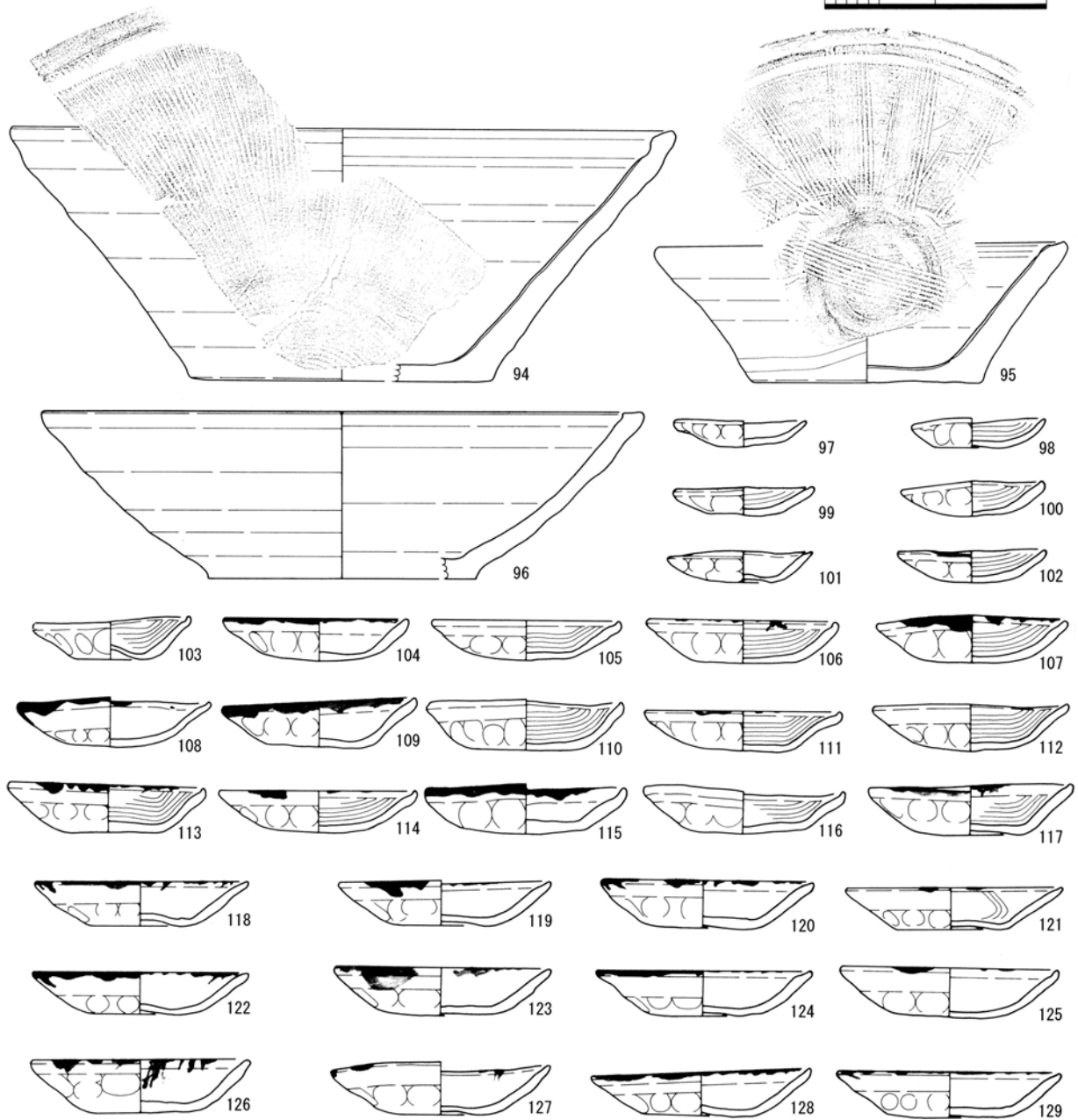


第29図 出土遺物(4)

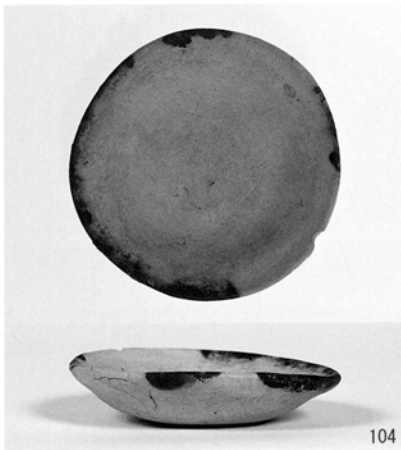
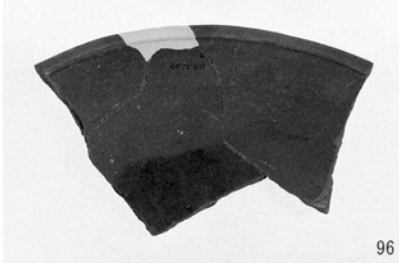
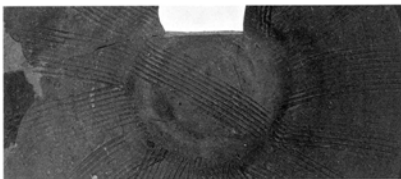
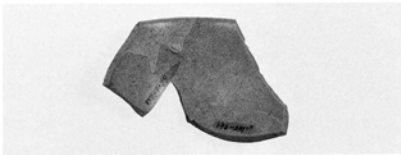
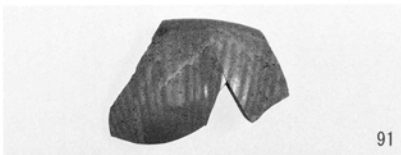
SA6365(90~93)



SD6279(94~129)

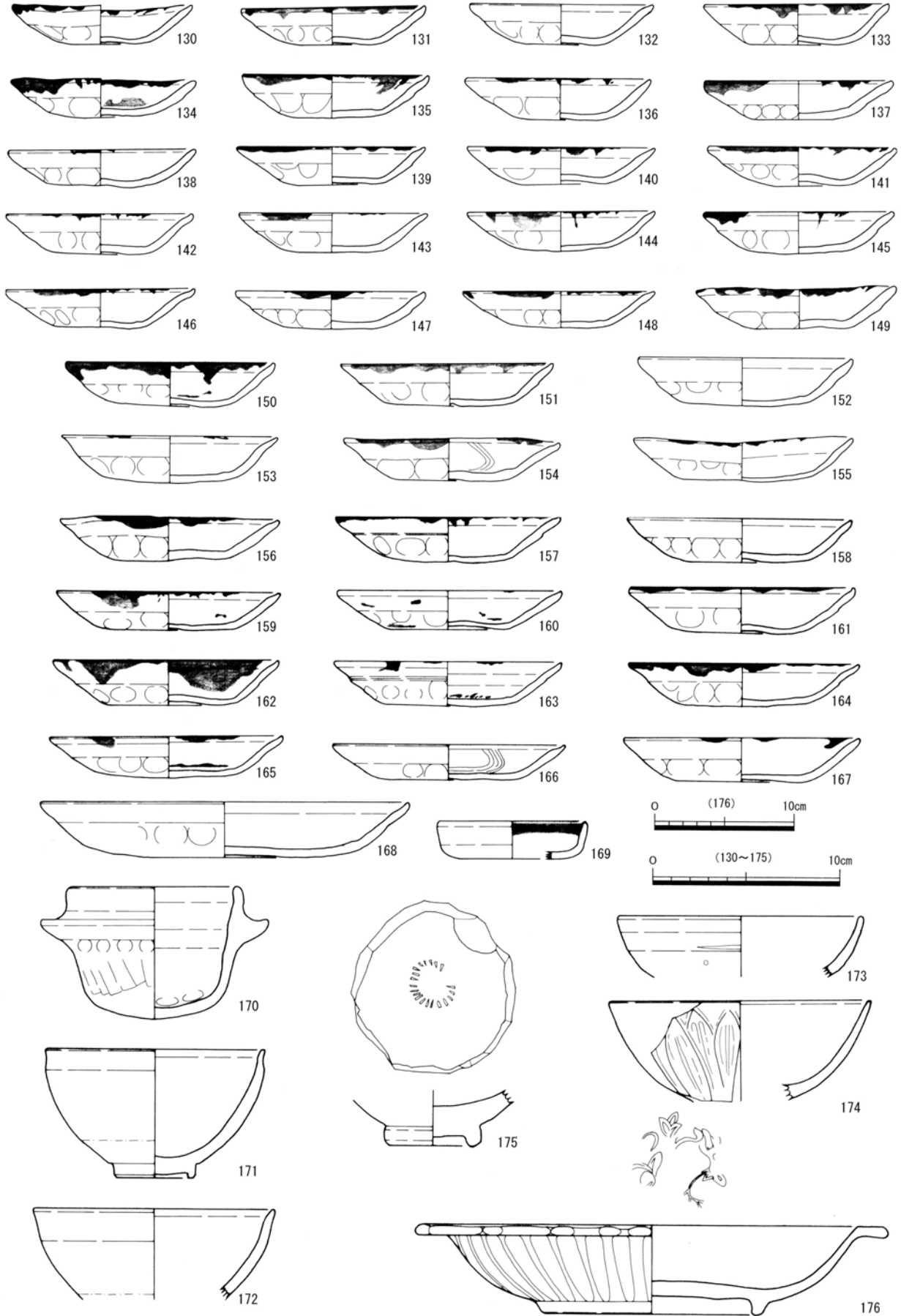


SA6365 越前焼桶90 青磁碗91 石製品バンドコ92・93 SD6279 越前焼播鉢94・95 鉢96 土師質皿97~129

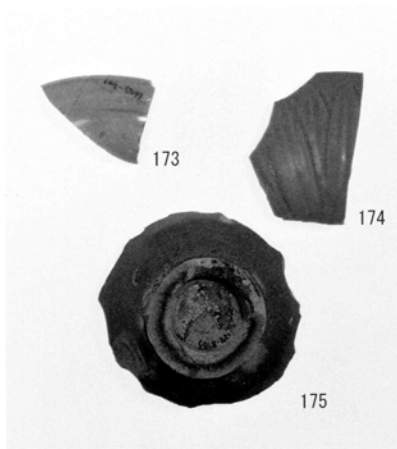
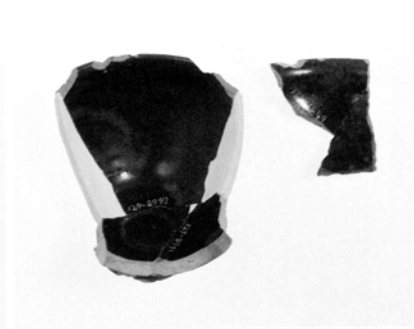
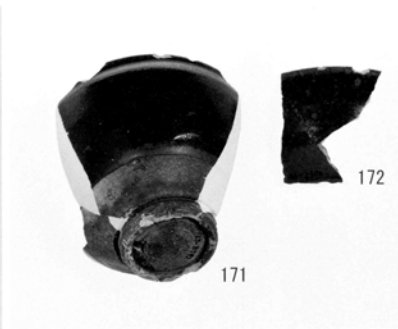
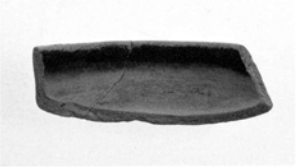
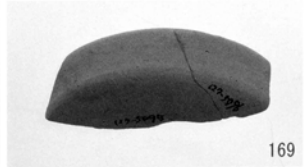
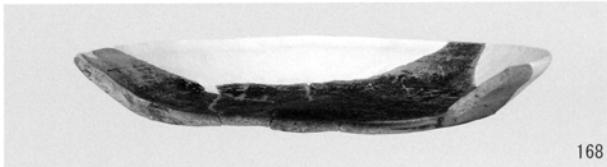


第30図 出土遺物(5)

SD6279(130~176)

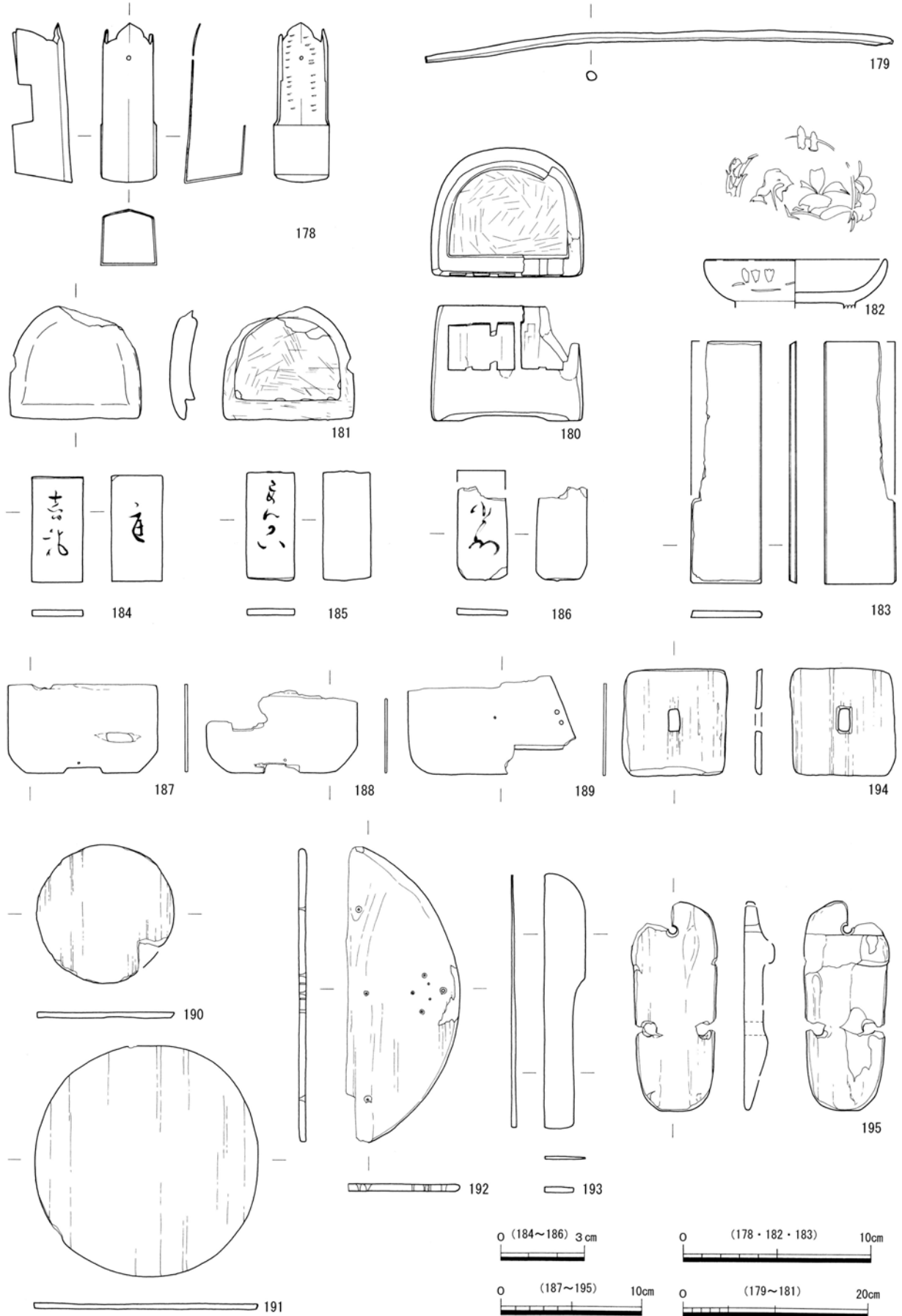


SD6279 土師質皿130~169 土釜170 鉄釉碗171・172 青磁碗173~175 盤176

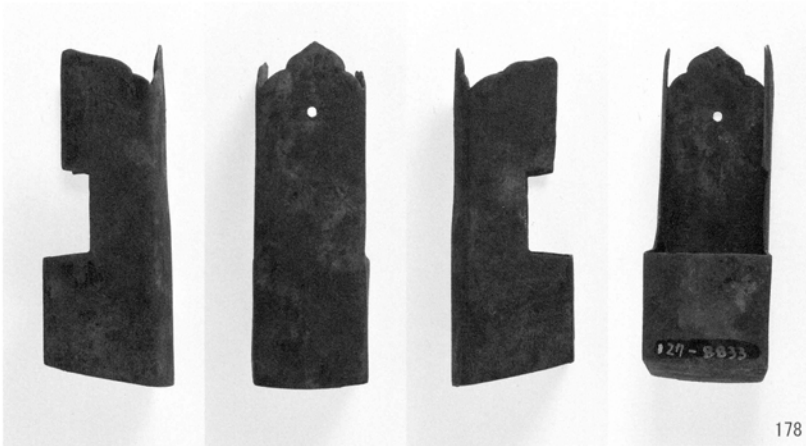


第31図 出土遺物(6)

SD6279(178~195)



SD6279 金属製品脚付飾金具178 棒状金具179 石製品バンドコ180・181 木製品漆皿182 箱材183 間香札184~186
折敷187~189 曲物190~192 ヘラ193 鋳194 下駄195



178



180



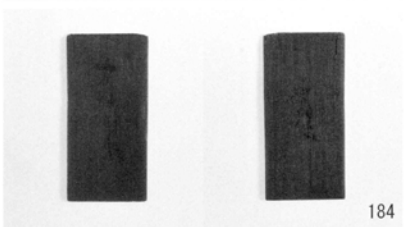
179



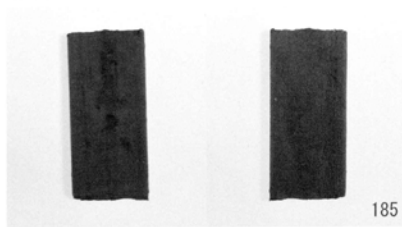
182



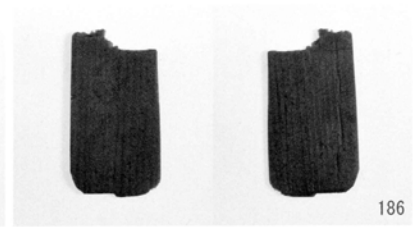
183



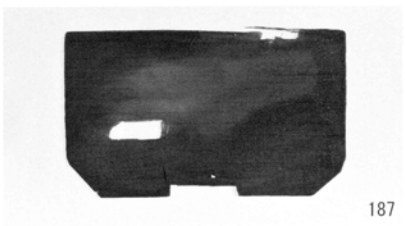
184



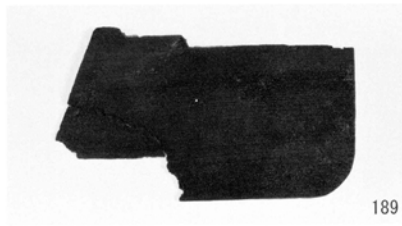
185



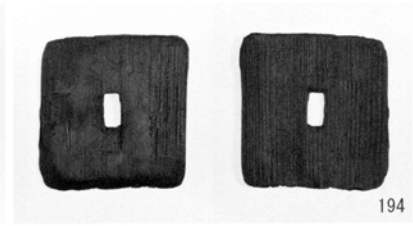
186



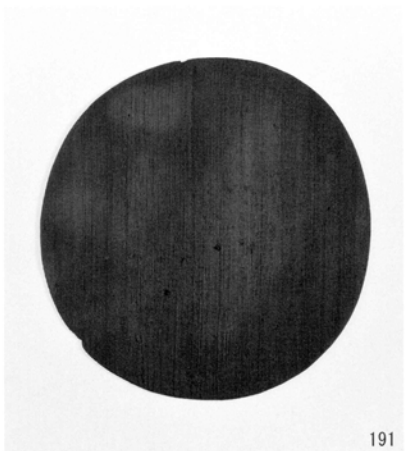
187



189



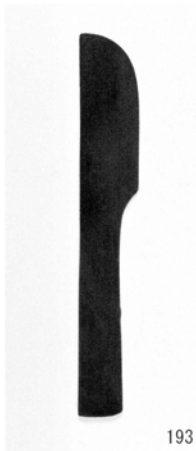
194



191



192



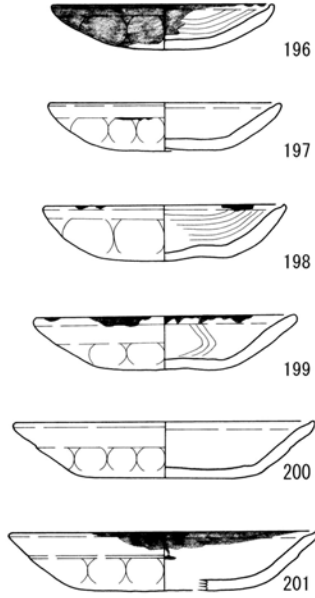
193



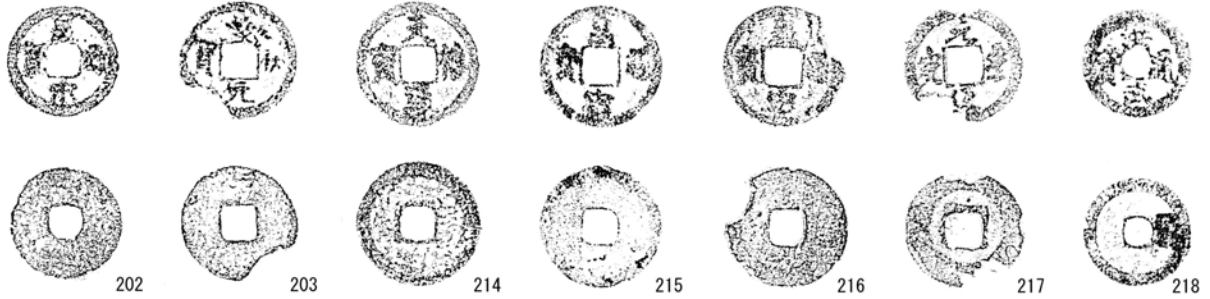
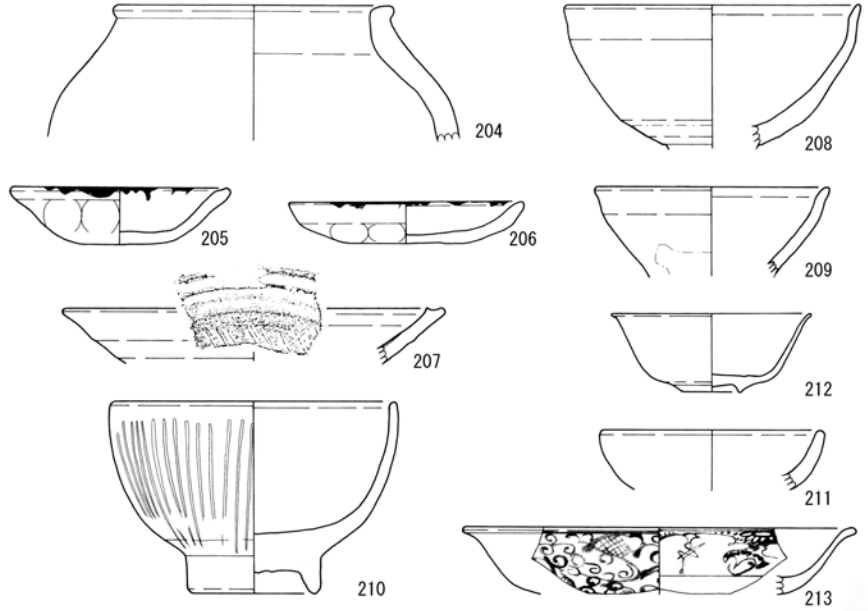
195

第32図 出土遺物(7)

SF6703(196~203)

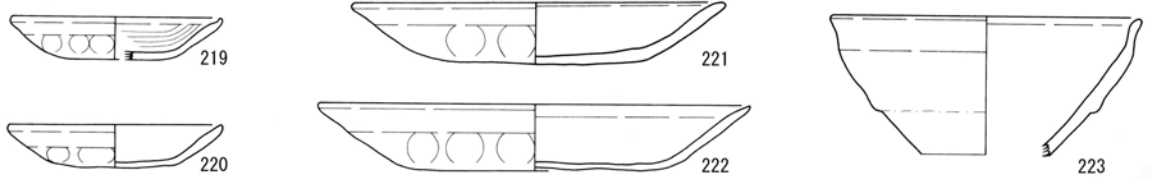


A 1 区包含層(204~218)

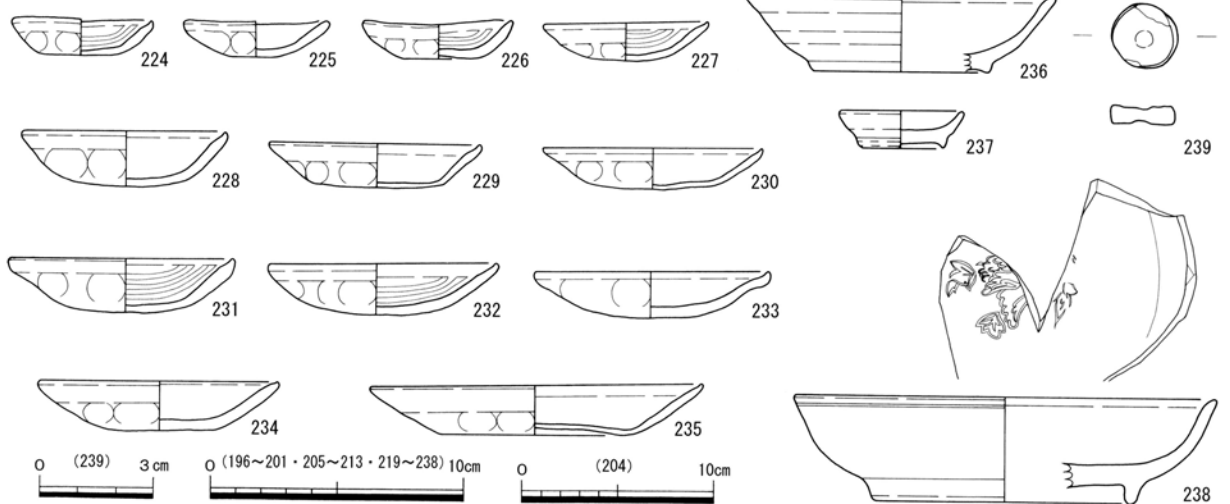


(202・203
O 214~218) 2 cm

B 1 区遺構面(219~223)

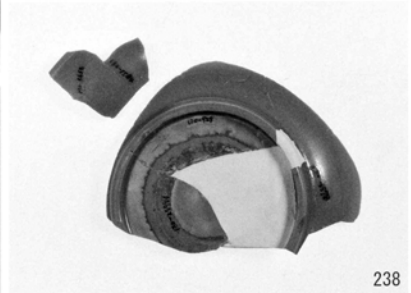
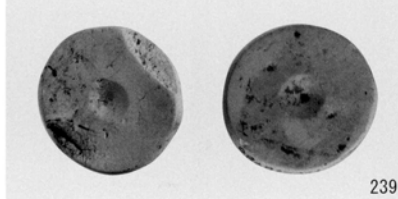
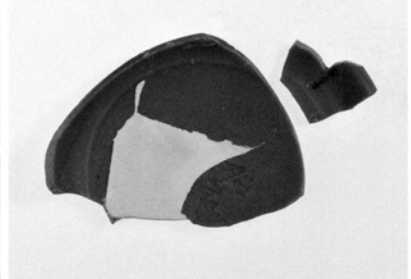
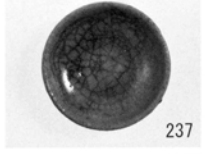
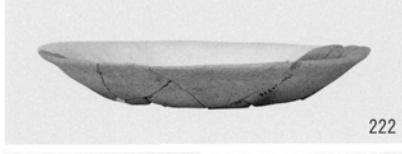
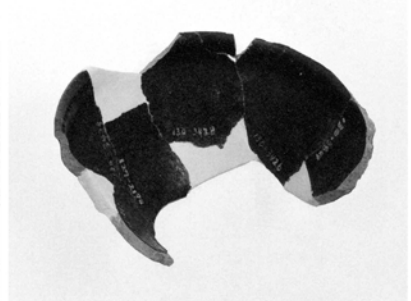
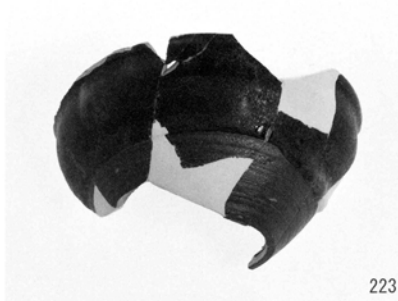
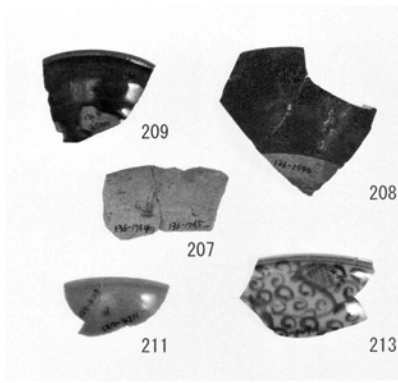
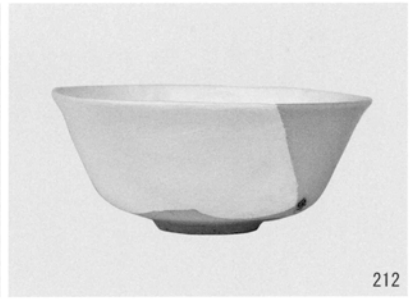
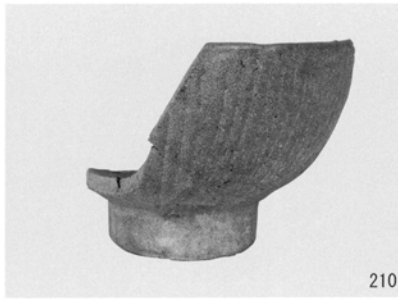


SD6341(224~239)



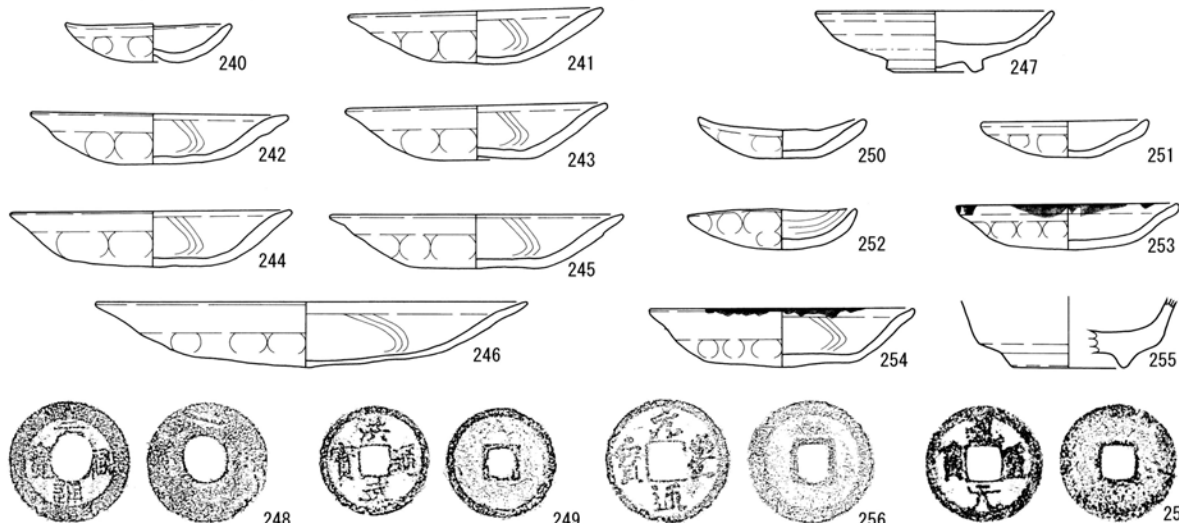
0 (239) 3 cm 0 (196~201・205~213・219~238) 10cm 0 (204) 10cm

SF6703 土師質皿196~201 金属製品銅銭202・203 A区包含層 越前焼壺204 土師質皿205・206 鉄釉碗208・209
 灰釉卸皿207 青磁碗210 皿211 白磁坏212 染付皿213 金属製品銅銭214~218
 B 1 区遺構面 土師質皿219~222 鉄釉碗223 SD6341 土師質皿224~235 灰釉皿236・237 青磁皿238 骨製品駒石239

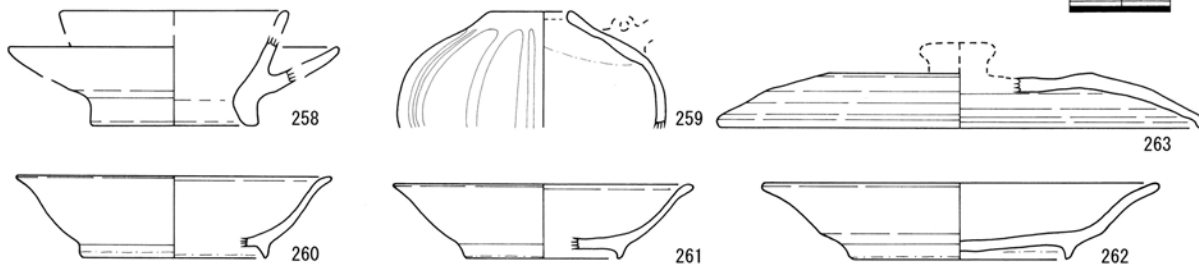


第33図 出土遺物(8)

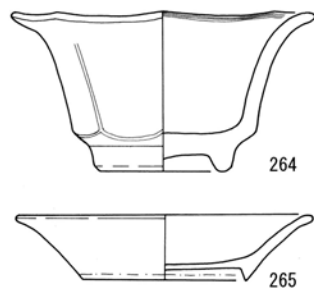
SX6344(240~246), SP6392(247), SB6359(248・249) B2区遺構面(250~257)



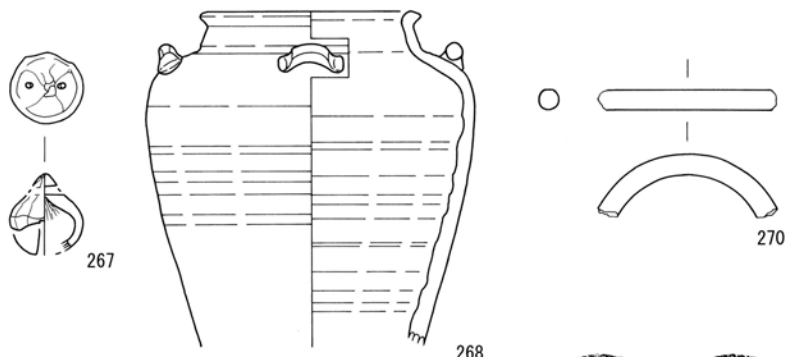
SD6250(258~263)



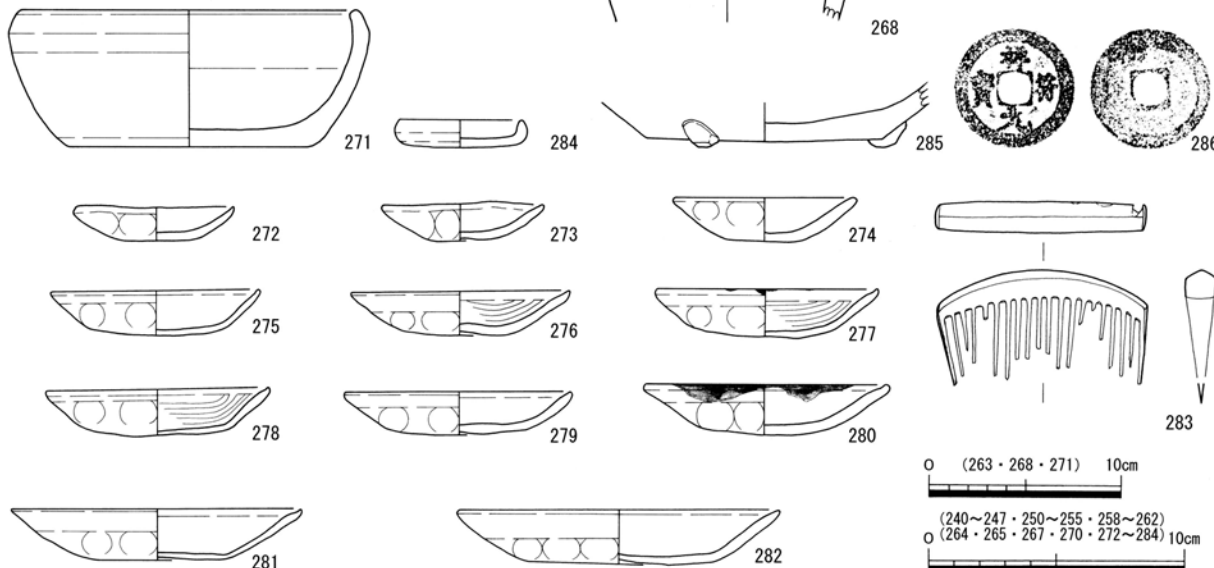
SD6252(264・265)



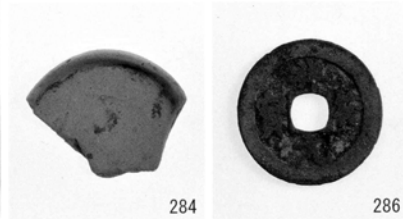
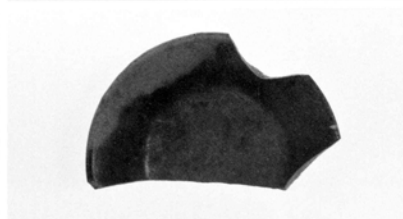
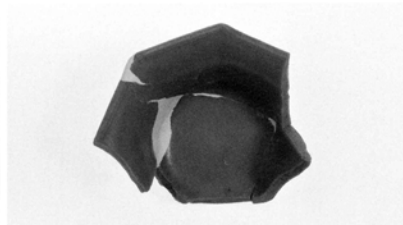
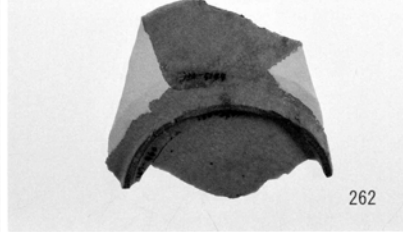
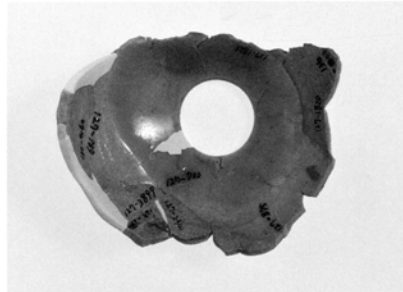
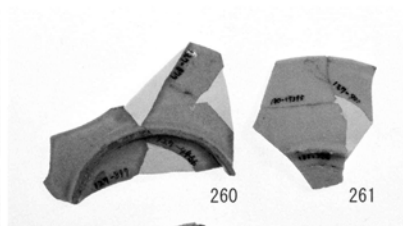
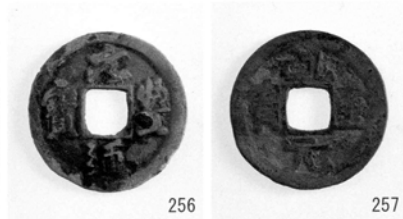
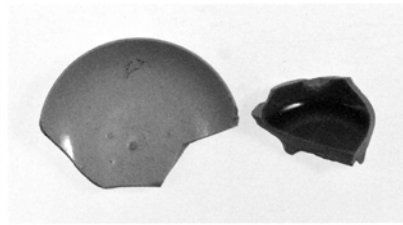
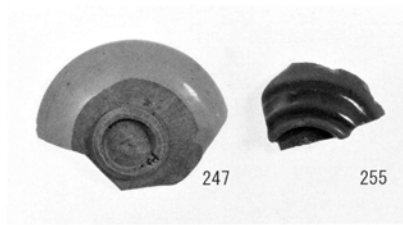
SD6253(267・268・270)



SD6335(271~283), SD6338(284~286)

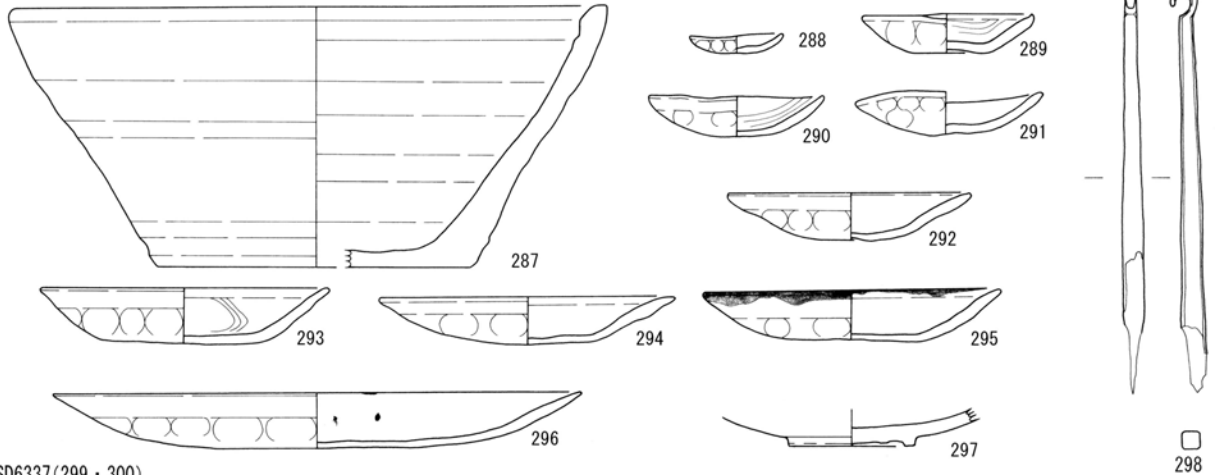


- SX6344 土師質皿240~246 SP6392 白磁皿247 SB6359 金属製品銅銭248・249 B2区遺構面、包含層 土師質皿250~254 青磁碗255 金属製品銅銭256・257 SD6250 青磁托258 水注259 白磁皿260~262 須恵器蓋263 SD6252 青磁鉢264 白磁皿265 SD6253 土師質土鈴267 鉄釉壺268 金属製品輪状金具270 SD6335 越前焼鉢271 土師質皿272~282 木製品櫛283 SD6338 土師質皿284 灰釉鉢285 金属製品銅銭286

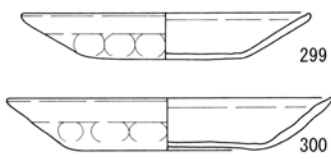


第34図 出土遺物(9)

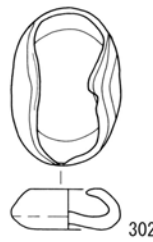
SD6336(287~298)



SD6337(299・300)



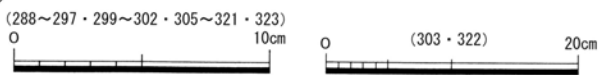
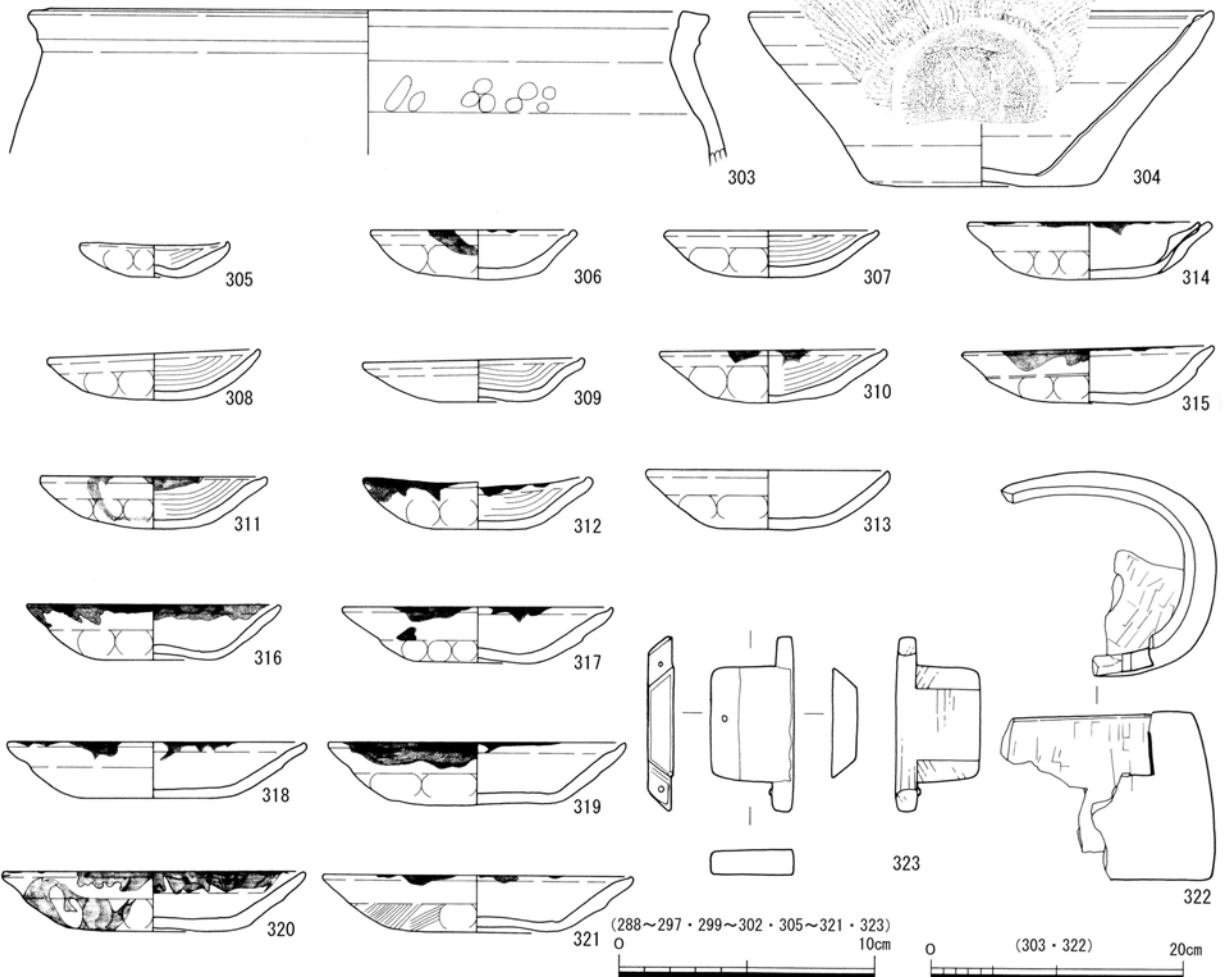
SP6394(302)



SD6358(301)



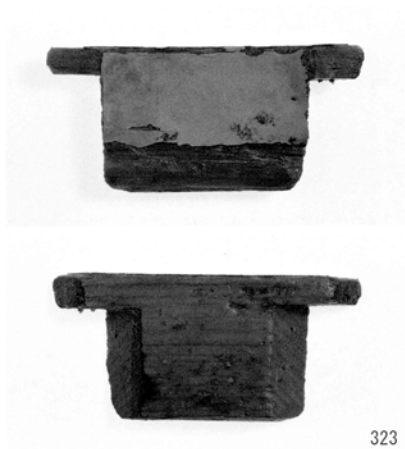
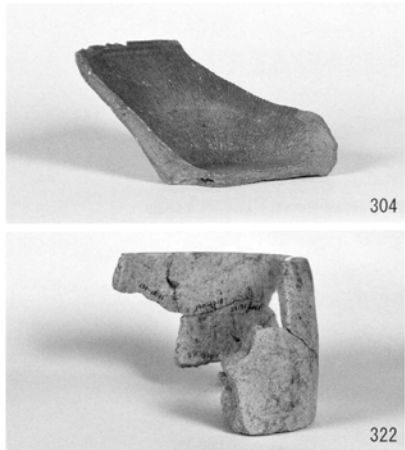
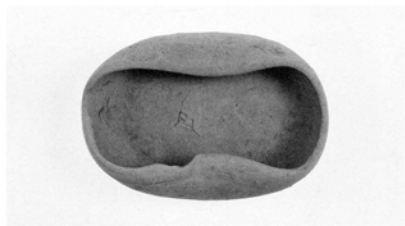
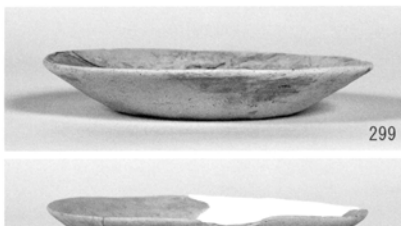
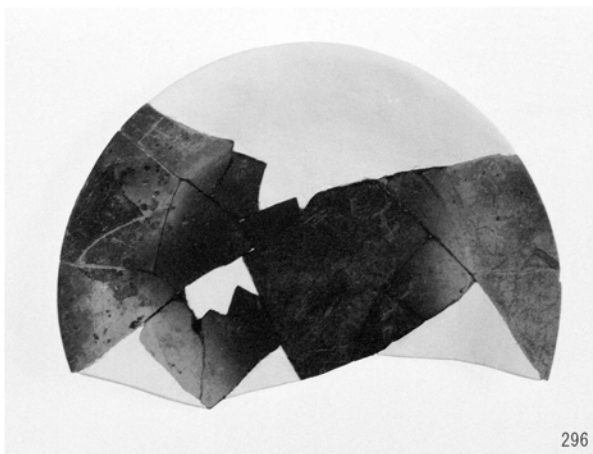
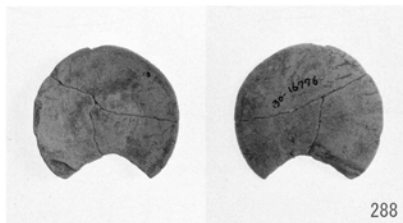
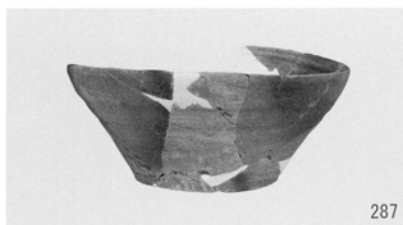
SF6352 II層(303~323)



SD6336 越前焼鉢287 土師質Ⅲ288~296 鉄釉碗297 金属製品棒状金具298 SD6337 土師質Ⅲ299・300

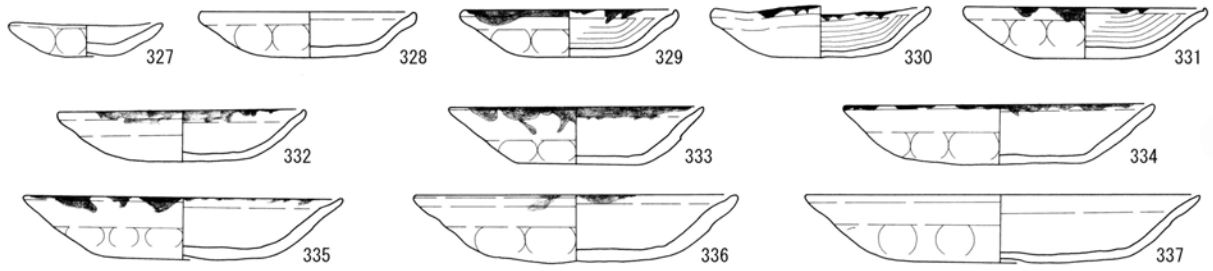
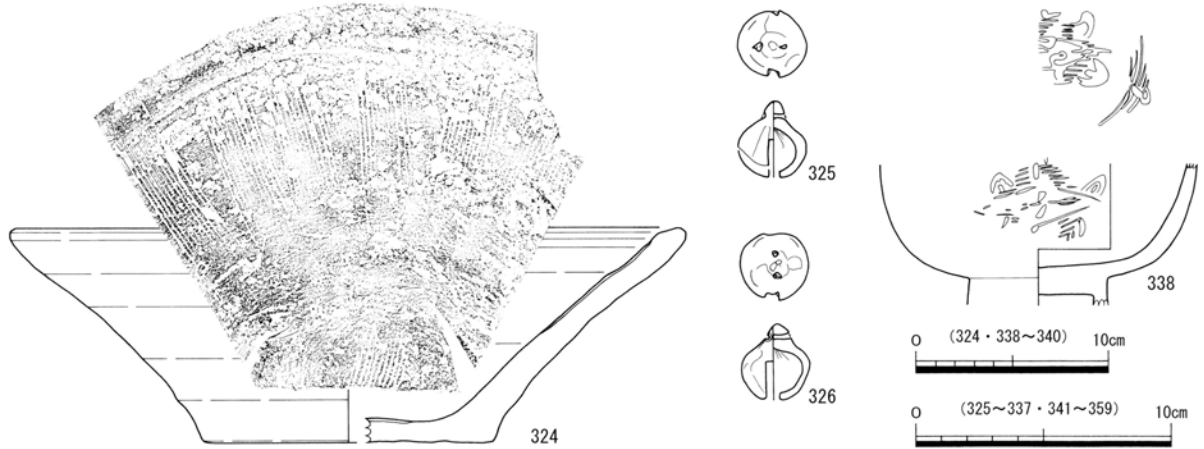
SD6358 土師質Ⅲ301 SP6394 302

SF6352 I・II層 越前焼甕303 播鉢304 土師質Ⅲ305~321 石製品バンドコ322 木製品脚323

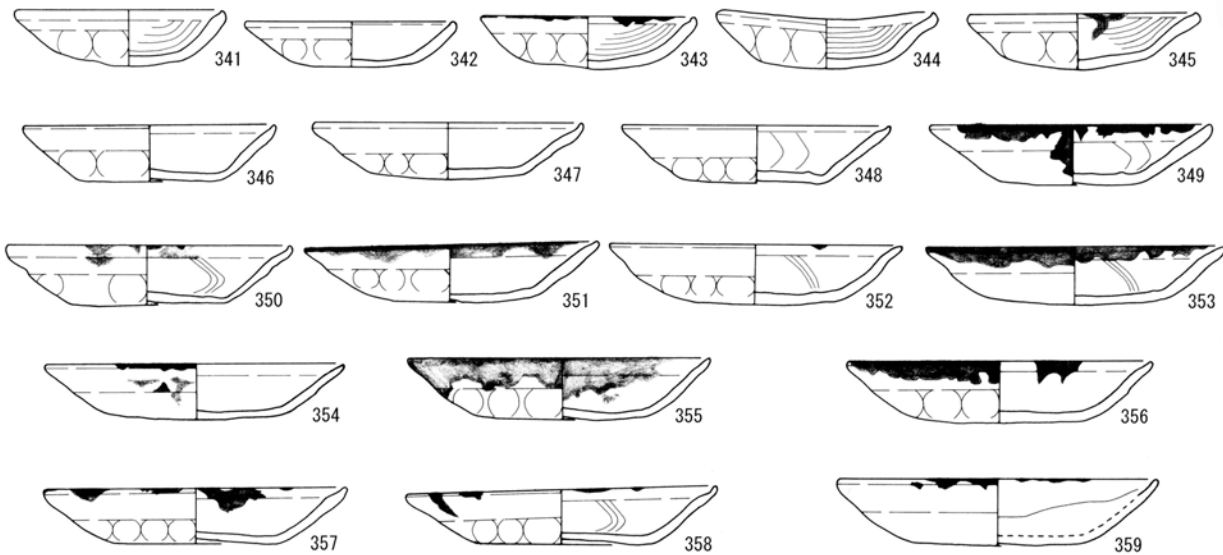
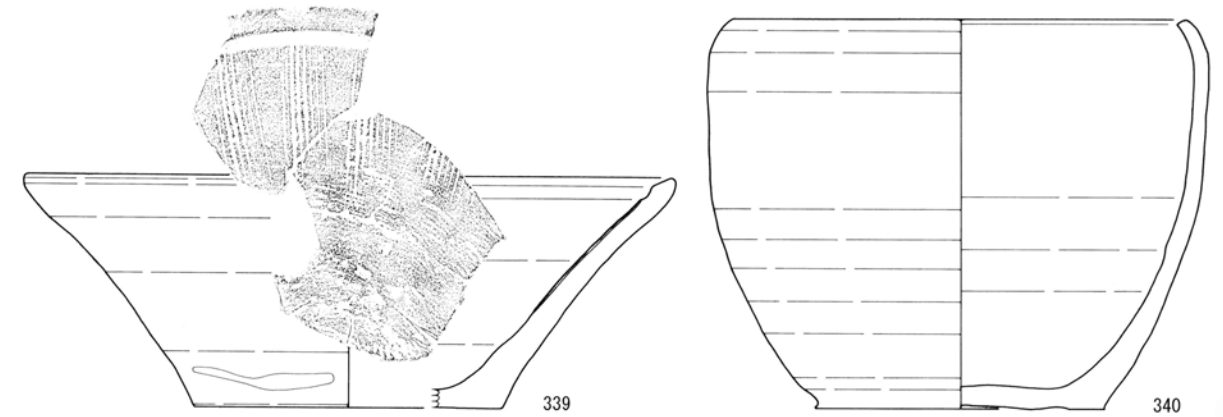


第35図 出土遺物(10)

SF6352 Ⅲ層(324~338)

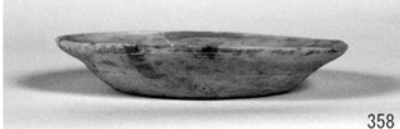
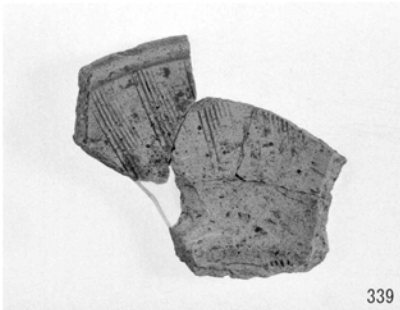


SF6352 Ⅳ層(339~359)



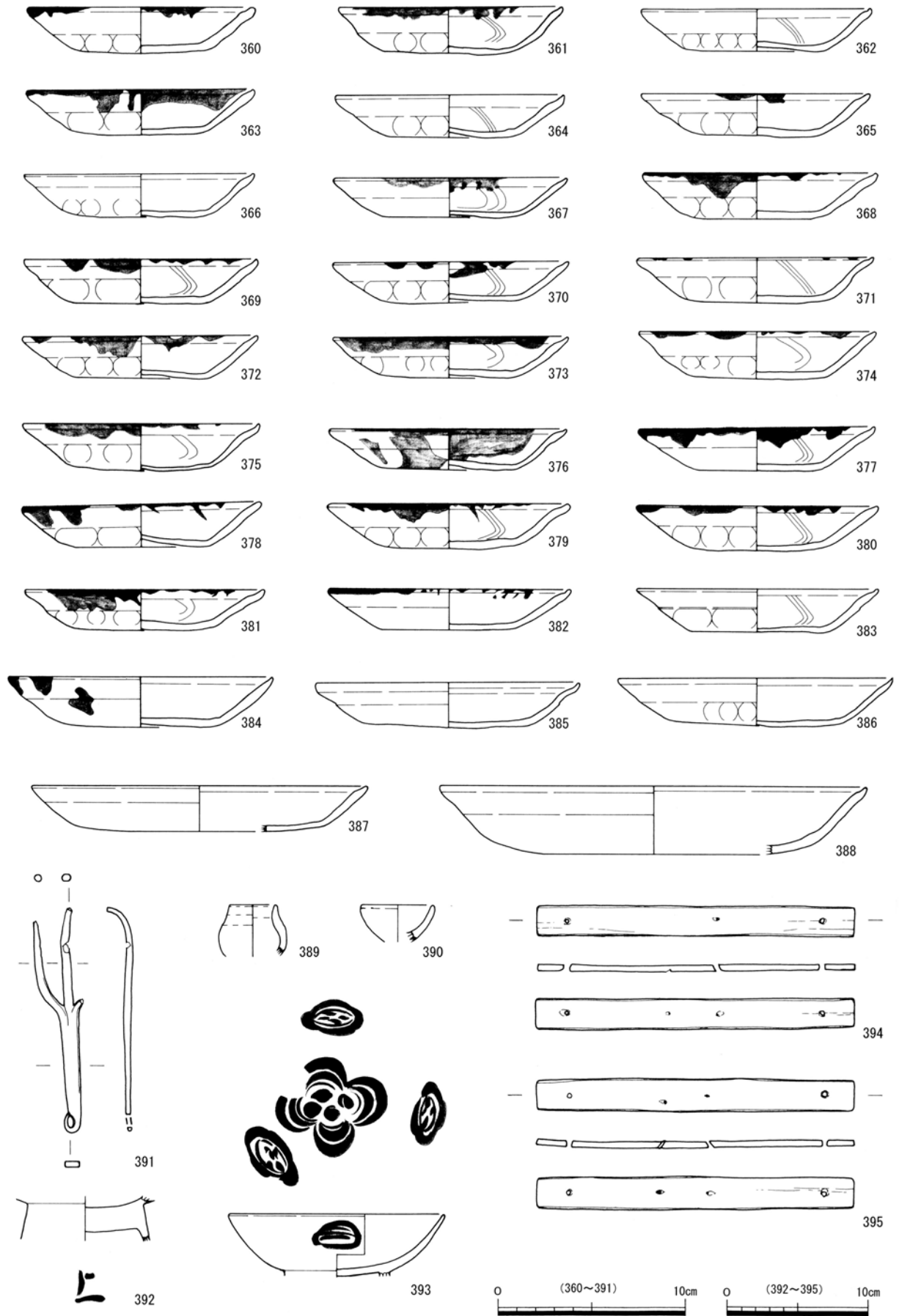
SF6352Ⅲ層 越前焼播鉢324 土師質土鈴325・326 皿327~337 木製品漆椀338

SF6352Ⅳ層 越前焼播鉢339 桶340 土師質皿341~359



第36図 出土遺物(11)

SF6352 IV層(360~395)



SF6352IV層 土師質皿360~388 小壺389 白磁小鉢390 金属製品棒状金具391 木製品漆椀392・393 板394・395



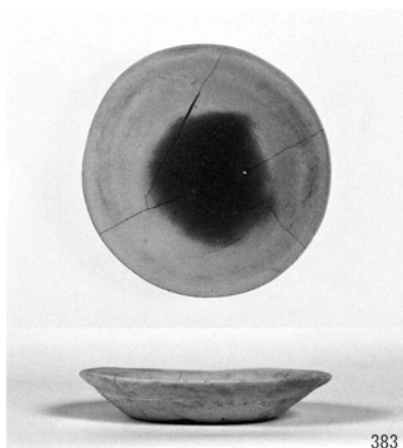
362



380



382



383



379



381



360



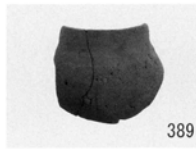
378



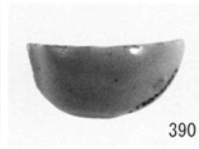
375



388



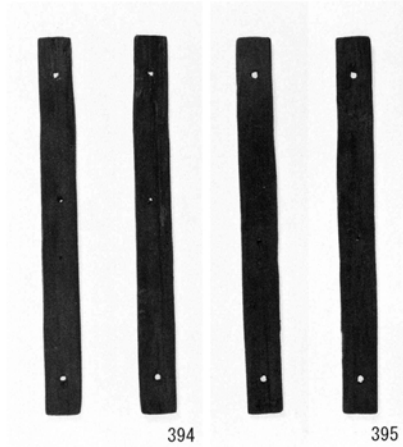
389



390



391



394

395



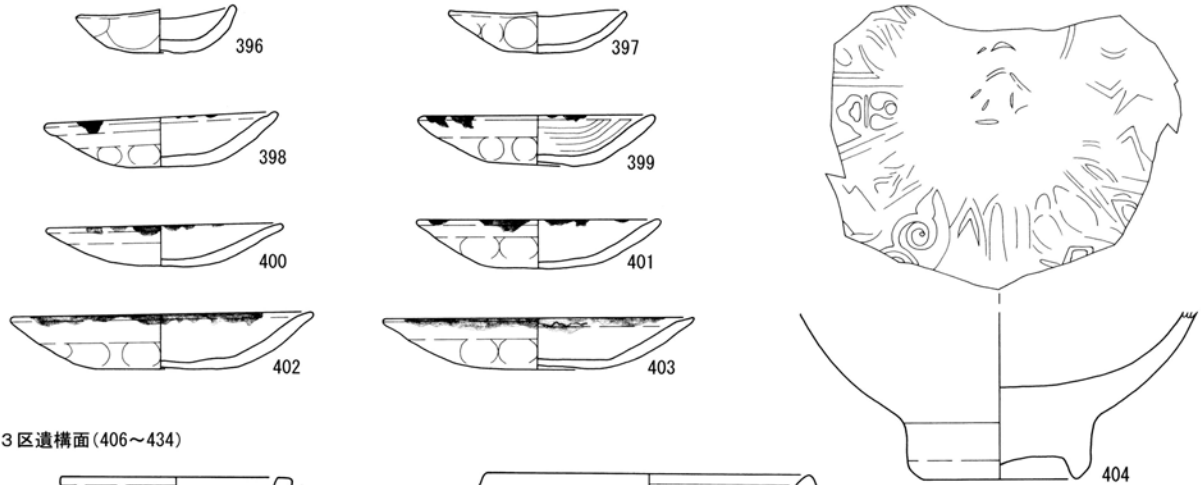
393



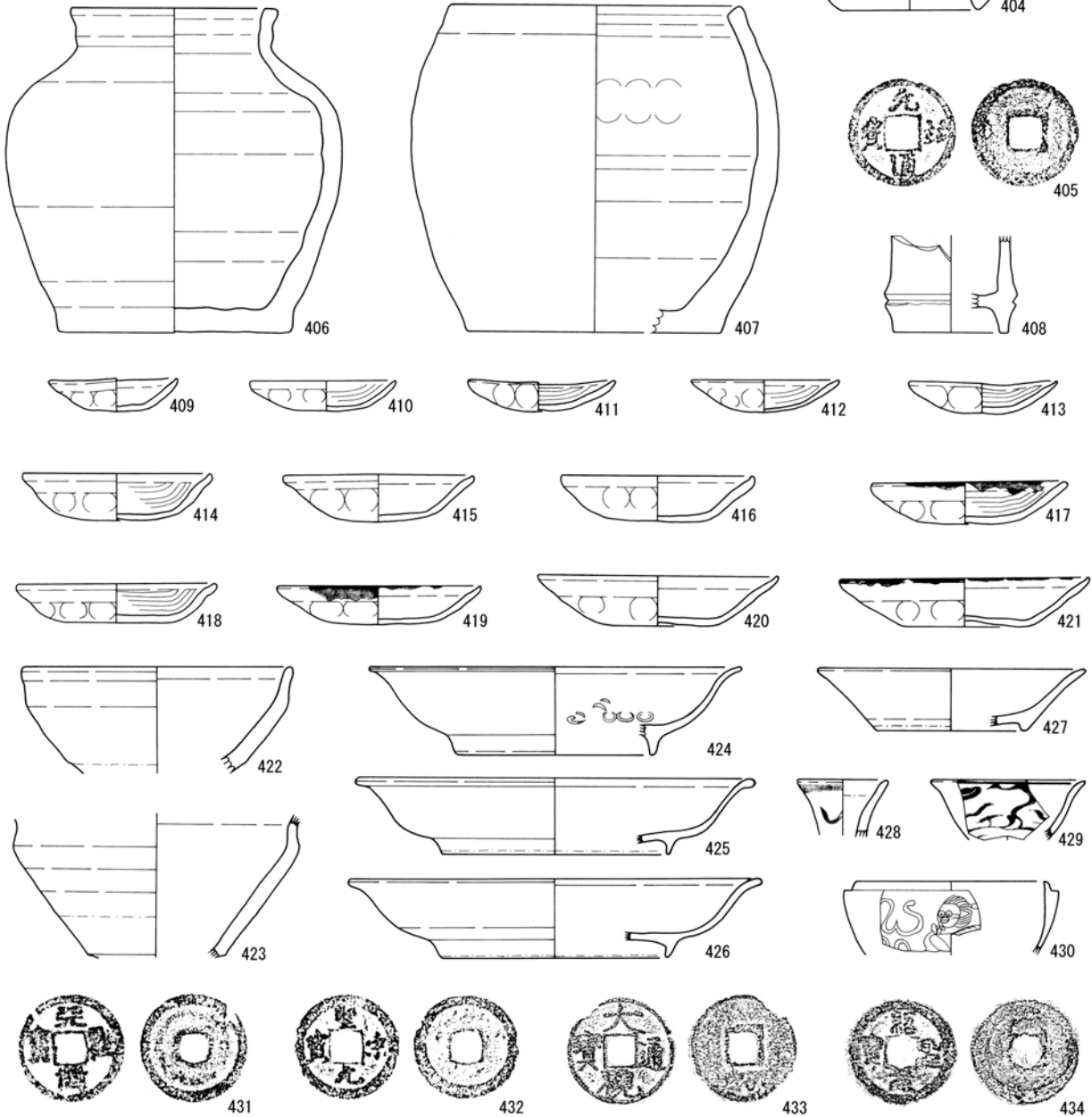
392

第37図 出土遺物(12)

SF6353(396~404), SP6395(405)



B3区遺構面(406~434)



(405・431~434)
0 2cm

(396~404・408~430) 10cm

(406・407) 10cm

SF6353 土師質Ⅲ396~403 青磁碗404 SP6395 金属製品銅銭405 B3区遺構面 越前焼壺406 桶407 花生408
土師質Ⅲ409~421 鉄軸碗422・423 白磁Ⅲ424~427 染付瓶428 坏429 五彩合子430 金属製品銅銭431~434



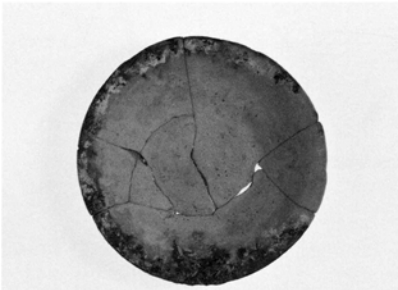
400



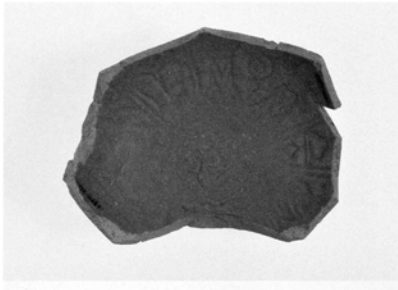
401



402



403



404



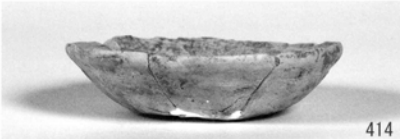
406



407



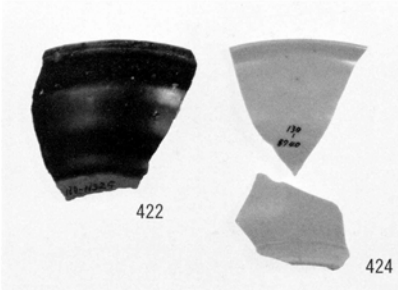
408



414



417



422

424



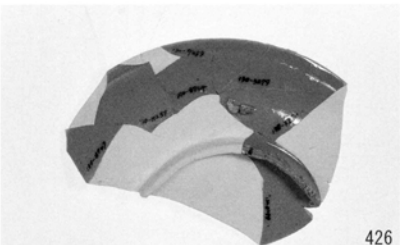
421



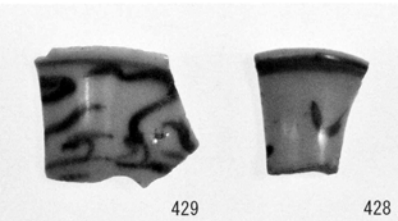
420



427



426



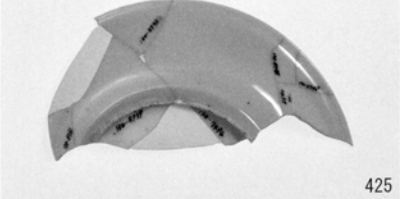
429

428



431

432



425



430

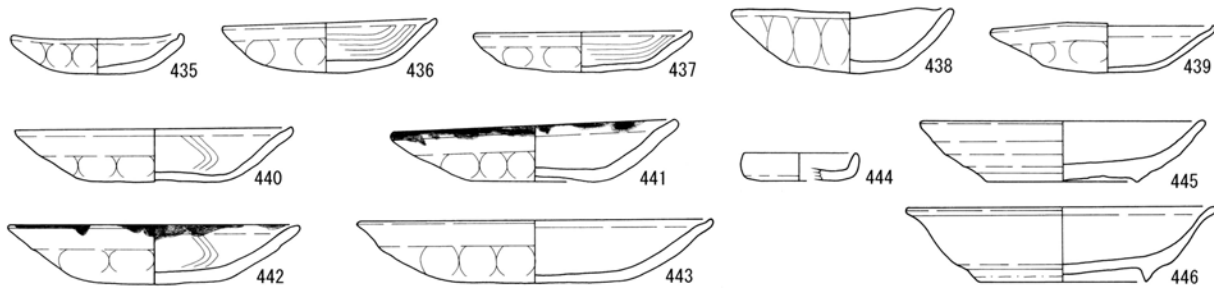


433

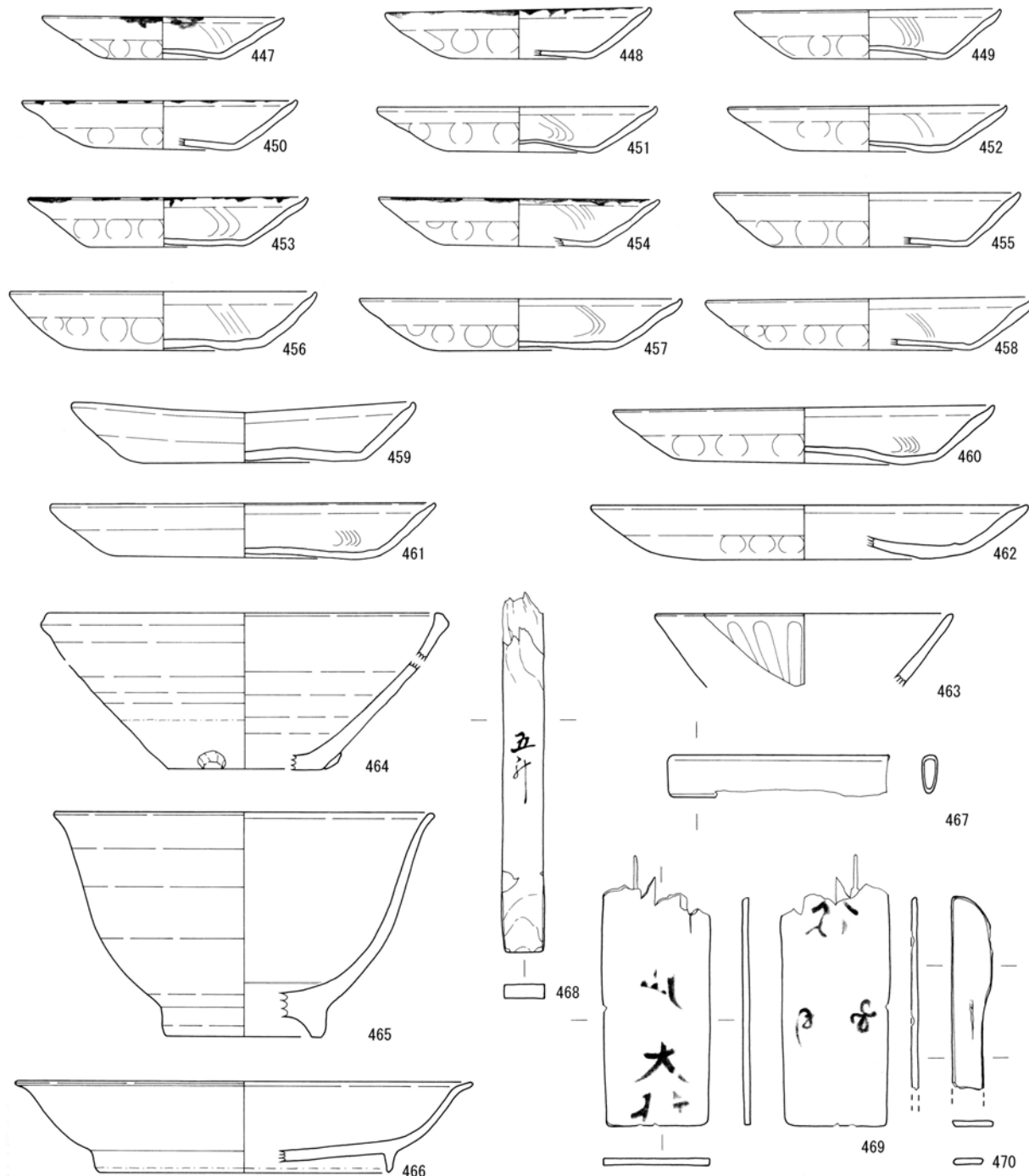
434

第38図 出土遺物(13)

黒色炭混土(435~446)



I 遺構埋土(447~470)



0 (467) 3cm 0 (435~463・465・466) 10cm 0 (464・468~470) 10cm

B3区黒色炭混土 土師質皿435~444 灰釉皿445 白磁皿446 B3区I遺構埋土 土師質皿447~462 青磁碗463
鉄軸針464 白磁碗465 皿466 金属製品小柄467 木製品木札468 板469 ヘラ470



436



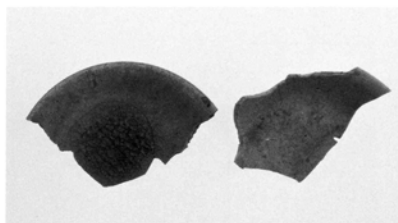
437



441



442

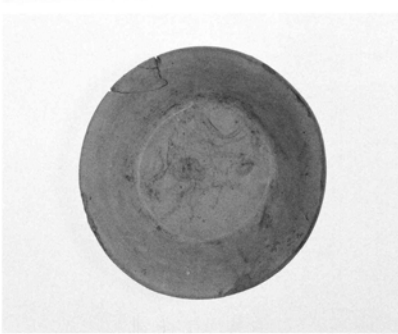


445

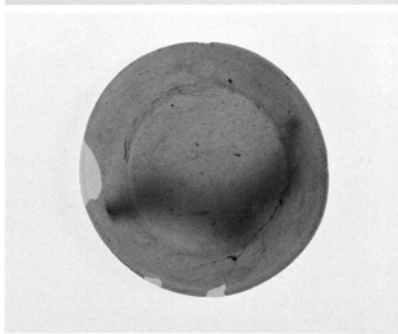
446



456



457



459



447



451



463

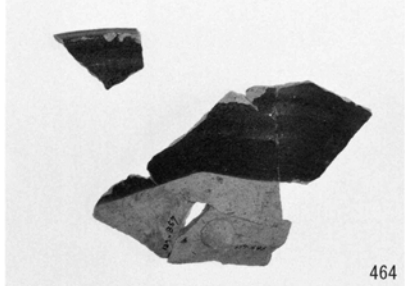
464



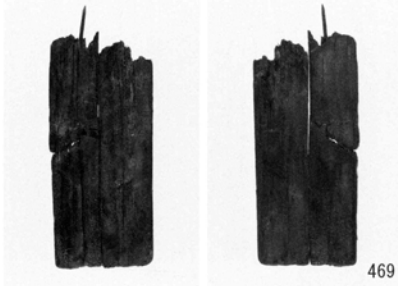
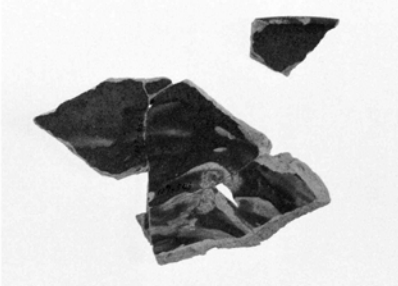
447



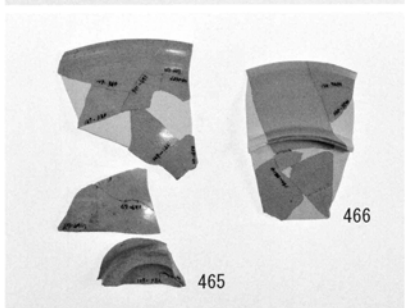
451



464

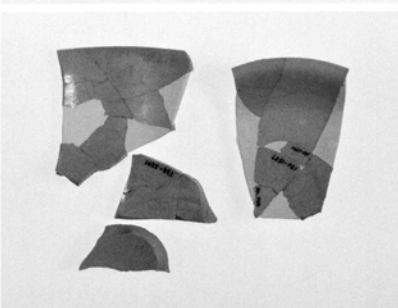


469



466

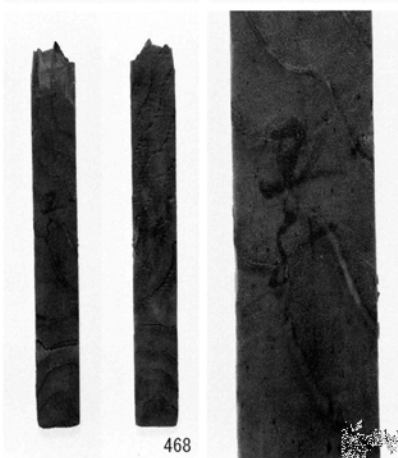
465



467



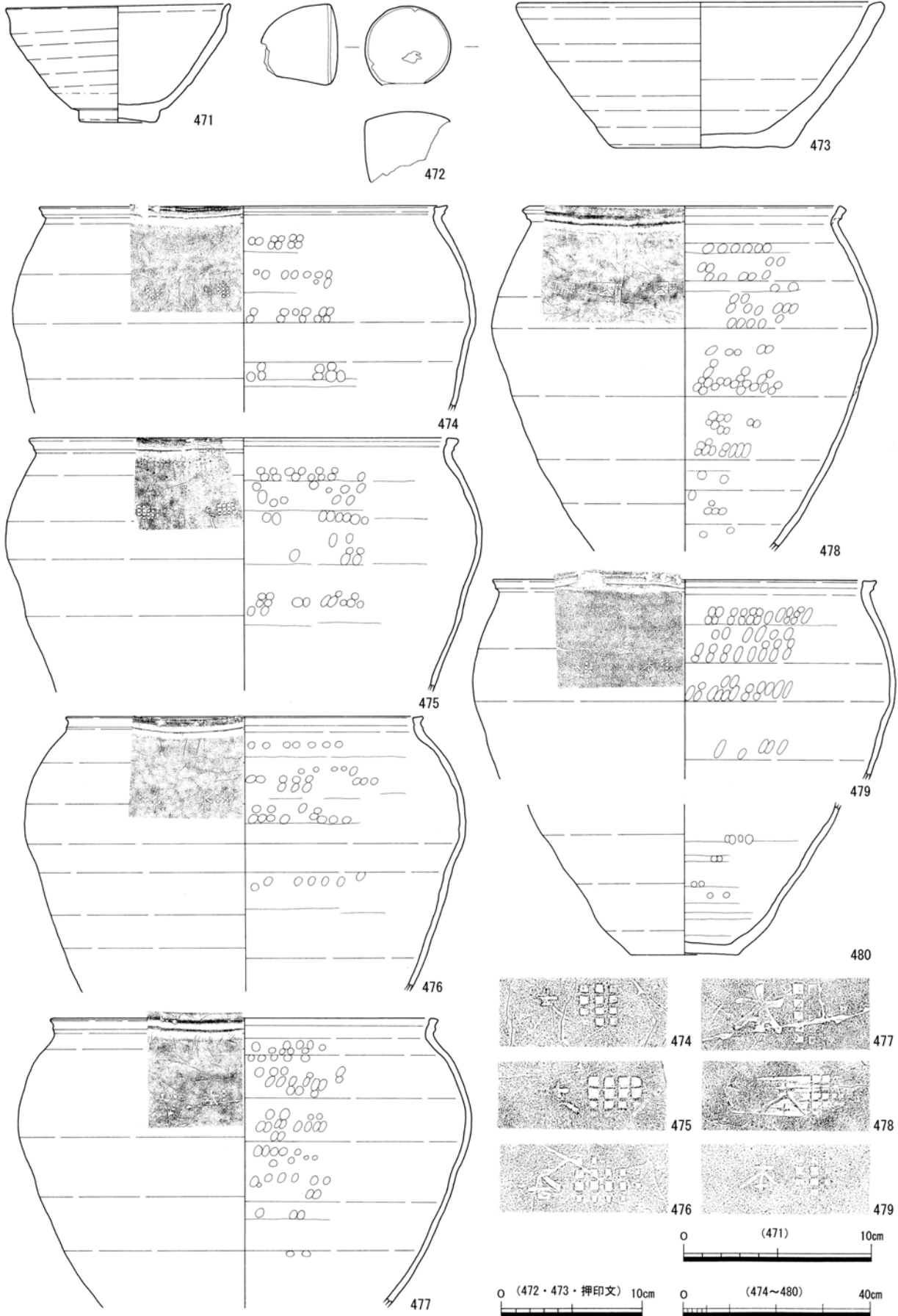
470



468

第39図 出土遺物(14)

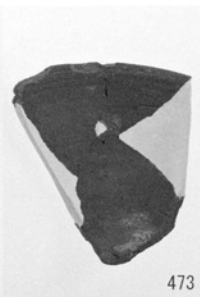
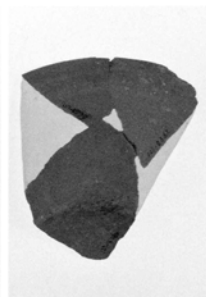
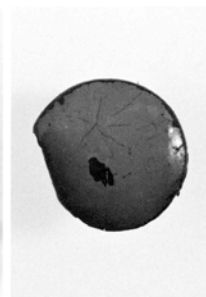
SD6272(471・472), SK6263(473) SK6259~6271(474~480)



SD6272 鉄釉碗471 木製品栓472

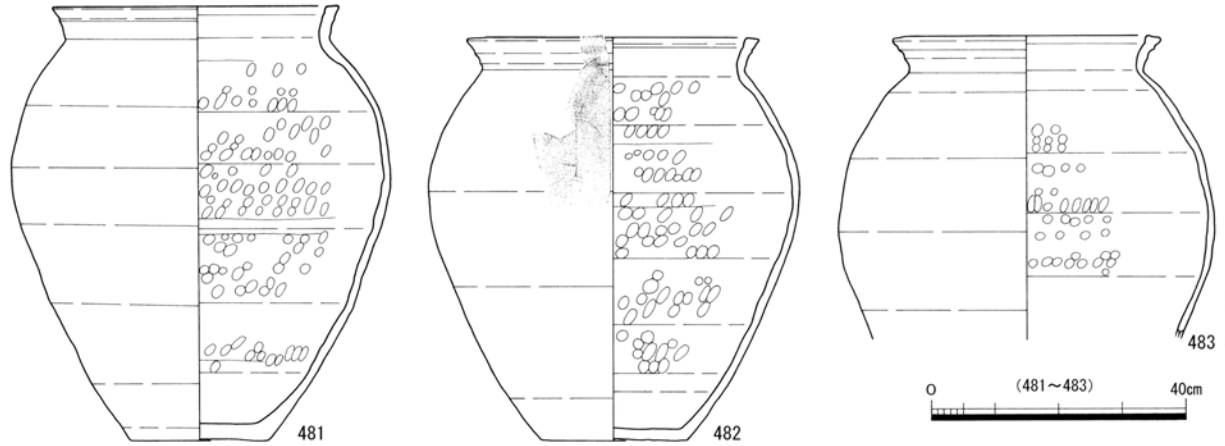
SK6263 越前焼鉢473

SK6259~6271 越前焼甕474~480

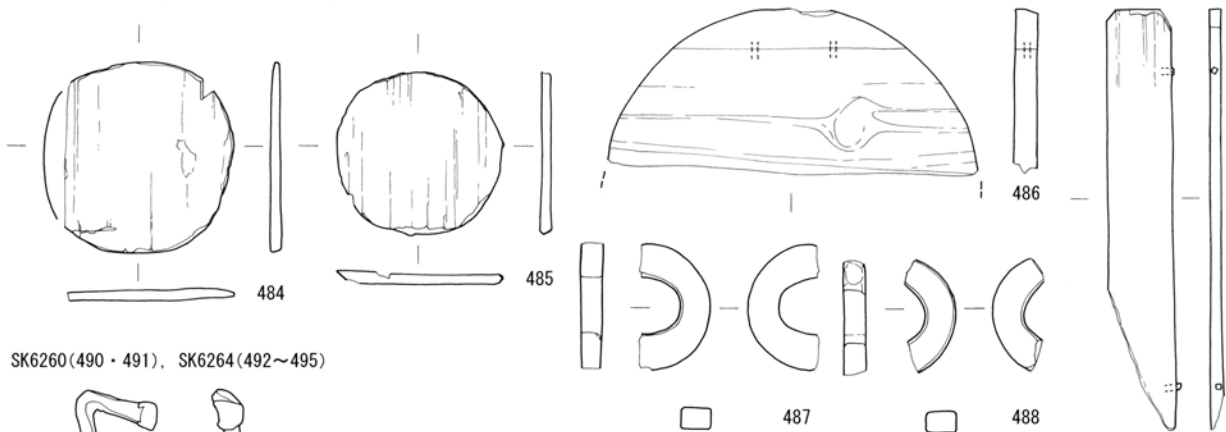


第40図 出土遺物(15)

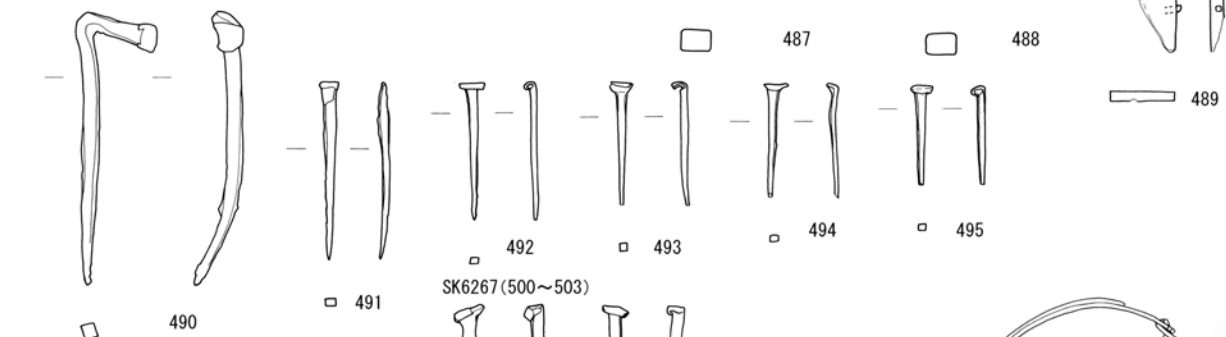
SK6259~6271 (481~483)



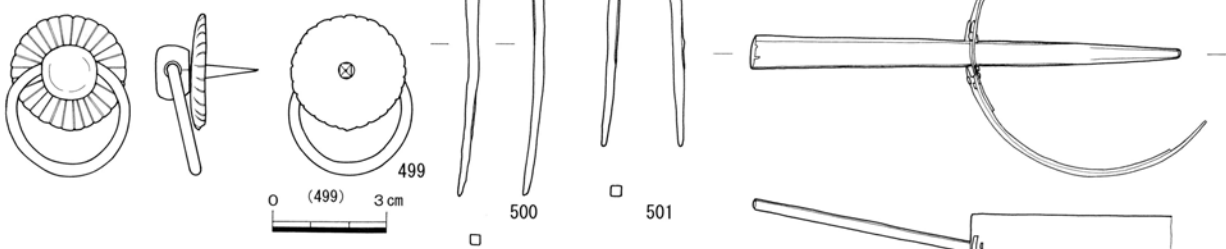
SK6260 (484~486), SK6265 (487~488), SK6271 (489)



SK6260 (490~491), SK6264 (492~495)



SK6268 (499~504)



SK6269 (496~498)



- | | | | | | | |
|-------------|-----------------|--------|--------------|--------------|--------------|--------------|
| SK6259~6271 | 越前焼甕481~483 | SK6260 | 金属製品釘490・491 | 木製品曲物484~486 | SK6264 | 金属製品釘492~495 |
| SK6265 | 木製品環状木製品487・488 | SK6267 | 金属製品釘500~503 | SK6268 | 金属製品環付飾金具499 | 木製品柄杓504 |
| SK6269 | 金属製品釘496~498 | SK6271 | 木製品折敷489 | | | |



481



482



483



484



485



487



486



488



490



491



492



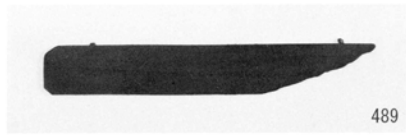
493



494



495



489



499



496



497



500



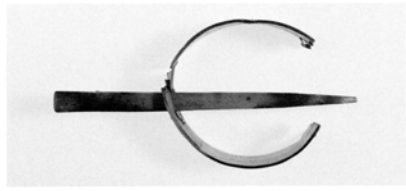
501



502



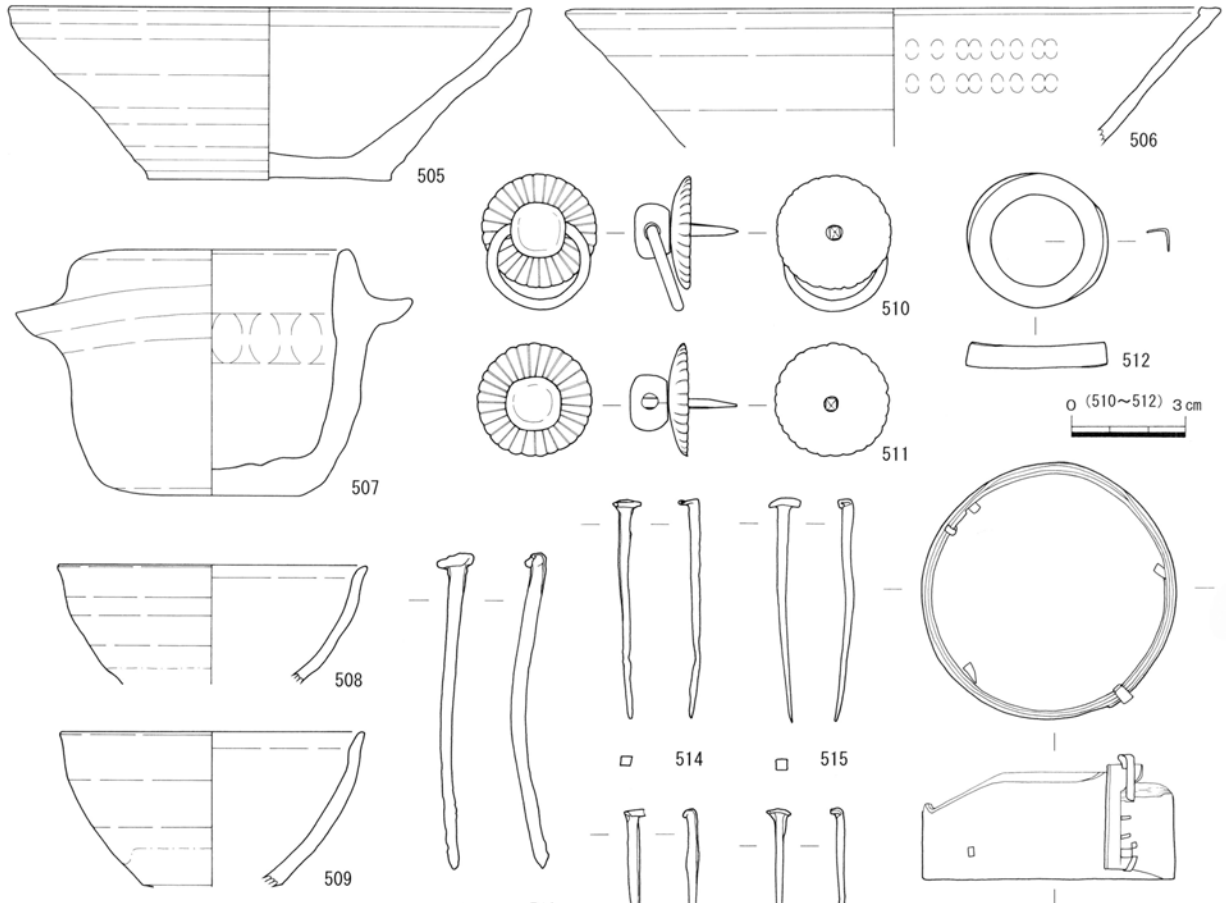
503



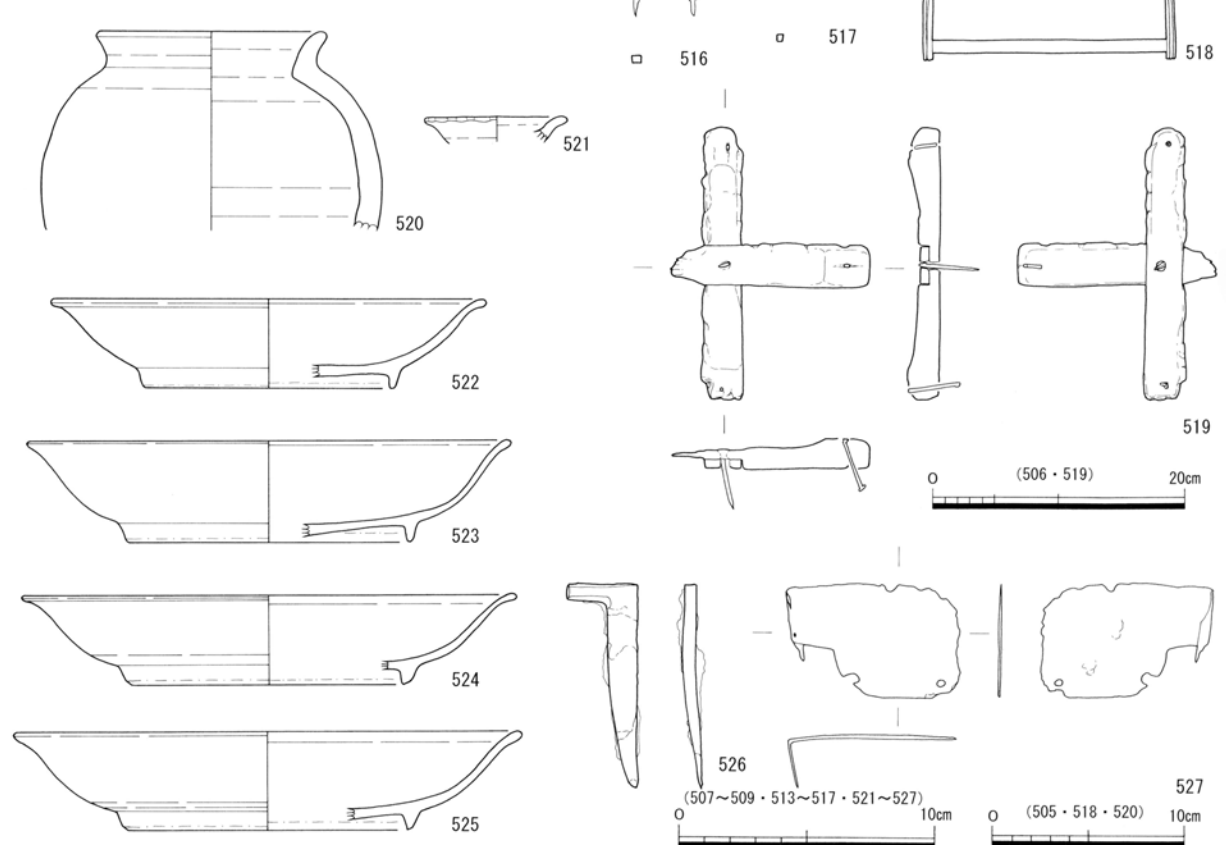
504

第41図 出土遺物(16)

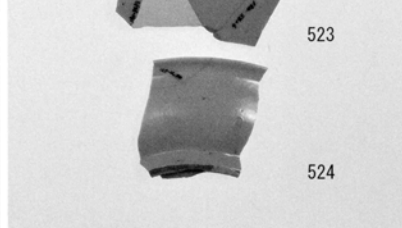
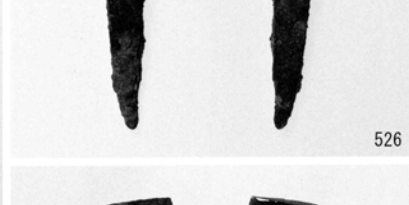
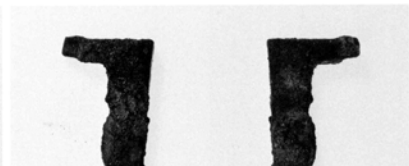
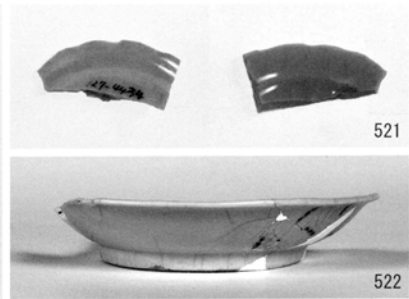
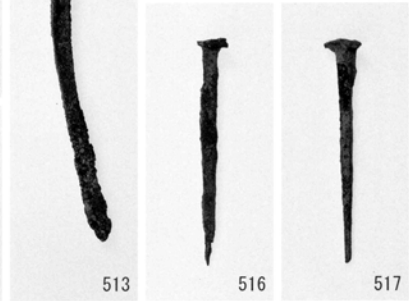
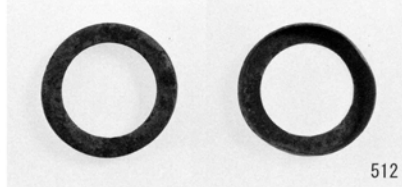
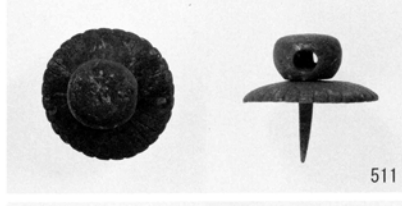
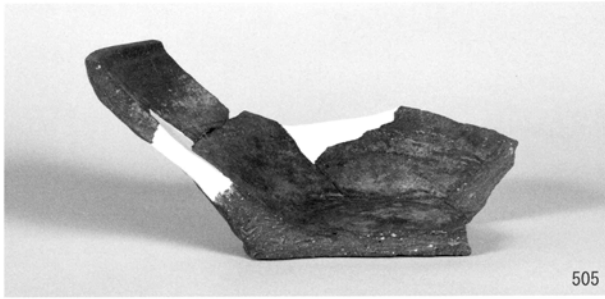
B4区I遺構面(505~519)



B4区II遺構面(520~527)

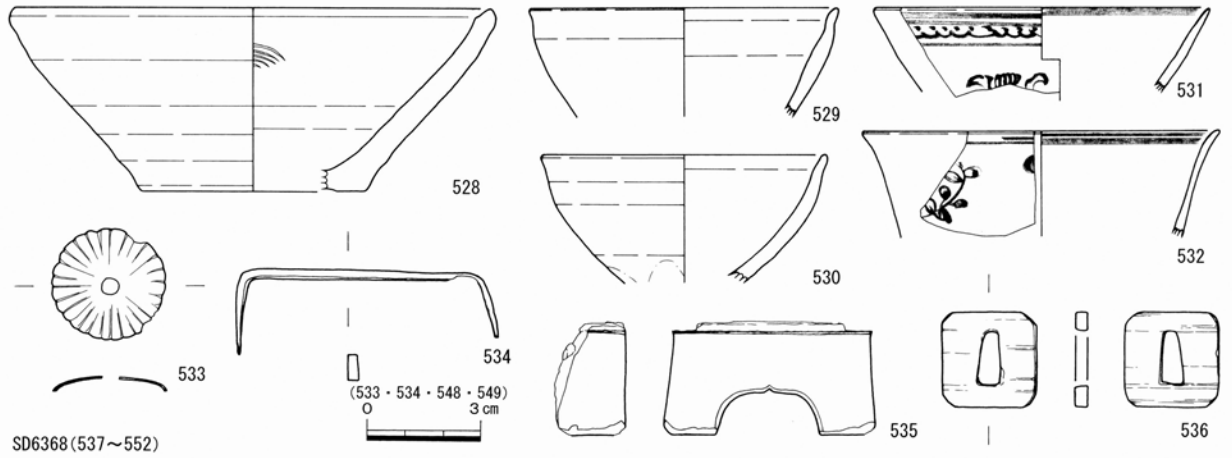


B4区I遺構面 越前焼鉢505・506 土師質土釜507 鉄釉碗508・509 金属製品環付飾金具510・511 環状金具512
釘513~517 木製品曲物518 燭台519
B4区II遺構面 越前焼壺520 青磁皿521 白磁皿522~525 金属製品肘金526 飾金具527

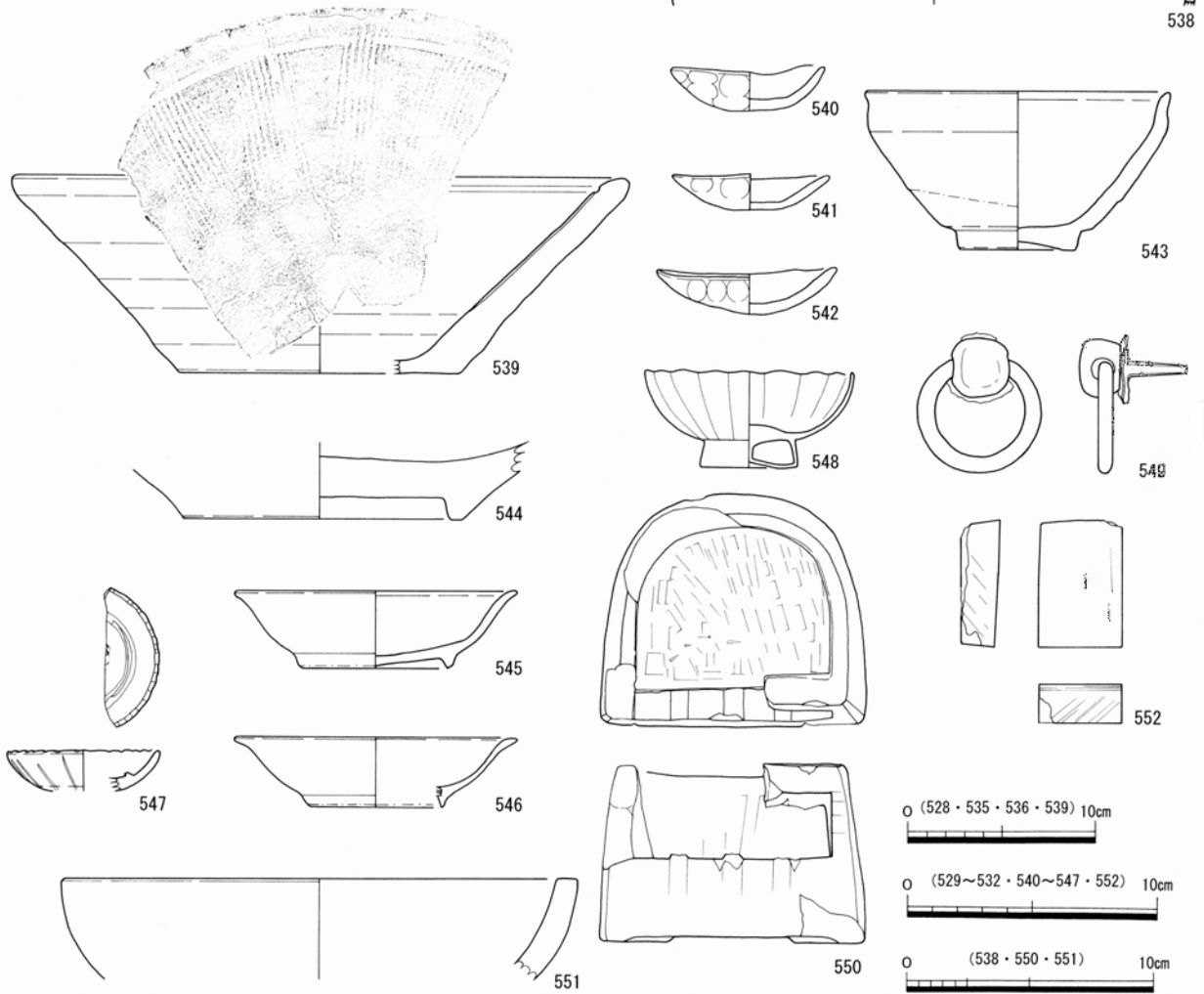
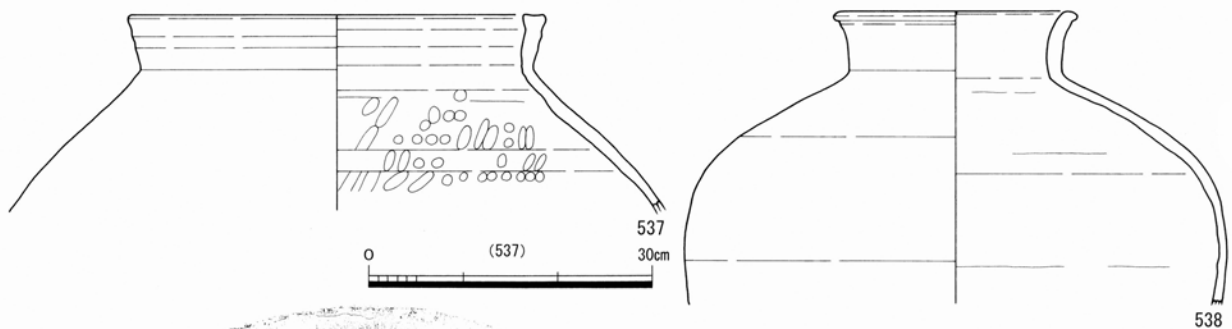


第42図 出土遺物(17)

B4区I遺構埋土(528~536)



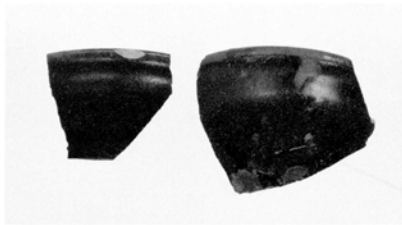
SD6368(537~552)



B4区I遺構埋土 越前焼鉢528 鉄釉碗529・530 染付碗531・532 金属製品環付飾金具533 鏝534 木製品脚535 鍔536
 SD6368 越前焼甕537 壺538 播鉢539 土師質皿540~542 鉄釉碗543 青磁盤544 白磁皿545~547 金属製品紅皿548
 環付飾金具549 石製品バンドコ550 盤551 砥石552

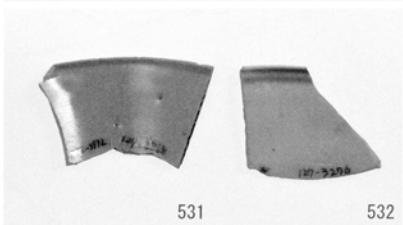
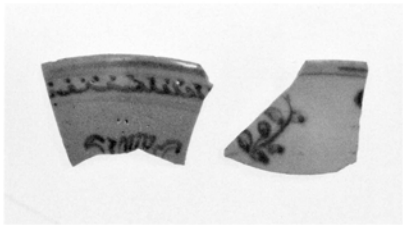


528



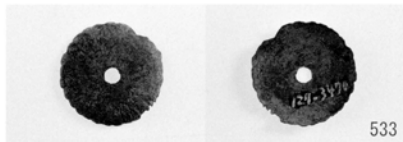
529

530



531

532



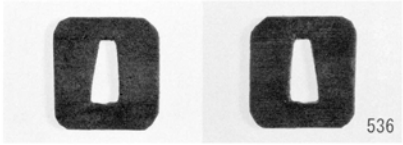
533



534



535



536



537



538



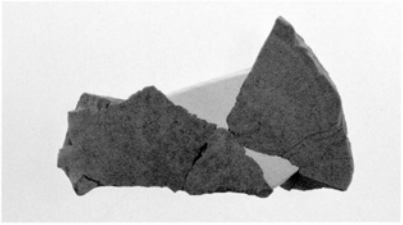
539



540



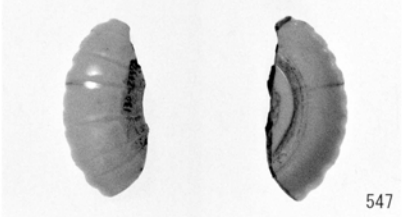
543



541



542



547



544



545



552



549



546



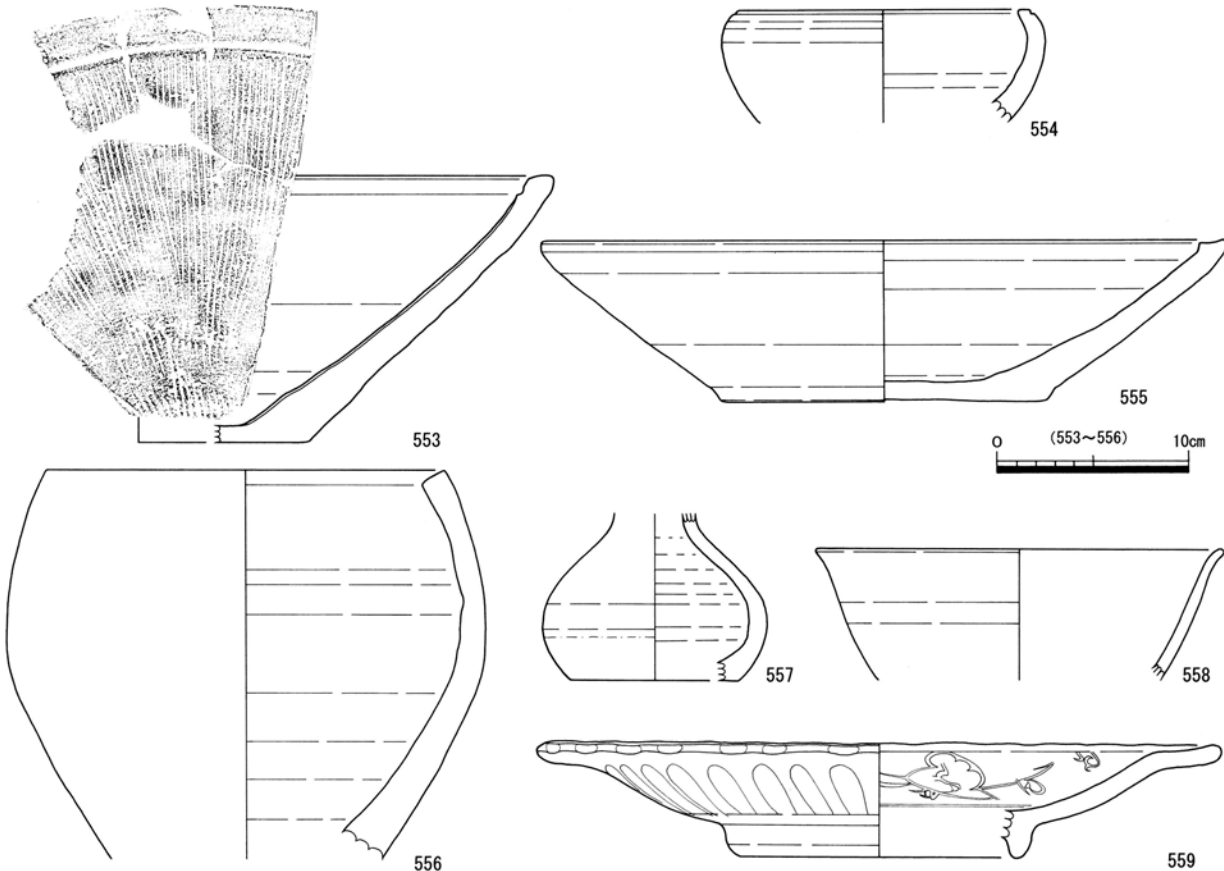
550



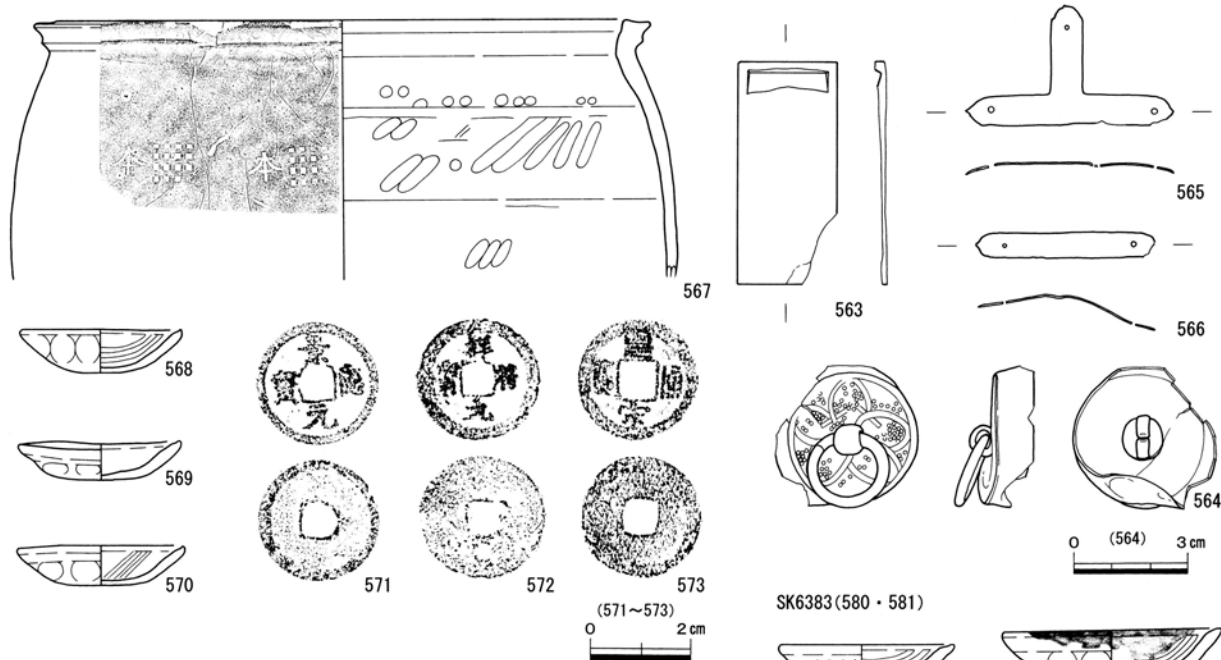
548

第43図 出土遺物(18)

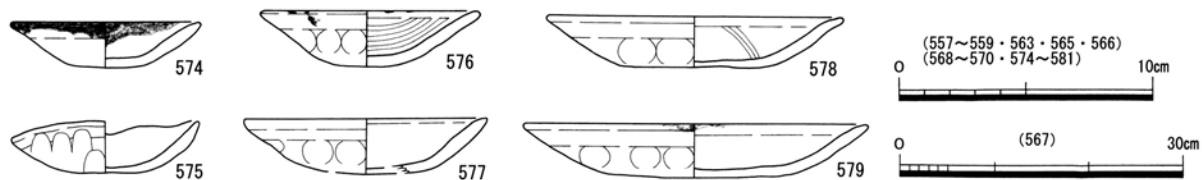
SD6373(553~559・563~566)



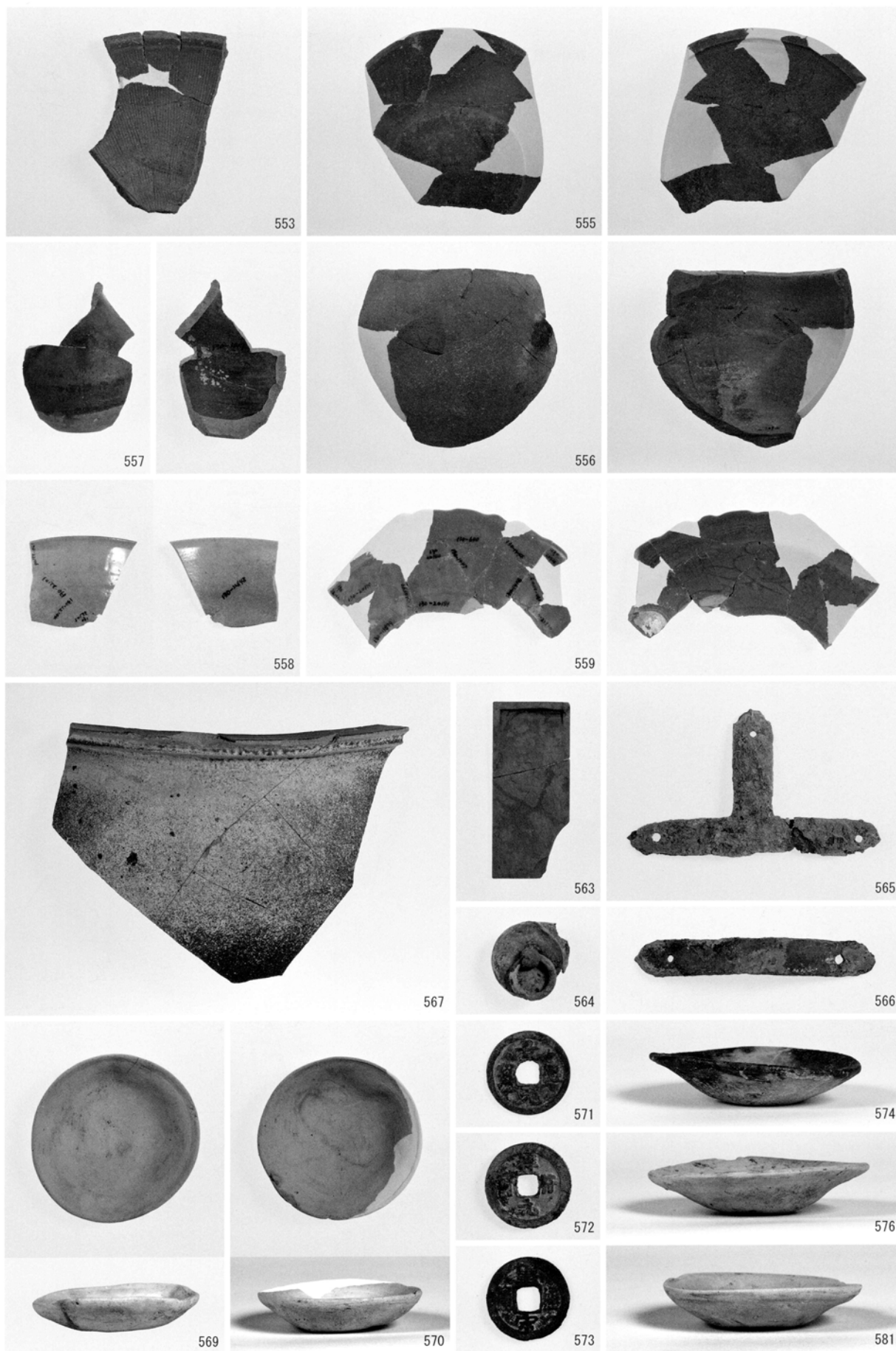
SD6388(567~573)



SK6386(574~579)

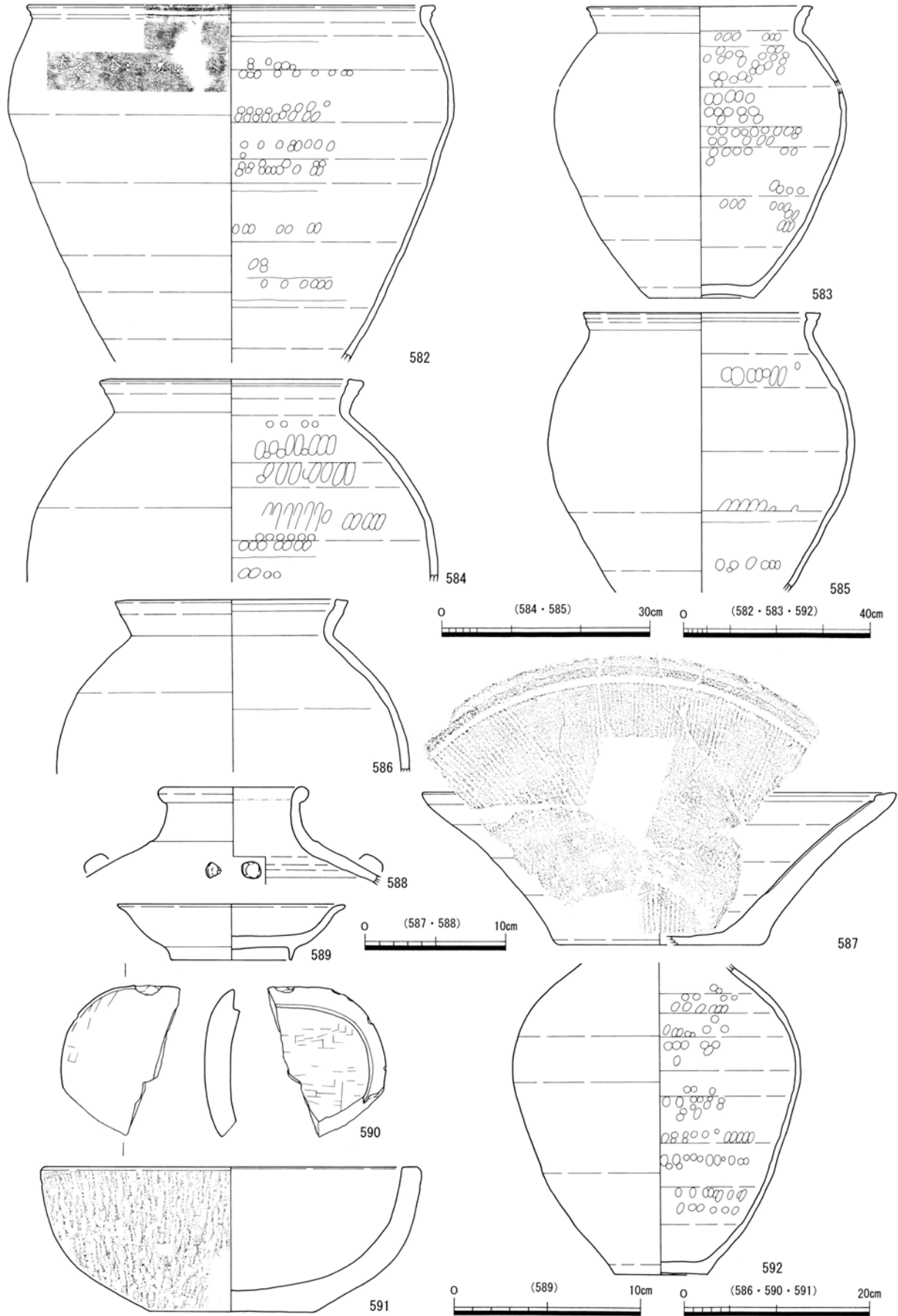


SD6373 越前焼播鉢553 鉢554・555 桶556 鉄釉瓶557 白磁碗558 青磁盤559 金属製品環付飾金具564 飾金具565・566
 石製品硯563 SD6388 越前焼甕567 土師質皿568~570 金属製品銅銭571~573
 SK6386 土師質皿574~579 SK6383 土師質皿580・581

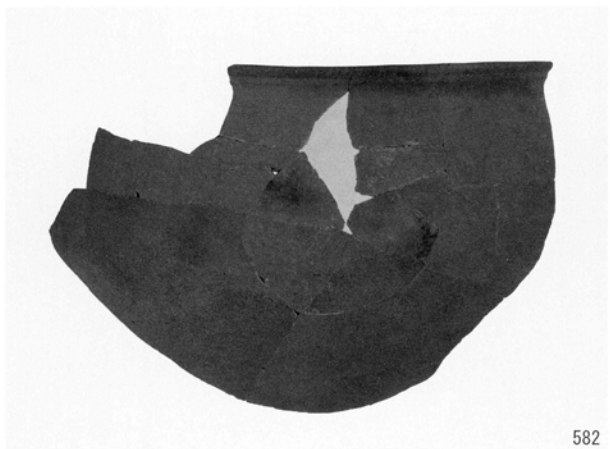


第44図 出土遺物(19)

SK6383(582~591), SK6384(592)



SK6383 越前焼甕582~586 播鉢587 鉄釉壺588 白磁皿589 石製品バンドコ590 盤591 SK6384 越前焼甕592



582



592



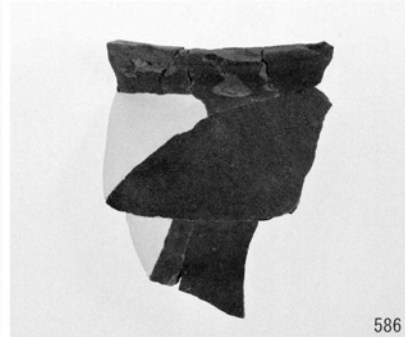
584



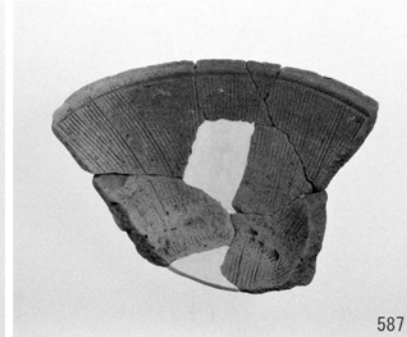
585



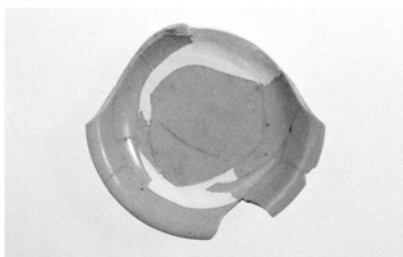
583



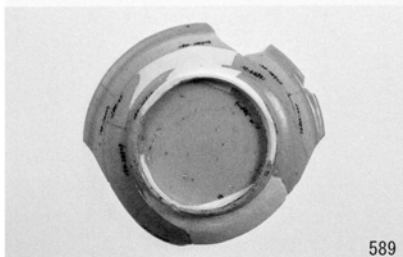
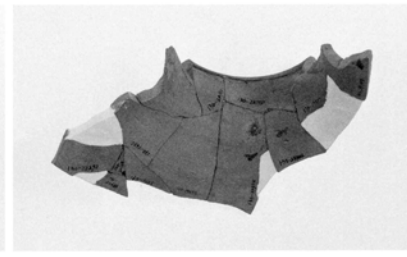
586



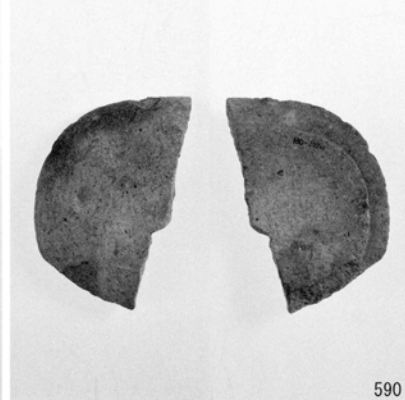
587



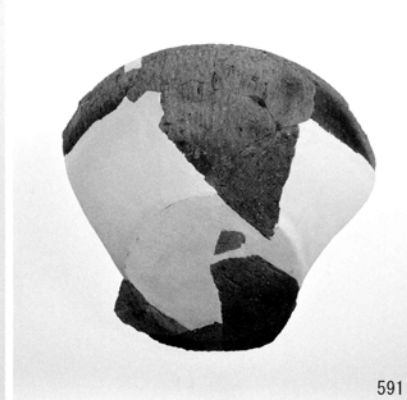
588



589



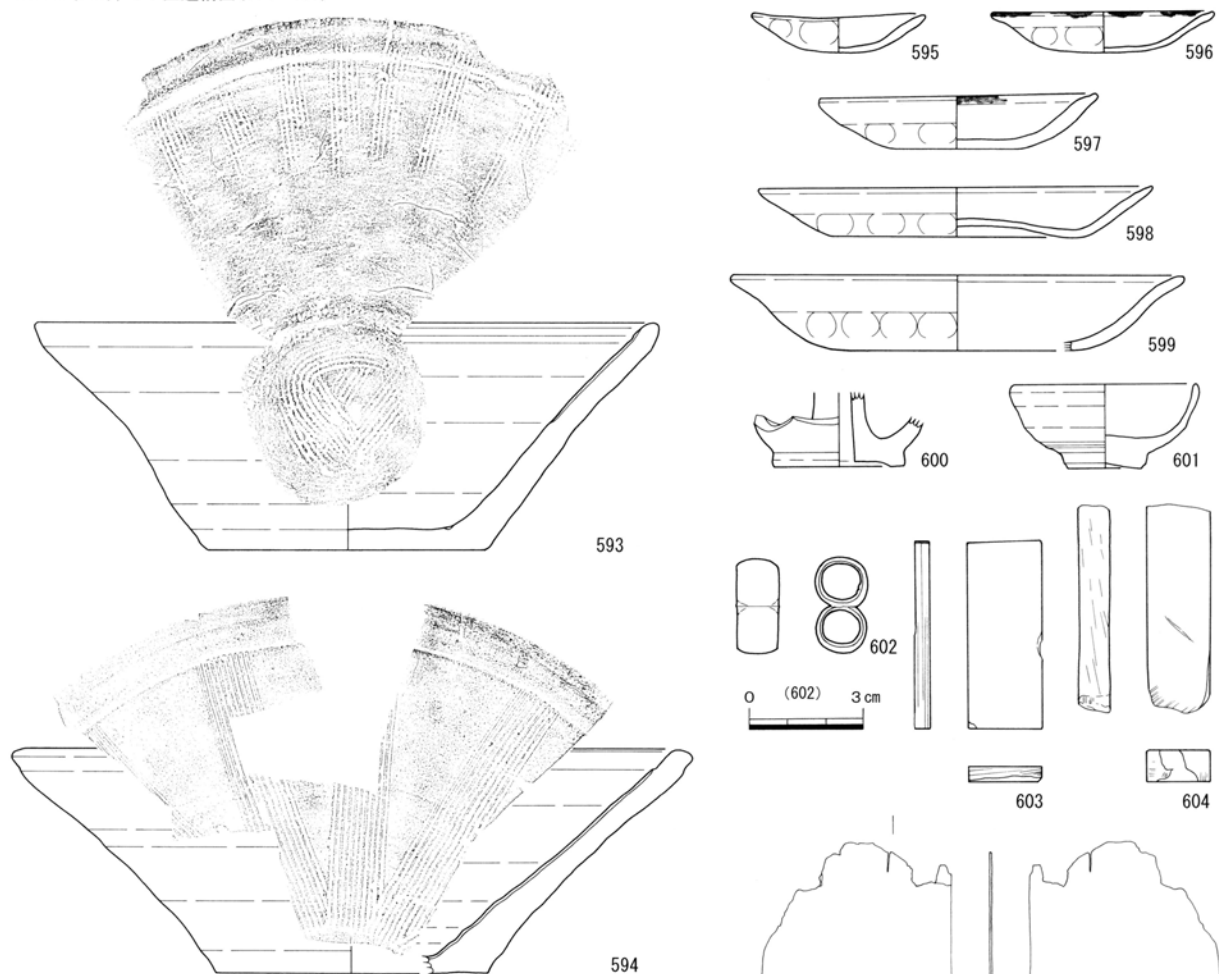
590



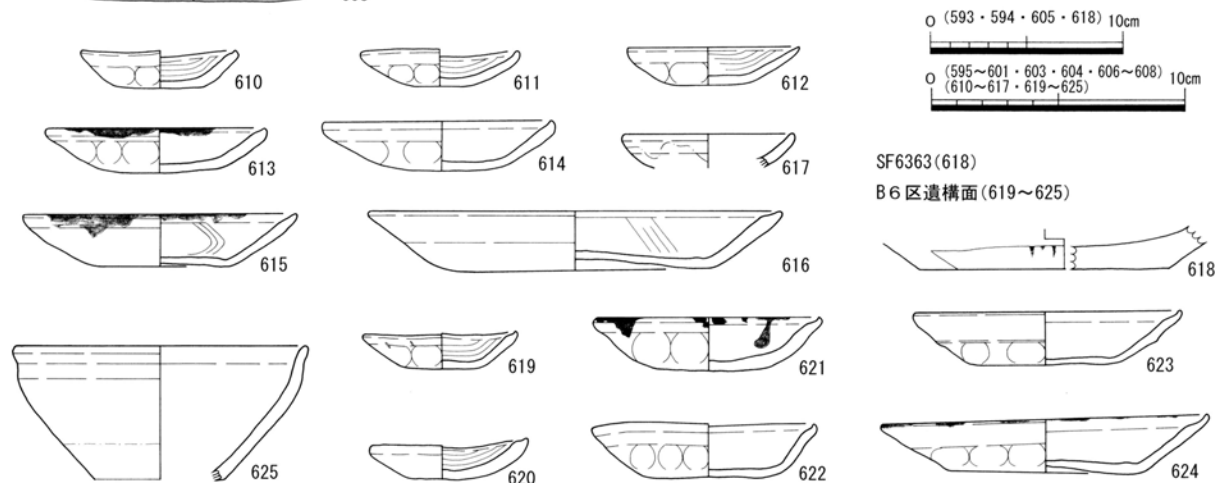
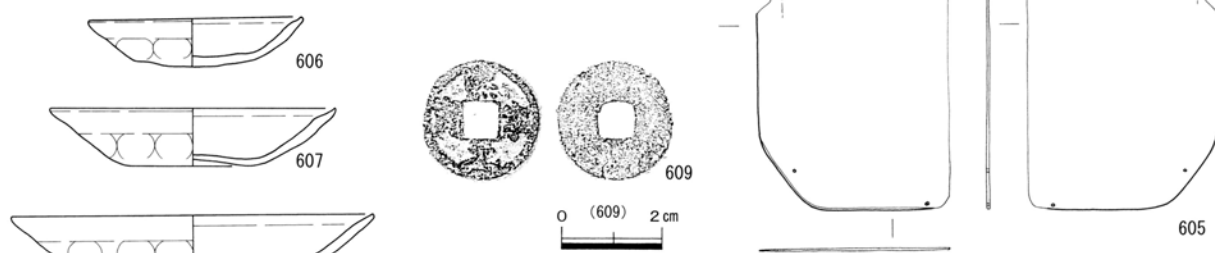
591

第45図 出土遺物(20)

SX6385(593), B5区遺構面(594~605)



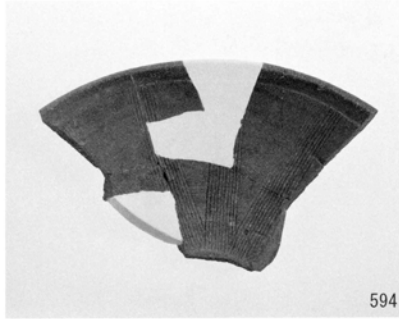
SD6362(606~609) SD6361(610~612) SD6364(613~617)



SX6385 越前焼播鉢593 B5区遺構面 越前焼播鉢594 土師質Ⅲ595~599 灰釉燭台600 白磁坏601 金属製品責鞋602
 石製品砥石603・604 木製品折敷605 SD6362 土師質Ⅲ606~608 金属製品銅銭609 SD6361 土師質Ⅲ610~612
 SD6364 土師質Ⅲ613~616 鉄釉坏617 SF6363 灰釉鉢618 B6区遺構面 土師質Ⅲ619~624 鉄釉碗625



593



594



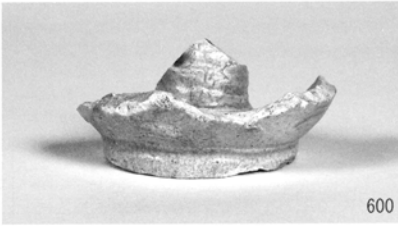
597



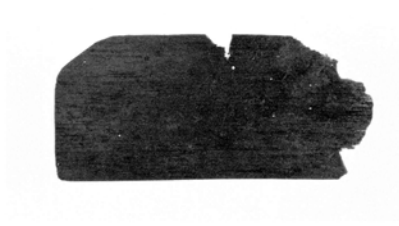
595



596



600



605



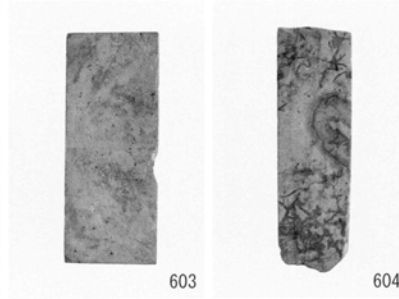
602



601



605



603

604



606



610



613



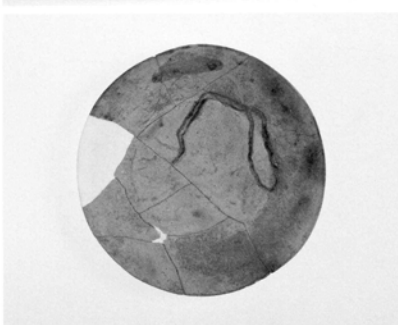
607



611



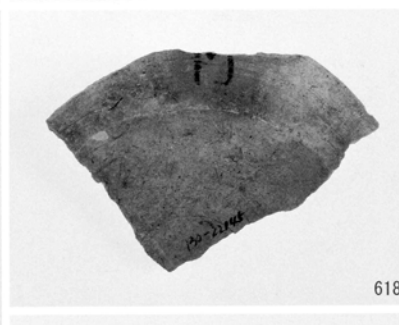
614



608



615



618



616



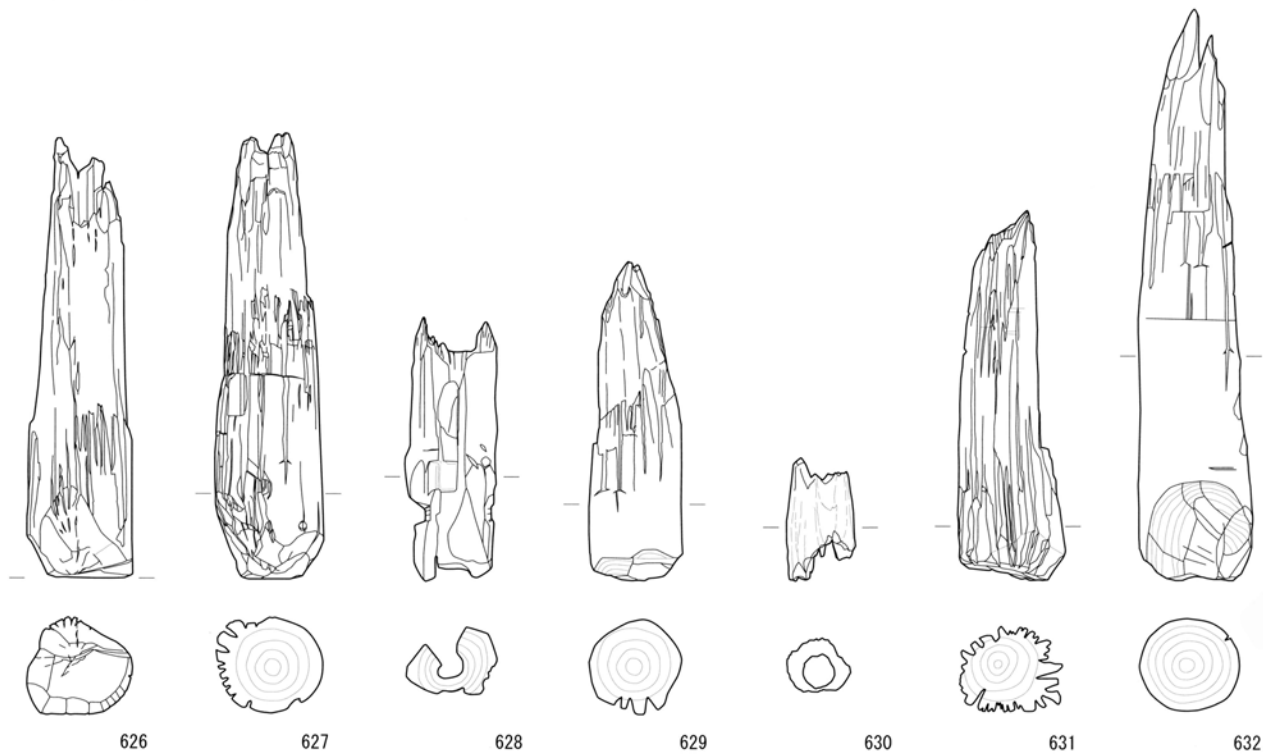
617



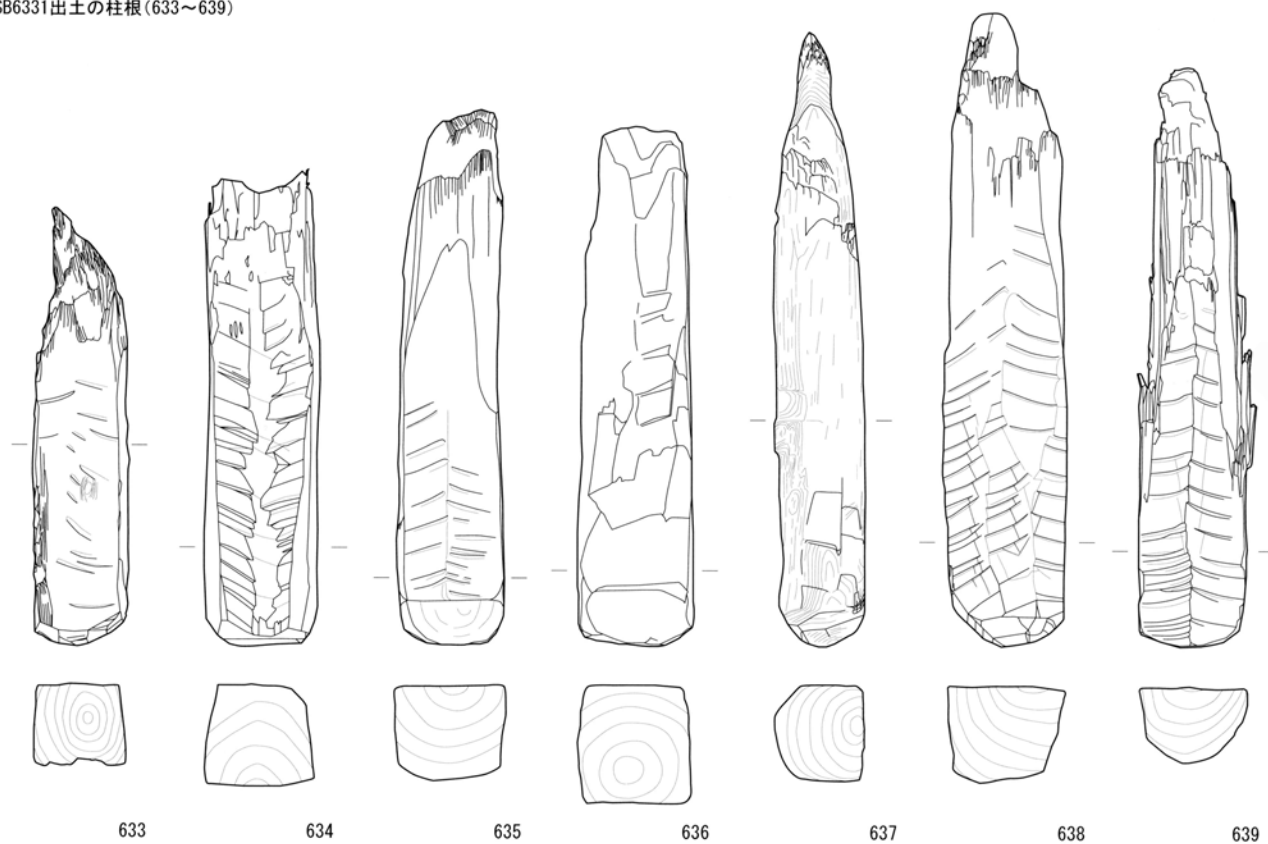
625

第46図 出土遺物(21)

SB6359出土の柱根(626~632)



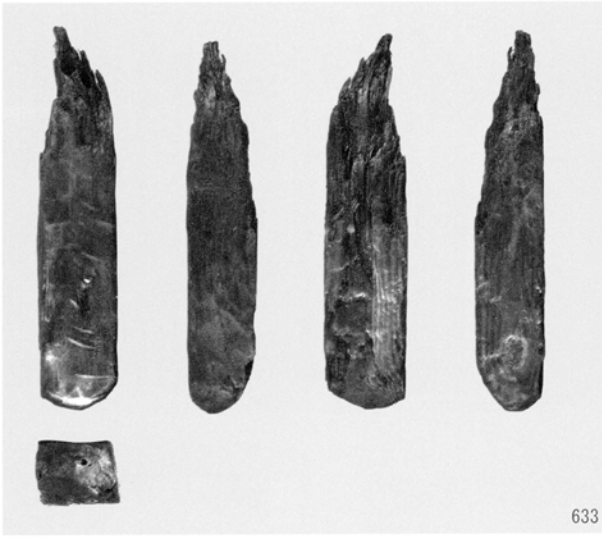
SB6331出土の柱根(633~639)



0 (626~639) 20cm

SB6359 柱根626~632

SB6331 柱根633~639



633



634



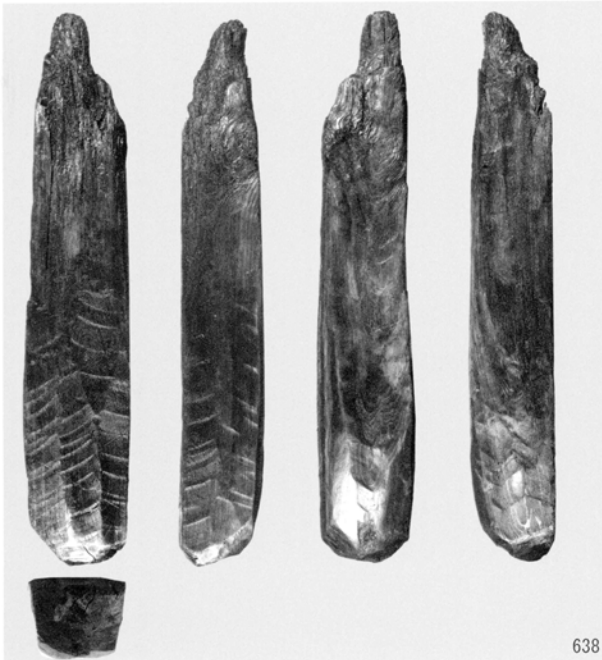
635



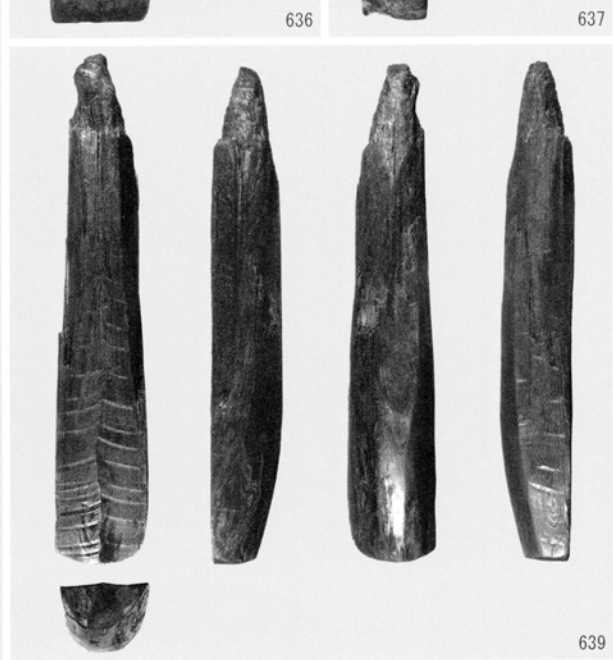
636



637



638



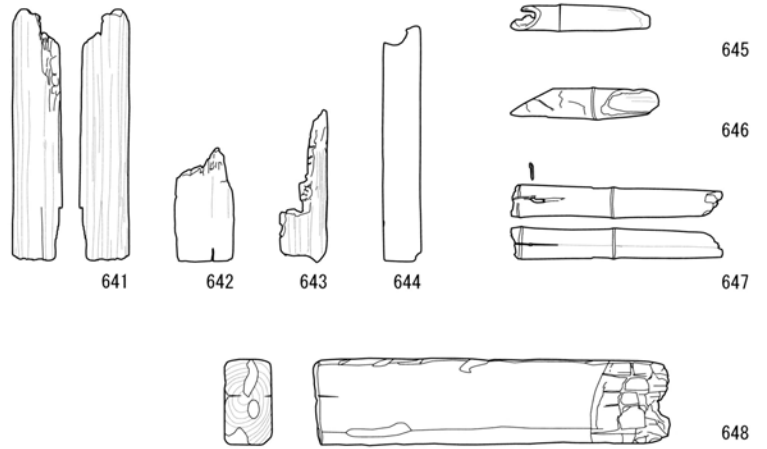
639

第47図 出土遺物(22)

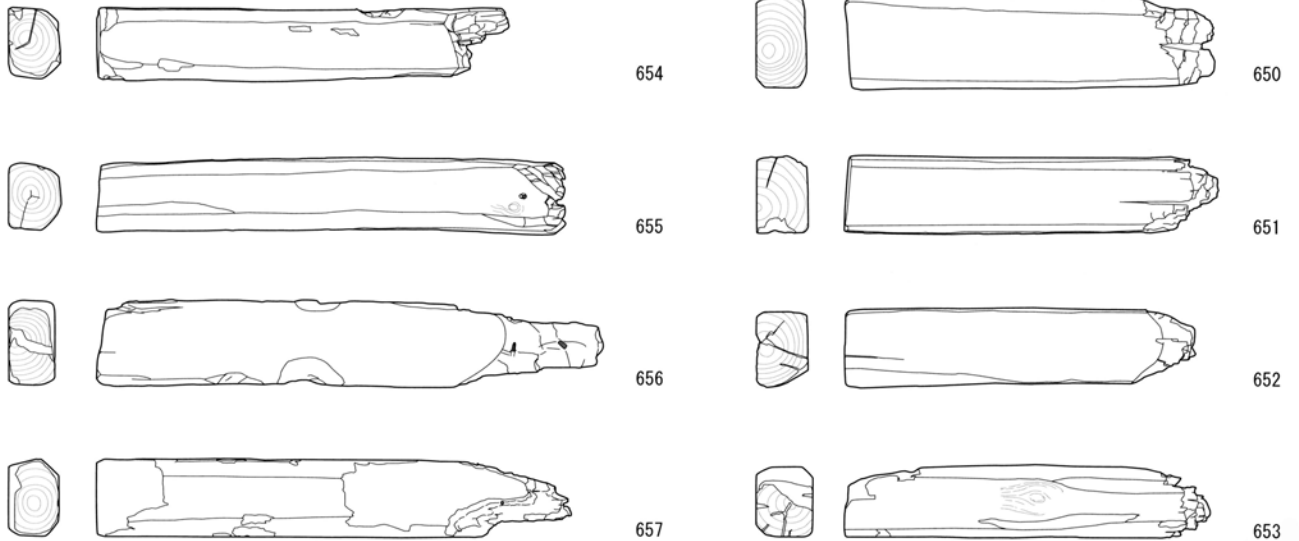
SB6258出土の建築部材(640~657)



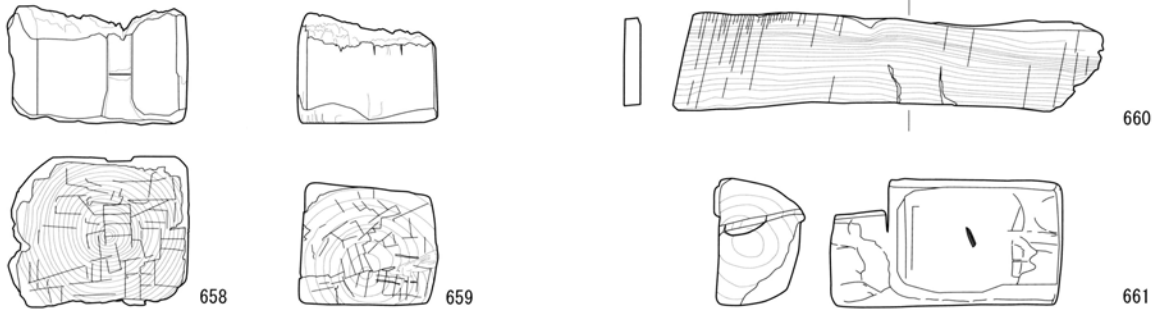
SB6258(SD6272) 出土の建築部材(641~653)



SB6258(SD6256) 出土の建築部材(654~657)



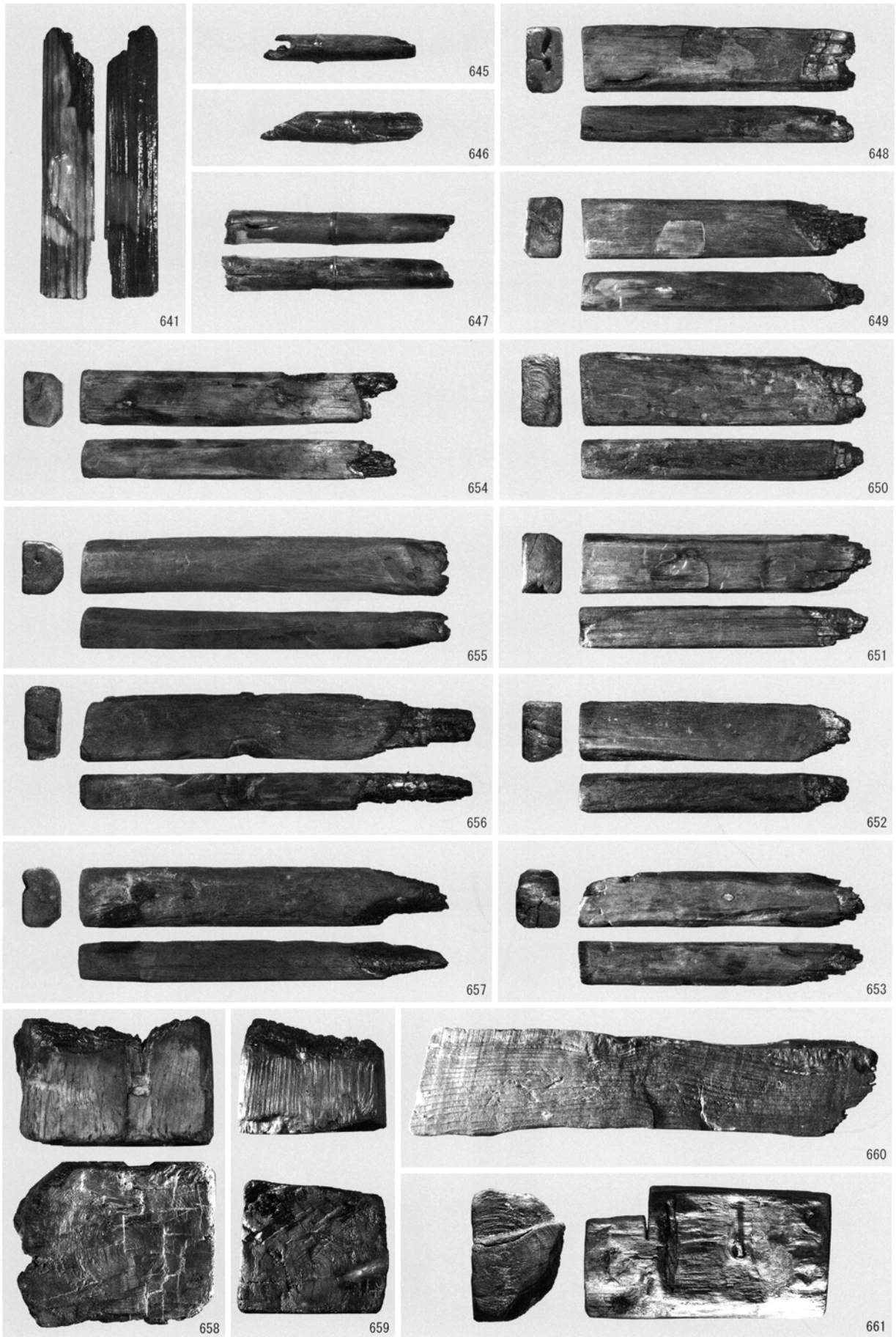
その他の建築部材(658~661)



0 (640~657) 20cm

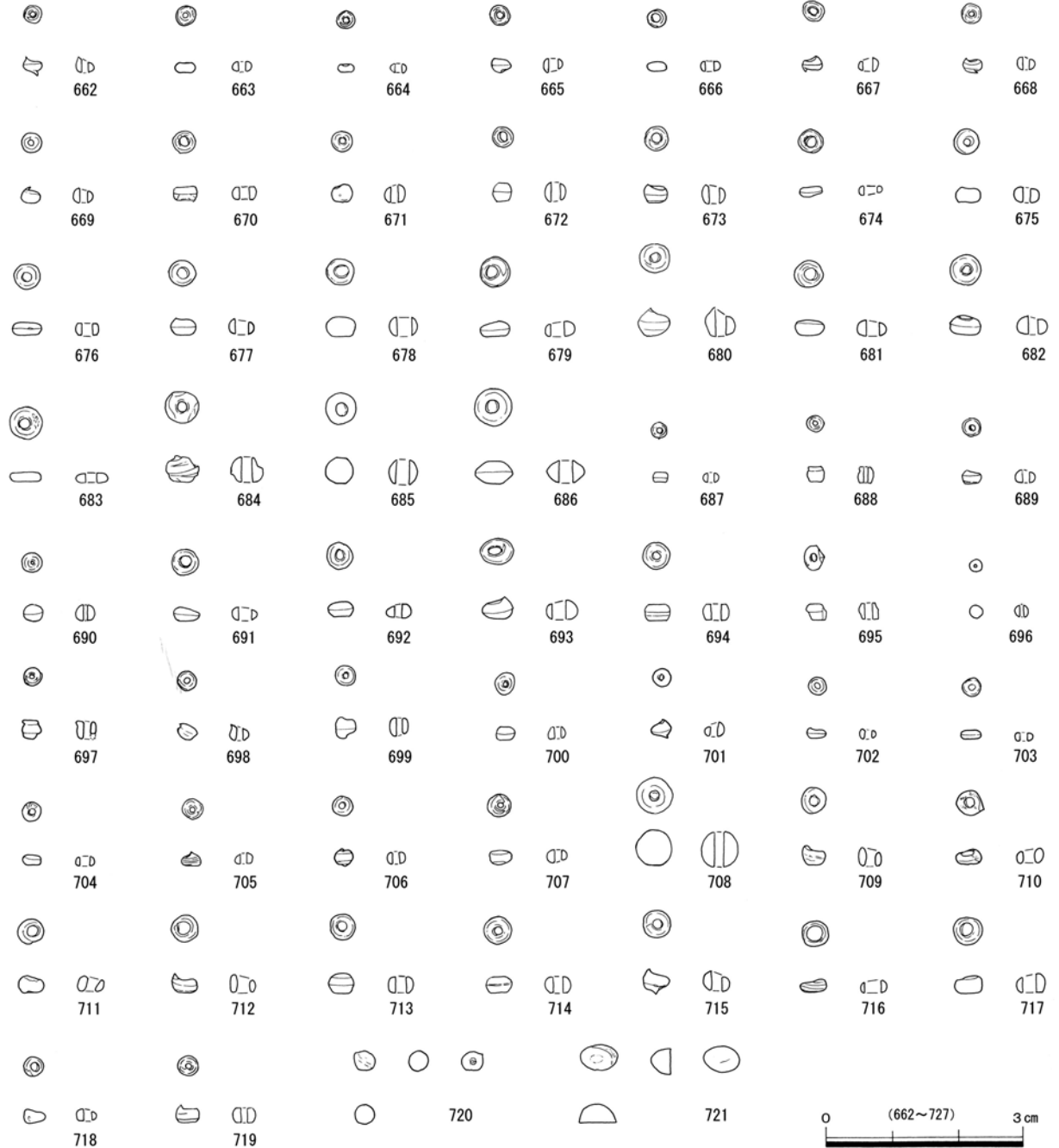
0 (658~661) 10cm

SB6258 板材640 SB6258(SD6272) そぎ板641~644 竹材645~647 角材648~653 SB6258(SD6256) 角材654~657
 B4区I遺構確認面ほか 角材658・659 板材660 角材661

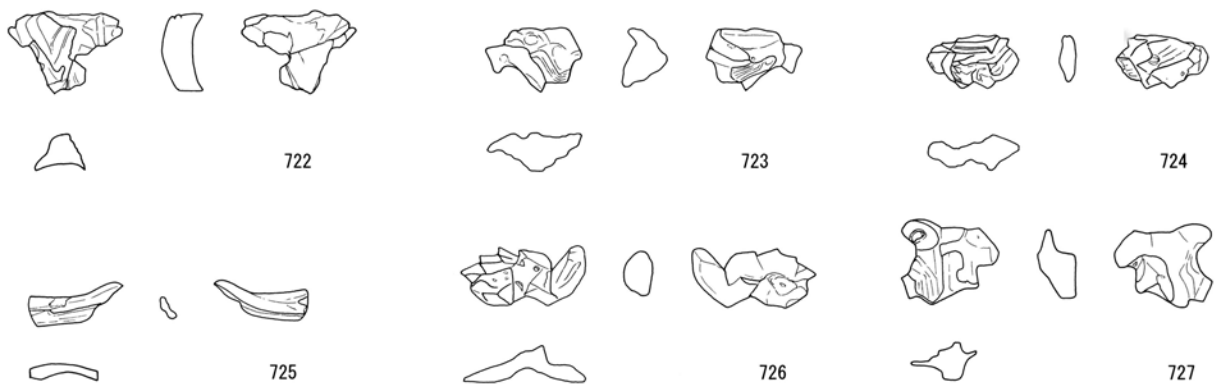


第48図 出土遺物(23)

SD6373(662~684・694), SK6381(685・686), SK6383(687~693), SP6396・6397(695・696), 遺構面(697~721)



SD6373(722~724), SK6383(725~727)

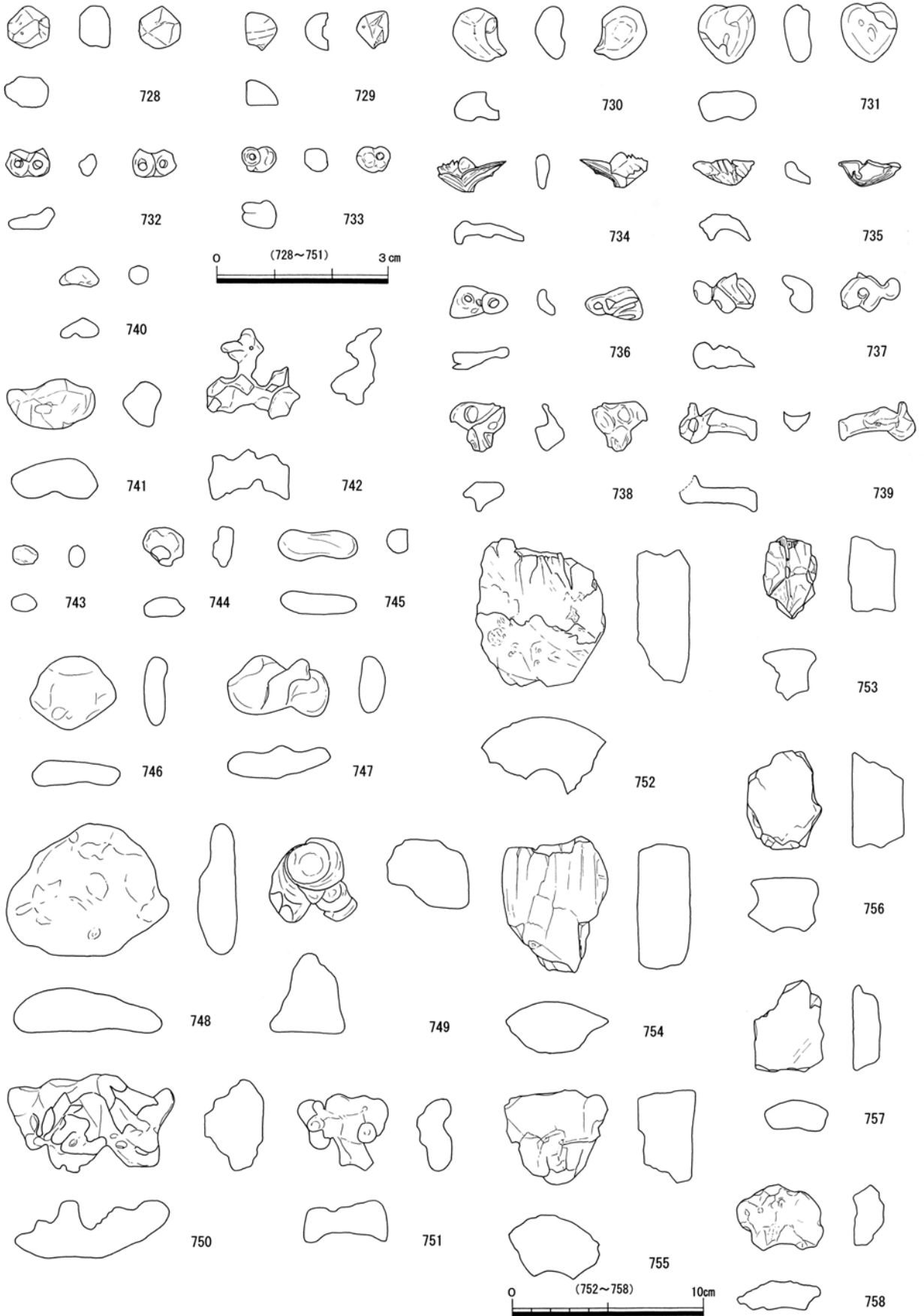


SD6373 ガラス玉662~684・694 溶解ガラス722~724 SK6381 水晶玉685・686 SK6383 ガラス玉687~693 溶解ガラス725~727 SP6396 ガラス玉695 SP6397 ガラス玉696 遺構面 ガラス玉697~719 溶解ガラス720・721

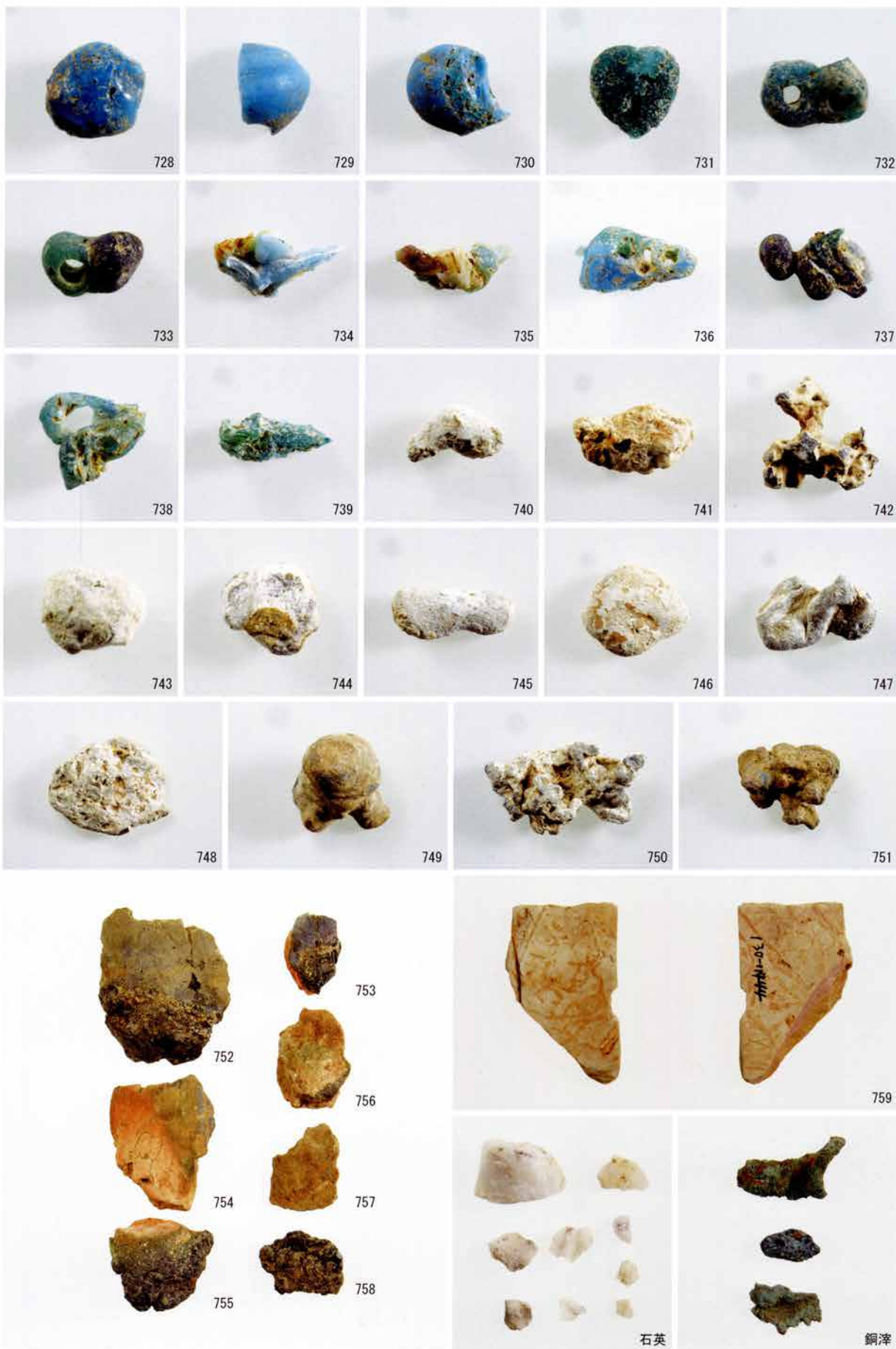


第49図 出土遺物(24)

遺構面(728~739・743~746), SD6373(740), SK6383(741), SP(742), 表土(747~751・754~758), SF6352IV層(752), SP(753)



遺構面	溶解ガラス728~739 鉛743~746	SD6373	鉛740	SK6383	鉛741	SP6399	鉛742
表土	鉛747~751 羽口754~758	SF6352IV層	羽口752	SX6376	羽口753		





50



60



177



266



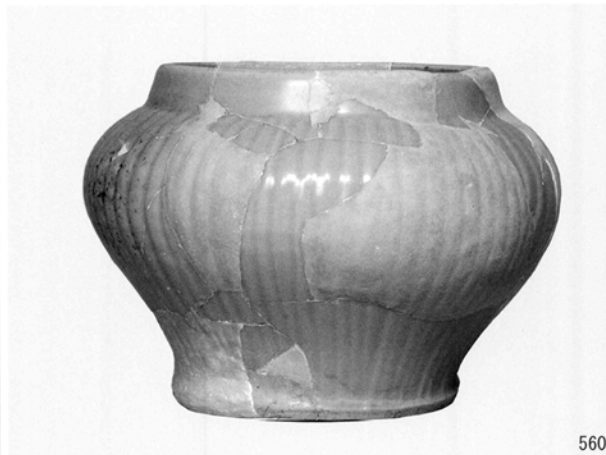
269



569



561



560



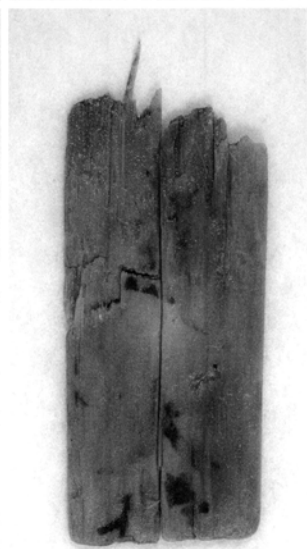
184



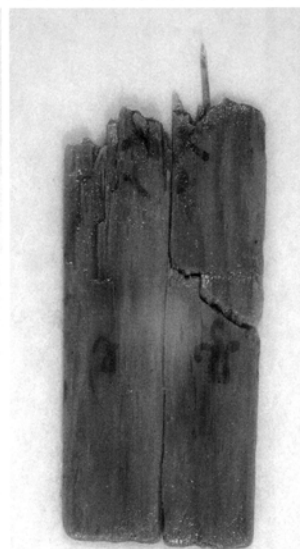
186



468



469



B3区表土 染付瓶50 B5区表土 染付瓶60 SD6279 染付合子177 木製品間香札184~186(赤外線写真)
SD6252 華南桶266 B3区I遺構埋土 木製品木札468(赤外線写真) 板469(赤外線写真)
SD6373 青磁酒会壺560 染付皿561

報告書抄録

ふりがな	とくべつしせきいちじょうだにあさくらしいせきはつかつちょうさほうこく
書名	特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告16
副書名	第127・130・136次調査
シリーズ番号	16
編著者名	木村孝一郎(編) 熊谷透
編集機関	福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
所在地	〒910-2152 福井県福井市安波賀町4-10 TEL. 0776-41-2301
発行年月日	平成30年3月20日

調査地区	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
第127次 発掘調査	ふくいしきどのうちょうあざかみきど 福井市城戸ノ内町字上城戸	18210	史一31	35° 59' 56"	136° 17' 44"	20080415 ～ 20081205	2,000㎡	環境整備に伴う 発掘調査
第130次 発掘調査	ふくいしきどのうちょうあざもんのうち 福井市城戸ノ内町字門ノ内	18210	史一31	35° 59' 44"	136° 17' 34"	20090422 ～ 20101216	2,500㎡	環境整備に伴う 発掘調査
第136次 発掘調査	ふくいしきどのうちょうあざかみきど 福井市城戸ノ内町字上城戸	18210	史一31	36° 14' 16"	136° 17' 47"	2011014 ～ 20111222	1,200㎡	環境整備に伴う 発掘調査

調査地区	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
第127次 第130次 第136次 発掘調査	屋敷	室町・戦国	土塁、溝、礎石・掘立 柱建物、石積施設、井戸、 池状遺構、土坑と小穴、 埋甕遺構、炉	越前焼、土師質皿、瀬 戸・美濃焼、青磁、白磁、 染付、金属製品、木製品、 柱材、ガラス玉、鉛・銅、 羽口	ガラス玉を製作する工房を 有する屋敷地
要約	<p>本調査区は、一乗谷川の右岸、朝倉館跡より上流に約400m、上城戸跡より下流に約100mに位置する。 発掘調査は、朝倉館跡から一乗谷川上流に位置する上城戸跡にかけての町割や様相を解明する目的で実施した。 調査の結果、大溝と土塁を伴う大規模な屋敷の北東部において、建物跡周辺からガラス玉や鉛、銅滓、フイゴ の羽口が出土し、炉跡を検出したことから、ガラス玉の製作工房を備えた屋敷であることが判明した。</p>				

平成30年 3月16日 印刷

平成30年 3月20日 発行

特別史跡

一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告 16

第127・130・136次調査

編 集 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

発 行 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

〒910-2152 福井市安波賀町4-10

印 刷 白崎印刷株式会社